

---

# 仮面ライダーディケイド 世界を巡る破壊者

D R T

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド 世界を巡る破壊者

### 【Nコード】

N2458S

### 【作者名】

DRT

### 【あらすじ】

過去の記憶を失いながらも己の道突き進む高校生の門矢 士。ある事件をきっかけに仮面ライダーディケイドへと変身するようになれるが、それと共に謎の青年から世界の崩壊を止めることを頼まれる。自分達の日常を守る為、士は仲間達と共に異世界を巡ることになった。果たして、士と仲間達が行く世界はどんな所なのか

## 第1話 『始まりの前』

「いつてきまゝす」

「は〜い、いつてらっしやい」

喫茶店『フォトショップ』

インテリアとして各種カメラや風景などを撮影した写真が飾られている一風変わった店内。

なぜ、このようなインテリアなのかというと数年前までは写真館も兼用していたからだ。

だが、ある事情により写真館は休業状態となり、現在は喫茶店のみで営業している状態である。

そんな店内で挨拶をする少女と女性がいた。少女の名は芹沢せりざわ望のぞみ。女性の名は芹沢せりざわ叶かなえ。

望は背中まで伸びる艶やかな黒髪にボーイッシュな顔立ちで身長はやや低めといった感じ。そんな体を可愛らしい制服で包んでいた。叶は肩の辺りで切り揃えた黒髪に優しい顔立ちをしている。

身長は望よりも頭1つ分大きく、薄青のニット製のノースリーブのシャツに膝まである黒いスカートを着込んでいた。

名前でわかるとおり2人は姉妹であり、叶は現在のフォトショップのオーナーでもある。

「ほら、土ものんびりしてると遅れちゃうよ」

「わかつてるよ」

望に呼ばれて、これまた学生服の青年が店の奥から現れる。

やや乱れ気味の短い黒髪にそこそこに整った顔立ち。もっとも、その表情は仏頂面といったものだが。

背は叶よりも少しばかり高く、制服でわかりづらいが見た目はすりとした体付きに思えた。

彼の名は門矢 土。名前でわかる通り、彼は芹沢姉妹と血縁関係ではない。

ある理由から彼はここで居候をしているのだが、その理由は後ほど話しておこう。同時に彼は望と幼馴染みではある。

それはそれとして、叶に見送られて学校へと向かう望と士。

学校までは徒歩で行ける距離なので2人は他愛のない話をしながら歩き続け

「よ！」

「おはよ、雄介君」

そんな2人に声を掛ける制服姿の青年がいた。小野寺 雄介。整えた黒髪に笑みが似合う顔立ち。背は士と同じ位で体型も制服でわかりにくいがやはり同じように思える。

彼は2人とは中学からのクラスメートである。

「相変わらず脳天気そうだな」

「なんだよそれ」

どこか冷めた目を向ける士だが、雄介は笑顔で返していた。

士はどこか一歩引いているような、そんな感覚を感じさせる。かといって付き合いが悪いわけでもない。

それに口は悪いものの人のことを良く見ていたりと面倒見も良かったりする。

それを知っている望と雄介はいつもの士だと笑顔になれるのである。そんな3人がシヨップングモール差し掛かった時、シヨップングモールが視界に入った望が表情を曇らせていた。

「ん？ どうしたんだ？」

「え？ あ……そういえば、今日で5年経っちゃったんだって思い出して……」

その様子に気付いた雄介に聞かれ、望は曇った表情のままに答える。

5年前……それは望にとってあまりにも悲しい思い出であった。

5年前のこの日、望は叶と両親と。また士とその両親と共にこの

ショッピングモールに来ていた。

家族ぐるみでの付き合いというのもあったが、新学期から中学生となる望と土のための買い物と一緒にするためであった。

楽しい一時……そうなるはずだった。しかし、突然ショッピングモールの一画で大爆発が起きてしまう。

爆心地はあまりの爆発の威力で跡形も無く吹き飛び、死者、行方不明者合せて200人以上に及んだ。

望と叶はその時、自分達の買い物の為に離れていたために無事であった。

だが、2人の両親と土の両親は行方不明……いや、死体が無いだけで生存は絶望視されていた。

両親達と一緒にいた土は無事だった。爆心地にいたにしてはまったくの無傷で発見されたのだが……

しかし、彼は記憶を失っていた。爆発の時だけではなく、思い出の全てを

それを知った時、望は悲しさのあまりに泣いた。両親を失い、幼馴染みであった土が自分のことを忘れていたことに。

一方で叶は悲しみに耐え、全てを失った土を引き取った。彼をこのまま施設に預けるのはあまりにも忍びなかったから

だが、その後は苦労の連続だった。叶は当時高校を卒業したばかり。両親がいなくなったことで保険は出たものの、それだけで生活をしていくわけにはいかない。

その為、叶は大学進学を取りやめて両親が残した喫茶店を営んで生活費を稼ぐことにした。

両親との思い出を出る限り残したかったという想いもあった為に、ただ、父親が経営していた写真館は技術等が無い為に休業を余儀なくされてしまった。

そんな叶の努力の甲斐もあって望も立ち直り、普段と変わらぬ生活を送れるようになった。

その一方で土の記憶は戻ることはなかったが

なお、余談となるが爆発の原因は未だにわかっていない。

「そういえば、土は今日もあれを持ってるの？」

「ああ……そばにないと不安だな」

ふと思いついた望の問い掛けに土は鞆を開け、それらを取り出した。

1つは白い金属製のカバーに覆われた何か。装置のようにも見えないが使い方がまったくわからない。

その装置らしき物の中央には赤いレンズがはめ込まれてあり、そのレンズの周りを小さなマークらしき物が囲むように9個刻まれている。

もう1つはこれまた白く、四角く平べったい物。真ん中辺りにやはりマークらしき物がある。

これらのはあの爆発の時に土が持っていた物であった。しかし、なんであるかは未だにわかっていない。

爆発の後に土が持っていたという以外、いったいいつ手に入れたのか？ 土に記憶が無い為にはわからないままであった。

しかし、土とっては大事な物に思えて、こうして手放さずに持っているのである。

「前々から思ってたけど、それってなんなんだ？」

「さてな」

雄介の問い掛けに土はやれやれといった様子で答えながらその2つを鞆に戻す。

でも、土は不思議とこれらに疑問を持つことは無い。気にならないわけではないが、これがあるのは当たり前と感じていたのだ。

なぜ、そう思っのかはわからないままなのだが

「そういえば、学校が終わったら行くのか？」

「うん……そのつもり……」

ふと思い出したように問い掛ける土に望は曇った表情で答える。毎年、あの爆発事故が起きた日に望は爆心地であったショッピングモールを訪れるようになっていた。あそこに行けば両親にまた会えるような気がした。望もそれは叶わない望みであることはわかっている。それでもどこか諦めきれなかった。両親が生きているという望みをそんな望を見て土はため息を吐き、雄介は心配そうにしていた。

放課後になり、望は土と雄介は件のショッピングモールに来ていた。

事故後、爆発があつたショッピングモールは新たに建て直され、今はもう爆発があつたという面影さえ残ってはいない。

それでも望はここに来なければならなかった。両親がいつか帰ってくる。そんな思いを諦めきれずに

「なあ……このままでいいのかな？」

「じゃあ、どうしろと？」

心配そうな雄介に土は肩をすくめた。雄介としては未だに事故を引きずる望をなんとかしたかった。

でも、方法が思い浮かばない。下手な事を言ってしまうと逆に傷付けてしまいそうで……

だから、こうして見守るしか出来ない。それでも、なんとか出来ないかと考えてしまうのだ。

そんな彼女をしばらく見つめた後、そろそろ帰ろうかと土が思い始めた時、それは起きた。

「な、なんだありゃ？」

そのことに気付いた雄介が戸惑った声を漏らす。何事かと望と土が顔を向け、それを見た。

それは黒いヴェールのように見える半透明な膜のような物。それが

士達から離れた所で現れたのだ。

あれはなんだろうかと疑問に思う望と雄介。しかし、士だけはなぜか睨みように見えていた。

するとその謎の空間の表面に波紋が出たかと思うと、それらは現れた。

人のような形をしている何かが

虎や虫　虫はおそらくはバッタだろうか？　それに鳥。それらを模した禍々しい姿。ある意味、怪人とも言えなくもない。

そんな者達が突然現れたことに望や雄介だけでなく、シヨツピングモールに来ていた人達は呆然とその者達を見てしまう。

だが、士だけはやはり睨んだように見ており、鞆からあの2つを取り出した時にそれは起きた。

虫の姿を模した怪人が右手を前に突き出したかと思うと、その手のひらから光線を撃ち放ち

その光線が駐車場に止められていた車や地面にに当たると次々爆発を起こしたのだ。

「ぐおおおおおおお！！？」

その横では虎の姿を模した怪人が雄叫びを上げたかと思うといきなり駆け出し、その先にあつた車を殴りつけた。

殴られた車はまるで木の葉のように宙を舞って落下し、その下に駐車してあつた車に激突して爆発を起こす。

その光景に誰かの悲鳴が上がると次々と悲鳴が起こり、シヨツピングモールにいた人達は我先にと逃げ惑い始めた。

得体の知れない怪人達が起こした破壊活動を見て、恐怖を感じたのだ。

その恐怖の根源となった怪人達はそんな中を悠然と歩きながら光線を出すなどして破壊活動を続けていく。

「な、なんなんだ！？　なんなんだよ、あいつら！？」

突然の事に混乱して叫んでしまう雄介。だが、それ以上に怒りが強かった。





そんなのとまともに戦えるはずがない。雄介も望もそう思っていたから土を止めようとした。

「え!?」

が、その前に土が持っていた物を自らの腹部に当てるとベルトになる光景に2人は驚く。

その間に土は左腰に装着されたあの平べったい物を開いて何かを取り出した。

それは1枚のカードだった。まるでバーコードを思わせるような仮面を被った姿が描かれたカード。

もつとも、それは描かれたというよりも写真のような鮮明さではあったが。

その直後に土は左手でバックルのサイドパーツを引くと中央のパーツが90度回り、そのパーツへとカードを差し込み

「変身!」

掛け声と共にバックルの両サイドのパーツを両手で戻すとパーツも同じように元の位置に戻り

『仮面ライド デイケイド!』

ベルトから合成音が響いた瞬間、それは起きた。

土の周りに10体の人らしき姿が現れたと思うと、それらが土と重なり合うように1つとなっていく。

やがて、完全に1つとなると土の姿は変わっていた。あのカードに描かれていたバーコードを思わせるような仮面を被った姿へと。

「え?」

「つか……さ?」

その光景に望を目を見開き、雄介も呆然と声を掛ける。

しかし、土はそれには答えずに両手を払うように叩き

「ぐおおお!!」

「ふん! は!」

「ぐお!?」

「ぐが!」

鳥の姿の怪人が襲いかかってくるが、突き出された爪を左腕で受け反らしながら右手で殴り  
その横から虎の姿の怪人が襲いかかるものの、慌てた様子も無く蹴り飛ばす。

それでも土は止まらずに左腰に装着された平べったい物を右手に持つと、それが変形して剣の形となった。

「はあ！」

「ぐお！？　があ！？」

その剣で飛びかかってくる虫の姿の怪人をバツの字に斬り付け、即座に突き飛ばす。

これを受けた虫の怪人は悲鳴と共に飛んでいき、転がるような形で地面へと落ちた。

この光景に望と雄介は何も言えずにただ黙って見守っているしかなかった。

土の姿が変わったかと思えば、人では敵わないと思えるモンスターと戦っている。

それだけでも異常なのに互角以上に戦っていることに事態が理解出来ず、ただ黙っているしかなかったのだ。

そんな中でも戦いは続く。

虫の怪人が襲いかかってくるが、土は慌てた様子も無く剣となった平べったい物　ケースを開いて1枚のカードを取り出す。

それを投げる形でベルトに入れてセットし

『アタックライド　スラッシュユー！！』

合成音が響くと剣となったケースの刀身が紅い光に包まれ

「せいやあああああ！！」

「ぐが！？　ぐおおおおお！！？」

残像を残すほどの斬撃で虫の姿を模したモンスターを袈裟斬りにし、そのまま回転して逆袈裟斬り。

更に縦一文字に切り裂いたことで虫の怪人は体中から火花を上げながら倒れ、悲鳴と共に爆発する。

「があー!!」

「おわつと!? ち、厄介な」

そこに鳥の姿の怪人が空を飛んで光線を何発も放ってきた。それを後退しながら土は避けつつケースからカードを取り出してベルトに投げ入れる。

『仮面ライド ファイズ!!』

合成音の後に電子音が響いたかと思うと土の姿が変わった。

バーコードを思わせる仮面の姿から大きな目を持つどこか機械的な印象を受ける仮面の姿へと

ただ、ベルトだけは元のままであったが。

「か、変わった!?!」

『アタックライド オートバジン!!』

その光景に雄介が驚く中、土は更にもう一枚のカードをベルトにセットする。

すると土の背後にあの黒いヴェールのような物が現れ、その表面から1台のバイクが飛び出した。

見た目はオフロードタイプのバイク。そのバイクが次の瞬間にはロボットに変形し、空を飛んで鳥の姿を模したモンスターに向かっていく。

その間に土は左腰に戻ったケースから更に一枚のカードを取り出し

「ぐががががが!?!」

『ファイナルアタックライド ファ・ファ・ファ・ファイズ!!』

空を飛ぶロボットが左腕に装着されたホイールを構えるとホイールが高速回転し、その表面から無数の光弾が放たれる。

鳥の怪人はその光弾を何発も受けた挙句に翼を撃ち抜かれて落下した。

それと同時に土はカードをベルトにセットし、いつの間にか右手に装着されたパンチングユニットを構え

「はあ!!」

「ぐわああああああ!!?」

アップパーカットのような形で拳を打ち出し、落ちてきた鳥の怪人の腹を殴りつけた。

それが致命傷となったらしく、鳥の怪人は悲鳴と共に爆発してしまふ。

その後、士はバーコードを思わせる仮面の姿に戻り、地面に降り立ったロボットもバイクに戻ったかとその姿を変えた。

どことなく、今の士の姿を思わせるデザインとなったバイクへと

「ぐう……があああああ!!」

この光景に虎の怪人は一瞬怯むが、咆哮を上げたかと思うと士へと向かい駆け出した。

「があ!?!」

しかし、士は受け流すような形で避けると怪人の背中を蹴り飛ばし、左腰にあるケースを手に取り

「ぐががががが!!?」

今度は銃に変形させて光弾を連射する。怪人が振り向いた時にはすでに遅く、その光弾を何発も受けて吹っ飛んでいった。

それを見守りながら士はケースを左腰に戻し開いて1枚のカードを取り出し、ベルトに投げ入れてセットした。

『ファイナルアタックライド　　デイ・デイ・デイ・デイケイド!!』

合成音が鳴り響く士の背丈ほどの大きさがある、セットしたカードと同じ絵柄のエネルギーフィールドが現れた。

そのエネルギーフィールドが士の前から怪人の前まで並ぶような形で何枚も現れる。

「は!!」

その後、士は天高く跳び上がり、並んでいるエネルギーフィールドもそれに合せて動いた。

士と怪人を繋ぐかのように

「おりゃあああああ!!」

そして、土が右足を突き出す形でエネルギーフィールドへと突っ込むと、エネルギーフィールドを突き破って加速していく。

「が!?! があああああああ!?!?!?!」

エネルギーフィールドを突き破りながら速度を上げて突っ込んで行き、やがて怪人の胸板を蹴り抜いていた。

それによって怪人は大きく吹っ飛んで地面に激突するような形で落ち、直後に爆発してしまう。

着地した土は立ち上がると元の姿に戻り、望達へと向かって歩き出す。そんな光景を望と雄介は呆然としていた。

いきなり怪人が現れて暴れまわったかと思えば、今度は土が仮面の姿に変身してその怪人と戦い倒してしまう。

あまりにも現実離れた光景に思考が追いつかなかったのだ。

「つ、土……今のなに……?」

呆然としながらも望は思わず問い掛ける。

何が起きたのかまったく理解出来ない。だからこそ、何が起きたのかを知りたかったのだ。

「そう言われてもな……俺もわけがわからないんだよ。ただ、あいつらを見たらこのままじゃダメだと感じて……」

気が付けばこいつの使い方とかわかって……後は見ての通りに戦ってたって所だ。ま、いくつかわかったこともあるけどな」

「わかった……こと?」

ベルトとケースを見つめながら土が答えると、望が呆然としながらも問い掛ける。

それに対し、土は不敵な笑みを向け

「今言えるのは、俺はどうやら通りすがりの仮面ライダーらしい」

「仮面……ライダー……?」

土のその言葉に雄介は首を傾げる。なぜなら、その単語は今まで聞いたことの無い物だから。

だから、望も雄介もこの時は知らなかった。『仮面ライダー』とはなんなのかを

## 第1話 『始まりの前』（後書き）

初めましての方は初めまして。今回、こちらで初投稿させていただきました。きますDRTと申します。

この作品は……まあ、私の妄想前回の作品ですので、それを踏まえ  
て読んで頂けるかと良いかと。

後、先に言っておきます。この作品に鳴滝さんは出ません。つゝの  
もタイトルにある破壊者の意味。

それがディケイド本作とは違うからです。それがどんなものかは…  
…まあ、いずれお話することとなるでしょう。

さて、今回は新たな怪人が現れ士はピンチに。その時、雄介は  
のようなお話です。そんなわけで次回でお会いしましょう。

## 第2話『本当の始まり』

さて、あれからしばらくして土達はフォトショップに戻っていた。サイレンが鳴り響くのを聞いてこの場においてはマズイと感じたからだ。

まあ、帰ってくるのは一苦労だった。というのも現れたバイクを土が引いて来たからである。

なぜかという土が持つて帰ると言い出したのだ。置いていこう言出す望と雄介言い分を無視して。

しかし、土は未成年故に免許なんて当然持っていない。なので、望と雄介の反対もあって引いていく羽目になったのだ。

幸いにもシヨップینگモールで起きた騒ぎに警察が駆け付けていたためか見咎められることは無く、フォトショップの車庫に隠すことが出来た。

そんなこともあった土達は無事に戻ってきたのだが

「なあ……ありゃなんだよ？」

「さてな、俺にもわからん」

「わからないって……お前、姿が変わって……あいつらと戦ってたじゃないか？」

疲れた様子で問い掛ける雄介だが、なぜか落ち着いた様子を見せる土に戸惑いを見せた。

あの時、土は当然という感じで戦っていた。なのに本人は知らないというのは明らかにおかしい。

「わからない物はわからない。けど、あいつらが暴れるのを見たら倒さなきゃって、なぜか思ってたな。」

気が付けばこいつらの使い方がわかるようになってるし、やっぱり倒さなきゃって思ってるで 後は見た通りだな」

肩をすくめる土。表情だけを見れば冷静に見えるが、実はベルトとケースを見ている本人が一番困っていた。



なぜ、あのモンスター達を見てそう思ったのか？　そしてベルトとケースになつたこれはなんなのか？

それがまつたくわからないために

「本当に……何もわからないの？」

「ああ……だが、思い出したことがある」

「思い出したこと？」

心配そうな望に士はそんなひと言を漏らした。そのことに雄介は首を傾げるが

「5年前のあの日……奴らがいた」

「は？　え？　あ、や、奴らって……もしかして、さっき戦つた？」

「そうだ。あの時、間違いなく奴らはいた。奴らだけじゃなかったがな」

それを聞いて戸惑う雄介に話した士は小さくうなづく。

そう、なぜかその時のことを思い出したのだ。5年前のあの日、奴らが現れたシヨッピングモールを破壊し回つた光景を

「そんな……それじゃあ、お父さんとお母さんは」

「悪いが思い出せたのはそこまでだ。それ以上の事はわからん」

話を聞いてそのことに思い至つた望が問い詰めるが、士は顔を横に振つて答えた。

そう、士が思い出せたのはあのモンスター達が暴れる光景のみ。その後どうなつたかは未だに思い出せないのだ。

それを聞いてか望は落胆したように肩を落としてしまう。

「ああああ、なんだか騒がしいわね……って、ああ？　どうかしたの？」

「そうだな。どうにも厄介ごとに巻き込まれた……って、所かな？」

そんな時に奥にいた叶が顔を出してサイレンの騒がしさに首を傾げつつ、望達の様子に気付いて問い掛ける。

それに士は肩をすくめながら答えるが、理解出来なかつた叶はまた首を傾げるはめとなつた。

## その日の夜

雄介は自室のベッドに寝そべりながら今日起きたことを考えていた。あれは明らかに異常だった。怪人達が現れ尋常じゃない力で破壊活動をしたこと。

そして、親友が変身してその怪人達と戦ったこと。そのことを雄介は怖いと感じていた。

当然だろう。あんなことに巻き込まれていたら、まずただでは済まない。

だが、同時に後悔も感じていた。自分は黙って見ていて良かったのかと

自分がもしあの怪人達に戦いを挑んだとしても簡単にやられてしまっただけだ。

それでもなんとかしたかった。例え、戦えなくても親友を手伝ってやりたかった。

「でも、出来なかった。あの時はただ見ているだけで

「どうしたら……いいんだ……」

思わず握りしめた両手を見てしまう。雄介は土や望に笑顔でいて欲しいと思っている。

笑顔はその人が幸せである証と考えているから。だから、そうなるように勤めていたはずだった。

けど、あの時は……いや、その後もそれが出来なかった。確かに混乱はしていた。

でも、何か出来なかったのかと考えてしまうのだ。

しかし、自問はしても答えが出ることは無く、雄介は悩んで眠れぬ夜を過ごすのだった。

眠れぬ夜を過ごしていたのは望も一緒だった。

シヨッピングモールで起きた惨劇は5年前の事故を彷彿とさせ、彼

女を怯えさせた。

また、誰かがいなくなってしまうような気がしたからだ。あの時は自分の両親と士の両親がいなくなってしまうた。

そして、今度は士がいなくなってしまうような気がしてしまう。

士は言っていた。5年前のあの時、あの怪人達以外にも他の怪人がいたと。

だとすれば、また怪人が出てくるかもしれない。そうすれば、士は再び戦いに行くだろう。

そんな確信めいたものを望は感じていて、それを怖いと思ってしま

だって、そのせいで士がいなくなってしまうような気がしてならな

いから  
「やだよ……やだよお……」

自分と姉と両親、それに士とその両親が写った写真を見つめてか

ら、望はその写真を抱きしめ涙を流した。そう切に思いながら

願わくば、これ以上何も起きて欲しく無い。そう切に思いながら  
一方、士は自室のベッドに寝そべりながら1枚のカードを見てい

た。  
それは自分が変身する際に使ったカード。士が変身した姿が描かれ、その下には『仮面ライダーディケイド』と書かれていた。

「ディケイド、か……なんか不思議だな。初めて変身したはずなのに、そんな感じがしない」

思わずそんな疑問を呟いてしまう。あの時、望や雄介には話さな

かったが、自分は変身に慣れているような感じがあった。  
いや、慣れているというよりもディケイドの姿がしっくりとくる感

覚があったのである。  
「もしかして、俺は前にも変身したことがあるのか？」

ふと、そんなことに思い当たるが、そうと考えないとこの感覚の

説明が付かない。

だが、自分にはそんな記憶は無い。無いはずなのに

「ま、考えてもしょうがないか」

しかし、土はため息を軽く吐くと気にした風も無くカードをケースへと戻し、再び寝そべるが

「それにこれで終わりってわけじゃないだろうしな」

ふと、思ったことを漏らしてしまう。なぜか、終わった気がしない。

いや、それも当然かと思っている。なぜなら、あの爆発事故の時に今日現れた怪人達以外にもいたことを思い出したからだ。

それが今回の戦いでは姿を見せなかった。となれば

「また、出てくるだろうな」

そんな予感に土はため息しか出ない。別に土も戦いたくて戦っていたわけではない。

ただ、どうにかしなければならぬという焦燥感に駆られてしまうのだ。

なぜ、そう思うかはわからない。でも、それはある意味間違っていないとも思っている。

あの時はそうしなければ、望や雄介が危なかったのだから

そのことにどうしたものかと土は考えを巡らせ……しばらくして眠りに付いてしまうのだった。

あれから3日。町はいつもの喧騒を取り戻していた。

あのショッピングモールでの出来事は原因は不明であるものの5年前と同じく爆発事故とされた。

一方で土達は土こそいつもの調子であるが、望や雄介は戸惑いが残ったままだった。

ショッピングモールで起きたこともそうだが、望は土によって告げられた事実思い悩んでいたためだ。

雄介にいたっては今後をどうするかでも悩んだ為にクラスメートに心配されたりしていたが。

「なあ……」

「なんだ？」

「あいつらは……また来るのか？」

学校からの帰り道。雄介のその疑問に望がビクリとしながら振り向く。そんな問い掛けに対し返事をした土は頭を掻き

「まあ、来ないで欲しいのは俺も一緒だがな。でも、あいつらが何のために現れたかもわかってないんだ。

それがわからない内はこれで終わりとは……ならないかもな」

ため息混じりに土は答えるが、望と雄介はそれを聞いてか沈んだ様子を見せる。

確かに土の言うとおり、あの怪人達がなんの為に現れたのかわかっていない。

それを調べる前に土が倒してしまったのもあるが、あれでは聞き出せるかどうかも疑わしい。

その為何もわかっておらず、それが望や雄介の不安にも繋がっていた。

「でも……でも、出来ることなら来て欲しくないよ……だって、だって……」

不安そうな表情でうつむきながら望は思わず本音をもらしてしま

う。

もし、あの怪人達がまた現れたら、また誰かがいなくなりそうで……それが嫌だった。

「ま、このまま来なくなるなら、それはそれでいいんだけどな」

「確かに……って、おい。なんか様子がおかしくないか？」

土の言葉にうなずく雄介だが、ふと感じた様子にいぶかしげな表情を見せた。

良く聞くと遠くから悲鳴のようなものが聞こえ

「おい！ あれって」

気付いた雄介が指差した先には悲鳴と共に逃げ惑う町の人達の姿。更には破壊音や爆発音まで聞こえてきていた。

「な、何？」

「あ、士！？」

その様子に望が戸惑う中、士がいきなり走り出してしまふ。

それに気付いて慌てて追いかける雄介。望も戸惑いながら追いか

「え……」

追いかけた先に怪人の群れが暴れながら町を破壊している光景を目にしてしまふ。

それから逃げ惑う人々。しかし、怪人達はそんな人達にも襲い掛かっていた。

「なによこれ……なんなの、これ！？」

「さてな。だが、このまま放っておくわけにもいかないだろ」

あまりの状況に悲鳴のように叫んでしまふ望。

そんな彼女に答えながら士はベルトを取り出して装着していた。

「て、おい！？ 戦うつもりかよ！？」

「あれをどうにかしないとまずいことになると思うが？」

「そうかもしれないけど……無茶だ！？ 数が違いすぎる！？」

当然と言った顔で答える士に驚いていた雄介は叫んでいた。

確かに前回とは違い怪人の数が違いすぎる。ざっと見ても30以上はいそうだった。

それではいくら士が変身すれば強くなるとはいえ無理だと雄介は感じたのである。

「確かに無茶かもな。でもな、なぜかはわからないが、あいつらの好き勝手にさせちゃいけないって思うんだよ」

「で、でも」

ケースからカードを取り出しながら話す士に望は止めようと声を掛けた。

雄介の言うとおり数からしてあまりにも無茶だと思った。いや、そ

れ以前に土もいなくなってしまうと思った。

そんな望に土は振り向いて笑顔を見せ

「安心しろ。死に行くつもりなんか無い。変身!」

『仮面ライド デイクライド!』

その言葉の後にカードをベルトにセットし、3日前のあの姿、デイクライドへと変身する土。

その後、両手を払うように叩いてから怪人達の群れへと向かい走り出した。

「土……」

その様子を望はただ黙って見送るしか出来ない。だが、同時に無事でいて欲しいと願ってもいた

「が!?!」

「たく、こんだけの数がどこから来るんだか」

「おが!?!」

怪人達を殴りながらばやく土。わかってはいたものの怪人達の数が多すぎる。

無茶だとはわかってはいたが、それでも土は戦うしかなかった。

このまま怪人達を暴れさせるのは嫌な予感しかなかったために。

「何をするつもりか知らんが、ろくでもないってことは確かみたいだしな」

『アタックライド プラスト!』

「あががが!?!」「ごばあ!?!」「がああああ!?!」

怪人達は明らかに町を破壊したり人を襲っている以上、友好的な目的とはどうしても思えない。

だから、止める為にベルトにカードをセットし、銃へと変形させたケースから光弾をマシンガンのように放って怪人達に撃ち込んでいく。

しかし、これで倒せるわけでは無い為、どうするかと土が考えた時

「ん? おわ!?!」

巨大な光球が自分へと飛んでくるのに気付き慌てて跳び退くが、地面に当たると共に大きな爆発を起こして大きな衝撃を起こした。その衝撃に吹き飛ばされ、着地をし損ねて地面を転がるように倒れる土。それでもすぐさま立ち上がって光球が飛んできた方へと向いた。

「たく、いきなり何しやがる！」

「ふん、まさかこの世界に我らと戦える者がいたとはな。だが、無駄だ。この世界は我らグロンギの物だ」

文句を言う土に答えたのはある怪人だった。他の怪人達よりも一回り大きな体。

その姿はどこか金剛力士を思わせるが、身に付ける鎧や装飾品が禍々しさを際立たせている。

「グロンギ？ それがお前の名前か？ それにこの世界がお前らの物だと？」

「そうだ。この世界の物全てを奪い邪魔な人間どもを滅ぼし、我らグロンギの帝国を創り上げる」

「は、ふざけんな。そう言われて、はいそうですかって言うこと聞くと思ってるのか？」

「この世界は我らの物となる。その為に我らはこの世界へと来た。今更、それを変えることなど出来ん」

「だったら、なおさらやらせるわけにはいかないな！」

グロンギと名乗る怪人の言葉に土は怒りを覚える。この世界は自分達の物。貴様らは邪魔だから殺す。

さも当然と言わんばかり言動に自分に告げる勘の意味がわかった。こいつは許してはいけないと

だからこそ、ケースを剣へと変形させて斬りかかる。怪人達の目的を止める為に。

「うおおおー！！」

「ふん……数年前にこの世界を破壊するために先兵を送ったが……貴様が倒したようだな？」





それが嫌だった。だから、声に出して懇願するのだが、土には届いていないのか戦いをやめようとはしない。

「なんでだよ……なんで、あんなになつてまで戦えるんだよ……」

雄介は拳を握りしめながら問い掛けていた。勝てるわけがない。それはどう見たって明らかだ。

なのに、土はやめようとはしなかった。もう、ボロボロのはずなのに戦い続けようとする。

なぜ、そんなことが出来るのか雄介にはわからないことが悔しかった。

自分は何もわからず、ただ黙って見ているしかないのかと……

「あ!?」

そんな時、望は思わず声を出していた。

何事かと雄介が顔を向けると土が怪人に羽交い締めニされており、それを狙って別の怪人が攻撃しようとしていた。

「やめろお!?!」

無意識に叫んだ雄介は体が動いていた。

「ぐあ!?」

「く、どけ!」

「ごわ!?」

気が付けば土を羽交い締めニしている怪人に体当たりして突き飛ばされていた。

解放された土はすぐさま遅い掛かってくる怪人を斬り付け蹴り飛ばし、雄介の元へと寄る。

「たく、無茶しやがって」

「無茶はお前だ! 早く逃げよう!」

「悪いがそれは出来ない。代わりにあの子を頼む」

「あの子? あ……」

「う、うう……うええええええええ」

土の言葉に思わず叫んでしまうが、それでも逃げようと言い出す雄介。しかし、土はそれを断つてある方へと指を向けた。

雄介がそこへと顔を向けると、その先にしゃがみ込んで泣いている小さな女の子とを見つめる。

「どうやら親とはぐれてしまい、怖くて動けなくなってしまったらしい。」

それを見て雄介は助けなきゃと思うのだが、すぐに女の子が怪人達の中にいることに気付いて足を止めてしまう。

今は土に気を取られて気付いていないようだが、先程のことを考えれば気付かれた途端に襲われてしまうかもしれない。

「俺があいつらの気を向けるから、お前はあの子連れて逃げろ」

「ちよつと待てよ!? だったら、あの子と一緒に逃げようぜ！」

その方がいいって! あんな数に勝てるわけ無いだろ!？」

土の言葉に雄介は慌てて止めようとした。どう見たって土が勝てそうには見えない。

だったら、あの子と一緒に逃げた方がいいと雄介は思ったのだ。

「安心しろ、勝つつもりはない。せめて、あの馬鹿笑いしてる奴だけでも倒しておきたいだけだ」

それに対し、土はグロンギを指差して答えた。土もこの数に勝てるとは思って無い。

しかし、少しでも数を減らしておきたかった。次に戦うのであれば、そうした方がいいと思っただのだ。

「無茶言うな!? 今は逃げた方がいいって!？」

「じゃあ、俺達が逃げたらあいつらはやめてくれると思うか？」

「そ、それは……」

それでも逃げようと言いつがる雄介だが、土の言葉に言いよんどんしてしまう。

グロンギの話は聞いていた。それを考えれば、土が握ればグロンギ達は再び暴れ出すだろう。

しかし、しばらくすれば警察や自衛隊が来るはず。後はその人達に任せればいいと思っただのだ。

「だからって……土が戦う必要なんて無いだろ!？」

「違うな」

「え？」

思わず叫ぶ雄介だが、士の返事に思わず顔を向けてしまう。

言われたの士は刀身を手でなぞりながらグロンギを睨み

「必要だからやってるんじゃない。俺がやると決めたからやっている。ただ、それだけだ」

「士……」

士のその言葉は雄介の中で響いていた。それが士の覚悟の言葉に聞こえて、そこで気付いたのだ。

自分に足りないのが士のような覚悟だと。自分の身近な者達にはせめて笑顔でいて欲しかった。

今まではどうすればそうすることが出来たのかわからずにいた。でも、今の士の言葉で気付いたのだ。

自分にはそれがしたいという覚悟が無かったことを

「くそ……」

気付いて、雄介は両手を握りしめる。やっと気付けたのに、自分には今をどうにか出来る力が無いことに。

どうにかしたかった。どうにかしたいのに……その力が無い。

「くそおおおおお！！？」

だから、悔しくて叫んでいた。自分の不甲斐なさに……ようやく答えを見つけられたのに何も出来ない自分に

そんな時、士が持つケースが独りでに開いたかと思うと2枚の真っ白なカードが飛び出してきた。

士がその2枚を手に取りると真っ白だったカードに図柄が現れた。

1枚には士がしているベルトとどこなく似ているベルトが描かれており

もう1枚にはやはりディケイドとどこかに似ている仮面の戦士とクワガタのような機械が描かれていた。

「雄介！」

「え？ おわ！？」

呼ぶと共に士はベルトが描かれたカードを投げ、呼ばれて振り向いた雄介は慌てた様子でそのカードを受け止める。

そして、不思議そうにカードを見つめるが

「な、なんだよ……これ？」

「お前のカードだ。使い方はカードが教える。さっさと変身しろ！」

「え？ へん……しん？」

士の言葉に戸惑っていた雄介だが、不意に何かの頭の中に浮かんできた。

それはカードの使い方……いや、それだけではない。カードに秘められた想いも頭の中に流れ込んでくる。

かつて、このベルトをした者は自分と同じように誰かの笑顔を守りたくて

「なんか、わからないけど……よし！」

戸惑いながらも雄介は決意を秘めた顔をして、両手をカードと共に腹部に当てた。

するとカードが輝いて消えると共にカードに描かれたベルトが雄介に装着される。

「なに！？」

それを見たグロンギや怪人達は驚きを見せていた。なぜなら、そのベルトは見覚えがある物だったからだ。

その間に雄介は左手を握ってベルトの左側に当て、右手を構えながら突き出し

「変身！！」

掛け声と共に右手を振って左手に当てるとすぐに両腕を広げる。すると雄介の体が何かを纏うかのように変わっていき

「馬鹿な！？」

「雄介も……変身しちゃった……」

その姿にグロンギはまともに驚き、望は呆然としてしまう。

雄介の今の姿は士が持っているもう一枚に描かれた仮面の姿と同じになっていた。

黒い手足に赤い体。頭も黒く昆虫を思わせる目も赤く、額にはクワガタを思わせるような触覚があった。

「クウガだと!? 馬鹿な……奴がこの世界にいるはずがない!?」  
その雄介の姿にグロンギは信じられないといった様子で叫んでいた。

なぜなら、グロンギは雄介の今の姿と同じ者と戦い敗れようとしていたからだ。

しかし、”ある者”の助けで自分達の世界から逃れ、この世界へと来たのに

「く……奴らを殺せえ!!?」

「なに怒ってんだか……行くぞ、雄介」

「ああ……望ちゃん。あの子を頼んだよ!」

「え? あ、ちよつと!」

怒りを露わにして号令するグロンギ。そんな様子に土は呆れながらも声を掛け、雄介はうなずきながら望に声を掛ける。  
声を掛けられた望は戸惑ってしまったが。

「は!」

「く、貴様!」

斬りかかる土の剣を受け止めるグロンギだが、先程の余裕とは打って変わって苛立った様子を見せていた。

そんな彼らに怪人達は襲いかかるうとするが

「させるか!」

「ぐあ!」「ぎゃ!」

飛びかかる形で雄介が怪人達を殴り、それを阻んだ。

「おわ!? くつ、ちよつと待って!」

しかしながら数が違いすぎてすぐに劣勢になってしまう。

雄介はカードの力で戦えるようになったが元は普通の人間。故に戦いが出来るわけではない。

それでも避けたり受け止めたりして何とか怪人達と戦っていたのだが

「まったく……雄介、交代だ」

「え？ あ、わかった！」

そのことに気付いた士の言葉に雄介はうなずくとグロンギへと向かい、士はグロンギから離れて怪人達へと向かっていく。

「また邪魔をするか、クウガ!？」

「俺はお前なんか知らないっての!」

グロンギにつかみかかりながら叫び返す雄介。グロンギはある意味そうではないのだが、雄介とっては初対面。

なので、グロンギの言葉の意味を理解出来ずにいたのだ。それでもやらせないと士から離れるように押していく。

「がは!？」「ごば!？」

一方、士も2体の怪人を斬り飛ばすとケースからカードを1枚取り出し、ベルトにセットして

『アタックライド イリユージョン!』

「え!？ 士が……増えた!？」

いきなり5人に増えてしまう。その光景に望は驚く中、士はそれぞれ怪人へと向かっていき

「があ!？」「ぎゃあ!？」「ぐば!？」「ごあ!？」「ぐがあ!？」

それぞれ殴ったり蹴ったり斬ったり撃ったりして怪人達を攻撃していく。

「く……なんなのだ、貴様は!？」

その光景にグロンギは叫ばずにはいられなかった。明らかに士の力は異常だった。

雄介をクウガへと変身させただけでなく、自らも増えたりして怪人達を攻撃していく。

そんなことはいかに自分とて出来るものでは無い。だからこそその疑問だった。

「俺か？ 俺は通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ!」

「ぎゃば!？」

その疑問に対し士は元の1人に戻ってから顔を向けて答え、その時に遅い掛かってきた怪人を殴り飛ばした。

「ふざけおつて!?!」

「うおわ!?!」

そのことで怒りを感じたグロンギは雄介を殴り、殴り飛ばされた雄介は地面を転がってしまう。

「いっつ〜……くっそ、強いぞあいつ!」

「なら、一気に決着を付けるか」

足下に来た雄介に答えつつ、士はケースから1枚のカードを取り出した。

それは雄介を変身させたカードと共に出てきたもう1枚のカード。それをベルトにセットし

『ファイナルフォームライド　ク・ク・ク・クウガ!』

「ちよつとくすぐつたいぞ」

「へ?」

声を掛ける士に雄介は疑問を感じて振り向こうとするが

「おわ!?!」

その前に士の両手が雄介の背中に触れたかと思うと扉を開けるかのように動かした。

すると雄介の背中に黒くて平べったい金属のパーツが現れたかと思うと雄介の体に変形し

「ゆ、雄介?」

「おつきい……クワガタだ……」

その光景に呆然としてしまう望。女の子もそれに気付いて顔を上げる。

そう、雄介は士がセットしたカードに描かれた金属で出来た人の大ききさほどもあるクワガタへと姿を変えていたのだ。

「な、なんだよこれ!?!」

「俺達の力つて所だ。一気に行くぞ」

「俺達のとつて……わかったよ!」



士の返事にいきなりすることに驚いていた雄介は戸惑いながらも空高く飛び上がり

「ぎゃ!?!」「ぐお!?!」「がつ!?!」

飛び回って周りにいた怪人達を突き飛ばしていく。

その間に士はケースを銃に組み替えてカードを取り出し、ベルトにセツトしていた。

『アタックライド　ブラスト!!!』

「ぐぐぐぐぐぐぐぐ、ぐわあ!?!」

士が撃ち出す無数の光弾に撃ち抜かれ、グロンギは突き飛ばされるような形で地面を転がっていく。

その間に雄介はクウガの姿に戻って士の横に立ち

「「おおおおお!!!」「」

「ぐはああああああ!?!?!」

共に片足を突き出す形で立ち上がるうとしていたグロンギを蹴り飛ばしていた。

「決めるぞ、雄介」

「ああ!」

『ファイナルアタックライド　ク・ク・ク・クウガ!!!』

「おりゃあ!」

カードをセツトする士に返事をしてから雄介は再びクワガタの姿となってグロンギへと向かい飛んでいき

「く、ぐ……おわ!?!」

よろめきながらも立ち上がるグロンギを角で挟み込み、宙へと持ち上げるように飛び上がり

「く、やめ、ぐはあ!?!」

天高い所でUターンして落下し、地面へとめり込ませるように叩きつけた。

その後、グロンギから離れた雄介は士の元へと飛んでいき

「は!」

士もそれを見て飛び上がると再びUターンして戻ってきた雄介の

上に乗る、共に天高く飛び上がっていく。

「は！」

グロンギが小さく見えるほどまで上がると土は飛び降り、雄介もクウガの姿に戻り

「「おりやあああああああ！!?」」

共に右足を突き出しながら落下していく。グロンギへと向かって。

「く……こ、の……ぐばあああああ！!?」

グロンギもそのことに気付くが地面にめり込んだことでまともに動けず、それでも攻撃しようとして腕を伸ばす。

だが、間に合わずに落下してきた土と雄介の右足に胸を打ち抜かれてしまう。

蹴りを打ち込んだ土と雄介は跳ねるようにしてグロンギから離れ、振り返って様子を見ていた。

「く、が……リントに……我らが野望を……破られるはずが……が  
あああああああ！!?」

右手を突き出すように伸ばしうめくグロンギ。だが、やがて悲鳴を上げたかと思うと大きな爆発を起こした。

それと共に周りにいた怪人達が力なくしたかのようにへたり込んだかと思うと次々と消えていった。

「え？ あ、あれ？ どうなったんだ？」

「どうやら、あいつを倒せば終わりだったみたいだな」

この光景に戸惑う雄介だが、土は肩をすくめながら答えていた。落ち着いて見えるが、実は土もこれは予想外だった為に少しばかり驚いていたりする。

「土！ 雄介！」

「あ、望ちゃん！」

と、心配そうに駆け寄る望に右手を振る雄介。だが、やってきた望は2人を見て泣きそうな顔になる。

「馬鹿……心配……させないでよ……馬鹿あ……」

「あ、ごめん……」

「言つたる？ 死ぬつもりは無いつてな」

泣き出す望に雄介は両手を合せて謝るが、土はそんな彼女の頭に手を置きながらそう答えるのだった。

その後、サイレンの音を聞いて土達は変身を解いて逃げ出してしまふ。

このままだと自分達が警察のお世話になつてしまふと判断した為だ。その為、警察が駆け付けた時に見たのは破壊された町並みと犠牲になつた人達。

そんな中、救助された女の子が何か見てないかと聞いてみるのだが

「あのね。通りすがりの仮面ライダーさんとおっきなクワガタがバケモノを倒してくれたの」

と言われ、もしかして混乱してるのか？ と、周囲を戸惑わせたという。

グロンギとの戦いから2日後の土曜日の朝。

学校が休みのため、土と望はフォトショップの住居部分にあるリビングにいた。

ちなみにこのリビングは写真館が経営されていた頃は撮影スタジオとして使われていた部屋である。

しかし、今は写真館が休業状態の為にリビングとして使われていた。

「よー！」

「あら、雄介君いらっしやい」

そんな時に雄介が右手を挙げつつ現れ、そんな彼に叶が笑顔で挨拶をしていた。

「なんだ、来たのか」

「いや、望ちゃんのこと気がなっちゃって。でも、その様子なら大丈夫そうだね」

ソファーに座る土に頭を掻きつつ笑顔で答える雄介。

顔を向けて見ると同じくソファアに座る望はそれなりの笑顔を見せていた。

「あ、うん……終わった……よね？」

「そりゃそうだろ？ 俺と土があいつらをやつつけたんだから」

望の問い掛けに雄介は笑顔で答える。あのグロンギとの戦いの後、望は泣き続けていた。

あの戦いの恐怖もあったが、2人が無事でいたことが本当に嬉しかったからだ。

そんな状況で帰ってきたために土と雄介は何があったんだと叶に怒られる羽目になってしまったが。

ちなみに叶には何があったかは話してはいない。言っても信じてもらえるかわからなかったからだ。

それはそれとして望と雄介はそんな会話をしていたが、土はどこか真剣な表情を見せている。

「ん？ どうしたんだよ？ 難しい顔をして？」

「いや、あのグロンギが言っていたことが気になってな」

そのことに気付いた雄介に土は表情を変えずに答えた。

あの時、グロンギはこの世界に来たと言っていた。それがどうにも気になったのだ。

まるで自分達は違う世界から来たというような言い草だ。もし、そうなのなら

「気になること？ いや、気にすることないんじゃないか？ もう終わったんだからさ。」

それにまた出たとしても俺達でまた倒せばいいんだし」

などと笑顔で話す雄介。しかしながら、あまりにも楽観的な意見に土は呆れてため息を吐いたのだった。

「はいはい、コーヒーはいかがくて、あらあ？」

そんな中に叶が入ってきた時だった。壁際の梁に設置されていた写真撮影の時に使う背景用の垂れ幕がいきなり降りてきたのである。

「え？ なんて？ それにあんなのってあったっけ？」

いきなりのごとに戸惑う望。本来真っ白であるはずの垂れ幕には大きな……本当に大きなししか言えない大木の絵が描かれていた。それに良く見ると大木の周りには町らしき物も描かれている。そんな垂れ幕が独りでに下りてきたことに驚いたのだ。

「あら〜？ あんなのあつたかしら？」

「え？ この家の物じゃないんですか……って、なんだありや！？」  
首を傾げる叶の言葉に雄介は困った顔をしながらふと窓へと顔を向け、それを見た途端に叫んでしまう。

「きゃ！？ な、なによ……いきなり大声なんて出し、て……」

いきなりのごとに驚きながらも望も窓へと顔を向け、それを見て固まってしまった。

「あら〜？」

「俺達の町じゃ……無い？」

叶と土も釣られて窓へと顔を向け、そこから見えた光景に呆然としていた。

窓の外には見知っていたはずの町並みは無かった。代わりにあったのはまったく知らない町並み。

洋風を思わせる……そう、垂れ幕に描かれた町並みと似た町並みがそこにあつたのだ。

林らしき場所。そこに誰かがいた。

「は……はは……なんで……こんな所に来てしまったのかな……私は……」

全身をマントとフードで覆い、顔も右目以外を包帯で覆ってしまっている者が木に背を預けながら座り込んでいた。

声からして女性らしいのだが、そんな格好故に姿がうかがい知ることが出来ない。ただ、同じく包帯で覆われた右手には野太刀が握られていたが。

「まあ……いい……ここなら、奴らも来ない、だろう……ゆっくり

と……死んで、逝ける……」

力ない声で呟き、右目を閉じる女性。

そんな女性を学校の制服らしき物を着た黒髪をサイドテールにした少女が、長い竹刀袋を持ちながら見つめているのだった。

突然の事に呆然と窓の外を長めながら立ち尽くす士達。この時の彼らは知らなかった。

自分達の戦いが今これから始まるうとしていたことに

## 第2話『本当の始まり』（後書き）

ども、今回の話はどうでしたか？　ちと駆け足感が否めませんが、これにて序章は終了。

次回からは本章へと入ります。本章では見ての通り異世界での話となります。

もっとも、この時点では土達はここが異世界だとはまだ知りませんが

さて、今回は『魔法先生ネギま！』の世界に来てしまった土達。

しかし、そうだと知らない土達は町中を探索してみるが、そこである女性と出会った。

その女性とは　といったお話です。

ちなみに先に言っておくとネギま！の主人公は出てこなかったりしますが……ま、そんなわけで次回でお会いしましょう。

### 第3話『見知らぬ世界』

「な、なんで!? どうなってるの!?!」

いきなりの事態に望は混乱していた。

気が付けば家ごと見知らぬ土地に来ていたなんてのは普通あり得ることではない。

だから、彼女の混乱はある意味当然とも言える。

一方で士は訝しげな顔をしながらもフォトシヨップの外に出てみた。広がる光景はやはり変わることはなく、まったく知らない町。

ただ、行き交う人のほとんどが日本人だったため、日本だというのは間違いなさそうだが。

「学生が多い町だな」

町の光景を見ながら士は学生が多いことが疑問に思う。

近くに学校があるのかと思ったが、それらしい建物は見えない。

「日本だとしても、ここどこだよ?」

「さてな」

「て、どこに行く気!?!」

未だに戸惑いを隠せない雄介に答えた士はどこかに行こうとしていた。

望が慌てて呼び止めると振り返り

「どんな所なのか見てみるんだよ。そういうわけだから叶さん、行ってくる」

「は、い、迷子になっちゃだめよ」

答えてから声を掛けて歩き出す士に叶は笑顔で手を振っていた。

ちなみに叶も驚いてはいるが、フォトシヨップが無事なので何とかなるだろうと思ってるので比較的冷静であった。

「あ、待って、私も行く!」

「お、俺も!」

外へと出る士の後ろ姿を見てから望と雄介は不安そうに互いの顔



を向け合い、慌てるように土の後を追うのだった。

で、町中を歩く土達はここが麻帆良まほりょうと呼ばれる都市であることを知ったのだが

「麻帆良って……あつたっけ？」

「さあ……」

雄介の疑問に望は首を傾げるしかない。地理に詳しいわけではないが、それでも都市名に聞き覚えが無い。

一方で土はさして気にした風も無く麻帆良を歩き続けていた。

もつとも、褐色の肌をした小柄な少女が大勢の男達を殴り飛ばす光景を見た時は顔をしかめていたが。

「な、なんだ……あれ……」

「さてな……ま、とんでもない所に来たのは間違いなさそうだが」

同じ光景を見て望と共に驚く雄介に土は肩をすくめながら答えつつ、町中を歩いていく。

「お、おつきい……」

「ああ、本当だな……」

ある場所に来た時、それを見上げる望に雄介は戸惑いながらもうなずいた。

2人が見ているのは1本の木だった。ただし、ただの木では無い。

大きい……いや、巨大と言ってもいい程の樹

というか巨大すぎる。まるで高層ビルの如く、その樹はそこに立っていたのだ。

それに圧巻される望と雄介だが、逆に土は顔をしかめていた。何かがおかしいと感じたのだ。

だが、何がおかしいのかがわからず、その場は去ることにした。

しばらくあちこちを歩き回った土達はふと林の入口らしき場所に来ていた。どうやら、郊外に出てしまったらしい。

「へえ、こんな所もあるのか。でもまあ、こんな所に入っても、つて入る気かよ!？」

感心しながらも振り向く雄介だが、林に入ろうとする士の姿を見て驚いてしまう。

士はといえば振り向き

「なんか、変な感じがしてな。それを確かめたいだけだ」

「変な感じって……」

士の返事に望は不安そうな顔をする。確かに何か近寄りがたい雰  
囲気を感じる。

故に望としては生きたくなかった。なのに、士は林の奥へと行こう  
としてしまう。

それを見た望は同じように不安そうな雄介の顔を見てから、意を決  
して士の後を追うことにしたのだった。

「あ、ちよつと待ってくれ!？」

それを見ていた雄介も慌てて追い掛けるはめになったが

さて、林の中では全身を覆い隠した女性が未だに木に背を預ける  
ようにして座り込んでいた。

唯一露わとなっている瞳も閉じられており、傍目から見ると眠って  
いるのかもしれない。

が、不意にその瞳を見開いたかと思うとある方向へと顔を向ける。  
その先にいたのはサイドテールの少女。その手には竹刀袋ではなく、  
代わりに女性と同じ野太刀が握られていた。

「刺客……か……ここまで来るとは、な……」

「長の命により、あなたを捕縛します」

呟く女性を睨みながら少女は野太刀を抜き、構えた。

この時、女性は意識が朦朧としていて少女の言葉が良く聞こえな  
かった。

もし、聞こえていたら疑問に感じていたかもしれないのに

「出来れば……静かに……逝きたかった、が……無理か……」  
「え?」

少女に対し女性は動きを見せず、そのことに少女は戸惑いを見せる。

「というのも少女は女性が」凶悪な存在」と聞かされていたからだ。しかし、今の女性からはそんな物は感じられない。いや、どこか諦めているようにも見えた。

少女の考えは正しい。女性は諦めていた。全てに……生きることさえも……

「殺せ……私は、もう……疲れた……」

（ああ……これでいいんだ……ただ……）

その一言を漏らすと共に女性は瞳を閉じる。ただ、1つだけ心残りはある。

でも、それも”今の自分”では叶わないだろう。そんな諦め故に女性は死ぬことを選んだのである。

「あ、ああ……あ……」

そのことに少女は怯えてしまう。自分を殺してくれと言われたのだから当然かもしれない。

少女は人を傷付けたことはあっても人を殺したことなど無い。故に殺してくれと言われたからといって出来るはずも無かった。

「あ、あ……くっ」

その為だろうか？ 少女は逃げた。

女性の諦めが怖くて……何をどうしたらいいのかわからなくて

「なんだ？ でも……いいか……これで……静かに、逝ける……」

そのことに女性は瞳を開くものの、すぐに再び閉じてしまう。

女性はすでに限界だった。もう、何日も飲まず食わずだったのだから。

そして、その限界が来たのを悟ったのである。そのことを望んでいた女性は穏やかな様子を見せていた。

しかし、何かが近付いてくる気配にわずかながらに瞳を開けてしま

う。  
（誰だ……さっきの奴が……戻ってきたのか？ だとしても）

誰かが近付いてくる様子を朦朧とした意識で眺めていた女性はそのまま気を失う。

その寸前にどこか心地の良い感触を感じた気がしながら

「あ、う……あ……」

「お、ようやくお目覚めか」

暖かな感触を感じながら女性は目を覚まし、掛けられた声に朦朧としながらも顔を向ける。

そこにいたのは女性の見知らぬ青年。その青年が向き合う形でソファに座っていた。

そこで女性は気付く。自分がソファに寝かされていたことに。

「お前は……誰だ……ここは……」

「俺は門矢 士。で、ここは俺の家のリビングだ」

青年こと士は気にした風も無く答える中、女性はそれを聞きながら辺りを見回す。

そこで男女 雄介と望のことだが、その2人が自分を怯えているような困っているような目で見ていることに気付いた。

どうしたのかと思ったが、そこで新たに気付いた。自分を覆い隠していたマントやフード、包帯が取られていることに。

それによって、自分の姿が露わになっていることにも

女性の姿は醜悪な物だった。体は右の瞳の周り以外はどす黒い色をした瘤のような物で包まれていたのである。

頭も腰まで伸びる黒髪があるが、その上からでも瘤がいびつに盛り上がっているのが見て取れた。

あの2人がこの姿を見て怯えているのは容易にわかった。だが、それでも女性はわずかに困惑していた。

士はどう見たって自分の姿を怖がっているようには見えなかった為に。

「お前……私の姿をどうも思わないのか？ それになぜ私をここに

連れてきた？」

「いや、前にも変なのを見たことがあってな。気にするほどでも無かっただけだ。」

ここに連れてきたのはなんか行き倒れみたいだったから、ほっとくのも気が引けただけだ。

ま、最初は病院連れていこうと思ったが、体の様子を見ようと脱がしてみたらそんな体だろ？

それでマズイと思ってな。とりあえず、ここに運んだ」

睨む女性に土は肩をすくめながら答える。ちなみに土が言ってるのは前回戦ったグロンギのことである。

それ故か、土には今の女性の姿とグロンギの姿はどっちもどっちにも思えたのだ。

だが、そのことを知らない女性はある疑いを持って土を見てしまう。

「お前……魔法、使い……か？ それとも、呪術師？」

「いや、俺は通りすがりの仮面ライダーだ」

「仮面……ライダー？」

土の返事に問い掛けた女性は首を傾げる。まあ、仮面ライダーを初めて聞いたのだから当然の反応とも言える。

ともかく、自分を見る土の反応を見て女性はそう思ったのだが、今の土の様子を見ているとどちらでもないような気がしてしまう。

逆に仮面ライダーの意味がわからなくて少し困惑していた。

「それにしても魔法使いや呪術師ね……ここはそんなのがいるようには見えないが」

その一方で土は窓の外を見ながらそんなことを呟くが、同時にある考えにいたっていた。

自分達は見知らぬ場所に来てしまったと思っていた。しかし、それが違っていたら？

そして、女性が言う魔法使いや呪術師とやらの存在やあの大きすぎる樹。もしかしたら

そんな事を考える土を見てか、女性は仮面ライダーの意味を考え

つつも自分の推測が外れていたこと気付く。

もしかして、ただの一般人かとも思い始めていた。

「お前は……本当になんとも思わないのか？」

「なんだ、怖がって欲しかったのか？」

思わず睨んでしまう女性だが、土は気にした風も無く顔を向けるだけ。

その様子に女性は顔をしかめてしまう。本当に気にしていないのか？ と疑ってしまったために。

そんな時だった。女性から明らかにお腹の音が響いていた。そのことに怯えていた雄介と望は顔を引きつらせ、土は呆れた様子を見せた。

女性はとうとうつむいていた。顔を覆う瘤のせいでわかりにくいのが、恥ずかしがってるのだろうと土は見たりするが。

「叶さん、スープとか軽い物持ってきてくれるか？」

「はい」

「なにを」

声を大きくした土の言葉に叶が返事をする。女性は戸惑っていた。確かに空腹だが、だからといって食べ物望んでるわけではない。それどころか、これからのことを考えれば必要な物だった。

しかし、土は笑みを浮かべながら顔を向け

「なにを我慢してるかは知らんが、変な無茶は自分の為にはならないぞ」

「貴様に……何がわかる……」

「そうだな。お前さんが好きでそんな姿になっただんじやないと思ってるか？」

「な……」

言われて睨みつける女性だが、次に出た土の言葉に思わず呆気に取られた。

土の言葉は事実ではあるが、かといって言い当てられるとは思っていなかっただけに女性は驚きを隠せなかったのだ。

「その様子だとアタリみたいだな。ま、必要以上に自分の姿を気にしてるようだし、そうなんじゃないかとは思ってたけどな」

「あ、そういや土って……」

「そうだったね」

肩をすくめる土を見て雄介はあることを思い出し、望も気付いてうなずいていた。

土は人を外見で判断したりせず、その上勘も鋭い。以前、土達が通う学校にマドンナ的な女子生徒がいた。

雄介も思わず見とれてしまう女子生徒であったが、土に「あれは問題起こすか巻き込まれるかするからやめておけ」と言われた。

その時雄介はまさかと思っていたが、しばらくしてその女子生徒は事件に巻き込まれたと聞いてビックリしてしまう。

詳しいことまではわからなかったが、事故に巻き込まれた理由が自業自得と聞いた時には信じられないような目で土を見てしまったものだ。

だって、ほぼ土の言ったとおりになったのだから

そういったことがあったので、雄介や望も土の言うとおり女性が自分が思ってるほど怖い者では無いと思えるようになっていた。

「はい、どうぞ」

しばらくして叶の手によってコーンスープとロールパンが2個出されたが、その光景に女性は戸惑いの表情を見せていた。

というのも、叶が自分の姿を見ても穏やかな表情を何1つ変えなかったことに困惑したのだ。

「あの人は……私を見て何も思わないのか？」

「叶さんは小さいことは気にしない人だからな」

女性が漏らしたつぶやきに土は苦笑しながら答える。実際、叶は余程のことがない限り口出ししたりはしない。

その代わり土達が間違った道に行こうとすればそれを感じ取って諭したりする。そういったこともあって、土は叶に頭が上がりなかつた。

一方で女性は戸惑いながらコーンスープをスプーンですくい取り、一飲みして……それから静かに食べ始めた。

余程お腹が空いていたのだろう。コーンスープとロールパンはすぐに無くなってしまった。

「おかわりいるか？」

「え？ あ、いや……すまない。助かった。私はこれで失礼する」

答えて立ち上がる女性だが、問い掛けた士は見逃さなかった。女性の瞳が一瞬鋭さを増し、どこかを見ていたのを。

「え？ あ、あの、なんとというか……もう少ししてもいいのに」

「いや、これ以上世話になっても迷惑になるだけだ。すまなかったな」

戸惑う雄介に女性は答えつつ包帯を全身に巻きフードとマントを纏い、野太刀を持って外へと出ようとしたが

「そっぴや、あんたの名前を聞いていなかったな」

「必要無い。少なくともお前達にはな」

問い掛ける士だが、女性は視線だけを向けて答えるとそのまま去ってしまう。

それを静かに見守っていた士だが

「やれやれか」

「どこ行くの？」

「あいつを追い掛ける。なんか、気になってしょうがないからな」

望の問い掛けに士は立ち上がりながら答えて外へと出た。望と雄介も互いにならずき合ってから追い掛けるのだが

「あれ？ 追い掛けるんじゃないのか？」

「バイクで行く。たぶん、歩いたんじゃないや追いつけないだろうしな」

「バイクって……士は未成年じゃないの!？」

そのことに気付いた雄介の問い掛けに、なぜかガレージに向かう士はあっさりとした表情で答えた。

女性が外に出てから間もないのに女性の姿はもうどこにも見えない。外に出たことでそのことに気付いた士は普通に追い掛けただけでは



追いつけないと判断したので、そうしようと考えたのである。

もっとも望に待ったを掛けられるが、士は気にした様子も無くガレージのシャッターを開けた。

「ん？」

「え？ 増えてる？」

で、シャッターを開けた先には士が持ってきたバイクとは別にオフロードタイプのバイクがあった。

その見覚えの無いバイクに士は顔をしかめ、雄介はいつからあったのかと目を丸くして驚いている。

「な、なに……このバイク？」

「ふむ……どうやら、雄介のバイクみたいだな」

「へ？ 俺の？ おわ！？ な、なんだよこれ？ 免許証？」

望が戸惑う中、士がバイクに近寄って何かを見つけるとそれを投げ渡す。

雄介はそれに驚きながらも受け取って見てみると、それは自分の免許証だった。

ただし、生まれ年が2年早くなっており、現住所も麻帆良の物となっていたが。

「なんでこんな物が？」

「さてな。ま、安全運転はしておくがな。とにかく行くぞ」

「あ、待って!？」

戸惑う雄介だが士はいつの間にかヘルメットを被り、バイクをガレージの外に出していた。

そして、バイクにまたがりゴーグルを掛けてエンジンを掛けたところで望が慌ててヘルメットを被り、士の後ろにまたがった。

それを見ながら雄介もバイクを外に出し、バイクにまたがってヘルメットを被りエンジンを掛け

「あれ？ 俺、なんでバイクの動かし方知ってるんだろ？」

そんな疑問に首を傾げる。実は先日士に渡されたカードのおかげなのだが、そのことに雄介は気付かず士と共に走り出すのだった。

一方、女性は先程のいた林へと来ていた。あの時、リビングの中で感じた自分に向けられる殺気。

それは自分を追う者が向けたのだらうと感じた女性は、土達を巻き込まないためにあの場を去った。

そして、土達が自分を追い掛けないようにと普通ではありえない跳躍力で屋根を伝い、ここへと来た。

なぜ、そんなことが出来るのかは後ほど話すとして、女性としては土達を巻き込みたくはなかった。

何者なのかという疑問は残ってはいるが、少なくとも悪人の類では無いと思える。

そんな者達を自分が原因の騒動に巻き込むわけにはいかないところしたのである。

女性がそんなことを考えていると気配を感じて顔を上げた。

その先にいたのは数名の人影。スーツ姿だったりラフな格好をしていたりするが、その手にはなぜか日本刀や棍が握られている。

そして、その中にはサイドテールの少女もいたが、それとは別の少女の姿もあった。

背は女性の腰辺りまでしかない可愛らしい姿。巫女服を纏い、膝の辺りまで伸びる黒髪。

顔立ちこそ少女相応の物だが、歳を重ねれば美しく整うであろうことをうかがわせる。

そんな少女を女性は慈しむ目で見ていたが、少女は逆に睨んでいた。まるで親の仇を見るかのように。

そのことに女性は悲しそうな目になってしまふ。だが、仕方が無い。このように醜くなってしまうのだから、そんな自分をあの子は

「天寺 麗華。重大な裏切り行為により、貴様を処罰する！」

そんな少女の横に立つスーツを着込んだ中肉中背の初老の男が見下すような目を向けながら、そんなことを告げた。

それと共に左右に立つ男女がそれぞれ持つ得物を構えながら前に出た。サイドテールの少女は戸惑いを見せていたが

「長の命令……忘れたわけではあるまい」

「……はい」

やはり見下すような目を向ける初老の男性の言葉にサイドテールの少女は困惑した表情のままうなずき、野太刀を構える。

それに対し、麗華と呼ばれた女性は動かない。なぜなら、自分の言葉が届かないのはすでにわかっていたからだ。

出来れば、静かに逝きたかった。そう思いながら目をつぶる。そこで浮かぶのは小さな少女と土の姿だった。

最期に少女と土に会えたのは良かった……そう思った矢先

「やれやれ、なんだか穏やかじゃないな？」

「え？ な！？」

聞き覚えがある声に麗華は思わず振り返り、驚いた。なぜなら、その先にいたのは土と雄介に望だったのだから。

「一般人？ おい、”人払いの結界”を張ったのではないのか？」

「そ、そのはずです……」

一方、土達の登場に初老の男性は苛立ちを見せるが、問い掛けられた男は戸惑っていた。

なぜなら、”人払いの結界”は間違いなく張った。だから、普通の人間がここに来ることなど出来るはずがない。

でも、土達は来た。”魔力”も”気”も感じられない普通の人間が

「話は聞かせてもらったけど……麗華だったか？ そいつがどんな裏切りをしたって言うんだ？」

そんなやりとりを視線を向けつつ聞き逃さなかった土が問い掛ける。

一方で心の中では別なことも考えていた。

「ふん、そやつはな、禁断と言われる力に手を出し、関西呪術協会を転覆しようとしたのだ」

「禁断の力ねえ……まるで見てきたことのように知ってるんだな？」  
なぜか自慢げに話す初老の男性に士は視線だけを向けて問い掛ける。

雄介と望は困惑した表情で麗華を見ているが、士だけは初老の男性にある物を感じ取っていた。

「当然だ。この目で見たのだ。この化物が禁断の力を手に入れようとして失敗し、醜い姿になった所をな」

「ふうん……じゃあ、見てたんなら止めようとはしなかったのか？」  
「何が言いたい、小僧？」

やはり自慢げに答える初老の男性だが、士の問い掛けに今度は睨み返していた。

その姿に士はある確信を得る。が、それと同時にあることにも気付いてしまう。

「大体わかった……それでだ。後ろの奴らはあんたらの知り合いか？」  
「なに？」

士の言葉に初老の男性は訝しげな顔をしながら少女達や男女達と共に振り返る。

振り返った先にいたもの。それは蟻を思わせるような姿をした群れをなす怪人達の姿であった。

「な、なんだあれは……」  
「え？ あ、あれって……そんな、あれは俺達が倒したはずじゃ」

「俺達の所に来た奴らは、な」  
「ど、どういうこと？」

その光景に初老の男性は麗華や少女達や男女達と共に困惑の表情を浮かべる。

一方で雄介は驚きを隠せなかった。あの時とは姿こそ違えど、あれは怪人に間違いなかった。

まさか怪人が再び現れるとは思わなかっただけに驚いていたのだ。

逆に士は冷静だった。このことは予想していただいただけに雄介よりはシヨックはかなり低かったのである。

一方で望は雄介と同じく驚いていたが、士の言葉に疑問を感じて問い掛けていた。

「あいつらは別の所から来たようなことを言ってただろ？　そこにあいつらの仲間がいたとしても不思議じゃないってことさ」

怪人達から目を離さずに士は答えるが、今はそれよりも気に掛かることがある。それは

「な、なに!？」

士がそんなことを考えている間に怪人の1人が男に襲いかかった。男はそれを日本刀で受ける形で止めるが、同時に驚いていた。

怪人が斬れないのだ。男は怪人を斬るつもりで本気で日本刀を振っていた。当然、”気”を込めて。

だが、怪人を斬るどころか腕で日本刀を受け止められるという思いがけない結果に驚いたのだ。

「う!？」

その間に怪人に水を拭きかけられ、思わず離れてしまうが

「ぐ!？　あ、がぼ!？　がば!？　おぶ、ぶ!？」

なぜか、溺れたかのように苦しみだし、もがきながら地面に倒れ……動かなくなってしまう。

「ぐあ!？」「い、いやあああ!？」「な、なんだこいつら、ぐ!？　ごぼお!？」

「な、なんだこれは……」

他の者達も先程の男のように襲われていく光景に初老の男性は怯えた表情を見せていた。

男女達は怪人のような存在と戦う為の力を持った者達だ。なのに大した抵抗も出来ずに倒されていく。

初老の男性としては信じられない光景に恐怖を感じ始めていた。

「な!？　うわあ!？」

「きゃ!？」

その時、近付いてきた怪人に驚き、横にいた少女を突き飛ばしながら逃げ出してしまふ。

それを見て他の者達も逃げ出してしまふが、サイドテールの少女は怪人達に囲まれていたこともあって逃げ出せずにいた。

一方、突き飛ばされた少女はそのまま地面に倒れてしまい、すぐに起き上がろうとしたが

「え？ あ……」

怪人が近付いてくることに気付いて、その動きが止まってしまふ。

「あ、ああ……」

近づく怪人に少女は恐怖を感じていた。このままでは自分も襲われた者達のように

「麗葉！」

が、その間に麗華が割り込む形で立ちふさがった。

許せなかった。麗華が麗葉と呼んだ少女を傷付けられるのが。なぜなら、麗葉は

「お姉……様？」

私の大事な妹なのだから。そんな思いを持つ麗華を麗葉は戸惑った表情で見つめている。

「麗葉、逃げ、く！？」

そんな麗葉に逃げるように声を掛けるが、その間に怪人に襲われてしまふ。

なんとか野太刀で受け止めるものの、麗華はこのままではやられると感じていた。

自分では怪人と戦うのはままならない。なぜなら、自分は”気も魔力”もろくに扱えないのだから。

「おい、このままじゃ」

「わかつてる。望、お前は麗華の近くにいろ」

「た、戦うの？」

何かを言いかける雄介に答えつつ、士は望にそんなことを告げた。言われた望は戸惑っていた。また、士が戦おうとする。それが自分

を凄く不安にさせる。

だって、戦ったら土は傷付くかも……いや、いなくなってしまうかもしれないから

「このままだと俺達も危ないからな。いくぞ、雄介」

「おう！」

そんな望に答えつつ、土はベルトを装着する。

声を掛けられた雄介も返事をしながらカードを持って両手を腹部に当ててベルトを装着した。

雄介としてもこのまま見ているわけにはいかなかった。このままだと笑顔が失われることになるから。

「変身！！」

『仮面ライド デイクライド！！』

掛け声と共に土はカードをベルトにセットし、雄介もベルトのボタンを押すと2人の姿がデイクライドとクウガへと変わっていく。

「え？ な……」「え？」「な、なんだ？」

その光景に麗華、麗葉、サイドテールの少女は驚いてしまう。

特に麗華の驚きは大きかった。土に何かあるとは思っていたが、このことはあまりにも予想外だったために。

「まったく、数ばかりそろえやがって」

「ああ、そうだな、つと。ちょっと借ります」

ケースを剣にして麗華に組み掛かる怪人などを切り裂く土に答えつつ、雄介は手短にいた怪人を殴ってから落ちていた棍を拾い上げた。

「超変身！！」

そして、構えながら叫ぶとその姿が変化した。体と目の色が青くなり肩当てが黒くなる。

更には持っていた棍も青く硬質で装飾が施された物へと変わっていた。

「てりゃあ！」

その姿に変わった雄介が先程とは変わって素早い動きで棍を使い、

怪人達を打ちのめしていく。

「まったく、どれだけいるんだ？」

『アタックライド　ブラスト!!』

土もケースを銃に組替えカードの力で光弾を乱射するが、あまりの数の多さに思わず愚痴が出てしまう。

だが、無理もない。倒したそばから次々と同じ姿の怪人が現れるのだ。それこそ、蟻が巣穴から出てくるように。

「く、うう……」

その間に怪人に押し倒されそうになるサイドテールの少女を見て、土はケースからカードを取り出し

『アタックライド　イリユージョン!!』

「はあ!？」

5人に別れ、それぞれが怪人に向かっていく。その光景に麗華は更に驚愕した。

わかるのだ。あれの分身が全て実体だと。麗華の知識の中では”気や魔力”を使ってもそんなことはありえない。

故に驚いたのだが、逆にそれを離れた木の枝に腰掛けながら楽しそうに見ている者もいた。

「あ、く……」

「大丈夫か？」

「あ、はい……あなたは……いつたい……」

「後にしてくれ」

助けられたサイドテールの少女が問い掛けるが、怪人を殴り飛ばした土は答えつつ辺りを見回していた。

怪人達の数は減る様子が無い。このままでこちらが危ないと逃げ出すことも考える土だったが、そこであることに気付いた。

怪人達の姿は全員同じだが、1人だけ装飾品を多く身に付けている。そして、そいつはなぜか動こうとはしない。

「雄介!　露払いをしてやる!　そいつをやれ!」

「え?　あ、わかった!」



まさかという思いと共に土は叫びながらケースを銃に組替え、カードを1枚取り出した。

分身していた他の土達も同じことをする中、言われた雄介は戸惑いながらもうなずいて赤の姿へと戻る。

「ケイドー！」「ケイドー！」「ケイドー！」  
ケイドー！」「ケイドー！」  
デイ・デイ・デイ・デイ

全ての土がベルトにカードをセットすると、セットしたカードと同じ絵柄のフィールドエネルギーが土達の前に何枚も並んでいく。そのフィールドエネルギーへと土達が銃となったケースを向けて光弾を発射した。

光弾はフィールドエネルギーを突き破っていくことに大きさを増し、巨大な塊となって放たれて怪人達を吹き飛ばしていく。

それによって怪人達は次々と倒れ、しまいには光弾が大爆発を起こしたことで吹き飛んでいった。

残ったのは土が見つけた怪人のみ。それへと向かって構えていた雄介が走り出し

「はー！」

天高く跳び上がり、空中で一回転して

「はあー！」

「ぐはあ！？」

右足を突き出して怪人を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた怪人は吹き飛び、激突するような形で地面に倒れ

「く、が……が、がああああああああ！？」

それでも立ち上がるうとするが、蹴りを受けた胸に紋章らしき物が浮かんだかと思うと頭に光の輪のような物も浮かび、直後に悲鳴と共に爆発したのだった。

それを見届けてか、残っていた怪人達は先程のことまでが嘘のように引き下がっていく。

離れた場所にいた爆発した怪人よりも豪華な装飾を纏い杖を持つ、まるで王と女王のような姿の怪人と共に

「引き下がったただけか……ま、今は良しとしておくか」

その光景に土は元の1人に戻りながら、そんなことをぼやいていた。

そんな彼の姿を麗華は呆然と見つめていた。ただ者では無いとは思っていたが……だけど

「土……お前は何者なんだ……」

「言わなかったか？ 俺は通りすがりの仮面ライダーだって」

「仮面……ライダー？」

思わず出た麗華の疑問。それに土は人差し指を立てながら答えていた。

しかし、意味がわからない。サイドテールの少女もわからないために首を傾げていたのだし。

「仮面ライダーか……ふ、面白そうじゃないか」

その様子を木の枝に座っていた者が楽しそうに呟いていた。長く伸びた金糸のように艶やかに輝くブロンドの髪。

麗華よりも少しばかり高い背で、その顔立ちはまるで人形のように可愛らしく整っていた。そんな少女がなぜか鋭い瞳で土達を見ている。

そして、その少女の横には寄り添うように立つ少女がいた。人形のような少女よりも高い背。

その身を人形のような少女もだが、サイドテールの少女が着ているのと同じ制服を身に纏っている。

だが、その少女はどこか人形の少女よりも人形めいて見えた。

エメラルドグリーンに輝く長い髪を持つ顔立ちは整っていないながらもまるで人形のように無表情だった為に。

「まったく、面倒なことになりそうだな」

そんなこととは知らない土は変身を解きながらため息を吐いていた。

これから考えられる厄介ごとに頭を悩ませながら

### 第3話『見知らぬ世界』（後書き）

そんなわけで魔法先生ネギま！の世界に来た士達は麗華達の出来事に巻き込まれてしまいました。

果たして麗華達に何があったのか？　そして、士達を見守る少女は何者なのか？

え？　少女が誰かはバレバレ？　ま、そこは気にしないでください（おい）

さて、次回は少女や麗華達から話を聞くことにした士達。そこではある確信を得ます。

それと共に出てくる問題に頭を悩ませることになります……  
そんなわけで次回でまたお会いしましょう！

#### 第4話『導かれる者達』

変身を解く士と雄介だが、その様子を麗華、麗葉、ポニーテールの少女は戸惑った表情で見ている。

先程、士と雄介が見せた戦い方は彼女らからすれば異常と言っしかない。

” 気や魔力 ” を感じられないのはまだいい。あの変身した姿によってあの力が出せるんだと納得は出来る。

しかし、士が見せたあの分身はありえない。 ” 気 ” によって出来た分け身ならともかく全てが実体。

そんなことが出来るとは麗華達の常識ではまず考えられなかった。それに雄介が変身した姿の色が変わったことで戦い方が変わったことにも驚かされる。

戦い方を変えろというの自分は今まで培ってきた物を変えるのに等しい。

普通ならそんなことは出来るものでは無かった。

「さてと、俺達はお前達に何が起きてるかわからないんで、話を聞かせてもらえると助かるんだが？」

「ならば、ついでにお前達のこと聞かせてもらおうか？」

問い掛ける士にそんなことを聞いてきたのは聞き覚えの無い声であった。

士達が聞こえた方に顔を向けると、そこには先程木の枝で様子を見ていたブロンドの髪の少女と人形のような少女が立っていた。

「エヴァンジェリン……なぜここに？」

「ふん、その妙な格好をした奴や逃げていった関西呪術協会の奴らは気付かれないように入ったつもりだろうが私にはバレバレだ。それで様子を見てきたらということだ。それにしても中々面白いことになってるじゃないか？」

サイドテールの少女が驚いたように問い掛けると、エヴァンジェ

リンと呼ばれたブロンドの髪の少女はどこか偉そうに答えていた。それを雄介と望は戸惑った様子で見ているが、士は眼を細めながら見ている。

雄介と望は見た目らしからぬ話し方をするエヴァンジェリンに戸惑ったのだが、士の場合は何かを感じ取ったためであった。

「知り合いか？」

「え？ あ、その……」

「エヴァンジェリン・A・T・マクダウエルだ。名前くらいは知っているだろう？」

「なんだと!？」

士の問い掛けにサイドテールの少女が戸惑う中、名乗ったエヴァンジェリンに麗華が驚いていた。

麗華も麗華ほどではないようだが、驚いたような表情を見せている。

一方、士は腕を組んでエヴァンジェリンを見据え

「まったくもって知らん」

「だあ!？」

あっさりと言い切る。そのことにエヴァンジェリンは見事なこけつぷりを見せていたが。

「ほ、本当に知らないのか？ あの真祖の吸血鬼であるエヴァンジ

エリンを……

いや、私もまさかここにいるとは思ってはいなかったが……」

「そうだ!？ 貴様も裏の人間なら名前くらいは聞いているはずだろうが!？」

士の言葉に戸惑う麗華。エヴァンジェリンも立ち上がって凄い剣幕で迫っていたりする。

が、士は腕を組んだままエヴァンジェリンを見据え

「俺は通りすがりの仮面ライダーだが、裏の人間とやらになった覚えは無い。」

だから、お前さんのことなんて聞いたことも無い」

(しかし、真祖の吸血鬼か。どうやら、間違いなさそうだな。ここ

は )

表情を崩さずに答えた。それを証明するかのように雄介と望も首を傾げている。

一方で士は内心そんな確信を深めていたが。

「く、なんなのだ貴様は……先程の変身や戦い方といい……」

「そうだな。とりあえず、場所を変えないか？　ここで話すよりはいいと思うぞ？」

睨むエヴァンジェリンに士は肩をすくめながら返していた。

そのことに士と人形のような少女以外の者達が困ったような戸惑ったような表情を見せてしまう。

しかし、士の言うことももっともだったため、士の案内で場所を変えることにしたのだった。

で、やってきたのはフォトショップだったが

「おかしいです。記録されているマップではここにお店があるはずがありません」

「今日来たばかりだからな」

「来たばかりだと？」

人形のような少女の疑問に士はそう答えるのだが、そのことにエヴァンジェリンは訝しげな顔をする。

麗華は首を傾げつつも内心は少しばかり落胆していた。というのもここに来るまでの間、麗華が自分に近付こうとしなかったからだ。自分がこのような姿になったのだから当然かとは思ってはいたものの、こつもあからさまだとやはり落ち込んでしまう。

そんな麗華の様子に士は気付いた様子も見せないままで中へと入っていった。

「あ、お帰り、ってあら？　お客様かしら？」

「ま、そんなところだ。とりあえず、好きな所に座ってくれ」

出迎えた叶に答えつつ、士は麗華達に声を掛けた。

麗華と麗葉、サイドテールの少女は戸惑ったものの言われた通り思いの席に座る。

それでも麗葉は麗華とは離れた所に座っていたが。なお、エヴァンジェリンは当然という様子でカウンター席に座っている。

人形のような少女は座らず、エヴァンジェリンの横に立っていたが。「さてと、まずはなんで麗華を襲ったのか、詳しく話してくれないか？」

雄介や望と一緒にカウンター席に座る土の問い掛けに麗華はなぜかうつむき、サイドテールの少女は困ったような顔をしてしまう。

「裏切ったんだよ……お姉様は私達を……」

が、麗葉は怒りをにじませながら答える。そんな彼女を麗華は悲しそうに見ていたが。

「さつきもそんなことを言ってたけど、裏切ったってどういうことなの？」

「お姉様は……関西呪術協会を自分の物にしようと禁断の力に手を出したって……けど、それに失敗して醜い姿になったの……」

「私も長からそのように聞いています。それで彼女の捕縛を手伝うようにと……」

望の疑問に麗葉は怒りをにじませたまま答える。逆にサイドテールの少女はどこかすまなそうな様子で答えていたが。

それを聞いて雄介と望は戸惑いを見せながら麗華を見ていた。麗華のあの姿を見ていただけにそうなのかと思ってしまうのだ。

だが、土は眼を細めながら視線を向け

「と言ってるが、実際はどうなんだ？」

「そんなこと……考えたことも無かったよ……」

「「え？」」

そんな問い掛けに麗華は自嘲気味に答えた。そのことに驚く麗華とサイドテールの少女。

「私は……麗葉のように膨大な魔力も無いし……ましてや気を扱う才能も無いに等しかった。」

だから、私は剣の道を歩んだんだ。天寺家は才能がある麗葉が継ぐことになるのは間違いなかったからな。

私はそうなった麗葉を守れるようにと神鳴流の門をくぐり、毎日鍛錬に明け暮れていた。だが、あの日……突然だった。

道場で鍛錬をしていたらいきなり激痛に襲われて……苦しくなつて……そのまま気を失つたんだ。

気が付けばすでにこんな体で……更にはこの私を見た家の者達はいきなり裏切り者扱いして……

私は訳もわからないまま逃げるしか出来なかった」

「な……」

フードを下げ、顔の包帯を解きながら麗華は話していた。

そのあらわとなった彼女の顔を見てサイドテールの少女は驚いていたが、エヴァンジェリンは逆に興味深そうに笑みを浮かべている。

「嘘です！？ では、なんでそんな姿になつたのですか？ 藤島が嘘を言つたとしても！？」

「藤島？」

怒りを見せる麗華だが、その中で出た名前にサイドテールの少女が反応する。

それに気付いた土は一瞬視線を向けてから麗葉に向け直し

「藤島つてのは？」

「長年天寺家に仕えている者だ。あの林で麗葉の横に立っていた者がそつだ」

「あのじいさんか……ところで天寺家とやらは偉い所なのか？」

「え？ あ、はい……関西呪術協会に属している術士一家の中では最高峰とも言える所かと……」

麗華の返事に問い掛けた土は納得しつつ別なことを問い掛ける。

それにはサイドテールの少女が戸惑いながら答えていた。一方、エヴァンジェリンは訝しげな顔を土に向けていた。

エヴァンジェリンは今の話で何かに気付いたのだ。そして、その何かに土が気付いているのでは？ と思つたのである。



「なるほどね。ところで、さっき藤島って奴の名前に反応してたみたいけど?」

「え? あ……実は……長の命令をその藤島さんが伝えたので……その……」

納得しつつも土は先程気付いたことを問い掛ける。聞かれたサイドテールの少女はなぜか怯えた様子で答えていた。

実はその連絡の際に藤島にある脅しを掛けられていた。それが気掛かりで未だに怯えているのである。

そんな様子の彼女を見た土は何かを察しつつ、自分が感じていた疑問にある推測を立てる。

もともと、それはエヴァンジェリンも同じだったが。

「なあ、その長って奴に確認出来るか? 麗華を捕まえるように言っただか?」

「え? なぜ、そんなことを?」

「確かめたことがあってな。やってもらえるか?」

「は、はあ……」

戸惑うサイドテールの少女に問い掛けた土は真剣な眼差しで答える。

それでも意味がわからず首を傾げる少女だったが、どこか押されるような気持ちで携帯を取り出して掛けることにした。

「あ、長ですか? 桜咲 刹那です。実はお聞きしたいことが」

しばらくして、刹那という名を出したサイドテールの少女は携帯越しに長と思われる者と話し始めたのだが

「え? 指示を出していない? ど、どういうことですか?」

しかし、話している内に刹那は戸惑ったような顔を浮かべてしまっ

どうやら、長と思われる人物は藤島が言っていたような指示は出していないらしい。

そのことに戸惑ったようであった。

「では、藤島殿が話した事は、あ」

「詠春か？ 私だ、エヴァンジェリンだ」

戸惑いながらも通話を続けていた刹那だが、その彼女の携帯をエヴァンジェリンがひったくると携帯ごしに話し始めてしまう。

どうやら詠春という名の長とは知り合いらしく、どこか偉そうにながらも今回のことを話し合っていた。

「つまり、藤島はお前には麗華が修行の旅に出たと言っていたのかな？

しかし、それだとおかしいな……麗華は呪いでも掛けられたのか、とんでもない姿になっているぞ。

しかも、藤島は自らここに出向いて麗華を裏切り者扱いしていたな」  
麗華に視線を向けながら楽しそうに話すエヴァンジェリン。

一方、その話を聞いてか麗華はうつむき、麗華は信じられないような顔をしていた。

「ああ、藤島を調べてみてくれ。こちらでも奴を押えておく。どのみち、不法侵入も同然だからな。では、頼んだぞ」

「あ……」

通話を終えたのか、エヴァンジェリンは携帯を切ると放り投げてしまう。

その携帯を刹那は呆然としながら受け止める中、土は頭痛を感じるのかこめかみに指を当てていた。

「まったく、厄介な……」

「は？ どういうことだよ？」

「たぶんだが、麗華がそんな姿になったのも藤島って奴が原因なんだろうな」

疑問顔の雄介にぼやいた土はため息混じりに答えるのだが、それを聞いた麗華と麗葉は信じられないといった顔をしている。

実際に信じられなかった。藤島は天寺家に親身に仕えてくれただけでなく、自分達も世話になっていただけに

「天寺家とやらは良い所の家なんだろ？ それに乗っ取るか裏から牛耳ろうとしたんじゃないのか？」

「ありえる話だな。もしくは麗葉を利用しようとしたのかもしれん。あやつは魔力は木乃香並にありそうだからな」

呆れたように話す士にエヴァンジェリンも同意するかのようにならず。

その話を聞いてか、麗華と麗葉は完全にうつむいてしまっていた。そんなはずは無いと思いたかった。だって、自分達は藤島には色々とお世話になっていた。

自分達の両親が事故で亡くなった後も親代わりとまではいかなくとも親身になってくれたのだし。

「だったら、なんとかしないと」

「なんとかかって、何をやる気だ？」

「何って、麗華さん達を助けることに決まってるだろ」

「お前な」

雄介が言い出した事に士は呆れた様子で視線を向けるが、そのことに雄介は反論する。

しかし、それを聞いた士はあからさまなため息を吐き

「言うておくが、今話したことは状況証拠でしかない。

例え、藤島って奴を捕まえても言い逃れされたらそれまでだしな」

「証拠は奴自身が少なからず持っているかもしれんが、大半は京都の方だろう。」

となれば、ここで出来ることなぞたかが知れているぞ」

士と同意するようにならずエヴァンジェリンの話に雄介は思わすうつむいてしまう。

2人の言っていることがわからないわけではない。でも、それでもなんとかかしたいとも考えていた。

けど、その方法が思い浮かばず、雄介はそれ以上の事が言えずにいたのだが。

「それにこの世界にも怪人達が来たんだ。

そっちの方をなんとかしないと、後々厄介なことになるぞ」

「え？」

土の言葉に望はふと疑問を感じて顔を向ける。

今、土は何かおかしいなことを言っているように思えたのだ。

そう、確か

「この世界って……どういうことなの？」

「ん？ 言葉通りだ。どうやら、ここは俺達がいた世界とは違うみたいだ。いわゆる異世界って奴だな」

「はあ！？」

望の問い掛けに土が答えると雄介は大袈裟に驚いていた。一方で麗華達も驚きの顔を向けてはいた。

まあ、自分達が異世界から来たなんて聞いたら、雄介のような反応をしてしまうのも無理がないかもしれない。

「魔法使いに呪術師。麻帆良やらあのでっかい木やら……俺達がいち所で聞いたことはあるか？」

「あ、あの……そういつた物は魔法などを使って秘匿されてる物ですから、土さん達が知らなかったのはしょうがないかと」

「じゃあ、あの怪人は？ あいつらはどこから来た？ あいつらのこと、あんたらは知ってたのか？」

「そ、それは……」

話を聞いて否定しようとした刹那だが、話した土の反論に言いよどんでしまう。

あの時現れた蟻の姿をした怪人の群れ。あんなのは刹那は見たことも聞いたことも無かった。

それは麗華と麗葉、エヴァンジェリンも同じようにで苦虫をかみしめたような顔をしていたが。

「俺達の所にも来た奴もどっかの世界から来たような話をしてたからな。

まあ、俺も確信を持つてるわけじゃないが、そう考えた方が色々つつじつまが合ってくるだよ。

問題はなんで俺達がこんなことになってるかだが……それはあいつらを倒してから考えよう」

話し終えてから士はため息を吐いた。というのも問題が山積みだからである。

突然、異世界に来てしまったと思ったら妙なことに巻き込まれ、更には怪人達とまた戦うことになっている。

一部は自業自得だとしても、あまりの厄介さに頭が痛い思いだったのだ。

「ふむ、なるほど……確かにお前達の力は魔法使いとも呪術師とも違うからな。茶々丸、科学ではどうなんだ？」

「アーマーという形ならば、ある程度再現は出来ると思います。しかし、士さん達のような物となると超さんや八カセでも難しいと思われませう」

話を聞いて納得しているエヴァンジェリンの問い掛けに茶々丸と呼ばれた人形のような少女 名を絡繰 茶々丸という が静かに答えた。

その返事にエヴァンジェリンは納得する。雄介はまだしも士の力はあまりにも異質すぎる。それが魔法から見てもだ。

カードを使うという点では似たような物があるが、あれは1人に付き1枚だけの物。

特殊な能力でもない限り何枚も使えるような物ではなかった。

「それでお前達はどうするつもりなのだ？」

「さっきも言ったが、怪人達の方をどうにかする。ほっとくと色々つまずいことになりそうだからな」

士の言葉に問い掛けたエヴァンジェリンは興味深そうに視線を向ける。

士は”麻帆良にいるような魔法使い”とは違う。そんな物を感じたために。

「自分の徳にはならんのか？」

「厄介ことになるよりはマシだと思っけどな」

「では、お前はなんの為に戦う？」

ため息混じりに答える士に問い掛けたエヴァンジェリンは更に問

い掛けた。

問い掛けたのは確かめたかったからだ。先程感じ取った物が本当にそうなのかを。

「決まっている」

それに対し、土は顔を向け

「俺は俺が思うように戦う。ただ、それだけだ」

「「はい？」」

人差し指を立てながら答えるのだが、それを聞いて麗華と刹那は目を丸くする。

問い掛けたエヴァンジェリンも同じだったりするが。

「では、なぜ麗華を助けるようなマネをした？」

「言つたろ？ 俺は俺が思うように戦うと？ 興味本位もあつたとはいえ首を突つ込んだんだ。」

何もしいままだと後々面倒な事になりそうだったし、俺としては後味も悪くなりそうだったからな」

気を取り直し睨むかのような目で問い掛けるエヴァンジェリンに土は気にした風も無く答えた。

しかし、エヴァンジェリンはそれだけでは納得はしない。というのも

「それが理由か？」

「他に理由が必要か？」

それだけの理由であんなことをするとはエヴァンジェリンとしては信じられなかったのだ。

が、土は首を傾げながらも問い返してきた。

「理由なんて物は大抵は後付けみたいなもんだ。したいからする。大抵の奴はそんなもんだし、俺もそうだったってだけだ」

真つ直ぐに見据えながら土は答え、その様子を望と雄介は苦笑しながら眺めていた。

土がこういう者だと知ってるからこそその反応であるが、内心相変わらずだったので安心もしていた。

「く……ふふ、ははははは……まったく、お前のような奴は初めて見たな」

「そりゃどうも」

それを聞いたエヴァンジェリンはというと突然笑い出す。

士は今まで出会って来た人間の中でかなり特殊な部類だった。まさに己の道を行くといった感じである。

かつて、自分が憧れた者に似てるようにも見えるが、士は更にその上に行くような気がしてしまう。

一方で言われた士は呆れた様子でため息を吐いていたが。

「はい、どうぞ」

「叶さん。こいつらお客じゃないんだが……」

「ちよつとしたサービスよ。まあ、次からはお金はもらうけどね」

呆れた顔を見せる士にエヴァンジェリン達にコーヒーやクッキーを出した叶はちゃっかりとそのこと付け加えつつ答えていた。

まあ、こういった細やかなサービスを欠かさないのがフォトシヨップの売りの1つではあったりするが。

「ふむ、コーヒーは普段は飲まないのだが……これは中々の物だな」

「あ、美味しい……」

とりあえず飲んでみるエヴァンジェリンと刹那だが、苦みを抑えた飲みやすい味に少しばかり驚いていた。

麗華も声には出さなかったものの、目を見開いていることから同じように驚いているのがわかる。

ちなみにとある不幸体質なライダーのお姉さん程ではないものの、叶もコーヒーにはこだわりがあったりする。

また、紅茶も淹れられないわけではないが……味はコーヒーより落ちるとだけ答えておこう。

「あ、あの……これ、は？」

「え？ なにって、普通のオレンジジュースとショートケーキだけど？」

一方、麗葉出された物に戸惑っていたが、そのことに望が首を傾

げている。

望が言うように麗葉の前に出されたのは普通のオレンジジュースとショートケーキである。

まだ子供な麗葉にコーヒーはまだ無理だろうと思って叶がそうしたのだが

「無理もない。天寺家ではこういった菓子の類は出したことが無かったからな」

「そうなんだ」

そんな少女の姿を見つめながら話す麗華の言葉に望はそういうこともあるのかと思ってしまった。

そして、それはなんだか可哀想な気がしてくる。それは麗葉に自由が無いような気がして

まあ、その考えはあながち間違いでは無かったが。

一方、麗葉は戸惑いながらもフォークを使ってショートケーキを一口食べてみた。

もつとも、フォークに不慣れだったようで、一口食べるまで悪戦苦闘していたが。

で、食べてみて目を丸くしたかと思うと嬉々といった様子で食べ始めたのである。

その様子に気に入ったのだと思った麗華は微笑ましそうに見つめていた。

良く考えれば、妹のこういった姿は初めて見るような気がする。天寺家の家柄もあってこのようなことは出来ずにいたから。

だから、こういったこともあっても良いと思えてしまうのだ。

「あれ？ 君は飲まないの？」

「え、あ、その……私は……」

ふと、茶々丸がコーヒーに手を付けていないことに気付いた雄介が問い掛けるのだが、茶々丸はどこか困ったような顔をする。

「私はガイノイド……いわゆる機械の体ですので、食物を摂取出来るようにはなっていないのです」



「へ？ ロボット!?」

「ああ、茶々丸は知り合いが創り上げた物だな。まあ、一部に魔法を使用しているがな」

「どんな奴らだよ、それ」

すまなそうに答える茶々丸の言葉に雄介は驚きを隠せなかった。

確かにぎこちなさはあるし、良く見れば機械的な箇所もいくつか見受けられる。

でも、それに気付かなければ普通の少女に見えてしまうのだ。なので、望と麗華も目を丸くして驚いている。

そして、茶々丸の経緯を簡単に話すエヴァンジェリンだが、それを聞いた士はジト目になっていた。

詳しいわけではないが、茶々丸を創り上げるには相当な技術力があるのは容易に想像出来る。

それを可能にした者達がどんな者が気になった故の反応であった。

「あ、いや……気にしないでくれ。気付かなかった俺も悪かったし」

「そういえば……なぜ、あなたが麻帆良にいるのだ？ 15年前に退治されたと聞いていたが」

「それが……ふん、思い出すだけでも忌々しい……」

後頭部を掻きつつ頭を下げる雄介。

一方で麗華はそのことに気付いて問い掛けるが、エヴァンジェリンは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

「15年前のあの日、私はナギの奴に登校地獄という呪いを掛けられたんだ。」

授業がある日は病気でもない限り必ず学校に行かなければならないという呪いをな」

「なんだ、そのツツコミ所満載な呪いは？」

忌々しそうな顔をしたまま話すエヴァンジェリンだが、聞いた士は思わずジト目で突っ込んでいた。

良く見ると問い掛けた麗華も同じような目をしている。まあ、士の言うとおりなので同じ目を思わずしてしまったのだが。

「士達は知らんだろうが、私は昔色々やっつけていな。その罰といった所だ」

窓の外を見ながら答えるエヴァンジェリン。話を聞いた士はそれだけで察していた。

エヴァンジェリンは何か悪いことをして、その罰としてそのような呪いを掛けられたのだと。

「しかし、奴は……私が卒業した頃に戻ってくると……」

光に生きてみる、そして呪いを解いてやると言ったのに……奴は来ないどころか10年前に……

馬鹿な奴だ……悪の魔法使いである私に光に生きた所でどんな意味があるというんだ……」

そのまま話し続けるエヴァンジェリンだが、その表情はどこか物悲しげに見える。

そのことに士と叶、茶々丸以外の者達は息を呑んでいた。

「そんなのって……」

「あの、その呪いは……解けないの？」

「ナギの血縁者の血を吸って魔力を高めるか、ナギ以上の魔力を持つ者なら出来なくもないが……」

血縁者はまだしもナギ以上の魔力を持つ者などそうはいない。今の内は無理だろうな」

それを見て愕然とする雄介。

望も可哀想だと思いつながら問い掛けてみるが、エヴァンジェリンから返ってきた言葉は芳しく無いものであった。

そのことに望と雄介は悲しそうな顔をする。が、実を言えばエヴァンジェリンは全てを話したわけではない。

ナギの血縁者はこの麻帆良にいた。そして、エヴァンジェリンはその者を使って呪いを解こうと考えていたのである。

だから、エヴァンジェリンとしては望と雄介ほどの悲壮感は無かった。

「なんで来なかったのかはわからないが、そのナギって奴はそのまま」

まの意味で言ったんじゃないんじゃないか？」

「なに？」

「が、そんなことを言い出した士の言葉にエヴァンジェリンは訝しげな顔をする。」

「どういうことだ？」

「多分だけどな。ナギって奴はお前さんに光り輝く生き方をしてみろって言いたかったんじゃないのか？」

「光り輝く、だと？ 悪の魔法使いである私にか？」

士の言葉にエヴァンジェリンは拒絶の意志を見せる。

士や望達はこの時は知らないが、エヴァンジェリンは今でこそ取り下げられているものの、多額の賞金を掛けられていた。

いわば悪人であり、そんな自分が光り輝くことなど出来ないと思っていたのだ。

それに対し、士は右腕を高く上げて人差し指を差し

「ある奴はこんなことを言っていた。人はどんな形であれ光を持っていると。」

だが、そいつを輝かせられるかはそいつ次第でもあるとな。エヴァ、お前がどんなことをしてきたかは知らない。

けど、そんなお前でも光を持っているはずだ。エヴァという名の光をな。

ナギって奴は自分の光を輝かせられる奴らの中で自分を輝かせ方を探してみると言いたかったのかもしれない」

エヴァンジェリンを真っ直ぐに見据えて答え、その姿にエヴァンジェリンは息を呑んだ。

なぜか、士から光を感じた。太陽や電灯のような物とは違う光を。

「では、どうすればいい？ どうすれば……そんなことが出来る？」

「さてね。人によって違うかもしれないから、俺にもそれはわからないよ。」

だがな、例え後悔してもその後悔を糧にして生きていくのは必要だとは思うけどな」

だからだろうか？ エヴァンジェリンは知りたかった。そんな生き方をする方法を。

が、土は肩をすくめるだけであつたが。それでもエヴァンジェリンには不思議と腹ただしさは無かつた。

彼がそう言うのだから、そうなのだろうと思えてしまう。

一方で刹那はそんな光景を羨ましく感じていた。そして、考えてしまふ。自分にそんな生き方が出来るだろうか。

だって、自分はこの体のせいであの人から離れるしかなかったのだから……

「ふん、まあいい……行くぞ、茶々丸、刹那」

「はい」「え？ あ、はい！」

ため息を吐いてから、エヴァンジェリンは席を立ちながら声を掛ける。

それに茶々丸は静かにうなずき、刹那も慌てて返事を返した。

「じじいにお前達のことは話しておいてやる。呼び出しを受けるだろうが、それには応じておいた方がいいぞ」

「ああ、変な波風を立てる必要も無いしな。そうさせてもらうよ」

「ふん、コーヒーは美味かつたぞ。また、貰いに来るからな」

「金は払えよ」

答えてからため息混じりに返す土に、言い出したエヴァンジェリンは笑みを見せてから店を去っていく。

茶々丸と刹那も頭を下げてから後を追うようにして同じように去っていったのだった。

「でも、これから本当にどうするの？」

「さてな……なんで、俺達がこの世界に来たかはわからないが、怪人達もここに来たのは偶然ってことは無いだろ。」

まずはそつちをなんとかした方が良さそうだ」

不安そうな望の問い掛けに土は天井を見上げながら答える。

異世界に来てしまった自分達と怪人達。互いがこの世界に来たのは偶然とはなぜか思えなかつた。

しかし、関係があるとすればそれくらいで、他に何かあるかはわからない。

わからないがこのままでいいということでもないし、麗華達のこともある。山積みな問題に土は頭が痛くなる思いだった。

「そういえば……麗華さん達はどうするんだ？」

「え？ 私達……ですか？」

「お前達はここにいろ」

ふと、そのことに気付いた雄介が問い掛けるが、麗華はというと戸惑っていた。

実を言えば、土達を巻き込みたくなかったので今すぐにもここを離れたかったのだが、その前に土に言われてしまう。

「し、しかし……」

「あの藤島って奴は逃げただけでまだこの辺りにいるはずだ。そいつがまた何かしでかさないとも限らないしな。」

だったら、そばにいてくれた方がまだ安心出来る。部屋を貸すから、今日はそこに泊っておけ」

戸惑いながらも断ろうとする麗華であったが、土の反論に何も言えなくなってしまった。

実際の所、土の言うとおりでもある為に麗華としては断れないのだ。

「だ、だがな」

「それに麗葉を野宿させる気か？」

「う……」

それでも断ろうとする麗華であったが、土の容赦ないひと言に今度こそ何も言えなくなってしまう。

自分は藤島の手の者達から逃げ回っていたために野宿は慣れている。しかし、麗葉は年齢も考えとかなり難しいだろう。

それ以前に麗葉にそのようなことをさせたくは無かった。

「しかし、ここが襲われたりしないだろうか？ あの時も気配を感じたから、私は去ったのだが」

「その時はその時で追い出せばいい。人の家で勝手に暴れられても

困るからな」

それでも懸念はあったので麗華は聞いてみるのだが、土はあっさりした様子で答えていた。

それを聞いて麗華は納得する。土は戦いも出来るし、知略といった面も優れているようにも見える。

そこまで考えて、ふと麗葉へと顔を向けてみた。

「ん？ どうしたんです？」

「いや、なんでもない」

食べ慣れてないせいとか口の周りにクリームを付ける麗葉に微笑みつつ、そのクリームを拭き取ってあげた。

それと共に思う。この子にはつらい思いはさせたくはないと。

「すまない。世話になる」

「あ、そういえば……俺はどこに寝ればいいんだ？」

「すまないが、客間は1つしかないんでな。布団を敷くか、ソファに寝るかで我慢してくれ」

「そ、そんなあ……」

頭を下げる麗華だが、そこでそのことに気付いた雄介が問い掛ける。

ここは土、望、叶の家であって雄介の家では無いので当然部屋は無く、土の提案に雄介は思わずうなだれてしまう。

そのことに店内で笑いが起き、その光景に麗華はどこか心休まる物を感じるのだった。

夜、客間にいる麗華はふと窓の外を眺めていた。

このようにゆっくりと眠れるのはいつかぶりだったか……ふと、そんなことを考えながら

「ん、お姉……様」

そんな時、布団に眠る麗葉がそんな寝言を漏らし、麗華は微笑みながら布団をかけ直してあげた。

だが、その表情がしばらくして悲しげな物へと変わってしまった。そして、包帯を巻いた両手を見つめていた。

思いつくのは入浴の時。その際、麗葉と久しぶりに一緒に入ったのだが、その時の麗葉のつらそうな目が忘れられない。

理由はわかっている。この醜くなった体のことを気にしているのだろう。それはある意味嬉しくもあった。

でも、同時に悲しくもなってしまう。未だになぜこのような姿になっってしまったのかわからない。

だから、元の姿に戻れるかどうかもわからないし、戻れなければ麗葉の元を去るつもりでいた。

自分のこの醜い姿はどんな形であれ、麗葉を苦しめてしまっただろうから

それ故に麗華はこの時を麗華との最後の思い出にしようとも考えていた。

「士には感謝しなければな。この時を与えてくれたことに……」

思わずそんなことを呟いてしまう。もし、士と出会わなければこのような時は一生訪れなかったかもしれない。

そう思うと士に感謝してもしきれなかったし、どうにかして彼にお礼をしたくもあった。

でも、この体ではそれも叶わない。それを考えると、この時ほどこの体を恨めしく思ったことは無かった。

「私は……どうすれば良いのだろうか……」

そんな疑問を思わず口にしてしまうが、今の麗華にその答えは見つかりそうもない。

その思い故に麗華は眠れぬ夜を過ごすこととなった。次の日、自分に待ち受ける運命も知らないままで

#### 第4話『導かれる者達』（後書き）

今回は戦闘はありませんでしたが、いかがでしたでしょうか？  
相変わらず駆け足感が否めませんが、あんまりぐだぐだとやるのも好きではないので。

なので、テンポ良くやれたらと思ってますが、中々に難しいです。  
さて、次回はネギま！編最終回。

エヴァンジェリン達に案内される土達であったが、その先で君嶋達  
がまたもや現れる。

更には怪人達も現れて そんな中、麗華と麗葉はある決意をし、  
それがあることを起こします。

また、土にもあることが判明して というような予定です。うん、  
そこまで書けるといいなあ……

そんなわけで次回もまたお会いしましょう。



## 第5話『破壊する者』

「ふあ、あゝあ……」「ね、眠い……」

次の日の朝。雄介と望は眠そうな顔をしてリビングにいた。

「なんだ、寝てなかったのか？」

「いや、こんな状況で寝れるわけないだろ……」

リビングのソファに座る土に、雄介はジト目で答える。

なお、土と叶はいつも通りに見える。自分と望は見知らぬ場所どころか異世界に来た不安で眠れなかったのに。

「というか、良く眠れた物だな？」

「気にしすぎても状況が良くなるわけじゃないし、休める時に休まないといざという時に困るからな」

どこか呆れた様子を見せる麗華に土は気にした風も無く答えた。

確かにその通りではあるのだが、それは簡単に出来ることでは無いことを逃亡生活を送っていた麗華は経験している。

だからこそ、ある意味土に感心していたりする。

その後、朝食の時間となったのでみんなで朝食を取った。

その際、トーストとハムエッグを初めて見た麗華が楽しそうに食べていたのが印象的であったが。

その朝食も終わり、これからどうするか？ と、誰かがそのことを問い掛けようとした時

「起きているか？」

エヴァンジェリンが訪ねて来た。その後ろには茶々丸と刹那の姿もある。

「何か用か？」

「何、じじいがお前達を連れてきて欲しいと言ってきてな。迎えに来たのだ。ああ、コーヒーをもらおう」

「金は払えよ」

答えつつ、ちゃっかりコーヒーを頼んでいるエヴァンジェリンに

問い掛けた土はジト目で突っ込む。

昨日はしょうがないにしても喫茶店の物は基本的に叶の物であり、売り物でもある。

だから、いつでもただでというわけにはいかなかったのだ。

「じじい？」

「あ、あの……この麻帆良にある学園全てを統括しておられる学園長でして、名前を近衛 近右衛門という方です」

「なお、学園長は関東魔法協会の理事もなされております」

首を傾げる雄介にエヴァンジェリンに視線を向ける刹那が答えると、補足するように茶々丸も答えていた。

そのことに雄介と望はお偉いさんかと考えるが、土は厄介ごとが増えたかと頭を痛める。

その学園長なる人物がどんな者かは知らないが、自分達にただ会いたいというわけではないだろう。

下手をすると新たな厄介ごとになりそうな気がしてなからなかったのだ。

「それと麗華と麗葉にも来てもらう。お前達は立場的にもここにいるのはマズイからな」

「それは仕方あるまい」

「どうということなの？」

エヴァンジェリンの言葉に麗華は納得したように見えるが、逆に望は訳がわからず首を傾げていた。

会いたいというのならまだしも、マズイとはどういう事なのかわからなかったためだ。

「そうか……お前達は知らなかったのだな。関東魔法協会と関西呪術協会は昔いざこざを起こしていたな。

今でも表面上は大人しくしてるが、裏では小競り合いが続いている。そんな中で関西呪術協会の奴らが関東魔法協会の拠点とも言える場所にいるのは色々とマズイんだよ」

エヴァンジェリンの話に納得しつつもそれ以外に何かを感じ取る

士。

士の勘は外れていないが、今回の事には直接関係ないためにあえて触れないでおくが。

「やれやれ、異世界に来ただけでも厄介だったのに」

「はい、どうぞ」

「ああ、すまない。ま、行っておいた方がいいぞ。

ここにいる魔法使いの何人かはお前達のことには気付いているしな」

思わず愚痴る士に叶からコーヒーを出されたエヴァンジェリンは礼を言ってからそう返した。

確かにいきなり現れた自分達の事をこのまま誰も気付かないままというのも無いだろう。

それが元で誤解されて、襲われるようなことになるのはごめんでもあったし。

そんなわけでエヴァンジェリンがコーヒーを飲み終わるのを待ってから店を出ることになった。

本気で余談だが、エヴァンジェリンが飲んだコーヒーの代金は茶々丸が支払っていると話しておこう。

そんなわけでエヴァンジェリン達の案内で麻帆良を歩く士達。

なお、今日は日曜だとエヴァンジェリンが言っていた。それで普段を着ている学生が多いのかと士達は思っていたが。

そんな彼らがしばらく歩いていたのだが、不意に士達が立ち止まったことに望と雄介は訝しげな顔をしていた。

「どうしたんだよ？」

「周りを見る。人がいない」

「え？ あ、本当だ」

問い掛ける雄介に士が視線を向けて答えると、望もそのことに気付いた。それなりにいた学生や町の住民達の姿が無い。

確かに通りに人通りは少ないかもしれないが、それでもまったく

いなくなるのは考えにくかった。

なぜ？ と、望と雄介が考え始めた時

「見つけたぞ、裏切り者」

藤島があの時一緒に逃げた男女を連れて現れたからである。

そのことに望と雄介に麗華と麗葉の顔が強張るがエヴァンジェリンは呆れた顔をし、土にいたってはため息を吐いていた。

「なんとというか、しつこいな。あんたも……」

「ふん、裏切り者を退治せねばならぬだ。当然だ」

「にしては、詠春は何も知らなかったようだが……どういうことかな？」

呆れるようにため息を吐く土に藤島はにやけた顔を向けるものの、エヴァンジェリンのひと言に顔を強張らせた。

この明らかかな反応に土とエヴァンジェリンはやはりかと確信を深めていたが。

「な、どういうことだ！？ なぜ、貴様らが長と」

「なんだ、知らなかったのか？ こいつは木乃香の護衛だぞ。そいつが詠春と連絡が取れないわけなからう」

「な！？」

明らかにうろたえる藤島だが、エヴァンジェリンが呆れた様子で答えると一転して驚愕の表情へと変わる。

近衛 木乃香とは詠春の娘である。ある事情で今はこの麻帆良にいるが、その間は刹那がその護衛を引き受けていたのだ。

なお、木乃香とはある事情で刹那が自分の護衛だということは知らない。その理由はいずれ語ることとなるが

一方で藤島は木乃香がこの麻帆良にいることは知っていても、刹那がその護衛だとは知らなかった。

関西呪術協会の長の娘なのだから護衛はいるだろうとは思ってはいた。しかし、それが刹那だとは思わなかったのだ。

これもある事情故に伏せられていたのだが、その理由もいずれ話すこととなる。

ともかく、藤島は刹那をなんらかの理由で麻帆良にいる西の者と見ていたために利用しようとしたのだ。

もし、士とエヴァンジェリンがいなければ、藤島の思惑は上手く行っていたかもしれないが

それはそれとして、思いがけないことに藤島はうるたえ、一緒にいた男女達も戸惑いの表情を見せていた。

マズイとかそういう声が聞こえてくるところから考えると、全員が藤島のグルなのだと思われる。

「く、殺せ！ 麗葉以外は全員殺せ！」

不意に藤島がイラついた表情を見せたかと思うと、そんな指示を大声で出した。

そのことに男女達は戸惑いを見せるが、すぐに士達へと向かい刀や棍を構える。

これには望と雄介の顔が強張るものの、麗華と刹那は構えつつも藤島達を睨んでいた。

一方で麗葉は怯えた様子で麗華の背後に隠れ、士とエヴァンジェリンは呆れた様子を藤島達を見ている。

唯一、茶々丸だけは無表情であったものの、エヴァンジェリンの隣にいて離れようとはしなかった。

「麗葉以外ねえ……なんでこの子に拘ってるんだかは後で聞くとして……」

とりあえず、どっちもどうにかしないとまずいことになりそうだな」  
「なに？ な！？」

呆れながらもため息を吐く士に藤島は訝しげな顔をした。

しかし、すぐに気配を感じて振り返り、それを見て驚きで声を漏らしてしまう。

藤島達の背後にいたのは昨日現れた蟻の姿を模した怪人の群れ。それが士達を取り囲むように次々と現れていた。

「こいつら、また……」

「用があるのはあっちなのかこっちなのかは知らないが……このま

まっつてわけにはいかないか」

「ああ、そうだな」

ため息混じりながらも真剣な表情で怪人の群れを見る土に最初は戸惑っていた雄介も真剣な顔でうなずいていた。

その後土はベルトを装着し、雄介はカードを取り出して構え

「変身!!」

『仮面ライド デイクライド!!』

うなるような音と合成音が鳴り響くと土はデイクライドに、雄介はクウガへと姿を変えて怪人達へと向かっていく。

「く! こいつら、何が目的なんだ!？」

「さあな! 俺達が麗華達の方が。どの道、ろくな目的じゃなさそうだな」

怪人達を殴り飛ばす雄介の問い掛けに土もケースを剣に組み替えて怪人達を切っていく。

幸いというか、怪人達の強さは変身した土と雄介なら余裕を持って戦える。だが、数の多さがあまりにも厄介だった。

一方で麗華達は土達のようにはいかない。麗華や刹那、茶々丸にしてみれば怪人達の力は脅威だ。

エヴァンジェリンも呪いのせいなのか魔力が封じられており、まともにも戦うことは出来ない。

そのことに悔しく思いながらも、今は戦いの行方をじっと見守っていた。

麗華はといえば、気や魔力をろくに扱えないので怪人達に有効打を与えられない。

「はあああ!!」

現に怪人の1体を斬り付けようとするのだが

「な!? うぐ!？」

本来なら気によって強化された剣で斬りつけるのだが、それが出来ない麗華はただ技だけで剣を振るうしかない。

しかし、それは怪人には通じず、逆に剣の方が半ばから折れてしま

う。しかも、それに驚いた隙に殴り飛ばされてしまった。

「お姉様!？」

「あ! 危ないよ!？」

そのことに気付いた麗葉が駆け寄ろうとし、それを望が呼び止めようとするが止まらない。

「こんな所で、ひい!？」

藤島もそのことに気付いて麗葉を捕まえようとするものの、怪人達に阻まれる形になって怯えてしまう。

「お姉様!？」

「麗葉……なぜ、来た……」

立ち上がるうとする麗華に駆け寄る麗葉。そんな彼女達に怪人達がまるで群がるかのように集まっていく。

「こやつら、あの2人が狙いか。茶々丸、行けるか？」

「いえ、身を守るだけで精一杯です」

「こちらもです!」

そのことに気付いたエヴァンジェリンが指示を出すそうとするものの、こちらにも来る怪人の相手に茶々丸と刹那は手一杯であった。

「く、士! お前、分身が出来ただろう! それでなんとかしろ!」

「そうしたい所なんだが、な!」

「おわ!？」

舌打ちしつつもなんとかせねばと指示を出すエヴァンジェリンだったが、言葉を返す士と雄介も怪人達の相手で手一杯であった。

しかも、その怪人は群れている怪人達と姿も力も違った。

雄介を持っている杖で殴り飛ばした方は体格や身に付けている装飾品と相まって女王に見える。

士の方は体格は周りにいる怪人達よりもがっちりとしており、身に付けている装飾品を見ると王様に見えた。

その2体の相手に2人は押し込まれそうになっているのである。

「く……」

「お、お姉様……」

立ち上がる麗華は折れた剣を構える。すでに怪人達に囲まれており、逃げるのはほぼ無理だろう。

それでも麗華は諦めようとはしなかった。なぜなら、ここには麗華がいるから。

怯えているこの子を守りたいと思っているから。だから、麗華は諦めない。

自分はダメでも、せめて麗華だけは守り通したかった。

「麗華は……麗華は、私が守るんだあ!？」

「おねえ、様……」

麗華はその為に剣の道に入ったのだから

そんな想いを叫ぶ麗華を、麗華は怯えながらも見つめていた。麗華は麗華が大好きだった。

周りの者達が天寺家の次期党首としか見てくれないのに対し、麗華はいつも自分そのものを見てくれた。

それがとても嬉しくて……だから、麗華が禁忌の力を手に入れようとして裏切ろうとしたと聞いた時は裏切られた気分だった。

でも、それは嘘で……自分は利用されるために騙されたと気付いた時、麗華は何も変わっていないことに気付いた。

そのことが嬉しくて……だからこそ、麗華を死なせたくはなかったけど、それが出来ない。

次期党首として様々な術を習ってはいるものの、戦えるほどまでではなかったのだ。

悔しかった。ただ、見ているしか出来ない自分が。自分も『姉と同じように戦えたら』と願わずにはいられない。

「お姉様あ!!?」

だから、その想いを思わず叫んでしまう。そして、その想いは聞き届けられた。

「ちい!ん?なんだ?」

体勢を立て直そうと戦っていた怪人から離れる土だが、持っていたケースが勝手に開いたかと思うと3枚のカードが飛び出た。



そのカードを手にとると、それぞれのカードに絵柄が現れる。1枚はカブトムシの背にスペードのマークが入ったモノクロのカード。もう1枚はスペードのマークが入ったベルト。最後の一枚はディケイドやクウガとは違う仮面ライダーの姿と剣らしき物が描かれた物であった。

その3枚のカードを見た時、士は何か気付いて麗華と麗葉に2枚のカードを投げる。

「2人とも、受け取れ！」

「え？ な！？」

「な、なに？」

士の叫びに麗華はベルトのカードを、麗葉はマークが入ったカードを戸惑いながらも受け取る。

それと同時にカードから何かが流れ込んできて、2人は思わず戸惑ってしまう。

「使い方はカードが教えてくれる。さっさと変身しろ！」

「なに？」

士の叫びにエヴァンジェリンは訝しげな顔をしながらもそのことに気付いた。

士や雄介もカードを使って変身していた。ということは

「麗葉……いいんだな？」

「うん……私は……大丈夫だよ」

麗華の問い掛けに麗葉は決意を秘めた瞳で大きくうなずく。カードから流れ込んだ知識によって使い方がわかったからだ。

2人に渡されたカードは1枚ずつでは意味を成さず、2枚が揃って初めて意味を成す。

だが、それもこのままでは麗葉のカードは使えない。使えるようにするには

カードを通してそのことを知った麗華は心配するのだが、麗華の決意は揺るぐことは無かった。

これなら、姉と共に戦えるのだから。

「わかった。行くぞ！」

「うん！ お姉様！」

麗華がカードを腹部に当てると共に麗葉は返事をしてからカードを額に当てる。

麗華のカードは輝きと共に消えたかと思うと、彼女の腹部にベルトが装着された。

ただし、バックル部分はケースのようになってる。

麗葉は祈るような表情で瞳を閉じると彼女の体が輝き、カードに吸い込まれるように消えていった。

「ええ！？」「な！？」「あ、あれは……」

その光景に望とエヴァンジェリンは驚き、刹那も呆然と見守ってしまう。

一方、麗葉を吸い込んだカードはモノクロから鮮やかな色彩へと変わっており、

そのカードを麗華が手に取るとバックルにセットしてポーズを取り

「変身！！」

『ターンアップ』

掛け声と共に麗華がバックルのレバーを引くとケースが回転して浮き彫りされたスピードマークが現れる。

すると麗華の前にセットしたカードと同じ絵柄のエネルギーフィールドが彼女よりも一回り大きい形でバックルから現れ、近付こうとしていた怪人達を弾き飛ばした。

その直後に麗華がそのエネルギーフィールドに突っ込み、突き破る形で通り抜けるとその姿を変えていた。

腹部や肩にスピードのマークを持つ、どこか騎士風の姿をした仮面ライダーに。

もし、その姿を知る者がいたら、こう呼んでいただろう。剣と

「ふ、2人が……仮面ライダーに……なっちゃった……」

その姿を呆然と見つめる望。刹那も似たような状態だが、逆にエ

ヴァンジエリンは感心したような顔付きになっていた。  
気付いているのだ。麗華に……ブレイドに麗華の力が宿っているこ  
とを。

「行くぞ、麗華！」

『はい、お姉様！』

ブレイドへと変身した麗華から麗葉の声が響いてくる。

その麗葉の返事を聞いた麗華は左腰に備えられている装飾を施され  
た片刃の剣を手に持って構える。

するとその剣の刀身が力強い輝きに包まれ

「はあああ！！！」

華麗な動きで周りにいた怪人達を斬り飛ばし、斬り飛ばされた怪  
人達は倒れる前に爆発していく。

「あれは……斬岩剣？ でも、力が桁違いすぎる……」

「なるほど、そういうことか……」

麗華がしたことに見覚えがありながらも戸惑う刹那。斬岩剣とは  
気で強化した剣で岩を断ち切る神鳴流の技の1つだ。

確かに刹那も怪人達に対抗すべく使っている技だが、刹那では怪人  
に傷を付けるのがやっとなのに麗華は一撃で倒している。

その威力の違いさに驚いているのだが、威力の違いの理由にエヴァ  
ンジェリンは気付いていた。

仮面ライダーの力もあるのかもしれないが、あの気は麗葉の物だろ  
う。

そして、麗華が持つ魔力は刹那が護衛する少女並に　それこそ膨  
大な量を秘めている。

その力を使えば、確かにあれだけの威力を出すことは可能かもしれ  
ない。

今のブレイドは麗華の剣技と麗葉の膨大な魔力を持つ剣士。ある意  
味、理想的とも言える1つの形とも言えた。

「おおおおお！！！」

その麗華は神鳴流の剣技を駆使して、怪人達を次々と倒していく。

『アタックライド　ブラスト!!』

「うおおお!!」

一方、士と雄介も必死に戦っているが、こちらは苦戦を強いられていた。

光弾を乱射する士だが、怪人の王の動きを止める程度にしかなくていない。

雄介の方も殴ったりはしているのだが、怪人の女王は巧みな動きで攻撃を受け流していたりする。

「士!」

そこに麗華が怪人の王を斬り付けてから、士の横にやってきた。

怪人達の数はまだ多いものの、先に王と女王を倒せば士達と協力して怪人達を倒せる。

そう考えた故に麗華は士達に加勢しようとしたのだ。

「早くこいつらを倒して、周りの奴らを!」

「ああ、その方が良さそうだな」

『アタックライド　スラッシュ!!』

麗華に言葉を返しつつ、士はベルトにカードをセットして怪人の王に向かい構えた。

「はあ!!」

その間に麗華が切り込んでいき、幾度となく斬り付けていく。

怪人の王は持っている杖で受け止めたり避けたりしていたが

「ふん!」

「く、くお!」

そこに士も加わったことで捌ききれなくなり、麗華の斬撃を何度か受け

「ぐわあ!」

そこに士と麗華の斬撃をクロスする形で受けてしまい、勢いよく吹き飛んでいく。

そのまま地面に倒れるものの、怪人の王はよろめきながらも立ち上がっていた。

「流石に周りの奴らとは違うか」

「なら、力押しで行くか」

油断無く構える麗華だが、その横で士はケースから1枚のカードを取り出す。

あの時出た、3枚のカードの内の最後の1枚。その1枚をベルトにセットし

『ファイナルフォームライド　ブ・ブ・ブ・ブレイド!!』

「ちよつとくすぐったいぞ」

などと言いながら麗華の背中をなで上げた。

「え？　なんだ!？」

その直後、自身に起きたことに麗華は戸惑いの声を上げる。

なぜなら、体が不意に浮かび上がったかと思うと逆立ちの格好で体の形が変わっていき

気が付けば、麗華は　ブレイドは巨大な剣に姿を変えていたのである。

「なんだ、あれは……」

「あれって、雄介と同じ」

その光景にエヴァンジェリンが戸惑う中、望はあれが雄介の時と同じであることを思い出す。

あの時もああすることで士と雄介は　そんな光景を見たためか、望にはどこか安心感があったのだった。

『な、なにこれ?』

「ま、俺とお前達の方って所だ。　一気に行くぞ」

「待て!　それはどういう」

『ファイナルアタックライド　ブ・ブ・ブ・ブレイド!!』

戸惑いの声を漏らす麗華に士が答えつつ、麗華の疑問は無視してカードをベルトにセットする。

それによって合成音が響いたかと思うと、巨大な剣となった麗華の刀身に雷が走る。

「はー!」

その剣を持ったまま、土は天高く跳び上がり

「てりやああああ!!」

「が!?! ぐわああああああ!!?!」

振りかざした剣を一気に振り落とす形で怪人の王を縦に切り裂いた。

切り裂かれた怪人の王は吹っ飛んでいき、頭の上に光の輪が現れたと共に爆発と共に消えていった。

それを見届けた土は剣を放り投げると剣は変形してブレイドの姿へと戻り、よろめきながらも着地した。

「つ……土! さっきのはなんなのだ!?!」

「さあな? 俺にもなんで出来るんだか、まったくわからないんだが」

「どわああああ!!?!」

戸惑い気味に問い掛ける麗華に土は首を傾げながら答える。

実際、土もデイケイドの力がどんな物なのかは良く理解してはいない。今も使えるならそれでいいという理由であったし。

そんな時、吹っ飛んできた雄介が地面を滑る形で土達の元へと来ていた。

「大丈夫か?」

「いつつ……悪い。あいつ強いわ」

声を掛ける土に雄介は起き上がりながら謝るような形で答える。

土と麗華が顔を向けて見ると、怪人の女王が杖を構えながらこちらへと近付こうとしていた。

その周りにいる怪人も合せてこちらに近付こうとしている。

「やれやれか……俺が抑えといてやるから、あの偉そうなのを頼む」

『アタックライド ブラスト!!』

「わかった!」「ああ!」

土が呆れつつもケースを銃に組み替えてカードをセットする中、立ち上がった雄介は構え、麗華も剣の柄に仕込まれたケースを扇子のように円状に広げる。

ケースは全部で9個あってそれぞれにカードがセットされており、その中から麗華は4枚のカードを取り出した。

「はあああああ」

その間に士が光弾を乱射して怪人の女王や怪人達の足止めをし、雄介は身をかがめて力を溜め

「うおおおおお!!」

『キック      サンダー      マツハ      メタル      ライトニングストライク』

「はっ!!」

雄介が駆け出すと共に麗華は4枚のカードを剣の柄に次々とスラッシュしていく。

そして、最後の1枚をスラッシュし終わると剣の柄からスラッシュしたカードと同じ絵柄のエネルギーカードが飛び出し、それが麗華の体に融け込むと麗華は身をかがめて剣を地面に突き刺した。

「うおりやあああああ!!」

「おぐう!?!      ぐ、おおおおお……」

士によって足止めされていた怪人の女王は炎を纏った雄介の右足の跳び蹴りを胸の辺りで喰らう。

その衝撃で吹き飛びそうになるのをこらえ、蹴りを受けた箇所に残った紋章に苦しみながらも消えるまで耐えた。

「はあああああ!!」

「ぎゃあああああ!!?!」

だが、そこに右足に雷を纏った麗華の跳び蹴りを喰らって吹っ飛んでいき、地面に倒れる前に頭の上に光の輪が現れてそのまま爆発の中へと消えていく。

それを見届けることなく着地する麗華。それと共に周りにいた怪人達が動かなくなったと思うと次々と景色に解けるかのように消えていった。

「消えた……だと?」

「どづい……ことでしょうか?」

そのことにエヴァンジェリンは訝しみ、刹那は戸惑いを見せた。確かに怪人の王と女王は怪人達の親玉だというのは想像出来る。しかし、それを倒したら消えるとは思わなかったのだ。

「ま、あいつらが生み出していたのかもな」

それに対し、大して気にした風も無く話す土の言葉を聞いて、エヴァンジェリンはなるほどと納得していた。

魔法でも分身を生み出すということが出来る。その分身は生み出した本体がやられれば消えてしまう。

それと同じなのだろうと思ったのだ。一方、藤島はへたり込みながらもその様子を見ていた。

いったい何が起きているのか理解出来ないが、このままでは自分達が危ういことはわかった。

土達の話聞く限り、自分達の行動が長に知られているのは間違い無い。そうなれば、怪しまれて身辺を調べられるはず。

すぐにわかるようなことはしてないものの、自分達の計画が発覚するのも時間の問題。

そうなる前に誤魔化さねばならない。その為にもこの場はすぐに逃げなければ。

麗葉は諦めねばならないが、誤魔化せればどうにでもなる。この時の藤島はそう考えていたのだ。

「どこに行く気かの？」

だが、老人の物と思われる声に、立ち上がるうとしていた藤島はビクリと体を震わせてから振り返った。

その先にいたのは老人……と言えはいいのだろうか？ 見た目は間違い無く老人である。

ただ、頭部がなぜか長くなっている。頭頂部のみにある白髪を結び上げ、異様に長い眉毛とひげはある意味仙人に見えた。

その隣にはメガネを掛け、背広を着た初老の男性が立っている。その2人の後ろにも十数名ほどの男女の姿がある。

「学園長……なぜ、ここに？」



「ほっほっほ、なに。妙な場所に結界があつたのでな。もしやと思つて来てみたのじゃよ。」

まあ、着いたのはつい先程じゃがな。さてと、おぬしが藤島じゃな？ 関西呪術協会の長がおぬしに話があると云つておる。すまぬがご同行願えるかの？」

戸惑いを見せる刹那に学園長と呼ばれた老人は笑いながら答え、その後真剣な眼差しを向けながら話しかける。

その話には藤島は明らかに顔を引きつらせていた。まさか、知られている？ なぜ？

混乱する藤島だが、これは関西呪術協会の長の力を侮つた結果であつた。

1日では流石に証拠をつかむまでにはいたつてはいないものの、十分に怪しいと言える事がいくつも判明したのだ。

その為、長は藤島の拘束することにし、その協力を学園長に依頼したのだつた。

ちなみに関東魔法協会と関西呪術協会は裏では争っていたのでは？ という疑問を持った方もいると思う。

その辺りの詳しい説明は少々長くなるので割愛させてもらうが、学園長と長は和平の為に色々としており、今回はその一環として行われたと説明しておこう。

それはそれとして、全てが終わつたと悟つた藤島は地面に両手を付き、うつむいてしまつていた。

「え……あの人が……学園長……なの？」

「ああ、そうだ」

戸惑つた様子で指差す望にエヴァンジェリンはあっさりとうなずいたが、望はそれを聞いて顔を引きつらせた。

なぜなら、望が想像していたのは明らかに違いすぎたのだ。どんなのを想像していたかはあえて言わないでおくが

それはともかく、終わったと感じた雄介と麗華は元の姿に戻り、麗葉もカードから飛び出す形で戻る。

そんな登場の仕方をした麗葉と麗華の姿に初老の男性と後ろにいた十数名ほどの男女は思わず驚いていたが。

と、麗葉が駆け出して藤島のそばに行つたかと思うと睨みつけ

「あなたが……あなたがお姉様をあんな姿にしたの!? だったら、戻して!？」 お姉様を元に戻して!？」

怒りを露わにしながら叫ぶが、それに対し藤島はピクリと反応した。

そのことも思わず引いてしまう麗葉だが、藤島は歪んだ笑顔をとなった顔を向ける。

「戻せ……だと? 無理だな! なぜなら、私を含めて10人掛かりで呪いを掛けたのだ。

ありつたけの魔力と複雑な術式を使って……だから解くことは不可能だ。一生あのままの姿なんだよ、あの女は!? ははは……あ、はっはっはっはっはっは」

「そんな……」

まるで吐き出すかのように叫んだ藤島は最後には笑い出してしまふ。

自分は終わってしまった。だが、ただで終わらない。誰かを巻き込んでやる。

逆恨みからそのように考え、絶望させるために言ったのだった。

そのことに麗葉は呆然とした表情でへたり込んでしまふ。

騙されたことに気づき、姉と仲直り出来たのに……その姉がずっとあの姿のままなんて

そう思うと悲しくなって、麗葉は泣きそうになってしまう。

一方、麗華は瞳を閉じながらも、やはりそうかと考えていた。

逃げ回っている間、元の姿に戻る方法も探してはいたのだ。だが、どうにもならなかった。

有名な術士や魔法使いに頼ってみても結果は同じ。だから、もう元の姿には戻れないと半ば諦めていた。

今回のことでそのことが証明されてしまったが、麗華としては別に

良かった。妹との仲を取り戻せただけでも十分だったから。

そんな麗華を泣きそうになっている麗葉ともう1人、藤島とその仲間達以外の皆が心配そうに見ている。

エヴァンジェリンも同情的な眼差しを向けていたのだが

「ふむ、それじゃあ、試してみるか？」

未だにディケイドの姿のままの土が、ケースから1枚のカードを取り出しながら問い掛ける。

そう、もう1人とは土のこと。彼は話を聞いて、もしかしたらあることを思いついたのである。

「試す……とは？」

「なに、もしかしたら、どうにかなるかもしれないってことだ。どうだ？ 試してみるぐらいはしてもいいと思うが？」

首を傾げる麗華に土はカードを弄りながら答え、逆に問い掛けてみる。

土の言うことは呪いを解くと言うことだろうか？ もし、そうだとしても可能なのだろうか？

麗華は思わず考えてしまうが

「そうだな……可能性があるなら、それに賭けてみてもいいか」

ふっと笑みを漏らしてから、麗華は土へと体を向ける。

別に麗華としてはどうでも良かった。ただ、呪いが解ける可能性があるあるなら……その程度にしか考えて無かった。

「んじゃ、やってみるか。変身」

『仮面ライド 響鬼！！』

ひと言そう言うってから、土はベルトにカードをセットする。

すると土の体が炎に包まれたかと思うとすぐに吹き飛んで新たな姿へと変わっていた。

まるで宝石のように光沢を放つ、深い紫色の体。

顔は仮面に包まれてはいるが、ディケイドとは違ってよりフルフェイスのヘルメットに近い印象を受ける。

そして、その額からは2本の角が生えていた。響鬼……ある存在と

戦う鬼の仮面ライダーである。

「あれは……」

その響鬼の姿に学園長は片眉を跳ね上げながら見ていた。

実は学園長は響鬼と似た姿の者を見たことがあり、今の土の姿がその者に似ていることに気付いたのだ。

『アタックライド 音撃棒、烈火!!』

一方、土は新たなカードをベルトにセットし、ある物を両手に持っていた。

それは紅い棒。シンプルながらも装飾が施され、先端には鬼と思われる顔をかたどった紅く透明な石がはめ込まれていた。

『ファイナルアタックライド ヒ・ヒ・ヒ・響鬼!!』

更にもう1枚のカードをベルトにセットすると、麗華の前に彼女とほぼ同じ大きさで円状の炎のような紋章のような物が現れる。

その様子をじつと見つめる麗華。『そばにいた』エヴァンジェリンもじつとその様子を見つめ

「はあ！」

土が持っていた紅い棒で紋章を叩くと、まるで太鼓を叩いたように大きな音が響いた。

そのまま、土は両手の紅い棒で紋章を次々と叩いていく。リズム良  
く……まるで祭り囃子で叩く太鼓のように

「はあ!!」

そして、最後と言わんばかりに土は両方の紅い棒で紋章を力強く叩いた。

その直後、麗華の体全体にヒビが入る。そのことに土以外の全員が驚きの眼差しを向け

「きゃ!?!」「うお!?!」「なんだ!?!」

次の瞬間、麗華の体が弾ける。そのことに土以外の全員が思わず顔を背けつつも、思い思いに驚き

「え? あ、おねえ……様?」

その光景に麗華は呆然としてしまう。

麗葉の今の姿はかつての姿を……自分が大好きでやまなかつた元の人の姿を取り戻していた。

一方で望や雄介は驚愕に目を見開いていた。というのも、今の麗華の姿は……あまりにも美しすぎた。

あの醜かった姿から比べたらという意味では無い。まるで創られたかのように整った凜とした顔立ち。

長い黒髪と相まって文字通り、絶世の美女とも言える美しさが今の麗華にはあつたのである。

「解けた……のか？ 私は……」

「お姉様！？」

「麗葉……ああ、そうか……麗葉……」

まさか解けると思っていなかった麗華は思わず自分の体を見回してしまふ。

その姿を見て泣き出してしまった麗葉が抱きつき、ようやくそんなのだと実感した麗華は麗葉を抱きしめながら涙を流していた。

「ば、馬鹿な……あの呪いを……解いただ！？」

一方で藤島は驚愕で顔を歪めていた。彼自身も麗華の呪いが解けるとは思っていなかった。

なにしろ、自分や術士達のありつただけの魔力を込め、術式も複雑怪奇にしたのだ。

どんな凄い魔法使いや術士でも解けるはずがない。そう思っていたのに……藤島の中で理不尽な怒りが募っていく。

自分だけ……自分だけこんな目に合うわけにはいかない。

「おおおおおおお！？」

ならばいつそのことと麗華と麗葉に向かって駆け出す藤島だったが

ゲリドゥスカブルス

「凍てつく氷枢！！！」

誰かの声が聞こえたかと思うと、藤島は氷柱の中に閉じ込められてしまふ。

その様子を土以外の皆が驚きで見っていたのだが、学園長と初老の男

性はあることに気付いてある者に顔を向ける。

今の現象……というより魔法なのだが、それを使える者に心当たりがあったのだ。というか、先程の声にも聞き覚えがあったし。

それで2人はその者に顔を向けたのである。すなわち、エヴァンジェリンへと

「ふむ、そばにいたせいかな、私の呪いも解けていたようだな」

で、エヴァンジェリンはといえば、悪びれた様子も無く不敵な笑みを浮かべていたが。

「土……ありがとう……本当に……ありがとう……」

「別に感謝なんていらぬ。俺が勝手にやったことだからな」

ふと、そのことに気付いた麗華が頭を下げながら感謝の言葉を告げる。

それに対し、響鬼からデイケイド、デイケイドから元の姿に戻った土は気にした風も無く答えていたが。

「まったく……とんでもない奴じやの。土君と言ったか？ 君は何者なんじや？」

一方、ため息を吐いてから顔を向けて問い掛ける学園長。

土は答えるかのように不敵な笑みを向け

「俺か？ 俺は通りすがりの仮面ライダーさ。覚えといてくれ」

人差し指を立てながら、あっさりとした様子で答えるのだった。

## 第5話『破壊する者』（後書き）

そんなわけで怪人達との戦いを終え、麗華の呪いを解いた士とまあ、格好良く言ってますが……すいません。ラストは次回に回らせてください^^;

流石に長くなりすぎまして……それに戦闘もかなりおざなりに……こういう所はもう少し勉強し直さないといけないなあと思いました。それと今回ブレイドに変身した麗華と麗葉。ネタ的にはWっぽいですが、このような形にしました。

後、今回出たブレイドの必殺技はこのSSでのオリジナル技となります。

4枚使ったらもっと凄い技使えね？ という思い付きから生まれた物ですが……

良く考えるとキングフォームとかだと5枚使ってますよね……まあ、気にしないでおきます（おい）

さて、今回は士達は元の世界に戻ることに。そのことに麗華と麗葉はある決意をするのですが

そして、元の世界に戻った士達はある事実を知ること。それを知った士達は再び異世界に旅立つことになる。

そんなわけで今回は第1章エピローグとなります。次回、またお会いしましょう

## 第6話『帰還。そして、新たな世界へ』

あの後、藤島一味は学園長の手の者達によってどこかへと連れて行かれた。

話を聞く限りでは関西呪術協会に引き渡すとのことだった。

で、土達はというと、なぜか学園長らと共にフォトショップの前に来ていたりする。

というのも

「もう、帰ってしまふのかい？」

「まあ、いつまでもここにいるわけにもいかないしな」

初老の男性 名を高畑・T・タカミチという。

その高畑の問い掛けに土は肩をすくめつつ答える。そう、土達は帰るためにここへと来たのだが

「けどさ、帰れるのか？ どうやって来たのかもわからないってのに」

「多分だが、俺達がこの世界でやることは終わった。だから、後は帰るだけ。ま、そんな気がするっただけだな」

不安そうに問い掛ける雄介に土は顔を向けつつ答える。

土も漠然とそんな気がしているだけだった。でも、なぜか確信めいた物も感じていた。

自分達は元の世界に帰れると

「わしとしては、もう少し詳しい話を聞きたかったのじゃがの」

「悪いが、俺達も何がどうなってるのかわかっていなくてね。さっきまで話した事以上のことは知らないんだよ」

学園長の言葉に土はため息混じりに答えた。

自分達のことには怪人達のことも含めてここに来るまでの間に学園長達に話している。

なので、自分達がなぜこの世界に来たのか？ あの怪人達はなんなのか？



そういったものは土達もわからないために、そうとしか言えなかったのだが。

「士……私もお前達の世界に連れていってくれ！」

「は？」

と、何かを考え込んでいた麗華が、いきなりそんなことを言い出した。

このことには流石の士も呆然としてしまう。というのも

「いや、いきなり何言ってるんだ？」

「私はお前に色々と助けてもらった。それは感謝してもしきれない。

だから、なんとかその礼をしたいのだ！」

「気にしなくてもいいんだがな」

真剣な眼差しの麗華に、問い掛けた士は呆れた様子で後頭部を掻いていた。

士もなんとなく呪いを何とか出来そうな気がしてやってみたにすぎない。

結果としては出来てしまったが、そういった経緯もあつたので士としては別に気にしていなかったのだ。

だが、麗華としてはそれで済ますわけにもいかなかった。

行き倒れた自分を助けただけでなく、妹との仲を取り戻してくれた上に呪いまで解いてくれた。

命の恩人というだけでは生ぬるいまでの恩。と、麗華は考えていたので、それをなんとかして返したいと考えていたのだ。

「そんな……お姉様……行っちゃうの？」

「う、すまない、麗華……私は」

「そうじゃの……土君、2人一緒に連れていってもらえんかの？」

「なんでだよ？」

そんな彼女に泣きそうな顔でしがみつく麗華を見て、麗華の決意が揺らぎそうになる。

麗華としてもう姉と離れたくはなかった。騙されていたとはいえ、

姉と別れた後にあつたのは寂しさだけ。

そんなのはもう経験したくはない。そんな想いからの行動である。

そんな姉妹を見て、そんなことを言い出す学園長に土はジト目でツッコミを入れる。

まあ、あまりにも脈絡がなさすぎてツッコンでしまったのだが。

「困った話なのじゃがな……藤島が麗葉君を利用してしようとしていたのは聞いておるかの？」

「それらしいことは言ってたな」

「そうか。どうやら、あやつは麗葉君を利用して関西呪術協会の長になろうとしていたらしい。

麗葉君の持つ魔力はわしの孫に匹敵する程にあるからの」

「俺としては、あんたの孫がどんなのか気になる所ではあるけどな」

「土……」

ため息を漏らしつつも事情を話す学園長だが、聞いていた土はなぜかそんなことを言い出す。

そのことに望は恥ずかしそうにしながら肘で軽く土を小突き、刹那はなぜか苦笑していたりする。

「なに、母親似の可愛い娘じゃよ。どうじゃ？ もし、良かったら見合いなぞ」

「さっさと先を話せ」

「せっかちじゃの……ま、麗葉君の持つ魔力は関西呪術協会の長になれるだけの物ということじゃ。

藤島はそれを利用してしようとしたようじゃが……どうやら、それを考えておるのが藤島だけではないらしいのだよ」

「嫌な話だ」

「冗談交じりの話をそでにされて呆れつつもそのことを話す学園長。先を促して話を聞いた土は呆れた顔をするが、望や雄介は複雑そうな顔をしていた。

望や雄介でも今の話で麗葉がどんな状況に置かれているのかわかってしまったのだ。

それ故に彼女のことが不憫に思えてしまったのである。

「今回のことで天寺家には関西呪術協会の手入れが入るじやろう。それを狙って、麗葉君に近付こうとする者もいるじやろうな。そして、今の天寺家ではそれを防ぐことは不可能じゃ。」

麻帆良にいてもらうという手もあるが、あちらが何かしらの手出しをしてくる可能性もあるしの」

「なるほど。手が出せない所へ行かせようってわけか」

「うむ……中には麗葉君を操ってでもと考える者もないとは限らん。」

せめて、ほとぼりが冷めるまではそうした方がいいと思ったのじゃ」  
ため息を漏らしながら問い掛ける士に、話していた学園長はどうか沈痛な面持ちでうなずいていた。

士も権力者達が色々ともんでもない事をしていたというのはテレビで見た程度だが知っている。

それを考えると学園長の話もあり得ない話では無いと考えたのだ。もっとも、学園長としては麗華達のが孫にも影響が出るのと懸念していたりもするが。

それを言ってしまうと姉妹の気分を害するとわかっていたため、あえて言わないことにした。

それはそれとして、姉妹を連れて行くにしても問題があるとするれば

「そういうことなんだけど、どうする？ 叶さん？」

「そうねえ。お店の手伝いはしてもらうけど、いいかしら？」

振り向いて問い掛ける士に叶はどこか軽い調子で答えていた。

ちなみに叶。学園長を初めて見てもこの調子であった。大物なのはたまた

まあ、叶としては麗華と麗葉が困っているようなので、それ位ならという考えで答えていたりする。

「だ、そうだ」

「え、あ、す、すまない。世話になる」

「ありがとう。お兄様！」

再び振り返る土に麗華は戸惑いながらも頭を下げ、それにつられて麗華も笑顔になった。

が、そこで土は訝しげな顔をする。というのも、聞き流せないひと言を聞いたからだ。

「なんで、お兄様？」

「だって、お兄様はお姉様の恩人なんだよね？」

思わず問い掛ける土に、麗華は首を傾げながら答える。

その仕草が年相応の可愛さがあったものの、土としてはなぜか頭痛を感じる返事だった。

彼としては恩人になったつもりはない。勝手にやったらそうなった程度のことではなかった。

しかし、麗華と麗葉はそうは思っていない。勝手にやったとはいえ、土に文字通り救われたのだ。

感謝の念を抱いてもおかしくなかったのかもしれない。麗葉の場合、それが呼び方に現れたのである。

「いいじゃないか、別に」

「まったく……そんなじゃ、そろそろ帰るか」

「て、しつこいようだけど、どうやって帰るの？」

思わず笑ってしまう雄介にため息を吐きつつ、土はそのことを言い出す。

しかし、望は不安そうな顔をしていた。帰ると行ってもその方法がわからなかったからだ。

「店にみんなが入れば帰れると思う」

「思いつて……本気かよ……」

土の言葉に流石の雄介も顔をしかめる。いかに土の言うことでもそれで帰れるとは思えなかった。

それなら昨夜帰ってきた時にはすでに帰れるはずだからである。

「まあ、俺達がやることをやったから、帰れると思うただけだな」

「本当かよ？」

「おい、士」

それに対して士は肩をすくめてこたえるものの、雄介はやはり訝しげな顔をするだけであった。

そこにエヴァンジェリンが声を掛けてきたので士は顔を向けていた。「私もお前に呪いを解いてもらったからな。その礼をしたい所だが、あいにく何をすればいいか思いつかん」

「別に構わないんだがな。エヴァの場合は気が付いたら巻き込んでみたいなものだし」

「それでもだよ。私の気が済まんからな。だから、またここへ来い。その時までにお前への礼を用意しておく」

「ま、縁があつたらな」

真剣な眼差しで話すエヴァンジェリン。普段の彼女を見るとそうは思えないが、エヴァンジェリンは義理堅い所がある。

そんな彼女だからこそ掛けられていた呪いを解いてもらったことに感謝してるし、礼をしたと思うていたのだ。

それに対して、士は肩をすくめながら答えるしかなかった。

士にしてみれば偶然の結果でしかないし、礼を言われる必要も無いと考えている。

第一、この世界に来たのも偶然のような物だった。だから、またこの世界に来れるわけではない。

この時、士はそう考えての言葉であった。

「ああ、待っているぞ」

「やれやれ……それじゃ、行こうか」

「あ、士」

それでも笑顔で答えるエヴァンジェリンに士は呆れながらもフォトショップの中へと入っていく。

それに慌てて付いていく望。雄介と叶も頭を下げてから店へと入っていく中、麗華は学園長と対峙していた。

「このたびはご迷惑を掛け、申し訳ありませんでした」

「構わぬよ。結果的には大事には至らなかつたし、わしらは何もし

ておらんからの。

まあ、あちらに行つて迷惑を掛けんようにの」

「はい、それでは」

学園長の言葉に頭を下げた麗華は再び頭を下げてから麗葉と共にフォトシヨップの中へと入っていく。

そして、ドアを閉めるとフォトシヨップ全体が光に包まれそれが消えると共にフォトシヨップの店舗もその場から消えていたのだった。

「異世界から来たというのは……本当だったんですね……」

その光景を刹那は他の者達と一緒に呆然と眺めていた。

転移を可能とする魔法があるが、今のは魔法では無いのは刹那でもわかる。

なぜなら、魔力を一切感じなかったからだ。魔法無しで転移というのは刹那としては聞いたことが無い。

だから、土達が異世界から来たというのを半信半疑であったのだが、今ので確信出来たのである。

「そういえば、エヴァ。呪いは解けたけど、これからどうする気なんだい？」

「そうだな、ああ言った手前だ。土達がまたここに来るまで麻帆良にいるさ」

その一方、顔を向けて問い掛ける高畑にエヴァンジェリンは不敵な笑みを浮かべて答えた。

呪いが無い以上、エヴァンジェリンは自由の身だ。それこそ、麻帆良を出て世界中を回ることだって出来る。

しかし、エヴァンジェリンは留まることを決意した。確かに士に一方的にした約束のこともある。

だが、それ以上に

「私にしかない光が……ああ、見せてやるよ。お前が来るまでにきつと」

決意を秘めた瞳でエヴァンジェリンは空を見上げる。

いつか再び来るであろう土に自分の光を見せるために、彼女はそうして生きていこうと決めたのだった。

そんなエヴァンジェリンを茶々丸は静かに見守っていたが、逆に刹那は羨ましそうな顔をする。

自分にエヴァンジェリンのような決意が出来るのだろうかと不安を感じながら。

「にしても」

一方、学園長はあることを思い出しながら、右手で髭を弄っていた。

思い出すのは響鬼に変身した土のこと。あの響鬼の姿に学園長は見覚えがあった。

あれは鬼の郷と呼ばれる所で鬼と呼ばれる者だけがなれる姿。それになぜ土がなれたのか？

そんな疑問が学園長にはあった。

この時のエヴァンジェリンと刹那はまだ気付くことは無かった。

土達との再会が意外に早く来ることに。

そして、学園長は思ってもいなかった。その鬼の郷に土が関わることに

一方、土達はフォトショップの中に入ったかと思うと店が光に包まれ、それが消えたかと思うと目の前に見慣れた風景が広がっていることに気付いた。

「ほ、本当に……帰ってこれたんだ……」

その光景を見て、呆然としながらも内心は嬉しさのあまり泣きそうになる望。

一時は本気で帰れないと思っていただけに、この事実はとても嬉しかったのだ。

「ここが……土達の世界……なのか？」

一方で外の景色を興味深そうに見ている麗華。彼女としては異世

界に来たという実感は薄い。

なまじ、魔法を知ってるだけに場所だけを移動しただけのように思えたのだ。

そんな中、土はテレビの電源を入れる。映ったのは土達がいつも見ている番組。

「どうやら、時間的には麻帆良に行った時とあまり変わらないみたいだな」

放送されている番組を見て、こちら側の時間を計っていた。

麻帆良に行つて戻ってくるまで、元の世界では数分しか経っていない。その事実には土は訝しげな様子を見せる。

「戻つてこれたからいいけど……結局、あれつてなんだったんだ？」

「そのことに関して、話さなければなりませんね」

戻つてこれたことにほっとしながらも、出てきた疑問に首を傾げる雄介。

そんな彼の疑問に答える声が聞こえ、土達は慌てて振り向いていた。なぜなら、その声には聞き覚えがなかったからだ。

振り返つてみると、そこには1人の青年がいた。ズボンにシャツというラフな出で立ちに、穏和そうな顔立ちに黒い短髪という姿。

そんな青年の姿に土達の思いは1つだった。すわなち、何者なのか？と

「あんたは？」

「そうですね……今はあえて、メッセンジャーと名乗っておきましよう。」

まずはいきなり異世界へ行かせたこと、申し訳ありませんでした」

土の問い掛けにメッセンジャーと名乗った青年は頭を下げた。

そのことに土と叶を除く皆が訝しげな顔をする。

「どういう……ことなの？」

「私達は見たかったのです。土さんが突然あのような状況下に置かれたら、どのような行動をするのかを。」

ああ、確かに土さんの意志に働きかけたりはしましたが、土さんが



決めたことは土さん自身の意志であるのは間違いありません」

「なるほど。妙に勘が働くと思っただら、そういうことか」

戸惑い気味に問い掛ける望に、青年は静かに答えると土は納得したかのような顔になった。

あの時は考えもしなかったが、今の話を聞いて確かにおかしなことだと思っただのだ。

それと土達が異世界に行ったのも彼が……正確には彼らなのだろうが、関係していることはわかる。

では、なぜそんなことをと疑問に思っただが

「そして、あなた方がしてきたことは私達が思っただ以上に好ましい物でした。

これならば、あなた方に託してもいいと我々は判断いたしました」

「託す……とは？」

「あらゆる世界の未来です」

「え？　なんだ！？」　「なにこれ！？」

麗華の問い掛けににこやかな笑顔で話していた青年は真剣な表情になって答えた。

それと共に起きた変化に雄介と望が驚愕する。なぜなら、自分達の周りが宇宙空間のような景色に変わったからだ。

そのことに麗華や麗葉も声には出さなかったものの驚きの表情を見せている。

「あなた方が行った麻帆良のように、この世にはあらゆる可能性によって生まれた世界がいくつも存在します。

本来、それらの世界は互いに干渉することはありませんでした。あいつらが現れるまでは」

「あいつら？」

「あなた方が戦った怪人です」

青年の話に合せるかのように宇宙空間にいくつもの地球が現れ、そのいくつかの地球が紅く染まっていく。

その光景に内心は驚きながらも比較的冷静だった土の問い掛けに、

話していた青年は真剣な表情のまま答える。

「正確にはその者達を束ねる存在ですが……その者があらゆる世界に干渉し、滅ぼして自分達の物にしようとしています。」

しかし、そのことによつて本来干渉しあうはずが無かった世界同士が干渉を初めてしまったのです」

「それつて、大変なことになるんですか？」

「下手をすれば……存在する世界全てが消滅する可能性もあります」「な!？」

青年の話に合わせるようにいくつもの地球が重なるように集まり、やがて大爆発を起こした所で風景がフォトショップの店内に戻る。

その話を聞いて疑問を感じた雄介だが、話をしていた青年が沈痛な面持ちで答えたことに驚愕する。

望や麗華も同じ顔をしていた。話を聞いているととてもではないが信じられる物ではない。

しかし、異世界に行くという体験をしただけに、頭ごなしに否定も出来ない。

それ以前に話のスケールの大きさに驚いていたのだが。

「あなた達でなんとかするとか出来なかつたのかしら？」

「本来ならば、そうしなければなりません。」

ですが、我々が行つた場合、世界に多大な影響を与えてしまいます。世界とは、その世界に存在する全ての為にあります。

いくら全ての世界の消滅を防ぐ為とはいえ、余程の事でも無い限りそれらに悪影響を出すようなことをするわけにもいきません。

そこで私達はあなたにその者を止めてもらおうと考えました」

「ちょ、ちよつと待つてよ!？　なんで士がそんなことしなくちゃならないのよ!？」

叶の問い掛けに青年はうつむきながら答えるものの、それを聞いた望は慌てた様子で問い掛ける。

良くは理解出来なかつたが、聞く限りでは自分達では出来ないのので士にやつて欲しいと言っているように思える。

そのことが望には理不尽に思えたのだ。

「それに止めるって、あの怪人と戦うことなんでしょ！？ そんな危ないこと」

「聞きたいんだが……俺に記憶が無いのは関係あるのか？」

「え？」

なんとかやめさせようとする望であったが、それを遮る形で土が真剣な表情で問い掛けてくる。

そのこと麗華は思わず顔を向けてしまう。なぜなら、聞き捨てならないひと言を聞いたからだ。

「それは……今はお答えすることは出来ません。

ですが……いずれ行く、どこかの世界で知ることになるとだけは言っておきます」

それに対して青年は沈痛な面持ちで答え、そのことに土はため息を漏らす。

自分が望む答えを得られなかった。となれば、青年が頼むことを引き受ける義理は無いのだが

「やれやれ、信じがたい事もあるが……それはおいおい確かめればいいだろ」

「お、おい……やる気なのかよ？」

「怪人が出たのは間違い無いしな。それに言っただろう？ 俺は俺のためには戦うって？」

もしかしたら、厄介なことが降りかかってくるかもしれないしな。

そうなる前になんとかした方がいいと思っただけだ」

戸惑う雄介にこめかみを指で搔いていた土はそう話した。

実感がまだ薄いため信じがたい所もある。しかし、何かがありそうなのがしたのだ。

それ自体は自分の勘だと思っている土は、それを確かめるべくやるうとしていたのである。

「で、今すぐ行けばいいのか？」

「いえ、あなた方にも生活があります。それを出来る限り守る為

に行くのは1週間ごと。

この日、この時間帯に行ってもらいます。それとお気付きでしょうが、異世界で数日過ごしてもこの世界では数分の出来事です。

ですので、時間的なことはお気になさらなくても大丈夫ですよ」

「それは喜んでいいのかわからんな」

青年から返ってきた言葉に問い掛けた土は呆れた様子でため息を吐く。

確かにそれなら時間的なことはあまり気にしなくていいのかもしれない。

だが、どこか手放して喜べない感じがしてしまうのだ。

「それと　これはささやかな物ですが、これからの生活にお役立ててください。

それでは土さん……いえ、デイケイド。全ての世界の未来を……お願いいたします」

何かをテーブルに置いた青年は真剣な顔を向けると、その言葉と共に頭を下げた。

その後、青年は頭を下げたまま景色に融け込むかのように消えてしまふ。

その光景を呆然と見る望達だったが、土は青年が置いていった物を手にとって見ていた。

「こいつは麗華と麗葉の戸籍か？　それに通帳とハンコにカードねん？　麗華の免許証もあるな」

見てみると書類は麗華と麗葉の戸籍のようだった。

確かめてみると2人は叶と望の遠い親戚で、家の都合でこちらに来ているということになっている。

その為か、一緒にあった麗華の免許証の住所がフォトショップがある住所になっていた。

で、通帳一式は最寄りの銀行で使える物だったのだが

「つ、土……こんなのもらっちゃって……いいのかな？」

「まあ、麗華と麗葉の物を買ったりしなくちゃならんし、色々入

り用は出来るだろうしな。

くれるって言うんならもらっとけ。あつて困る物でもないし、犯罪  
ってわけじゃ……たぶん無いだろ」

通帳に記載されている金額を見て、顔を引きつらせる望に土は呆  
れた様子で答えた。

なお、通帳に記載された金額が色々でありえなかったとだけ言つて  
おこつ。

「土……記憶が無いというのは？」

「ん？ ああ、5年前に色々あつてな。そのおかげで5年より前  
のことは覚えてないんだよ」

土から返つてきた言葉に問い掛けた麗華と麗葉は悲しそうな顔を  
した。

何があつたかまでは言つてくれなかつたのでわからないが、何か大  
変な事があつたのではと予想出来る。

それを思うと思わず心配してしまうのだ。

「それで麗華達はどうするんだ？ 下手すると大変な事に巻き込ま  
れそうだけど？」

「構わんよ。元より、土に恩を返すために一緒に来たのだ。それが  
出来るとなれば、願つてもないことだ」

「ま、しょうがないよな」

「ちよ、雄介まで……」

土の問い掛けに麗華は真剣な眼差しで答えると雄介もそうだと  
言わんばかりにうなづく。

そのことに雄介まで賛同するとは思わなかつた望は困惑していた。

そんな彼女に雄介は真剣な顔を向け

「もしかしたら、大変な事なるかもしれないんだろ？ それが本当  
なら、俺もなんとかしたいんだ」

「ま、どの道どうなるかは、次に行くかもしれない世界で確かめ  
ばいいさ」

そんなことを言う雄介。その横で土は肩をすくめながら答えた。

このことに望は悩んでしまう。納得出来るわけがないし、今までのことを考えると危なすぎる。

それを考えると望としてはやって欲しくは無かったのだが

「ま、俺だって死にたくは無いからな。そうなりそうなら、逃げるまでだ」

「土……」

あっさりとした様子でそんなことを言う土に、望は複雑そうな顔をする。

でも、内心はほっとしてもいた。今の土の姿はいつもと変わらずにいたのだから。

「ともかく、話は来週ってことで。今は麗華と麗葉の物を買わないとな。幸い、お金もあることだし」

「あ、うん。そうだね」

土の言葉に望は笑顔でうなづく。

同居人が増えたのだから、その為に必要な物は買わなければならぬだろう。

そんなわけで麗葉に望のお古に着替えさせて、みんなで買い物に行くこととなった。

その先で麗葉が目を輝かせていたり、麗華が下着売り場で困った顔をしていたりしたが

それから1週間はあっという間に過ぎていった。

麗華と麗葉の部屋を用意したり、麗華にフォトショップを手伝ってもらったり。

ただ、絶世の美女とも言える麗華が手伝ったことでフォトショップに来る客が増えたりした。

麗葉の方は小学校に行くことになった。本人は渋っていたものの、年齢的に行かなければ色々問題になる。

ただ、手続きの関係上、行くのは来週からとなってしまったが。

そんなわけで1週間経った今日。リビングに全員が集まっていた。  
「あのさ……もしかして、異世界に行くのって……お店ごとなのかな？」

「前回のことを考えると、そうなるだろうな」

少し悩んだ顔をしながら問い掛ける望に土は肩をすくめながら答えた。

その時、麻帆良の時に現れた垂れ幕の上にもう一枚の垂れ幕が落ちてくる。

鈍い輝きを放つその垂れ幕を見て、土と叶以外の皆は息を呑んだ。

その垂れ幕に描かれていたのは真っ赤な夕日の下にある荒野。しかも、その荒野に無数とも言える様々な剣が突き立っている。

その異様な光景に土と叶以外の者達はどこか恐怖を感じてしまっていた。

一方、夕暮れ時のある学校の校庭で、男子生徒と思われる体操着を着た赤毛の少年が一人で高跳びをしていた。

その少年が跳ぼうとしているのだが、跳べずにバーを落としてしまっ

た。

それを何度も繰り返し……それでも少年は諦めずに跳び続ける。

その光景を2人の少女が見守っているとも気付かずに

「やれやれ、次の世界はどんな所なんだろうな？」

垂れ幕を見た土はため息と共にそんなひと言を漏らしてしまう。

新たな世界に来た土達。そこで起こる出来事は果たして

第6話『帰還。そして、新たな世界へ』（後書き）

そんなわけでネギま！編が終わりました。

しかし、修正しても話が微妙にわかりにくいような気がしてならない……

大丈夫だろうかと不安を感じてますが、それでも話は続きます。

さて、今回は Fate / stay night が始まる数年前の世界に士達はやってきます。

そこで出会う士郎達に士はどう思うのか？ というお話です。

そんなわけで次回でまたお会いしましょう！



## 第7話『運命という名の世界』

「町はどう見ても普通っぽいな」

窓越しに見える光景は夕暮れ時の商店街。それを見た士はそんなことを漏らす。

士達の見知らぬ場所であったが、それ以外は普通と言える光景であった。

「良かった……垂れ幕を見たら、怖い場所に行くんじゃないかって思っちゃったから……」

「でも、あの垂れ幕の景色ってなんなんだろ？」

ほっとする望だが、雄介はそんな疑問に首を傾げた。

麻帆良に行った際に現れた垂れ幕は町並みを描いた物のように思える。

そこから考えると今回現れた垂れ幕も町に関係した物だと思ったのだ。

「別の何かを表してたのかもな」

「別な何か……か？」

「お兄様、どこかに行くの？」

垂れ幕のことを答える士に麗華は首を傾げるが、麗葉はキョトンとしながらそんなことを聞いてきた。

というのも士が明らかに店の外に出ようとしていたからだ。

「どの道、どんな世界なのか知るには見て回らなきゃならないからな。そんなわけで行ってくる」

「はい、夕飯までには帰ってくるのよ」

「夕飯……なのかな？ って、ちょっと待って」

そう言ってから店を出る士に叶は手を振りながら見送る。

しかし、姉のひと言に首を傾げながらも、慌てて追い掛ける望。

雄介、麗華、麗葉も後を追うように店を出て、士と共に商店街を歩いてみた。

「やっぱり、普通の商店街だよな？」

「ああ」

商店街を歩き回りながら言葉を漏らす雄介に麗華はうなずく。

商店街は賑わっているくらいで、これといって変わった所は無い。

だからこそ、余計垂れ幕のことが気になるのだが

「そのことは今は気にしない方がいい。今はこの世界がどんな所なのか、確認するのが先だ」

「そうなのかなあ？」

土はそう言うが、どうしても気になる望は首を傾げるばかりであった。

そんな土達はいつの間にか商店街を抜け、どこかの学校のそばへと来ていた。

そこで土は足を止め、どこかへと顔を向ける。そのことに気付いた望達も足を止め、つられて顔を向けてみた。

その先にあつたのは高飛びを続ける赤毛の髪の少年の姿。しかし、何度やっても跳べずにバーを落とすばかり。

それでも少年は諦めず、バーを直しては跳び続けていた。

「部活かな？ 1人でやつてるみたいだけど」

その光景に望は首を傾げた。校庭にいるのはその少年のみ。

他には見あたらないし、校舎の方も人の気配があまりしない。そのことに疑問に思ったのだ。

「にしても、良く続けられるな。あれ、跳べそうに無いぞ」

雄介も別な理由で首を傾げている。見る限り少年があの手を越えるのは無理そうに思えた。

もうちょっとで越えられるというものでは無い。少年のジャンプ力では明らかに高さが足りていない。

それに跳び方が素人目でも少年が高跳びに慣れていないように見えた。

それが雄介がそう判断した理由なのだが

一方で麗華はあごに手をやりながら訝しげな顔をする。

何か引つかかっているのだが、その何かがわからない。故にそれがなんなのかを確かめようとして少年を見つめていた。

「おい」

「え？ あ、なんですか？」

そんな中、土が少年に声を掛ける。少年は戸惑いながらも顔を向けるが

「お前、何の為に跳ぼうとしている？」

「え？」

更に来た土の言葉に戸惑いを深めるはめとなった。

実を言えば、少年は高跳びの選手でも無ければ、部活をしている生徒でも無い。

たまたまやってみようと思いついてやっているにすぎなかった。

「あ、いや、その、俺は」

「なぜ、越えられないのか。お前はそれを考えたか？」

「え？」

「土？」

そのことを言おうとした少年だったが、土の言葉に望と共に訝しげな顔をしてしまう。

越えられないのはわかっていた。自分にそれだけの技量が無いのはわかっていたから。

それでも続けたのは諦めたら負けたような気がしてしまい、それが嫌だったからにすぎない。

だから、土に聞かれたように深い考えがあつての行動では無かったのだが

「お前がやってるのはただの意地だ。別にそれが悪いとは言わない。だが、それだけを貫くは時として害にしかならない。自分が何をやっているのか？ それを良く考えた方がいいぞ」

「あ、待てよ！」

そのこと言うと土はまたどこかへと歩き出してしまい、そのことに雄介は慌てながら後を追いつける。

望や麗華達もその後を追うように去っていくが、言われた少年は見送ることも出来なかった。

なぜなら、土の言葉が少年の心に突き刺さっていたから。だが、なぜそう思うのかはわからないままだった。

そして、その光景を2人の少女は別々の場所で見守っていたことにも気付かずになっていたのだった。

さて、フォトショップに戻ろうとしている土達だったが

「ねえ、あれってひどくないかな？」

望がそんなことを言い出す。土の言うこともわからなくはない。望にもあの少年がただ跳んでいるだけにしか見えなかった。

土はそのことを指摘したのだろうか、それでも言い方があると思っただのだ。

「あれでも足りないと思ってるけどな」

「足りないって……どうしてだよ？」

「見た感じではあるが、あれはこれと思い込んだら脇目もふらずにただそれだけをやり込むタイプだな。

嫌な言い方をすれば、思い込んだら一直線と言ったところか？」

雄介の疑問に話していた土はどこか呆れた顔をしながら答える。

そのことに望と雄介は顔を顔を引きつらせるものの、逆に麗華はどこか納得といった顔をしている。

「確かに。しかも、あれはわかってやってるようにも見えなな」

「ああ……たぶんだが、あれは高飛び以外でも同じことをしてるかもしれない。だとすると、やばいか？」

麗華の言葉にうなずきつつも、そのことに気付いた土。

すでにフォトショップにたどり着いていたが、土は立ち止まって何かを考え

「悪い、あいつに会ってくる。どうにも気になってな」

「あ、土！」

そう言つて、ガレージに向かう土。声を掛けた雄介は望達と一緒に慌てて追いかける。

で、ガレージにたどり着いた土はシャッターを開け

「なるほど、ライダーが増えればこいつも増えるか」

「え？ 何が？」

呆れた顔をする土を気にしつつもガレージを覗く雄介。その先にあつたのは土と自分のバイクの他にもう1台。

オンロードタイプの土や雄介のバイクと同じ、どこか奇抜なデザインの青いバイクが置かれていたのだった。

その後、少年は片付けを済ませてから帰宅の途についていた。

彼の名は衛宮 土郎。ある目標を掲げる少年なのだが、今はあることとで考えがいつぱいだった。

それは土に言われたこと。初めて会った人にいきなりあんなことを言われたこともある。

だが、なぜか自分の何かを指摘しているようにも思える。

土郎はそれがなんなのかを考えていたのだが、どうしても答えが見つからない。

「あら？ あの人は確か――」

そんな土郎を偶然にも見かけた少女がいる。少女の名は遠坂 凛。黒髪をツインテールにしており、どこか優雅な雰囲気漂わせる美少女と言つても過言ではない顔立ちをしている。

凛は他校の生徒なのだが用事であるの学校へと着ていて、土郎の高飛びはその時に見ていた

その時、土郎がとても綺麗だと思った。あの高飛びはどう考えても跳べないと思つた。

自分ならわかつていたらまずやらない。だって、意味が無いから。

なのに、土郎はそれがわかつているはずなのにやり続けた。

それがなぜか、綺麗だと思つて……羨ましいと感じてしまう。

「あの人は」

時を同じくして、同じく士郎を見かけたもう1人の少女がいた。少女の名は間桐 桜。

腰まで伸びる艶やかな紫色の髪を持つ、どこか儂げな雰囲気を持つ美少女であった。

桜もまた学校で士郎を見ていたが、それはとても複雑な心境であった。

諦めてしまえと思っていた。諦めず、心が折れない人がいないなんて思いたくなかった。

だって、自分は……だから、士郎が挫折することを思わず望んでしまふ。

でも、同時に士郎のことが危なげなあまり心配していることにも気付いて、そう考えてしまった自分を恥じてしまう。

この時の3人は知る由も無いが、本来ならこの3人が交わるのはまだ先の話だった。

しかし、ある出来事が3人の運命を交わらせた。それは「え?」「な!?!」「え……」

3人の前に現れたのは異形の姿をした物達。いわゆる怪人だった。士郎の前に現れたのは牛。凜の前に現れたのは鳥。桜の前に現れたのは羊。

それぞれ、それらを象った姿をした怪人達であった。それらが目の前に現れたことに3人は思わず後ずさり

「……あ……」

それぞれの背中が触れあったことで自分達のこと気付いた。

「ねえ……あれ、何に見える?」

「わからない。でも、ただ事じゃない気がする」

そのことに戸惑いを見せながらも、凜は落ち着いた様子で問いかける。

内心はひどく困惑していたが。というのも、怪人が冗談の類でないのがわかったからだ。

凜は『秘匿された存在』であり、それによって怪人達の異常性にいち早く気付いたのである。

それに対し、士郎は怪人達を見据えながら答えていた。彼もまた混乱している。

実を言えば逃げ出したかった。でも、それは出来ない。だって、彼はある者を目指す者だから。

「ここは俺が何とかする！ 君達は逃げろ！」

「そ、そんな!？」

「馬鹿言わないで!？ あなたも一緒に逃げなさい!？」

士郎の言葉に桜は狼狽し、凜は慌てたように叫んでしまう。

怪人達は明らかに異常だ。今は近付いてくるだけだが、どう見ても友好的には見えない。

それに『秘匿された存在』である凜から見ても、怪人達が人以上の強さを持つのがわかる。

無理な高さだったとはいえ、高飛びを跳べなかった士郎が怪人達に敵うなんて思えない。

最悪、自分が『力』を行使しても逃げるべきかと凜は考える。

後々問題になるが、ここで死ぬよりは遙かにマシだった。

狼狽していた桜は士郎の言葉が信じられなかった。桜から見ても、

怪人達は畏怖の存在に思えた。

なぜなら、自分に様々なことをする『あの人』の雰囲気とどこことなく似ていたから

だから、敵うはずが無い。そう思うのに士郎はそんなことが言えるのか、それがわからなかった。

「いいから、早く逃げろ！」

「だけど、つて、え?」「な、なに?」

士郎が叫んだ時だった。爆音が聞こえたかと思うと、3台のバイクが士郎達周りに止まる。

そのことに怪人達は思わず立ち止まり、凜と桜はいきなりすることに困惑してしまう。

士郎もいきなりのこと困惑する中、バイクに乗っていた1人がヘルメットを外していた。

「やれやれ、気になって戻って見たら、妙なことになってるな」

それは校庭で声を掛けた土であった。その後ろでは相乗りしていた望もヘルメットを脱ぎながらバイクを降りている。

「どうするんだ、土？」

「ま、明らかにやる気みたいだしな。相手をした方がいいだろ」

「そうだな」

同じくヘルメットを脱ぐ雄介に、バイクから降りつつ呆れた様子で答える土。

見れば怪人達は明らかに構えていた。その様子に新しく現れた青いバイクに乗る麗華がヘルメットを脱いでからうなずく。

その後ろでは慣れない様子でヘルメットを脱いでいる麗華の姿もあったが。

「そういうわけだから、お前達はどっか隠れててくれ」

「で、でも」

「言うておくが」

言われて反論しようとした士郎だが、言い出した土はそんな彼の額に人差し指を当て

「自分が犠牲になっても、なんて考えは馬鹿のすることだ。2人を助けたきゃ、一緒に必死扱いて逃げた方がいい」

「え？」

土のその言葉に士郎は思わず固まる。なぜなら、今言われたことはまさに自分がしようと思ったことだった。

自分を囚にして凜と桜を逃そうと考えていた。でも、それがなぜ馬鹿な考えなのか、士郎はわからない。

その間に土、雄介、麗華、麗華は士郎達の前に立ち

「……へ！？」「」

麗華が額にカードを当てたことでその姿が消え、持っていたカードが麗華の手に飛んでいくという光景に思わず目を疑う士郎達。



その間に士、雄介、麗華はそれぞれベルトを装着し

「……変身……!」

『仮面ライド デイクイド!!』 『ターンアップ』

かけ声と共に士はカードをベルトにセットし、雄介はベルトサイドに付いたボタンを押し、麗華はベルトのレバーを引く。

うなる合成音や電子音。直後、士と雄介の姿が変わり、麗華も自分の前に現れたエネルギーフィールドを突き破ることでその姿を変える。

「はい!？」 「え、ええ!？」

その光景に凧と桜は驚愕していた。怪人達が現れたかと思ったら、今度は士達の変身。

あまりに予想外すぎて理解が追いつかない。一方で士郎はその光景を食い入るように見つめていた。

凧や桜程では無いにしろ、彼自身も今は驚いている。でも、それ以上に感激していた。

だって、今の士達の姿は自分が目指そうとしている者に見えたから

「望はそいつらと一緒に隠れててくれ」

「わかった。さ、早くこつちに」

両手を叩きながら声を掛ける士に、望はうなずいてから士郎達を連れて離れようとした。

士が戦うのは未だに納得がいかないし、戦って欲しくもない。だが、同時に士の決意の固さにも気付いている。

だったら、せめて邪魔にならないようにしよう。自分には戦う力はないから

雄介や麗華達を羨ましく思いつつも、その考えからの行動であった。そんな望に凧達は困惑しながら連れられていくのだが。

「ほら、あなたも来なさい!」

「あ、待ってくれ!？」

士郎だけはその場を動かうとはしなかったが、凧に引つ張られる

形で連れて行かれるのであった。

なお、士郎が動かなかったのは戦いを見ようとしたからだ、そんな彼を士はどこか睨むような感じで見ていた。

「は！」「てやあ！」

そんな中で戦いは始まる。麗華は剣で斬りかかり、雄介も飛びかかっていく。

士も牛の姿をした怪人と素手で戦っていたのだが

「ぐおおおお！！！」

「く、流石に見た目通りに馬鹿力ってわけか」

牛の怪人の力に押され気味になる。かといって、別の怪人と戦っている雄介と麗華の援護を期待するわけにもいかない。

「じゃ、力比べと行こうか」

そう言いながら左腰にあるケースから一枚のカードを取り出し

「変身！」

『仮面ライド キバ！！』

ベルトにカードをセットすると、合成音と共にその姿が変わっていく。

変化が終わると士は赤い体にどこかコウモリを思わせるようなライダーへと姿を変えていた。

ファンガイアと呼ばれる種族と戦った仮面ライダーキバである。

「士の姿が……」

『す〜い』

その士の更なる変身を知らなかった麗華は思わず動きを止めて見てしまう。士郎や凜達は驚きの表情を見せていたが、

麗葉もその光景に思わず感心していたが、士の動きはそれだけではなかった。

カードから更にもう一枚のカードを取り出してベルトにセットし

『フォームライド キバ、ドツガ！』

合成音と共にその姿が更に変わっていく。

キバのままなのだが、赤かった体は紫の鎧に包まれたような物へと

変わっている。

また、黄色かった目も紫へと変色しており、手には長い柄に拳のよ  
うな形の紫のハンマーが握られている。

「ぐおおおお！！」

「ふん！」

「ぐおお！？」

そんな土に牛の怪人が突っ込んでくるが、土はハンマーで殴るこ  
とで突進を止めた。

「よっしゃ、俺も！ 望ちゃん！ その棒をお願い！」

「え？ あ、うん！」

その土の姿にあることを思いついた雄介は声を掛け、掛けられた  
望も戸惑いながら足下にあった木の棒を拾い上げ、投げ渡した。

「超変身！」

その棒を受け取った雄介が構えながらかけ声を上げると、その体  
が変化する。

引き締まった肉体のような上半身が縁に紫のラインが走る鋼色の鎧  
のような物に変わり、目の色も紫へと変わる。

そして、持っていた木の棒が一瞬かすんだかと思うと剣へと姿を変  
え、その刀身を伸ばしていた。

「がああ！！」

そんなことに構わずに羊の怪人は襲いかかるが

「があ！？」

打ち込んだ拳が雄介の体にあっさりと弾かれていた。

「2人とも姿を変えることで力や戦い方を変えるのか。少し羨まし  
い限り、だな！」

「があ！？」

一方、鳥の怪人と戦う麗華だが、少しばかり苦戦を強いられてい  
た。

なにしろ、相手は鳥だけに空を飛ぶ。武器が剣しかない麗華では攻  
撃は当然届かないし、跳んだとしても逃げられてしまう。

幸いなのは鳥の怪人が飛び道具の類を持っていないらしく、接近して爪で切り裂くといった攻撃しかしてこないことだ。

その時に斬ろうと攻撃を仕掛けるが、鳥の怪人の攻撃も避けなければならぬためにまともに当てることが出来ない。

状況から見ても一方的に攻められている麗華。攻めに転じたいが、その方法が見つからずにいたのだが

「お姉様。あれならば」

「なるほど。助かった、麗葉！」

麗葉の助言にうなずくと剣の柄に納められたケースを広げ、そこから2枚のカードを引き抜き

「スラツシュ　マツハ」

2枚のカードを剣の柄にスラツシュすると、一瞬だけ光に包まれた麗華は気を込めた剣を構え

「きええええ！！！」

「はあ！！！」

再び襲いかかってくる鳥の怪人の上を目にも止まらぬ速さで飛び抜け

「ぎゃああああ！！？」

それと共に鳥の怪人の片方の翼を切り落としていた。その光景を見ていた凜は訝しげな顔をする。

士達の変身は訳がわからないものの、麗華が見せた力には見覚えがあったからだ。

そう、あれは自分達と同じ

一方で士郎はその光景を羨望の眼差しで見守っていた。

なぜなら、士達の姿は自分が望んでやまない者にしか見えなかったのだから。

逆に怯えた目で見ていたのは桜だ。桜は士達がなぜ戦えるのかわからなかった。

桜でもあの怪人達が普通では無いのはわかるし、見ているだけでも怖い。

それなのに、土達は臆することなく戦っている。そのことが桜には信じられなかった。

自分には出来ないことが出来ることに

「はあ！」

「ぐおお!？」

そんな中、土は持っていたハンマーで牛の怪人を殴り飛ばすとデイクイドの姿へと戻り

『ファイナルアタックライド　　デイ・デイ・デイ・デイクイド！』

「は！」

ベルトにカードをセットさせ、合成音が響くと共に何枚ものエネルギーフィールドが牛の怪人へと導くように並んでいく。

その直後、土は天高く飛び上がるとエネルギーフィールドも土と牛の怪人を繋ぐように動き

「はあああああ!！」

右足を突き出し、エネルギーフィールドを突き破る形で突っ込み加速していく。

「があああああ!!？」

そして、跳び蹴りの形で右足を打ち込むと牛の怪人は大きく吹っ飛び、地面に落ちると共に爆発してしまったのだった。

「ぎゃあああああ!!？」 「ぐおおおお!!？」

それから少し遅れて、鳥と羊の怪人も雄介と望の手によって倒され、爆発していった。

「ふう〜。倒せて良かった」

「ああ、そうだな」

「みんな、お疲れ様」

一息吐く雄介に麗華がうなずくと共に変身を解いて麗葉と共に元の姿へと戻り、そんな彼らに望が笑顔で駆け寄る。

土も元の姿に戻るのだが、なぜか訝しげな顔をする。というのも（おかしい、数が少なすぎる。この世界はそれほど重要では無いと

いうことか？ それとも )

そんな疑問を感じていた。今までの戦いを考えると、怪人の数が少なすぎた。

今回はそうしたということも考えられるが、士はそのことがどうしても気になってしまう。

「ちよつと……あんた達、何者なのよ？」

と、そんな声が聞こえて士達は顔を向ける。その先にいたのは凜。しかし、先程まで感じられた優雅な雰囲気は無く、ただ突き刺すような視線で睨み付けていた。

その頃

人気の無い道をパーマが掛かったような色が抜けた黒髪を揺らしつつ歩く、それなりに整った顔立ちの少年がいた。

どこかの学校の制服を着ている少年はどこか憂いそうな表情で歩き続けていたのだが、自分の前に人がいることに気付いて立ち止まってしまう。

そこにいたのはつば付きの灰色の帽子に同色のコートを纏った男性と思しき者であった。

「間桐 慎二……だな？」

「え？」

自分の名を呼ばれた少年こと慎二は訝しげな顔をする。

少なくとも男性に見覚えは無い。そんな者がなぜ自分を知っているのか？

それ故に警戒していたのだが

「手伝ってもらおうぞ。この世界を我らの物とする為に」

「な、何を、え？」

男性の言葉に警戒を強めて思わず後ずさる慎二だったが、不意に額に受けた衝撃に思わず視線を向けてしまう。

そこにあつたのは黒く細長い立方体状の物体。この頃の慎二は知り



## 第7話『運命という名の世界』（後書き）

そんなわけで始まりましたFate編。といっても物語が始まる数年前のことですが。

なんでこの頃を選んだかは……ノリです。いや、私が書いてるのってほぼノリなんです^^；

それはそれとして、正義の味方を目指そうとする士郎君は士達にその姿を見ますが

それがどのようなことになるのか？　そして、慎二にガイアメモリを使った者は何者なのか？

それは次回のお楽しみということ。ではでは、次回でお会いしましょう。



第8話 『語る者。悩む者。決意する者。そして』

あの後、凜に詳しい話を聞かせると問い詰められた土達は、ここで話すのもなんだからとフォトショップに案内した。

たどり着くまでに簡単な自己紹介をした後、大した会話も無くたどり着いたのだが

「ここに喫茶店なんてあつたっけ？」

「今日来たばかりだからな」

「来た、ばかりですか？」

見覚えの無いフォトショップに首を傾げる土郎に土がそう答えておく。

もつとも、それで意味がわかるわけではないので、桜と共に土郎はまた首を傾げる羽目になったが。

「あ、お帰りなさ、つてお客様？」

「一応な」

出迎える叶に土が答えると、店内に入った皆は思い思いの席に座り

「じゃ、聞かせてもらおうかしら？」

「ああ、そうだな。俺達が異世界から来たと聞いたら、お前達は信じるか？」

「……は？」「……」

あつさりした様子で土は答えるのだが、問い掛けた凜は土郎と桜と共に呆けた顔をしてしまう。

まあ、話がいきなり突拍子もなさ過ぎて、理解出来なかっただけだが

「なに、ある奴に色んな世界が大変なことになるから、何とかして欲しいって頼まれてな。

異世界であるここへ飛ばされてきたってわけだ」

が、土は気にした風もなく答える。当然、意味が理解出来ずに土

郎と桜は戸惑いを見せていた。

しかし、凜はこめかみに人差し指を当て、何かを考えている様子を見せている。

「それ、本気で言ってるの？」

「あいにく、そうとしか言えないな」

睨んでくる凜に土は気にした風もなく答える。

ちなみに証明しろと言われたら麗葉に頼むつもりでいる。

麗葉はまだ幼いこともあって大した術は使えない物の、明らかに手品とは違つといった術は一応使うことは出来る。

それを見せれば、一応の証明になる。

土はそう思っていたのだが、いきなり凜が笑顔になつたことで嫌な予感を感じた。

なんかこう、嵐の前の静けさのような

「先に謝っておくわね」

「は、謝るつて」

「ふっざけんなあああああああああああああ!!!?」

「おわ!?」「きゃあ!?」「うわ!?」「きゃ!?!」

いきなり言葉に雄介が首を傾げた瞬間、そんなことを言い出した凜はいきなり大声で叫んだ。

あまりの音量に雄介だけでなく、望や士郎、桜も驚いている。

麗華も声こそ出さなかつたが目を見開いて驚いているし、麗葉はあまりの声の大きさに目を回している。

流石の土も目の前で叫ばれたこともあって両耳を人差し指で思わずふさいでいた。

唯一、叶だけがいつもの様子で眺めていたが。

「たく、デカイ声出しゃがって。そんなに怒るようなこと言つたか?」

「うっさい! 何よ、異世界から来たつて!? それって第二魔法じゃない!?!」

そんなのを近所から来ましたってな軽い感じで話すなあ!？」

顔をしかめながらも文句を言う士だが、凜は興奮冷めやらぬままにそんなことをまくし立てる。

もつとも、それを聞いた士は片眉を跳ね上げていたが。

「第二魔法……ね。なるほど、この世界にも魔法使いがいるのか。で、言葉からするとあんたはその魔法使いかな？」

「え？ あ!？」

士の言葉に最初は訝しげな顔をする凜だが、すぐさま自分の失言に気付いてしまったという顔をする。

そう、本来なら秘密にしなければならぬことを、自分の失言で気付けてしまったのだ。

自分のうっかりを呪いつつも真剣な表情へと変える凜。

一瞬、士達の記憶の改ざんを考えるが、それは後にしようと考えた。今はまだ士達から話を聞く必要もあるし、自分ならすぐにでも実行出来ると思ったからだ。

それにここには桜もいたから

「訂正させてもらうわ。私は魔法使いじゃなく魔術師よ」

「え？」

「ふ〜ん……魔術師ね。魔法使いとは何か違うのか？」

「そうね。正確には魔術と魔法ということになるけど、魔術は科学技術などで同じような現象を起こせる物を

魔法はいかなる方法を用いても起こすことが出来ない、文字通り奇跡のような現象を指すわ」

士の問い掛けに言い出した凜は真剣な顔で答える。それを聞いていた士郎はなぜか驚いていたが。

「なるほどね。エヴァの所にいた魔法使いとは違うってことか」

「エヴァ？」

「前に行った世界にいた奴のことだ」

「前に行った世界ね。そこに魔法使いがいるって言ってたけど、どんな所なの？」

話を聞いていた凜が問い掛けると、話していた土はエエヴァンジーリンがいた世界のことを大雑把に話し始めた。大半の魔法使いが人の為に動いていたりとか、見たことがある魔法のことなどを。

そして、その話を土郎は異常なまでに興味深く聞いていたのを、土は見逃していなかったが。

「なによそれ。信じられないわね」

それを聞いた凜は表情をしかめる。

彼女にしてみれば、エヴァンジーリンの世界の魔法使いのあり方はあり得なかったのだ。

その後はこの世界の魔術師のあり方を話すのだが、それを聞いた雄介、望、麗華と麗葉は顔をしかめた。

場合にもよるが、時として人の犠牲をいとわない魔術師に嫌悪感を感じてしまったからだ。

「エヴァが聞いたら、喜びそうだな」

土は気にした風も無く、そんな感想を持っていたが。

「それでさっき言っていたことだけど、本気なの？ 色んな世界が大変になるとかって」

「俺達も半信半疑って所だ。だから、確かめるためにこうしてこの世界に来たんだがな。」

ま、怪人達が暴れてるし、この世界でも何かをやるうとしてるのは間違いないだろ」

睨む凜に土は気にした風も無く答える。

ただ、内心では今回の怪人達の動きが気になっていたが。

「確かにあれは得体が知れなかったけど……それじゃなに？

あんたは正義の味方ぶってるってわけ？」

「いや、そんなのには興味は無い」

「「はい？」」

相変わらず睨む凜であったが、あっさりと返す土の言葉に土郎と共に呆けてしまった。

それに対し、土は勝ち誇るような笑みを浮かべながら、右手を上げながら人差し指を立て

「俺は俺の為に戦う。」

もし、世界がやばいことになるという話が本当なら、俺の所もやばいことになるだろうしな。

そんなのはごめんこうむるから、やめさせるために戦っているにすぎない」

なんてことを言い放つ。その光景に凜、土郎、桜は呆然と眺めていた。

言っている意味はわからなくもない。だが、こうも堂々と言えることでもない。

そのあまりの清々しさに呆然とならざるおえなかったのだ。

「じゃ、じゃあ、なんである時……来たのは」

「ああ、少々お前のことが気になってな。少し話をしようと思ったんだ」

戸惑いながらも話を聞いて疑問に感じたことを問い掛ける土郎。

それに対し、土は顔を向けて答える。

なぜか、勘が働くのだ。土郎をこのままにしてはいけないと。

「話……ですか？」

「ああ。あの時の高飛び……もしかしたら、何かに見立てていたんじゃないのか？」

何かに見立て、それに到達しようとして、無茶だとわかりながら跳び続けてたんじゃないのか？」

不安そうな顔をする土郎に土はまっすぐ見据えながら問い掛ける。

その後、しばらくは沈黙が続いたが、意を決したのか土郎は息を呑んでから、そのことを話し始めた。

「俺、孤児だったんです。5年前にこの冬木で大きな災害が起きて

……大勢の人が亡くなって……

その中には俺の家族もいて……俺は助かったけど……ひどい怪我をして、入院して……

そのせいか、今でも家族の顔は思い出せないんです」

「そんな……」

うつむきながらも話す士郎。その話を聞いて、望が悲しそうな顔を  
をする。

凜や桜、雄介や麗華も似たような顔をしていたが、望としては今の  
話に思う所があった。

なぜなら、それはどことなく土と境遇が似ている気がしたから

「そんな俺をじいさん……切嗣って言うんですけど、その人が俺を  
引き取ってくれたんです。

じいさんは良く家を空けて……それでも家にいる時は色んなことを  
教えてくれました。

でも、少し前にじいさんは亡くなって……その時に自分の夢のこ  
話を話してくれました。

自分は正義の味方になりたかったって……」

「正義の、味方？」

「はい……でも、自分はなれなかったって話してました。

だから、俺はその時に言ったんです。俺が代わりに正義の味方にな  
ってやるって」

「そうだったのか……」

話を聞いていた雄介の疑問に、話していた士郎はうなずきながら  
答えた。

その言葉に麗華が納得した。大切だった人の想いを叶えるようとす  
る。

士郎は無自覚だったのかもしれないが、その想いの強さが高飛びに  
現れていたのだろう。

それであんな無茶を続けていたのではと麗華は思ったのだ。

「なるほど。ま、別に正義の味方になるってのは悪いことじゃない。  
例え、それが人の想いを受け継いだものだとしてもな。

他の奴らはなんか言うかもしれないが、少なくとも俺はそれは大事  
な物だと思う」

「あ、ありがとうございます」

「だが、だからこそ聞かなくちゃならない。

お前はその願いを叶えるために何をすべきなのか、考えたことはあるのかと」

「え？」

言われて嬉しそうになる土郎だったが、続けて出た土の言葉に訝しげな顔をする。

気にはなつたが、気を取り直して真剣な顔になり

「と、当然ですよ。俺は」

「どうせ、人を守ったり助けたりするにはどうすればいいのか？  
つて、辺りじゃないのか？」

「え？ あ、そ、それは、そうですね」

そうだと答えようとするが、その返事を遮る形で出てきた土の言葉に思わずうなずいてしまう。

実際、その通りでもあったのだが、それを聞いた土はあからさまなため息を吐いていた。

「正義の味方に限らず、目的のためには何をしてもいいってわけじゃない。

どんなことでも、自分にとって最善だと思っていたことが他人には最悪に見えた。

なんてのは別に不思議な話でも無いからな」

「で、でも」

「それにだ。今のお前じゃ、誰かを助けることも守ることも出来やしない」

「土！ それは流石に言い過ぎだぞ！」

言われて戸惑いながらも言い返そうとする土郎であったが、次に  
出た土の言葉に思わず体が揺れた。

雄介は言い過ぎだと思っ  
て思わず叫んでしまったが、逆に望と麗華はその様子を見守っていた。

望の方は流石に戸惑った様子を見せていたが、土が言わんとする

ことがわかったような気がしたのである。

「そ、そんなことありません！」

俺は誰かを守れるようになるうと体を鍛えてるし、魔術だってがんばってるんです！」

「え？」

「それ以前の問題だ。あの時もお前、自分を犠牲にして2人を逃そうとしてただろ？」

「当然じゃないですか！ ああしなければ」

「じゃあ、聞くが。あの時、お前が死んでいたら、2人は助かったと思うか？」

「え？」

否定しようと思わず叫んでしまう士郎だが、その一言に凜は思わず顔を向けてしまう。

一方、再びため息を吐いた土の問い掛けに士郎は当然と言わんばかりに言い返すが、次に出た問い掛けに思わず口を閉ざした。

確かにあの時は自分がどうなっても2人を助けたいと思っていた。それが当然なんだと士郎は思っていたのだ。

だが

「あの怪人達はお前を殺した後は、まず間違いなく2人を追いかけて襲うだろうな。」

で、死んでるお前はどうかやって2人を守るんだ？ 運良く、他の誰かが助けてくれるとでも？

今回は俺達が行ってたから良かったが、毎回そう都合良く行くもんじゃない。

お前はただ守る、助けるってことばかりに目が行って、何をどうすればいいかなんて考えてもいない。

それどころか、自分自身だけでなく守ろうとする者のことも考えてないだろ？

そういったことに目を向けようとも考えようとししないでやるうとするのはただのわがままだ。



そして、そのわがままは付き合わされた人達を不幸にもしかねないんだよ」

「言い方はひどいかもしれんが、確かにその通りだな。士郎はまだ若いから、わからないことかもしれない。

だが、わからないことをわからないままにはいけないんだ。

それは時として、大事な物を失ってしまうことにもなりかねないんだからな」

士の話の後に渋い顔をしながら話す麗華。

なまじ、自分も似たような経験をしただけに、麗華の言葉には実感が込められているように思える。

そして、その話を聞いた士郎は落ち込んだようにうつむいてしまう。よくよく考えてみれば、今までそのようなことを考えたこともなかった。

ただ、守る、助けることが大事なんだと思っていた。

けど、それだけではダメなのだど気付かされ、どうすれば良いのかと思ひ悩んでしまう。

「ところで……衛宮君？ 先程、あなた魔術をがんばってるって言うっておりませんでしたか？」

「え？ あ、そ、そう、だけど……」

「へえ、そうなんですかあ……その辺りのこと、詳しく聞きたいのですけれど。冬木のセカンドオーナーとして」

とても爽やかな笑みを浮かべる凜。だが、士郎や士達にはわかっていなかった。

あれは笑ってないと。だって、凜からもの凄い威圧感を感じるのだ。故に迫られている士郎は顔を思いつき引きつらせている。

どうやら、士郎が魔術を使えるのは凜的には色々と問題だったらしい。

士達から離れて、あれこれと士郎を問い詰めていた。

「ほっておいていいのか、あれ？」

「どうやら、俺達がなんやかんや言ってもいいことじゃなさそうだ

「からな。落ち着いた時に聞けばいいだろ」

「あ、あの……聞きたいんですけど……怖くは……無いんですか？」

「は？」

士郎達を指差しながら問い掛ける雄介に士は呆れた様子で答えていた。

そこに桜がそんなことを聞いてきたのだが、意味がわからず雄介は首を傾げてしまう。

「そ、その……あの怪人と戦うのって……怖くないのかなって……」

「ん……俺は必死になってるから、そんなこと考えたこと無かったな……」

「俺は怖くないと言えば嘘になる。だが、怖がってばかりもいられないからな」

「怖がってばかりもいられない？」

そんなことを聞かれて、雄介は頭を掻きながら答え、士はあつさりとした様子で答えた。

問い掛けた桜は士の返事に少し驚いたような顔をしながらも首を傾げてしまう。

だって、あの時の士は怖がっているようには見えなかったからだ。

「大抵の奴は怖い時は怖い。それが当たり前だ。だが、怖いから怖がってればいいというわけでもない。」

時として、それが致命的になることもある。だから、俺は常に考える。何をどうすればいいのかをな」

「考える……」

「ま、さっきも言ったが、だからって何をしてもいいってわけじゃない。」

士郎にも言ったように他の誰かを不幸にさせるかもしれないし、自分の身にもとんでもない形で返ってくるかもしれないしな」

「それって、何も出来ないんじゃない？」

話を聞いて訝しげな顔をする桜だが、話していた士の言葉に不安そうになる。

そうなるのであれば、自分ではとてもじゃないが怖くて何も出来ないと思っただからだ。

「だからといって、何もしなかったら結局は一緒だ。

そうだな……自分のやったことはどんな形であれ、結局は自分に返ってくる。」

その覚悟があるか無いかだな」

それに対して士は顔を向けて答えるが、聞いた桜は思わずうつむいてしまう。

自分にそんな覚悟が出来るだろうかと不安を感じたからだ。

でも、出来ない気がする。だって、自分は

「はあ……」

「話は終わったのか？」

「ええ。士郎のおじいさんって、どうやらモグリの魔術師だったみたい。」

ここが霊地だとは気付いていたはずなのに、セカンドオーナーである私の家に連絡は無いもの。

何が目的だったのか、士郎においおい聞いていくことになるけど」

「すまない。霊地は何となくわかるのだが、セカンドオーナーとは？」

士の問い掛けにため息を吐いていた凜が答えるのだが、それを聞いていた麗華が疑問を投げかける。

霊地が魔力などが溜まりやすい場所だというのは麗華もなんとなくだがわかる。

それは自分達の世界にもあるのだから、セカンドオーナーという言葉は聞き覚えがないので疑問に感じたのだ。

「そうね。大雑把に言えば、魔術協会と言われる所から、そういった場所の管理を委託されてる人を指すわ」

それに対し、凜は大雑把に答える。

詳しく答えても良かったのだが、今日は色々とありすぎて気疲れが出てしまい面倒くさくなってしまったからだ。

何しろ、土郎や土達の問題が解決してるわけでもない。無駄なことを嫌う凜としては、余計なことに手間をあまり掛けたくなかったのだ。

それに別に嘘を言ってるわけでもないので問題は無い。と、凜は思っていたのだが、この時はそんな心境のせいか気付かなかった。

土郎の義父である切嗣が現れた時期に。土郎の話の思い出せば、その時期は容易に特定出来た。

なぜなら、その時期は凜にとっても大事な意味合いを持つ時だったのだから。

だが、この時の凜は気付かない。でも、気付かなくて正解だったかもしれない。

もし、気付けば凜は土郎の敵になっていたかもしれないから

「と、ところでさ……なんで、俺のこと名前で呼んでるんだ？」

「ん？ 別に深い意味は無いわよ。私としてはこっちの方が呼びやすいつてだけだし」

「そ、そうなのか……」

「ん？ まあ、いいわ。それであんた達はこれからどうするの？」

凜の返事に問い掛けた土郎は顔を淡く赤くしながら顔を引きつらせる。

姉代わりの女性以外から名前で呼ばれたことのない土郎にとって、なぜか気恥ずかしく感じられたのだ。

そのことに気付かない凜は首を傾げながらも土に問い掛けていたが「ま、あいつら倒して終わりってわけでもないだろうからな。何かわかるまでは調べ回ることになるだろ。」

で、出来れば道案内をしてもらえると助かるんだが？」

「なるほど……まあ、いいわ。私もそのつもりだったし」

で、あっさりとした様子で答える土に、凜はため息を吐きながらもうなずいていた。

土達はまだ怪しい所があるだけに、凜としても目を離したくはな

つたのだ。

なので、この提案は渡りに船と言えた。

「あ、あの……私は、どうすれば……」

「悪いが一緒に来てもらえると助かる。

無理強いはいたくは無いんだが、あの怪人達はお前達を狙ってたからな」

ふと、恐る恐るといった様子で問い掛ける桜に、士はため息混じりに答えた。

怪人達の目的はわからないが、士郎、凜、桜が狙われたのは間違いない。

そして、この後も狙われる可能性がある。

それを考えると一緒にいてもらった方が守りやすかった。

ただ、どうしても怪人達の目的が気になってしまう。

狙いがなんにしる、あの時はその数が少ない気がしてならないのが士は気になっているのだ。

「でも、士郎ちゃん達はそろそろ帰らないといけないんじゃない？

お家の人も心配するだろうし」

が、叶の一言で新たな問題が発生してしまう。

エヴァンジェリン達の世界では麗華と麗葉は宿無しのような状況だったこともあって望達の家に泊めることとなった。

しかし、今回はそれも行かない。士郎達が帰ってこなければ家族は不審に思うだろう。

かといって、連絡をすればでも良いというわけでもないのだが

「あ、俺は家に1人暮らしで……完全に1人ってわけじゃないですけど……」

ある人にお世話になってたり、姉代わりの人が毎日のように来ますし」

「私もそうよ。後見人はいるけど、基本的に1人暮らしね」

「え？」

「それはそれで問題があると思うんだがな」

頭を掻きつつすまなそうに話す土郎に続き、凜もあっさりとした様子で答えた。

それを聞いていた桜は驚いた顔をするが、一方で土は呆れたような顔をする。

事情があるのだろうか、それでもそれはどうかと思ってしまうのだ。それは望や祐介、麗華も同じらしく、複雑そうな顔をしている。

「あ、あの……1人暮らして……どういう」

「え？ あゝ……5年前に事故で両親が死んじゃってね……」

でも、私の家って色々と複雑な事情があつて、誰かに頼ることが出来なかつたのよ。

その後見人のあいつに頼り切りって訳にもいかなかったから、それでね」

どこか戸惑いを見せる桜の問い掛けに、凜は気まずそうに頬を指で掻きながら答えていた。

実際は違う所もあるのだが、事情が事情だけに本当のことを話すわけにもいかない。

そう、『この地で行われてる』ことを土達に話す訳にはいかないのだ。

が、このことを桜に話すのもためらいがあつたために、表情に出してしまつたのである。

一方で桜は愕然としていた。だって、聞いていた話と違うからだ。凜は家で幸せな暮らしをしていると

「色々と気になるが、今は置いておこう。で、桜の方は？」

「え？ あ、はい。私は祖父と兄がいますけど……」

「そうか……さて、どうしたもんかな？」

聞かれて少し慌てながらも答える桜の言葉に、問い掛けた土はこれからのことを考える。

といつても、頭が痛い状況故にため息が漏れていたが。

「どうか、したんですか？」

「いや、このまま帰しても大丈夫かなと思つてな。

また襲われる可能性もあるから、気楽に帰すつてわけにもいかないんだよ」

士郎の問い掛けに士はため息混じりに答えた。

先程も言った通り、怪人達は3人を狙い続ける可能性がある。それに士郎と凜は1人暮らしだという。

家にいる所を狙われる可能性があるし、もしそうなつたら助けを呼ぶなどは困難を極めるだろう。

かといって、士達とずっと一緒にいてもらうのも難しい。士郎と凜はまだしも、桜には家族がいる。

怪人に襲われるかもしれないからと言っても納得はしない、ということが明らかに不審者だと思われるだろう。

まあ、泊められたらいいのだが、人数的に泊める場所が無いというのもある。

「そうだ。麗葉、防護用と信号用の札は作れるか？」

「うん、出来るよ。ただ、ここには道具が無いから、ちゃんとした物は作れないけど」

「構わない。信号用はともかく、防護用は数で補えばいいからな。

で、何枚作れる？」

「ん〜……信号用は20枚くらいは作れるけど、防護用は道具が無いから8枚くらいかな？」

「そうか、もう少し欲しい所だが、仕方あるまい。防護用を6枚に信号用を3枚作ってくれないか？」

「うん、わかった」

何かを思いついた麗華がそう言うと、麗葉はうなずいてから麗華と共に奥へと行ってしまふ。

その様子を士と叶以外の者達は首を傾げて見ていたが、しばらくして2人は何かを持って戻ってきた。

それは細長い長方形の紙が9枚と筆ペンであった。

その紙にカウンターに座つた麗葉が筆ペンで達筆な文字を書いている

「オン」

「へ!？」

文字を書いた紙の上に左手を置き、右手は人差し指と中指を立てた状態で顔の前に置くと、目を閉じてその一言を発した。

その光景に凜は目を見開いて驚く。なにしろ、麗葉の左手に膨大なまでの魔力の光が放たれたからだ。

桜や士郎も驚いていたが、凜の驚きはかなり大きかった。

魔力の強さもあつたが、麗葉は明らかに何かの術を使っている。

そして、凜はその術が自分の全く知らない物であることを察しており、それ故に驚いたのだ。

「ふう……疲れたあゝ」

「すまないな。叶さん、申し訳ありませんが、麗葉に後でお菓子をあげてください」

「はいはい」

何かをやり終えてため息を吐く麗葉に気遣いの言葉を掛けた麗華は叶にお願いをする。

その頼まれた叶の笑顔の返事を見送ると、麗華は麗葉が魔力を込めた紙を士郎達に差し出していた。

「これは君達の身を守ってくれる札だ。身に付けていれば危険な攻撃などを防いでくれる。

ただし、1枚につき1回か2回が限度だと思うから、その辺りは気を付けてほしい。

こちらの札は信号用だ。破けば魔力が吹き出して、それが目印となる。襲われた時に使ってくれ」

「ちょ、ちよつと待ちなさい!？」 何よ、今のは!？」

「ああ、麗華と麗葉はさっき言ってた世界から来てな。そういうたのが出来るんだよ」

1人に付き防護用の札を2枚、信号用の札を1枚を説明しながら渡す麗華。

士郎と桜は不思議そうに見ていたが、凜は慌てた様子で問い詰めて



いた。

何しろ、魔術師である凜から見ても、見たことも聞いたことも無い術だったからだ。

そのことは土が答えたのだが、聞いた凜の瞳が怪しく光ったかと思うと麗葉に詰め寄り、両手で彼女の両手を握りしめ

「ふ、ふえ？」

「ねえ、あなた……今日、私の家に泊まらない？」

「何をしようとしてるのかわからんが、そういうのは遠慮してくれ」

いきなりのことに目を見開く麗葉に凜はすっごい笑みでお願いをしてくるが、土が呆れた様子でツツコミを入れていた。

まあ、不穏な気配満載ならしょうがなくもないのだが……

「いいじゃない、色々調べてみたいのよ」

「却下だ。ほら、送っていくから、そろそろ帰れ」

「あ、別に送ってもらわなくても」

「帰る最中に襲われたらどうする気だ？」

不満そうに頬を膨らませる凜に土が呆れた様子でツツコミを入れる。

そのことに土郎が断ろうとしたが、麗華からのツツコミが入った。

確かにその通りなので土郎は何も言えなくなってしまうのだが。

そんなわけで土郎達を送ることになった土達。

ただ、食事の準備があるので、望はフォトショップに残ったが。

「あ、ここが私の家です」

と、門の前で立ち止まる桜。家はどうやら古い日本家屋といった物だったが

「なあ、ここでなんかやってるのか？」

「え？ あ、そ、そんなことはありませんよ……どうして、そんなことを？」

「いや、変な気配を感じた物だから……気のせいかな？」

桜は戸惑い気味に答える様子を見て、問い掛けた士はそう答えながらも視線は桜から外さない。

その様子に不思議そうな顔をする士郎と凜。

士郎は確かに変な気はするけど程度にしか思わなかった為に。

凜は桜の家がどんな所なのか知っていたために、そのような反応となったのだ。

雄介も同じような士郎達と同じような物だったが、麗華と麗葉は士と同じ顔をしていた。

2人とも桜の家から感じる不穏な空気を感じ取っていたのだ。

「じゃ、じゃあ、私はこれで……今日はありがとうございました」

「別に礼はいらないさ。俺が勝手にやってることだからな」

「そんな……それじゃあ……」

士の返事に礼を言った桜は困惑しながらも頭を下げ、家の中に入ってしまう。

それを見送る士郎達だったが、士と麗華、麗葉だけはまるで睨むかのようにその様子を見送っていた。

よくよく考えるとここに来るまでの間、桜の様子がおかしい気はしていたが

「士……」

「ああ……本当に気のせいならいいんだがな」

声を掛ける麗華にため息を吐きながらうなずく士。どうにも嫌な予感が止まらない。

しかし、桜の態度以外に変わった様子が見られないので、乗り込む訳にもいかない。

そんなことをすれば、自分達が不審者になってしまうからだ。

仕方なくその場を離れた士達は士郎と凜を家に送り、フォトシヨップへと戻ることとなった。

その際、広い武家屋敷のような士郎の家を見て、頼んでここで全員泊まれば良かったと士は考えたのだが

後日、本気でそうすれば良かったという事態が起きることを、この時の士達はまだ気付くことは無かった。

その日の夜、士郎は自室で1人考えていた。

義父である切嗣が死んでから、切嗣の想いを受け継いで正義の味方になろうと決意し、その努力を重ねていった。

けど、今日士に言われたことで、どうすればなれるのか？というのをまったく考えていないことに気付かされた。

よくよく考えれば、どうやって人を守ったり助けたりすれば良いのかわからない。

一番に思いつくのが警察官や消防士などだが、士郎が思い描く正義の味方としてはどこか違う気がする。

NPOなどもあるにはあるが、それも士郎としてはやはり違うような気がした。

では、どんなのが正義の味方の理想像なのかと考えると、士が一番近い気がしていた。

士は自分はそうではないと否定していたが、士郎としてはそう思えるのだ。

しかし、どうすれば士のようになれるのかわからない。自分には士のような力は無いのだから……

この時、士郎は自分が根本的な勘違いをしているのに気付いてはいなかった。

士は言っていたのだ。彼は自分のために戦っていると

一方、凜は自室である物を凝視していた。

それは麗華から渡された札であったが、凜としては複雑な思いで見つめていたりする。

この札を作っている所を見た感じでは簡単そうに見えるが、そうで

は無いことに凜は気付いていた。

表面上ながら札を解析してみると、驚くまでに複雑な構築が魔術的に施されているのがわかるからだ。

魔術の根幹の違いのせいか完全に読み解くまでには至ってないものの、それだけでも凜としては落ち込みそうになる。

これと同じ物を作れるかと聞かれたら、宝石を使えばYESと答えることは出来る。

では、なぜそのような心境になっているかと言えば、コスト的な問題だ。

先程も言ったとおり、凜の魔術は宝石を用いるのを主としている。

宝石に血を介して魔力を込めることで、簡単な詠唱で魔術がすぐに行使出来るようになるのだ。

こう聞けば良いことだらけに思えるが、当然ながら欠点もある。

実はこの魔術、使い捨てなのだ。一度使うと、使った宝石は塵になっってしまう。

そして、皆さん知つての通り、宝石は高い。米粒ほどの大きさでも物によっては万単位が付くほどに。

で、宝石魔術は性質上、小さな物や質が悪い宝石は向かない。使えないわけではないが、効率が悪くなってしまうのだ。

その為、宝石としては大きめで質が良い物をどうしても使いがちになっってしまうのだが

やはりだが、そういうったものは高い。困ったくらいに高い。普通の人では手が出せないくらいに高い。

まあ、普通の人は無理すれば買えなくもないが……ともかく、高いのだ。

しかし、魔術のためにはどうしても必要で、凜もそれに耐えながらやってきた。

が、今回麗葉がやったことはその欠点を克服出来る。

あの時の話を聞く限り正規の道具を使ってないそうだが、それでも凜から見ても十分と言える性能だろう。

もし、正規の道具を使っていたら、その分値段も掛かるだろうが、どれほどの性能になるというのか。

そのことを考えると凜は思わず悩んでしまう。この世界の魔術はひどく遅れているのではないかと。

確かに世界の違いなどはあるのかもしれない。でも、それを差し引いても、そう思えてしまう。

「世界の違い……か……」

そのことを考えた時、凜はふとその一言を漏らしていた。

『第二魔法。並行世界の運営』

大雑把に言つと異世界などを行き来する魔法で、凜が目指そうとしている1つでもある。

最初の方こそ不安はあった。なぜなら、自分達の大師父と言える者以外、それを成した者はいないと聞いていたから。

けど、今日この日にそれを成した者が現れた。その者が言うには自分達の力でも魔法でも無いらしいが。

それでも凜には大きな指針となる。最初の方こそ、土達が異世界から来たというのを信じられなかった。

しかし、麗葉が札を作った所を見て、土達がそうであると確信することが出来た。

なぜなら、麗葉が使った術は自分達魔術師とは明らかに根幹が違いすぎた。

どれほどの違いかは説明しづらいが、少なくとも麗葉のあれは魔術では無いと言い切れるくらいに違う。

自分達の知らない術がどこかにあって、それがいきなり現れたことも考えられる。

けど、そうなるとう度はあのフォトショップの説明が出来なくなるのだ。

凜も1人暮らし故にあの商店街は良く使っているので、どこにどんな店があるか大体把握している。

そして、2日前に商店街に行った時にはあそこにフォトショップは

無かった。

まさか、たった2日で建物が建つはずも無いので、何らかの要因があると考えるのが普通だ。

そして、凜はそれが第二魔法であると確信しているのである。

「いいわ……やってみせるわよ。私の手で」

自分が生きている間に第二魔法を成す。静かにそんな決意をする凜。

その時、何かがひび割れるのだが、凜はそんなことに気付くことは無かった。

さて、桜はというと静かにどこかへの地下への階段を下りている最中であつた。

これは日課だつた。自分がこの家に来てから、毎日のように行われる。

桜としてはやりたくはなかつた。だって、あれは苦しみともう一つを伴う物。

それが自分を蝕んでいくのだ。でも、拒否することは出来ない。

自分ではあの者に抵抗すら許されないのだから

だから、帰る時に麗華から渡された札を土達に気付かれないように捨てていた。

あの者が見たら、確実に興味を持たれるから。

もし、そうなつたら、自分は麗葉や土達のことを話してしまうだろう。

そうしてしまつたら、あの者は麗葉や土達に手を出してしまう。

そうなつたら、彼らは……助けてもらった恩人故に、そのようなことをさせたくない。

だから、桜はもらった札を捨てたのだ。自分のような者を増やさないために。

そう、これでいい……そう思いながら、石畳や石壁に覆われた部屋

へとたどり着く。

「来たか……」

そこにいたのは桜の腰回り辺りまでしかない背に、まるでミイラのようにしわがれた老人がいた。

その老人は杖で体を支えながら、顔を桜へと向ける。老人の名は間ま桐とう 臓硯そうげん

桜の祖父であり、間桐家の当主……正確には違うのだが、そうとも言える存在でもある。

「では、始めようか」

「……はい」

臓硯に言われ、桜は自分の服に手を掛ける。

また、今日も行われる。その思いが桜に悲壮感を漂わせていた。

今日もまた、あの苦しみが そんなことを考えていた時だった。

「は！ そいつに何をやらせる気だ、じじい！」

そんな大きな声が聞こえ、桜と臓硯はそちらへと顔を向けた。

そこにいたのは桜の兄である慎二……のはずなのだが、桜はその彼から明らかかな違和感を感じた。

「なんのようじゃ？ それにおぬしにはここには来るなど言っておいたはずだがな？」

「は、ボクがどこにいようが勝手だろ？」

まるで睨んでいるかのように顔を向ける臓硯だが、慎二の方はまるで意に介していなかった。

それどころか明らかに尊大な態度で接している。それがおかしいと桜は感じていた。

確かに兄は自己顕示欲があったが、祖父の前では借りてきた猫のようにおとなしいものだった。

しかし、今は違う。明らかに祖父を見下している。それがどうしても桜には不思議に思えてならなかった。

というのも、見た目こそしわがれた老人に見える祖父だが、その内に秘めるのは魔物。

慎二はもちろん、己の身に間桐の魔術を刻まれている自分でさえ、敵うことは無いのに

「ふむ、なにやら知恵を付けたようじゃが……その程度で頭にのりおつて。

どれ、少々お灸が必要なようじゃな」

「あ……」

体を慎二へと向ける臓硯の言葉を聞いて、桜は思わず身を引いてしまう。

感じてしまったのだ。臓硯から異様な気配を。その直後、石造りの部屋中から、無数もの蠢く物が現れる。

それは蟲……形容するのがはばかれるような、卑猥な形をした蟲の群れ。

それが慎二へと迫るのだが、当の本人は気にした風も無く薄ら笑いを浮かべている。

この時になつて臓硯も違和感に気付くのだが、その時には全てが遅かった。

『テラー』

薄ら笑いを浮かべる慎二が黒く細長い立方体　USBメモリを取り出したかと思うと、電子音と共にそれを額に突き刺した。するとメモリが慎二の額へと吸い込まれるように消えていく。

この光景に桜と臓硯は目を見開いたが、それだけでは終わらなかつた。

メモリを取り込んだ慎二の体が何かに包まれたかと思うと、その姿を変えていた。

どこかの文明に出てきそうな巨大な面を被り、これまたどこかの文明にありうな装飾が施された体へと。

「魔術……ではないようじゃな。じゃが、それがどうかしたかの？」

その光景を見ていた臓硯が落ち着きを取り戻したかと思うと、蟲の群れを慎二へと再び送らせたが

先程も言ったとおり、すでに遅かった。いや、今は様子を見るべき



だった。

知らぬこととはいえ、慎二の変わり様を取るに足りないと言断したための失策。

「はあああああああ」

「む？ なんじゃ うぐ！？」

だが、臓硯はそのことに気付かない。いや、気付くことが出来ない。

なぜなら、慎二がうなり声を上げたかと思うと、彼を中心に黒い水のような物が広がり始めたからだ。

それに眉を潜めた臓硯だったが、操っていた蟲が黒い水に触れた瞬間、臓硯は胸を押さえて苦しみだし

「『うぎやあああああああああああああああああああああ  
！！？？』」

頭を掻きむしりながら、人が出せないような声で悲鳴を上げた。

実は蟲は臓硯の体の一部のような物だ。それ故に臓硯とある意味、意志的な物が繋がっている。

そして、その蟲が黒い水に触れたことで、蟲を介してある物が臓硯に伝わったのだ。

それは恐怖。臓硯にとって一番恐れる物やそれ以外の物……そういうった恐怖が蟲を通して臓硯に伝わったのである。

「『あああああああああああああああ』」

そのまま、臓硯は悲鳴を上げ続けた。

黒い水に触れた蟲が1匹や2匹なら、ここまでにはならなかっただろう。

だが、一度に数十匹も触れたことで、その分だけ恐怖が臓硯へと伝わる。

しかも、今もなお黒い水は広がり続け、ついには石造りの部屋全てを飲み込んでいた。

そうなれば、相対的に黒い水に触れる蟲は増え

「『あああああああ……』」

それと共に臓硯に伝わる恐怖も増大し、やがては限界を超え臓硯は壊れた。

精神的な死……臓硯たるものが完全に消え、その体が溶けるように消えていく。

それは周りの蟲達も同じで……しばらくして着物だけを残し、臓硯は蟲達と共に完全に消え去ってしまう。

その様子を桜は恐怖に震えながら見ていた。

なぜか、黒い水はぽっかりと穴が開いたかのように桜を避けてくれたおかげで影響を受けることは無かった。

代わりに臓硯の苦しむ光景に恐怖してしまうはめになってしまったが。

「あれだけ大きな口を叩いておきながら、あっけないもんだな。

まあ、ボクのことを馬鹿にしてくれてたから、当然の仕打ちだけだね。

そして、お前もボクのことを馬鹿にしてたよな？」

「え？ あ、い、いや、あ、いや……」

どこか愉しそうに語る慎二が振り返って声を掛けてきたことに、桜は震えながら首を横に振っていた。

彼を馬鹿にしたことなどない。逆に羨ましいと感じていた。

あの地獄を味わうことが無かったのだから……もっとも、それは桜の思い込みで、慎二も地獄を見ていたのだが。

ともかく、厳密な意味で馬鹿にしたことなど無い。逆にこの地獄を変わって受けて欲しいと思っていた。

だが、今はその考えをしたこと事態を後悔している。このまま自分は兄に殺されて

「そこまですておきなさい。彼女は私達の計画に必要なのですから」

「ち……わかったよ」

不意にそんな声が聞こえ、その言葉を聞いた慎二は舌打ちをする。桜が正気に戻り振り返ってみると、そこには慎二にUSBメモリを

渡した男が立っていた。

その男を見た桜はあることに気付いて戸惑いの色が浮かべる。なぜなら、黒い水の上に立っているのに、なんの影響も受けていないように見えたからだ。

「初めまして、お嬢さん。すまないが、我々と来てもらおう」

「あ、あ、ああ……」

帽子を脱ぎ、優雅な仕草で頭を下げる男。しかし、その男を見ていた桜の顔が恐怖に歪んでいく。

なぜなら、顔を上げた男の顔にステンドグラスのような文様が浮かんだのだから

第8話『語る者。悩む者。決意する者。そして』(後書き)

今回の8話目、いかがだったでしょうか？

Fateが原作と違うと思ってる方。これはそういうお話です(おい)

それはともかく、士達と出会ったことで正義の味方の意味を考えるようになった士郎。

そして、自分の目標に決意を固める凜。一方で桜には魔の手が迫ります。

果たして、彼女はどうなってしまうのか？

今回は解決編。異変に気付いた士達はその場へと向かいますが、そこでは

というようなお話です。では、次回でもまたお会いしましょう。

## 第9話『伝える事』

次の日の朝。土はこめかみを引きつらせながらもため息を吐いていた。

というのも

「お前ら……狙われてるといふ自覚はあるのか？」

「じつとしてるなんてのは性に合わなかったのよ」

「えっと、俺も……そんな感じですよ」

土のツツコミに凜は胸を張りながら、土郎はすまなそうに頭を掻きながら答えた。

実は土達が土郎達を迎えに行くことになっていたのだが、その前に土郎と凜が来てしまったのである。

土郎達は今日は休日だそうだが、だからといって気軽に歩いて欲しくは無い。

いくら麗華から身を守るための札をもらってるとはいえ、無謀とも言えたくない行為なのだ。

それ故に土はこめかみを引きつらせていたのである。

「でも、桜ちゃんはや？」

「さあ？ 私はまっすぐここへ来たから」

「俺もですよ」

「どのみち、迎えに行かなきゃならないわけか」

桜がいないことに気付いた雄介が問い掛けるものの、凜と土郎は首を傾げるだけであった。

そのことに土はため息をまた吐くこととなったが。

まあ、朝食もすでに終えていたので、叶を除く全員で迎えに行ったのだが

「あれ？ 出てこないな？」

桜の家の門の所で雄介がそのことに首を傾げる。

というのも呼び鈴を鳴らしているのだが、誰かが出てくる様子が無

い。

呼び鈴が壊れてるのかと最初は思ったのだが

「あれ？ 開いたよ？」

麗葉が押すと門は簡単に開き、このことに土と麗華の視線が鋭くなる。

「あ、土！ 麗華さんも！」

「ちょっと、どうしたのよ？」

門を押し開けて中に入る土と麗華に望は驚き、凧は訝しげな顔をする。

しかし、2人はそれには構わずに玄関も勝手に開けてしまった。

「お、おい、何をやって」

「どう思う？」

「人の気配がしない……やられたか？」

「え？」

雄介がそのことに戸惑うが、土と麗華のやりとりに土郎が目を見開く。

その会話から連想されること。それは

「まさか、あの子」

「一応、確かめた方が良さそうだな。とりあえず、家の中を探してみろぞ」

「は、はい……」

凧も困惑の表情を浮かべる中、土の言葉に土郎も戸惑いながらもうなずく。

最悪の事態かもしれないが、それでも色んな可能性を考えて調べる必要はあった。

そんなわけでみんなで桜の家を調べ回ってみるが

「いた？」

「どこにも……でも、何か起きたようには見えないけど……」

雄介の問い掛けに望は首を横に振りながら答えた。

望の言うとおり、家の中には誰もいなかった。桜が言っていた兄や

祖父の姿も。

それに家の中を見る限り、荒らされたような形跡は見られなかった。そのことに望や祐介は不思議に思うのだが

「おい、こつち来てくれ」

「土？ なんだろ？」

「さあ？」

土の声に首を傾げる雄介と望だったが、確かめるために声が聞こえた方へと向かってみた。

2人がたどり着くと他の者達も来ていて、土が見ているものに顔を向けている。

「何かあったの？」

「明らかに怪しい物がな」

「これは……たぶん、工房よ」

「工房？」

望の問い掛けに土がそれに顔を向けたまま答える。

土が顔を向ける先にあったのは地下室と思われる場所へと続く、石造りの階段だった。

それを見た凜が断言するが、麗葉は意味がわからずに首を傾げてしまふ。

「大抵の魔術師は工房、大雑把に言うとなんを研究したりする場所のことだけど、そういうのを持つてるわ。」

それに桜の祖父には直接会ったことは無いけど、魔術師らしいわ。

だから、工房を持っていたとしても不思議ではないわね」

「え？ じゃあ、桜も魔術師なのか？」

「たぶん……ね」

少し驚いたような顔をする土郎の問い掛けに、話していた凜はどこか重苦しい雰囲気を漂わせながらうなずく。

わかってはいたことだった。でも、凜としてはあつて欲しくも無かったというのが本音でもあったが。

「なんで、そんなことを言わなかったんだ？」

「そう、ほいほい話すことでもないからよ、って、あんた何やってんのよ!？」

麗華の問い掛けに凜は答えるのだが、次に見た光景に思わず慌ててしまう。

というのも、土が地下室に下りようとしていたからだ。

「念の為に調べるんだよ」

「待ちなさい!？ 魔術師の工房は一種の要塞みたいな物なのよ！自分の魔術を他に漏れないようにするために、様々な魔術的なトラップを仕掛けてるの！下手すると死ぬわよ!」

「だとしても、どのみち調べない訳にはいかないさ」

凜が興奮した様子で止めようとするが、答えた土はそう言いながら階段をどンドン下りていく。

そのことに他の者達は戸惑いながら互いの顔を見てしまうものの、しばらくしても何か起きた様子が無いために恐る恐る階段を下りる事にしたのだった。

「魔術の施錠やトラップが無いなんて……どうなってるの?」

「にしても、なんなんだこの臭い?」

何事も無く全員石造りの部屋にたどり着くが、そこには何も無かった。

ただ、不快な臭いが充満しており、雄介や望、麗葉が顔をしかめていたが。

一方で凜は何事も無くこの部屋に来たことに疑問に感じていた。石造りの部屋という意外は何も無い所だが、凜はここが何かしらの工房であると確信している。

凜には少しながら魔術的な物がこの部屋から感じ取られたからだ。だとすると、外部からの侵入を防ぐ魔術的なモノが施されてるはずだが、それらしい物は無かった。

そのことに首を傾げたのだが

「何をやってたかはわからんが、ろくでもなさそうだな」

「それは……否定出来ないわね」



ため息を吐く土に凜は何かを言いかけて、思わず肯定してしまう。魔術師には非情な面がある。時には人体を用いた実験をいとわぬ者さえいるのだ。

そついうのもあるために、凜としてはその辺りのことが否定しづらかった。

「となると、奴らの狙いは最初から桜か？」

「どついう事ですか!？」

「言ったとおりだよ。ま、俺の考えだから、当たってるかどうかはわからないがな」

「しかし、どつして凜と土郎までも狙われたのだ？」

「さあな？ 偶然か、俺達を攪乱するためか……どのみち、桜が奴らに連れさらわれたと思つていいだろう」

それを聞いて慌てる土郎に、思わず漏らした土が答える。

麗華の疑問に答えたとおり、凜と土郎が狙われたのはその場に偶然いたとも思えるし、土達を混乱させるためとも考えられる。

もつとも、桜がさらわれたのは確実なので、じつとしてるわけにはいかないが。

「だったら、早く助けに行かないと!？」

「けどな、どこに連れていかれたのかわからないんだぞ？ 探すにしても闇雲つてわけにもいかないな」

慌てる土郎をなだめるかのように、土は静かに答えた。

確かに桜がどこへ連れていかれたのかわからないし、探すにしても手掛かりが全く無い。

この状況では手当たり次第になるのだろうが時間が掛かりすぎてしまふ。

未だに怪人達の目的がわからない状況では、それは致命的にもなりかねなかった。

どつしたものと誰もが考える……そんな時であった。

「なんだ？」

ある教会の中で、1人の神父は何かに気付いて振り返る。

この神父の名は言峰ことみね 綺礼きれいこの教会の神父なのだが、同時にある存在でもある。

今はあえてどんな存在なのかは割愛するが、彼はそれ故に『ある物の存在の動きをある程度把握することが出来た。

「『聖杯』が発動した？ しかし、これは」

綺礼が『聖杯』と呼ぶ物の動きに首を傾げる。

綺礼自身、『聖杯』が発動するのはまだ先のことだと思っていた。

確かに早まる可能性はあったものの、それでもいくばかの時間を要すると見ていたのだ。

しかし、それに反して『聖杯』は発動した。それに発動の仕方もおかしかった。

「始まる気配が無いだと？」

そのことに綺礼はいぶかしむ。『聖杯』は発動してから、ある手順を踏むことでその真価を発揮する。

だが、綺礼を感じる限り、その手順が行われる気配が感じられない。これではまるで

「『聖杯』が解放されようとしている？」

『聖杯』が内に秘める力を解放とうとしているように思えてならない。

このことに綺礼はどうするべきかを考える。普通ならば何が起きているのかを知るためにすぐさま調査を行うものだが

綺礼は嘲るような笑みを浮かべる。『聖杯』の完全発動は綺礼が望んでいたことだ。

どんな形であれ、それが成されるのなら綺礼としては別に構わなかった。

なにしろ、それは『聖杯』の中にある『あれ』が生まれ出でることも意味するのだから。

例え、そうならなかったとしても別の機会を待てばいいだけのこと。

どのみち、今は様子を見てから後のことを考えよう。綺礼はそう考えたのである。

だから、綺礼は気付かない。その判断で後悔することになるかもしれないことに。

なぜなら、『聖杯』がある場所には自分が望む物を別な形で見れたかもしれないのだから

「な、なにこれ!?!」

「こ、これは!?!」

「な、なんなのよ、これは!?!」

一方、士達の所でも麗葉、麗華、凜がその異常を感じ取っていた。

「やばそうな感じがするんだが、何が起きてるかわかるのか?」

「良くは、わかんない……でも……良くない物が凄く集まってる感じがするの……」

「ああ……人の悪意のような物が感じられる……しかし、これはあまりにも異常すぎる!」

気配で危険な事が起きていると感じている士が問い掛けると麗葉は怯えた様子で、麗華は困惑した様子で答えていた。

この様子に雄介、望、士郎は戸惑ってしまふ。士郎は違和感こそ感じているものの、士の言うような気配を感じる事が無かったからだ。

「結局はやばそうなことを起きるといふことか。それがどこかわかるか?」

「ええ……幸い、これ見よがしに魔力を垂れ流してくれてるから、場所の特定は簡単よ。」

まったく、どこの誰だか知らないけど、なめた真似をしてくれるわ」

その様子に士はため息を吐きながらも問い掛け、それに凜が忌々しそうな顔をしながら答える。

それを見て、士は再びため息を吐くはめになったが。

「このままってわけにもいかないだろうから、まずはそっちに行ってみるか」

「で、でも、桜はどうするんですか？」

「もしかしたら、何か起きてる場所にいるかもしれない」

「どうしてだよ？」

「桜がいなくなったのと凧達が言ってること。偶然にしちゃ出来すぎてるって気がするの俺だけかな？」

話を聞いて戸惑う士郎に答えてから首を傾げる雄介に話していた士はそう答えると、聞いていた士郎達は困惑した様子で互いの顔を見つめ合っていた。

桜がいなくなつたことと、凧や麗華と麗葉が言う異常。その2つが狙ったかのようなタイミングで起きている。

偶然と言えばそれまでだが、士としてはそうは思えなかったのだ。

「とりあえず、みんなで何か起きている場所に向かおう。」

で、その様子を見て桜がいなかったら、異常を調べる奴らと桜を探す奴らとで別れて行動する。

もっとも、その余裕があったらの話だけだな」

ため息混じりに士はそのような提案をするが、内心別れて行動するのはほぼ無理だろうと考えていた。

なにしろ、この事態を起こしているのは怪人達の可能性が高い。そして、怪人達は強い。

止めようと思っても、怪人達の妨害で簡単に行かないのは目に見えていた。

「で、でも」

「言つとくが桜を見捨てる訳じゃない。いるかもしれないからそこに行くんだ。」

それに今の状況だと、バラバラに行動するのは危険しかない。悪いが、一緒に来てもらうぞ」

それでも不満そうな顔をする士郎に士は真剣な眼差しで答えた。

行く先に桜がない可能性もあったが、それを言ってしまうと士郎

が1人で探しに行こうとするかもしれない。

怪人達の狙いがわからない状況では士郎を1人にさせるのは危険でしか無いために、仕方なくその辺りをぼかして答えるしかなかったのである。

もつとも、凜はそのことに気付いたのか、士を睨んでいたが。

「ともかく、急いだ方が良さそうだし、バイクで行くか」

「バイクでつて、バイクはフォトシヨップあるんだぞ。急ぐんなら、そのまま向かった方が良くないか？」

士の提案に雄介が待ったを掛けるようにそう反論した。桜の家からフォトシヨップまでは大体10分程掛かる。

急ぐ必要があるなら、バイクを取りに戻るより直接向かった方が早いのではと雄介は思ったのだ。

「カードに念じればバイクを呼べるはずだ」

「そうなのか？」

「しかし、人数を考えると1人余ってしまうぞ？ それは流石にま

ずくないか？」

しかし、思いがけない方法を士から聞いて雄介は感心したような顔をするが、その横で麗華は眉を潜めながらそんな指摘をしていた。士達は7人。バイクは3台。1台に付き2人乗るにしても、どうしても1人余ってしまう。

かといって1台に3人も乗るのは法律的にアウトなので、下手をすれば警察のお世話になる可能性もあった。

「まあ、なんとか誤魔化す方法があればいいんだが」

「しょうがないわね。こういう事に魔術は使いたくはないんだけど……」

「悪い、頼むわ」

呆れた様子で話す凜に、方法を考えていた士は軽く頭を下げていた。

そんなわけでバイクを呼び出した士達は凜の認識阻害の魔術を施された後、凜や麗華達を感じた魔力の元へと向かうのだった。

そうしてたどり着いた場所は柳洞寺と呼ばれる寺。

といつても、敷地内にバイクで入るわけにはいかないので、バイクを置ける場所に置いてから向かう事になったが。

中に入り、魔力が感じられる場所へと向かうと洞窟らしき入口へと着いていた。

望が不安そうな顔をしたものが入らないわけにもいかないので、結局全員で洞窟の中に入ることにした。

「なんだ……これは……」

「う……」

洞窟の暗い中を土が持つていた携帯のライトで照らしつつ奥へと進むと、怪しげな光に満たされた広い場所に出た。

なお、全くの余談だが、土の携帯は土郎や凜から見ると凄い物だったので、軽く驚いていたりするが。

ともかく、その場所にたどり着くと麗華と凜は眉を潜めてしまう。というのも、その場に満たされた魔力があまりにも濃密で、それ

いて不快な感じを受けたからだ。

そのせいで麗華も怯えた様子で麗華の背後に隠れてしまっている。

「さて、見るからに怪しい所に来たが」

「やはり、来ましたか」

辺りを見回していた土だが、聞こえてきた声の方に顔を向ける。

他の者達もそこへ顔を向けると、帽子とコートを纏った男と見知らぬ青年がそこに立っていた。

「あんたらは何者だ？」

「そうですね……あなた方が今まで倒してきた者達の同類……といった所でしょうか？ 隣にいる慎二君は違いますがね」

「同類ね……ようやく、普通に話せるのと出会えたな」

コートの男の返事に問い掛けた土は呆れたように肩をすくめる。

しかし、土郎と凜を除く全員の体がこわばる。なぜなら、コートの

男の言葉を信じるなら、男も怪人ということになるからだ。

「で、でも……どう見ても人……だよな？」

「人の姿になれるんだろ？」

怯えながらも疑問に感じていた望に士はため息混じりに答えた。

しかし、それでも望は納得がいかない。だって

「本当に……本当に怪人の仲間なの？　だったら答えて。なんで……

……なんで、世界を壊そうとするの？」

望は思わずそんなことを問い掛けていた。疑問だった。世界を滅ぼすということが。

なぜ、そんなことをするのか？　それが望にとって疑問だったのだ。

「だって、邪魔じゃないですか」

それに対し、コートの中の男は何を言ってるんだと言わんばかりに答える。

「邪魔なんですよ。私達が世界を支配するためには人や物、文明、それら全てが。

だから滅ぼし、無かった事にするんですよ」

「え？　あ、え？」

「まったく、普通に話せると思ったが……まともに話し合うのは期待しない方が良さそうだな」

「そうだな」

まるで当然と言わんばかりに話すコートの男だが、望は戸惑いを見せることしか出来なかった。

理解出来なかったのだ。邪魔だから滅ぼす。ただそれだけの理由に。一方で呆れたようにため息を吐きながらもベルトを装着する士の言葉に、麗華は同意しながらカードを構えていた。

「お、おい、士」

「雄介、こいつらは俺達がどうこう言おうと簡単に考えを変える気は無いと思うぞ。」

それとも何か？　黙ってこいつらに殺されるつもりか？」

「く……」

コート of 男を睨む士の言葉に戸惑いを見せていた雄介は悔しそうな顔をする。

雄介が戦う理由は誰かが傷付いて欲しくない為だ。その為には必ずしも戦う必要は無いと考えていた。

少なくとも雄介自身はそう考えていたのだ。

「俺だって、出来れば戦いたくは無いけどな。黙っていたって、あいつらはとんでもないことやらかすつもりだぞ？」

「ああ……そうだな！」

士の言葉に雄介は決意を秘めた顔でカードを構えた。雄介もわかつてはいた。コート of 男はやると言ったらやると。

それがとんでもないことであり、どのようなことをしても止めなければいけないのはわかってもいる。

その一方で、どうにかして穏便に止められないかとも思ってしまったのだ。

だが、コート of 男はそんな雄介の想いなぞ無視してやってしまうだろう。

それがわかったからこそ、雄介はどんなことをしてでも止めようと決意したのである。

「やるのですか？ 私達と」

「お前らが世界を壊すとかそういうのをやめてくれるなら、俺達も帰るんだけどな」

「やめる必要がありませんね。だって、邪魔なんですから」

「そういうのは俺としては困るんでな。止めさせてもらっぞ」

『仮面ライド』

士の返事に問い掛けた男は不敵な笑みを浮かべながら答える。

それを聞いた士は男を睨みながらベルトにカードをセットし

「変身！！」

『ダイケイド！！』

「変身！！」

『ターンアップ』



変身すると、後を追うように麗華と雄介も変身した。

「ふふふ、ここにのこのこと現れたことを後悔させてあげましょう。  
慎二さん」

「ああ」

『テラー』

その様子をなぜか笑いながら見ていたコートの男は慎二に声を掛けると、その顔に変化が現れた。

まるでステンドグラスのような模様が現れたのだ。しかも、変化はそれだけではない。

その模様が全身を包んだかと思うと、体の至る所にステンドグラスのような模様を持つクモのような怪人の姿になったのだ。

慎二も額にメモリを刺し、どこかの文明と思われる仮面と装束を纏ったような姿へと変わっていた。

その2人は姿を変えると共に、土達へと飛びかかってくる。

「望達は離れてる」

「う、うん！」

先程のコートの男 怪人のとのやりとりで戸惑っていた望であったが、土に言われて土郎と凜の手を引っ張って離れていく。

直後に剣となったケースで慎二の突進を受け止める土。雄介と麗華も怪人の突進を受け止めるのだが

「ふん！」

「つつ！ おわつ！？」

慎二に振り回されたかと思うとあっさりと投げ飛ばされる土。

「くっ！？」

「おわつと！ なんの！」

麗華と雄介も同じように弾き飛ばされるが、雄介はなんとか体勢を立て直して飛びかかる。

「かあ！」

「うわ！？」

だが、怪人が放った光弾が腹に当り、火花を上げながら吹っ飛び、

地面に倒れてしまう。

「うおおおおおー!!」

「く! くあ!?!」

その間に慎二の猛攻を剣などで受け流していた土であったが、捌ききれずによるめいた所を胸を殴られて火花を散らす。

そのまま突き飛ばされる形で倒れるものの、すぐさま立ち上がろうとしていたが。

「おわあ!?!」「くう!?!」

一方で、雄介と麗華も同じように苦戦を強いられていた。

「そんな……土さん達が……」

その光景に土郎は戸惑いを隠せなかった。

前回の戦いでは多少苦戦はしたものの、それでも怪人を倒してはい

た。しかし、今回の怪人と慎二は前回の怪人よりも別格に思える。というのも

「おりゃ!」

「ふふふ……は!」

「ぐわ!?!」

土に斬られる慎二だが、火花は散るものの傷を負っているようには見えない。

いや、何も無かったかのように立っていて、逆に土を大きく突き飛ばしていた。

圧倒的な強さに土郎もどうすれば良いかわからず、ただ黙ってみているしか出来なかった。

「あ、あれって……桜ちゃん?」

「「え?」」

が、何かに気付いた望の声に土郎と凜は思わず望が見ている方へと顔を向ける。そこには確かに桜がいた。

ただし、かなり高い位置に浮いた状態の艶のある黒い塊に両腕と両足を飲み込まれ、気を失った状態で。

「な、なによあれ!？」

「ああ、気付きましたか。彼女は祖父に面白い物を埋め込まれていましたね。」

それが私達には都合が良い物でしたので、利用させてもらったのです」

「お前達の強さの秘密は……そういうことか……」

驚く凛に怪人は自慢げに話し、そのことに麗華が立ち上がりながら舌打ちしそうな雰囲気を出していた。

「どういう……ことよ……」

「さあ？ 私が知るのはいそこまでです。実験台が何かにされたのではないのですか？」

「遠坂？」

震える声で問い掛ける凛に、怪人は肩をすくめて答える。しかし、そんな彼女の様子に士郎は訝しげになる。

良く見れば、悔しさをにじませているようにも見えた。なぜ、凛はそのようなことを聞くのかわからなかったからだ。

一方で凛は悔やんでいた。実を言えば、今まで桜の様子は遠目ながら見守っていたのだ。

時折つらそうな顔を見せるものの、普通の人とは変わらない様子を見せる桜の姿を見て安心していただけのだから

知らなかった。桜がそんなことになっていたなんて。もし、良く話し合えたのなら、何かしらに気付けたのかも知れない。

でも、それは出来無かった。だって、家同士の決まりで桜と会うことすらままならなかったのだから……

姉妹なのに……唯一、血の繋がった……でも、家同士の決まりで出来なくて……話せなくて……

そんなことになってるなんて、気付くことも出来なかった。そんな想いから、凛の中で後悔が渦巻いていく。

「なるほど……つまり、桜をなんとかすりゃ、お前らも何とか出来るってわけか」

「出来るとお思いですか？ 言っておきますが、無理矢理引き剥がそうとすれば、彼女の手足を引き千切る事になりますよ？」  
「そんな！？」

立ち上がる士の言葉に怪人が答え、その言葉に士郎は驚く。すなわち、このままでは桜は助けられないことになる。このことに士郎も悔しさをにじませていた。

どうすればいいのか、本当にわからない。桜を助けたくても、その手段が無いから  
士郎と凜はそう考えていた。そう考えていたのだ。

「関係無いな」

「なに？」

「え？」

しかし、士は剣となったケースを向けながら言葉を返す。

このことに怪人は訝しげに首を傾げ、凜と士郎は戸惑い気味に声を漏らした。

関係無いとはどういうことなのか？ まさか、士は……凜と士郎はそう思ったのだが

「無いわけじゃ無いんだろ？ だったら、その方法を探す。見つけたら、その方法でやってみる。簡単だろ？」

「は！？ 本当出来るとお思いなのですか！？ あなたは戦う力はおありのようですが、彼女を助ける力があるんですか？」

あっさりとした様子で答える士の言葉に凜と士郎は驚愕した。

確かに士の言うとおりではある。かといって、言葉で言うほど簡単な物では無い。

怪人もそのことに馬鹿にしたような態度を取っていたが

「ようはやりようだろ？ 方法が1つしかないなんてあり得ないし、絶対なんて物もありえない。」

やりようがあるなら、それをやってみるまでだ」

しかし、士は意に介した様子も無く、剣となったケースを肩に抱えながら答える。

その光景に土郎は思わず眼を見張る。その言葉は土郎にとって天啓を得たような気持ちだった。もしかして、自分の目指す物がそこにあるかも知れない。そう思えてしまう。

一方で凜は驚愕する。土が言っていることは無茶苦茶だった。確かに言わんとすることはわからなくもない。しかし、実行するならば困難を伴う。

それにこの場で桜を助けるなんて無理だ。凜はそう考えていたのだ。この時、怪人と慎二は自分達の優位から余裕を見せていた。どのみち、土達に勝ち目は無い。

そう確信していたのだ。だから、話に乗って戦いを止めてしまった。しかし、この場にはいたのだ。桜を助けるきっかけをつかめる者が

『お兄様！ 桜さんの穢れを抜つて！』

麗華の力の核となつている麗葉は気付いたのだ。桜を取り込んでいるのは人々の悪意 穢れだと。

それを抜えれば、桜を助けられる。そう考えて、叫んでいた。

「ふむ、気付きましたか。ですが、それをどうにかすることが出来るのですか？」

麗葉の叫びにも余裕を見せる怪人。知られた所でどうにも出来ないと考えていたのだ。

確かに麗華と麗葉は退魔の類は出来ない。2人は出来ないが、出来る者はいた。

「なるほど……なら、こいつの出番だ」

その者である土はケースから1枚のカードを取り出し

「変身！」

『フォームライド 響鬼、紅！！』

ベルトにセットすると全身が炎に包まれ しばらくしてその炎が消えると、その姿を変えていた。

見た目は麗華の呪いを解いた響鬼に見える。しかし、その全身は炎

のように真っ赤になっていた。

「姿を変えたからどうだというのです？」

「それは試してみればわかるさ」

土の変身にも余裕を崩さない怪人に土はケースを腰に戻し、音撃棒と呼ばれる先端に鬼のような顔の赤い石がはめ込まれた2本の棒を両手に持つ。

「わからない人ですね。慎二さん、やってしまいなさい」

「おお！」

呆れたといった様子の怪人の指示に慎二は突っ込んでいく。

それに対し、土は2本の棒を回転させてから構え

「はあ！」

「おぐ!?!」

その2本共を慎二の腹に叩き込み、よろめかせた。

「く、くそ！」

「おっと！」

「ぐお!?!」

それでもすぐさま殴りかかる慎二だが土に躲され、お返しとばかりに頬に叩き込まれた棒にまたもよろめかせた。

「なに？」

そのことに怪人は訝しげな様子を見せる。

慎二は最高とも言える力を与え、更には桜からの力のバックアップまで与えている。

普通の攻撃では慎二に通じるはずが無いのだが

確かに怪人の考えるとおり、普通の攻撃では慎二には通用しなかつただろう。

しかし、慎二の属性が今の土とは相性が悪かった。

響鬼は音撃と呼ばれる浄めの音を攻撃として用いる。

これは響鬼が戦っていた相手が、そうしなければ倒すのが難しかったことなどが理由だ。

そして、慎二の力の元となっているのは『テラー』すなわち、恐怖。

人の負の感情とも言われる物だが、それに音撃が効くかは言及は難しい。

しかしながら、音撃は負の要素を持つ相手と戦うために用いられていたのは間違いない。

『テラー』は負の要素を持ち、音撃はそういった相手に有効だった。今回はそういった要員が重なったことで、士の攻撃が慎二に通じたのである。

「どういうことだ？ くっ！」

「私達を忘れてもらっては困る！」

「そつだ！」

予想外のこと戸惑う怪人であったが、麗華と雄介の猛攻の相手をせざるおえなかった。

「くう！？ 馬鹿な！ ボクは……ボクは力を手に入れたんだぞ！？  
なのに、なんでこんな雑魚にやられるんだ！？」

「お前、その力のことを考えたことはあるのか？」

「なに！？」

一転して押され気味になった慎二は信じられないとばかりに怒り狂い、士の言葉に思わず睨み返し

「力つてのはな、ちゃんと考えて使わないと、他人どころか自分の身も滅ぼす事になるぞ」

「う、うるさああああああい！！？」

「やれやれ……だな！」

「ぐわああああ！！？」

言われて激昂し突っ込んでくる慎二であったが、指摘した士のバツトを振るように2本の棒を腹に叩き込まれて吹っ飛び

「がは！？」

桜の横にめり込むような形で激突した。

その間に士はケースから1枚のカードを取り出し

『ファイナルアタックライド ヒ・ヒ・ヒ・響鬼！！』

「はあああああああ」

ベルトにセットしてから構え

「はあ！」

慎二へと向かい跳び上がる。それと共に慎二と桜の間に炎を象つたマークが浮かび上がり

「はあ！！」

それを土は2本の棒で叩く。叩き続ける。まるで祭りばやしの太鼓のように

「ぐわああああああああああ！！！！？」

その土の行為に慎二は苦しみ、桜を取り込んでいた黒い塊にヒビが入っていく。

「はあ！！！」

「うわああああああ！！！！？」

やがて、最後とばかりに土が力強く叩くと、慎二は悲鳴と共に体が碎けて元の姿に戻り、桜も黒い塊が碎けたことで落ちようとしていた。

「土郎！ 桜を頼む！」

「え？ あ、はい！！？」

その光景を凜と望と共に呆然と見ていた土郎であったが、土の叫びに我に返った。

確かにあのままでは桜は落ちてしまふ。もっとも、土郎はそれを考える間も無く、駆けだしており

「おわあ！？」

「う」

間一髪、倒れながらも桜を受け止めることが出来た。

その間に土は肩に慎二を肩に担いで地面に降り立っており、その慎二の額からメモリが飛び出て碎け散っていたが。

「さてと……土郎、それが人を助けるって事だ」

「え？」

ふと、慎二をゆっくりと下ろした土の言葉に土郎は訝しげな顔をする。

確かに桜を助けたと言えば助けたのだろうか



「人を助けるってのはな、最初から最後まで面倒を見なけりやならないのさ。」

助けたつもりではいさようなら、なんて後にまた襲われたりとかするかもしれないからな。今の桜はそういう状態だ」

「あ……」

土に言われて、土郎は思わず自分の上に被さる桜を見てしまった。良く理解は出来なかったが怪人の話を聞く限り、桜はひどい目にあっていたようだった。

土の話を聞くと、またそういうことになるのか？ と、土郎は考えってしまう。

「まあ、この後どうなるかなんてはわからないが、少なくとも側で見守ってやれ。」

すぐにでも助けられるようにな。それが人を助ける方法の1つだ。

あ、しつこいようだが、だからといって1つにやり方にこだわるのは馬鹿のすることだぞ？

同じようなことに見えてもやり方が違うってのは、どんなことにもあり得ることだからな」

デイケイドに戻りながら話す土の言葉を、土郎は身を起こしながら聞き入っていた。

土郎はこれまで人を守る、助けることが大事なのだと思っていた。

しかし、土にそれだけではダメなのだと言われ、真剣に考えてしま

だつて、桜をこの場で助けた人の言葉だったのだから

「おわ！？」「くう！？」

「貴様あ！？」

そんな時、雄介と麗華を突き飛ばした怪人が怒り狂った様子を見せており、そのことに土は体を向けていた。

「貴様！　なんてことを！　この世界を壊す力を壊しやがって……

なんてことしてくれたんだ、この破壊者！？」

「破壊者？　違うな、俺は」

怒り狂う怪人に土はケースを銃に組み替えつつ

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ」

「ふざけるなあああああ!!?」

右手の人差し指を向けながら答えるが、そのことで更に激昂した怪人は突っ込んできた。

それでも土は慌てた様子も無く、ケースから1枚のカードを取り出してベルトにセットし

『アタックライド プラスト!!』

「ぐおおおおおお!!?」

光弾を連発して怪人に当てるが、怪人は多少よろめきながらも突っ込んでくる。

「ぐあ!?!」

そのまま体当たりしようとした怪人だったが、跳び上がった土に背を蹴られた事で地面に倒れてしまう。

跳んだ土はそのまま雄介と麗華の所に着地し、ケースから2枚のカードを取り出していた。

「さてと、このまま付き合ってやる必要も無いからな。さっさと終わらせるぞ」

「ああ!」「そうだな」

土の言葉にうなづく雄介と麗華。その後土は2枚のカードをベルトにセットし

『ファイナルフォームライド ク・ク・ク・クウガ!! ブ・ブ・

ブ・ブレイド!!』

「はあ!?!」

「ん……ん?」

その光景に土郎と凜は驚愕し、その声で桜は目を覚ました。

まあ、雄介が人ほどの大きさのクワガタに、麗華は巨大な剣になったのを見たのだから、初めて見る2人が驚いたのも無理もないが。

『ファイナルアタックライド ク・ク・ク・クウガ!! ブ・ブ・ブ・ブレイド!!』

「は！」

その間に士は更に2枚のカードをセットしてから巨大な剣となつた麗華を手に取り、クワガタとなつた雄介の上に乗る。

「行くぞ、雄介、麗華」

「ああ！」「さつさと終わらせてくれ！ この体勢はキツいんだ！」

士が声を掛けると雄介の返事と麗華の訴えが聞こえ、その直後に怪人に向かって飛んでいく。

その勢いは凄まじく、カードの力で光を纏つた3人はさながら光の矢となつて飛んでいくように見えた。

「く、く、来るなあああああああああ！！？」

立ち上がった怪人は逃れようとするのだが

「「「おおりやあ！！」「」」

「があああああああああ！！？」

間に合わず、3人のかけ声と共に袈裟斬りされてしまった。

その後、雄介が宙返りすると麗華と共に仮面ライダーの姿に戻つて、士共々地面へと着地した。

「く、く……が……が……ふ、ざける、な……こんなこと、で……我らが目的が……」

こんな奴らに……やられるはずが……があああああああああ！！？」

苦しみながら斬られた傷を手で押さえ、もう片方の手を士達へと向ける怪人。

だが、断末魔と共に倒れ、大きな爆発の中へと消えていくのだった。

「やれやれ、これで終わったかな？」

「そうであつて欲しいな。あんな相手と早々戦いたくは無い」

「まったくだ」

士の言葉に麗華はため息を吐きそんな雰囲気ですぐ、それに同意するように雄介がうなずく。

そんな3人の様子に望は苦笑していたが。

「なんて……ことしてくれたんだよ……」

が、聞こえてきた声にみんなが振り返る。

その先にいたのは砕けたメモリの前で膝を付き、うつむいている慎二の姿であった。

「なんて……ことしたんだ……ボクは……ボクは……魔術師になりたかったのに……」

「なら、なればいいじゃないか」

「なれないんだよ！？ ボクには魔術回路が無いんだ！？ それが無いボクは魔術師にはなれないんだよ！？」

土の返事にうつむいていた慎二は顔を上げ、涙を流しながら泣き叫んでいた。

この時の土達は知らなかったのだが、この世界の魔術師には魔術回路という物が備わっている。

それは魔力を生み出す機関であり、魔術を行使するための文字通りの回路となる物なのだ。

しかし、魔術師の家系ながらそれが無い慎二は祖父から無能のレッテルを貼られてしまう。

魔術回路が無い。ただ、それだけで……それが慎二への地獄となっていた。

「魔術回路つてのがなんなのかわからないが、それが無いと魔術を使えないってわけじゃないだろ？」

「何言つてんのよ！？ 魔術回路が無けりゃ、魔術が使えるわけ無いじゃない！？」

しかし、土はそれがどうしたとばかりに聞いてくるのだが、そのことに凜が怒鳴ってきた。

当然だ。魔術回路が無ければ、魔術は使えない。それは魔術師にとつての常識なのだから。

だが

「詳しく聞いたわけじゃないが、俺達が前にいた世界の魔法使い達はそんなのが必要だとは言ってなかったぞ」

「え？」

「ああ、魔法の発動体……例えば杖とかだが、それがあれば一応使えていたな」

士から次に出た言葉に凜と慎二は顔を向け、その話に同意するように麗華はうなずいていた。

麗華も魔法はある程度しか知らないが、少なくとも魔術回路が必要であると聞いた覚えはなかったのだ。

「簡単じゃ無いだろうが、そんな物が無くても魔術が使える方法があるかもしれないだろ？」

「で、でも……」

士の意見に凜は反論しようとして、ふと考えてしまう。

よくよく考えたと確かに魔力を持つという点では魔術回路は必ずしも必要では無い。

例えば魔力を込めた物を持つなど、そんな単純な方法でいいのだ。

むしろ、その魔力を扱うとなると別問題だが、そういった方法で魔術を使えるかもと考えてしまったのである。

「あるのか？ そんな方法が？」

「さてな？ 俺達は専門家じゃないし、どうかはわからんよ。でもな、その方法を探してみるのも手だとは思っぞ？」

士はあっさりと答えるが、問い掛けた慎二は思わず考え込んでしまう。

慎二は魔術師にはなれなかったが、自的に知識だけは学んでいた。魔術師になる方法を模索するためだが、結局はそれでは見つけることは出来なかった。

でも、と慎二は考える。それは魔術師を基本にしたからではないか？ 魔術という物を調べてみれば、もしかしたら見つかるんじゃないか？ 士の言葉でそう思えるようになってきたのだ。

「えっと……あの……終わったのです、か？」

「ん？ 一応、な」

と、慎二達の様子に戸惑いながらも問い掛ける桜に士が雄介や麗華達と共に変身を解きながら答える。

その時、凜がなぜ顔を背けたのを土は見ていたが。

「どうした？ 桜に何かあったのか？」

「な、なんでも」

「無いようには見えないな」

顔を背けながら答える凜に、問い掛けた土は呆れた様子でため息を吐いていた。

凜の様子を見れば、何かあると言ってるような物だからだ。

「そういや、昨日からお前さん、桜を気に掛けていたようだったが？もしかして、2人は前々から知り合いだったんじゃないのか？」

「え？」

土の言葉に土郎は驚いたような顔をしていたが、凜と桜はあからさまに反応してしまう。

このことに土はやはりかと思ひ、またため息を吐いたが。

「どんな関係は知らんが、とりあえず話し合っくらはしてもいいんじゃないのか？」

「出来るわけ……無いじゃない……だって……だって、家同士で決まりで……桜と会っっちゃダメだって」

「んな決まり、どぶにでも捨てる」

「へ？」

泣きそうになる凜だが、問い掛けた土の返事に桜と共に目を丸くする。

言い出した土は腕を組み

「大体、その決まりって、お前達も同意したのか？」

「そ、そんなわけないでしょ！？」

「だったら、別にいいじゃないか。見つかったらやばいってんなら、隠れて話すとかもありだしな」

「いや、それは流石にまずいんじゃないかな？」

凜の反論に腕を組む土は堂々とした態度で答える。

しかしながら無茶でもあるので、雄介のツッコミが入ってしまったが。

「まあ、決まりだとかしきたりだとか、そういうのは無視していいわけじゃない。

かといって、こだわりすぎるのも問題だ。今のお前達みたいにな」

土の言葉に凜と桜はうつむいてしまう。

確かに自分達は……桜は祖父が怖かったこともあったが、家同士の決まりにこだわりすぎていた。

だから、話すどころか直接会うことすら無かったのだし。

「話し合えば、全てが解決するってわけでもないが……それでも気持ち的には楽になるんじゃないか？

少なくともお前達にとっては、な」

土に言われて、凜と桜は互いの顔を見つめ合った。

確かに昨日も他人行儀であったとはいえ、話し合えて嬉しかったのは事実だ。

そういつたことを考えれば、自分達は家同士の決まりにこだわりすぎていたのだろう。

「ま、考えが堅すぎるんだよ。たまには新しいことに目を向けるのも必要だぜ」

「新しいこと……か……」

土の言葉に凜は考える。今の話で自分の考えは古すぎるのだろうかと思えてしまった。

確かに魔術師は懐古主義的な面もある。全ての魔術師がそうではないだろうが、少なくとも自分はそんな感じがしてしまった。

なら、どうするべきなのか？ 凜はふとそんなことを考え込んでしまふのだった。

## 第9話『伝える事』（後書き）

そんなわけでやっとのことこの世界での戦いが終わりました。

というか、前回から1ヶ月……リアルでの仕事の執筆があったとはいえ、掛かりすぎですね。

そのせいか、今回はしよりすぎてる感も否めない……要勉強だなあ……ここら辺は……

さて、次回は土達の帰還。そして、新たな世界へ行きます。

新しい世界はどこなのか？ 良かったら予想してみてください。

ちなみにヒントは第二期が終わった原作ありのアニメです。

ではでは、次回でお会いしましょう。



## 第10話 『魔法から魔術、そして科学へ』

あの洞窟から出た土達はそのままフォトショップへと向かう。  
というのも

「本当に……帰ってしまうんですか？」

「ああ、俺達がこの世界でやることは終わったみたいだしな」

不安そうな士郎に土はあっさりとした様子で答えた。

そう、土達は元の世界へ帰る為にフォトショップへと戻り、土郎達はその見送りとして来たのだ。

「あら、人を助けるのは最後まで面倒を見なくちゃいけなかったんじゃないかしら？」

「俺達が出来るのはここまでってわけじゃないが、他の世界にも行かなきゃならない。」

あんな奴らの好きにさせるわけにもいかないしな」

「そう……ですね」

凜の皮肉にも土は気にした様子も無く答え、土郎はそのことに沈痛な面持ちでうなずいた。

あの怪人達が言っていた理由を、土郎としても認めるわけにはいかなかった故の同意である。

「まったく、忙しいことね」

「そうだな。ま、俺達が大変なことにならないようにするには仕方が無いが」

呆れた様子で凜に土は肩をすくめながら答えた。土とて好きこのんでやってるわけではない。

しかし、このままでは自分達の所まで危険なことが起きることになる。

それを阻止するために土達は戦っているのだ。

「あ、あの……また、会えますか？」

「さてな。でも、この世界にまた何かあれば、来ることになるかも

しれないな」

少し怯えながらも問い掛ける桜に士はこれまたあっさりした様子で答えるが、内心そんなことはあつて欲しく無いとも考える。

自分達がこの世界に来るということは、怪人達に狙われてることを意味するのだから。

「それじゃ、そろそろ行くか」

「ああ、そうだな」

「あ、あの……土さん、俺……やっぱり、正義の味方を目指してみます！」

士の言葉に雄介がうなずくと、士郎が意を決した様子でそんなことを言い出す。

実を言えばまだ悩んでいたのだ。正義の味方とはどんな者なのかを。それでも目指してみたかった。士達の戦う姿を見て、自分なりの正義の味方に。

「別にいいんじゃないのか？　ちゃんとどうするのかを考えてやるっていうのならば」

「あ、はい！」

「だが、2つだけ言っておく。正義ってのは人によって違つて」と。

それと自分のしてることは正しいとは思わないこと」

「は？」

士の返事に嬉しそうな顔をする士郎だったが、次に出た言葉に思わず首を傾げてしまう。

正義が人によつて違つたというのはなんとなくわかるのだが、自分のしてることが正しいと思うなどはどうということなのか？

それがまったくわからなかったのだ。

「人の数だけ考え方がある。正義もまたしかりつてことさ。

後、自分のしてることが他人から見たらどう見えるのか？　それを考える。

でなければ、時には人の迷惑にしかならないこともあるからな」

「は、はあ……」

士の言葉に士郎は戸惑いながらも返事を返す。  
といつても、この時は士の言葉の意味をちゃんと理解してなかったが。

「そんじゃあな。がんばれよ」

「あ、はい！」

「士さん達もお元気で」

振り返り、手を振りながらフォトショップへと入ろうとする士。

望や雄介、麗華と麗葉もそれに続く所に士郎が慌てた様子で返事をし、桜も右手を振って見送っていく。

慎二も事情を聞いてないので良くわからなかったが、釣られるように手を振っていた。

「士……ありがとうね」

「礼はいらない。勝手にやったことだからな」

凜の言葉に士は答えてからフォトショップのドアを閉める。

それと共にフォトショップは光に包まれ 次の瞬間には建物その物が消えていた。

「ほ、本当に……異世界から来たんですね」

「そうみたいね」

その光景に呆然とする桜に、凜はため息混じりに答えた。

自分達以外の魔術師がこの光景を見たらどうなるか……それを思わず考えてしまったからだ。

ちなみにその想像は全く持って嬉しくない物だただけ答えておこう。

「さてと、これからやることはたくさんあるわよ。今回のことの後始末に士郎と桜の弟子入りとかね」

「弟子入りって……誰に？」

「私に決まってるでしょ？ 冬木の魔術師は実質私だけなんだから。

それに士郎は未熟すぎる。そんなの見過ごすわけにはいかないのよ」  
「ボクはどうすればいいんだい？」

戸惑う士郎に話していた凜は腰に両手を当てながら答える。

後始末の方は色々と面倒だが、自分達の保身を考えてと手を抜くわけにはいかない。

それに昨日聞いた限りではあるが、士郎は魔術師として……いや、見習いとしても未熟すぎる。

まあ、士郎の考え方は魔術師としてはあまりにも異質ではあるので、その呼び方もどうかとは考えるが。

良くて魔術使いだろうか？ などとも考えてしまう。

そんな中で慎二は思わず問い掛けてしまったが

「そうね。今回のことで私も色々と考えさせられたし、共同研究ってのはどう？」

魔術回路無しで魔術を行使するってのも面白そうだしね」

ウインク混じりに凧は答える。士の言葉で色々と考えさせられたのは事実だ。

だから、魔術回路無しで魔術を行使する方法を探すのも面白いかもと考えた。

ただ、実現は難しいだろう。いや、無理かもしれない。でも、やってみるのもいいかもしれない。

士の言うとおり、絶対なんて物はないのなら

「それにしても、士達ってもしかしたら守護者だったのかもね」

「守護者……ですか？」

「ええ。ただ、ガイアともアラヤとも違う人の為の守護者……『仮面ライダー』という名の、ね」

首を傾げる桜に思わずそのこと漏らした凧はウインク混じりに答えた。

守護者とは士郎達の世界に存在する、この世界の危機に動く存在のことだ。

ただ、凧が言うガイアやアラヤは本当に危ない時でしか動かないとされる。

それ故にそこにいる者達は手遅れだった場合もありえるのだ。

そんな者達とは違う、本当に人の為の守護者。それが士達ではない

か？

凜はそう考えてしまふのだった。

そんな中で士郎は、また士達に会えるといいなと考えていた。

その考えは数年後に叶えられることとなるのだが

さて、元の世界に戻った士達はいつも通りの生活を送る。

変わったと言えば、麗華が小学校に行き始めたことだろう。

彼女にとっては初めての経験だったようで色々と戸惑っていた。

それは士達がアドバイスすることで協力していたが。

そんなこんなで1週間後。新たな世界へ行く日となった。

「次はどんな世界なのだろうな？」

「とりあえず、魔法使いとか魔術師とかは勘弁して欲しい所だがな」

「あはは……そうだね……」

麗華の言葉に士がため息混じりに返すと、思わず同意する望や雄介は苦笑していた。

確かに前々回、前回とそういった関係だったのもあって、食傷気味なのは事実だが。

そんな時に垂れ幕が落ちる。淡い光を放つ垂れ幕には近代的な都市が描かれていたのだった。

「待ってていてるでしょうが!？」

近代的な都市の中を栗色のショートカットにどこかの制服を着た少女が怒った顔で何かを追いかけていた。

と、その少女が右手から電撃を放つ。その電撃の先にいたのは黒いツンツン髪をしたこれまた制服らしき物を着た青年。

その青年が慌てて振り返って右手を突き出すと共に電撃が突き刺さ

るものの、右手に触れた瞬間に電撃は最初から無かったかのように消えてしまう。

「くっそあゝ!? 不幸だあゝ!?」

しかし、青年はそのことを気にする間もなく、振り返って駆け出してしまっただが。

「やれやれ、今回は未来世界って所かな？」

どこか安心したような顔をする土だが、この時はこの場にいた者達も含めて気付いていなかった。

この世界には魔法使いや魔術師に近い存在がいることに

## 第10話 『魔法から魔術、そして科学へ』（後書き）

というわけでFate編はこれにて終了です。

次は見ての通り『とある魔術の禁書目録』の世界。

前回のあとがきでクイズを出しましたが、ご感想にて正解なされていた方がいました。

というか、久々に感想を頂きました。ありがとうございます。

それと今回は短かったので早めに出せましたが……次回も早めに出せるといいなあ……

さて、次回はその世界で士達はどんな出会いをするのか？ そんな話となります。

ちなみにインデックスは今回は出てきません。それ以前のお話ってことで

そんなわけで次回でお会いしましょう

## 第11話『2つが交差する前の世界』

店内から外の景色を眺める土達。そこに広がるのは近代的な都市の光景であった。

「なんか、俺達の世界とあんまり変わらないな？」

「まったく違ってわけでもなさそうだがな」

雄介の感想に土は外の景色を眺めつつそんなことを返す。

良く見るとポリバケツのような円筒形の機械がいくつもせわしなく動いているのが見えた。

「ロボット……かな？」

「たぶんな。しかし、茶々丸を見た後だと陳腐に見えるのは俺だけか？」

「あ……わからなくもない」

望の疑問に土が答えるが、その話を聞いて麗華は苦笑する。

確かにエヴァンジェリンの世界にいた茶々丸を見ると、あの円筒形の機械がおもちゃに見えてくる。

良く考えると茶々丸みたいなのを良く造れたなと思うのだが……そこはあえて考えないことにした。

「お兄様、これからどうするの？」

「ま、外に出るしかないな。どんな世界か確かめなきゃならんし」「そうなるよなあ」

麗華の問い掛けに土が答えると、雄介も同意するようにならず。前回、前々回もそうであったように、この世界がどのような所なのか確かめなければ始まらない。

そんなわけで叶を残して都市へと出た土達であったが

「なんか、学生が多くないか？」

「麻帆良みたく、学校が多い所なのかもな」

辺りを見回す雄介の疑問に土は気にした風も無く答えた。

麻帆良も学園が中心となった所と聞いていたので、そのような所な



のかと思ったのだ。

そんな風にしばらく都市を歩き回る土達。その結果、ここが学園都市と呼ばれている名の通りの都市であることがわかった。それと

「なんか、すごいハイテクっぽい感じがするね」

「確かにな」

望の言葉に土も同意を返す。

都市としては土達の世界の都市とあまり変わりないように見える。しかし、技術の方は土達の世界よりも進んでいるように思えた。現に携帯にしても、土達が持っている物より高性能であったし。そんな感じで都市を見回っていた土達であったが、いつの間にも人気の無い広い場所に来ていた。

「お兄様、あれ」

ふと、何かに気付いた麗葉が指を差したので土達が顔を向けるとそこには青年と少女がいた。

少女の方は栗色のショートカットに可愛らしくも勝ち気な表情を見せ、どこかの制服を着ている。

青年の方は黒いとんがった感じの髪をしており、顔立ちは普通といった所だろうか？ しかし、なぜか困ったような表情をしていた。

良く見るとその2人以外にも人はいた。

その2人から少し離れた所に立っているのはショートカットの少女よりも少し小柄で栗色の髪をツインテールにしている少女。

その少女もショートカットの少女と同じ制服を着ているが、なぜか呆れた様子で2人を見ている。

なお、可愛らしい顔立ちであったというのは述べておく。

その者達を見て、これはどんな状況なのかと土達は思った。

良く見ればショートカットの少女は青年を睨んでいるように見え

たかと思うと右手を向けていた。

なんだと土達が思う間も無く、そのショートカットの少女は向けた右手から電撃を放ったのである。

その電撃は青年へと襲いかかるが、青年は少し慌てながらも右手を向け、同時にその右手に電撃が突き刺さる。

すると電撃は何事も無かったかのように消えてしまった。

「な、なに、あれ？」

「まったく……魔法やら魔術やら関係の無い世界に来たと思ったんだがな」

今の光景に雄介と共に目を丸くする望だったが、士は呆れたようにため息を吐いた。

魔法や魔術とは関係の無い世界にこれだと思った矢先に、それっぽい力を見せられたのだ。

食傷気味だった士にとって呆れてしまう光景だったのである。

「しかし、今のは魔力や気を感じなかったのだが」

「まったく、相変わらずどんな能力なのよ。私の電撃を無力化するなんて」

しかし、麗華は疑問に感じていた。今の電撃からは魔力も気も感じられない。

どんな力なのかと疑問に感じていた所で、ショートカットの少女が青年を睨みながら問い掛ける。

能力ということは何かしらの力か？ と、ショートカットの少女の言葉を聞いて考える士だったが、そこであることに気付いた。

青年が動かないのだ。電撃を防いでからまったく。そのことに士は疑問に感じた。

ショートカットの少女の言うとおり、あの青年も先程の電撃を何かしらの能力で防いだのだろうか。

そこまではいい。ただ、一見すると戦っているように見えるが、睨んでいるのはショートカットの少女の方。

青年は遠慮しているというが、引いているというが、そのように見える。

となれば、ショートカットの少女に何らかの理由で襲われているのか？ とも考えるが、それでも反撃しないのはおかしい。

何かしらの能力を持つてるなら反撃は出来そうなのが。  
そこまで考えて、土はある推測を立てた。あの青年はもしかしたら

「なあ、いい加減に、つて、へ？」

「え？」

青年が諦めたようにため息を吐いてから何かを言おうとした時、  
土がその前に来ていたことにショートカットの少女と共に軽く驚い  
てしまう。

「なによ、あんた？ そいつの仲間？」

「少し、黙ってる」

「う……」

睨むショートカットの少女だったが、土に睨まれたことに思わず  
怯えてしまう。

怖かった。不良に睨まれても何とも思わなかった自分が、どことも  
知れない男に睨まれただけなのに。

それ故にショートカットの少女は思わず自分の体を抱きしめてしま  
う。

そんなショートカットの少女の様子に青年やツインテールの少女は  
訝しげな顔をしていたが。

「おい、お前」

「は、はい？」

「もしかして、あの子に攻撃出来ないんじゃないか？」

「う……」

土にいきなり声を掛けられて戸惑う青年であったが、次に来た問  
い掛けに凶星だったという顔をしてしまう。

それを見て、土はやはりかため息を吐いた。

青年の能力がどんな物かはわからないが、もしかして防ぐことしか  
出来ないのでは？

もしくは性格的にショートカットの少女を攻撃出来ないのでは？  
そう考えたのだ。

で、結果は見ての通りというわけである。

「とりあえず、なんでこんなことになってるか、話だけでも聞かせたいんだがな？」

「ちよつと！ 攻撃出来ないってどういうことよ！？」

「それを聞くんだよ。とりあえず、ここで話すのもなんだから、場所を変えよう」

どうやら、青年の反応を見ていたショートカットの少女が怒り出したが、話していた士はこのことのために息を吐く。

厄介なことに首を突っ込んだかと後悔したが、関わってしまった以上このままというわけにもいかない。

とりあえず、話し合わせようと思い、そう提案したのだった。

そのことにショートカットの少女は文句がありそうな顔をしながらもうなずき、青年もこの状況を何とかしたかったようで同じようにうなずく。

「いいみたいだな。そっちの嬢ちゃんはどうちかの知り合いか？」

「ええ……お姉様の付き添い……みたいなものですわ」

「そうか。悪いが付いてきてもらえると助かる」

ツインテールの少女の返事を聞いて、そう言い放つ士。

ツインテールの少女も不承不承ながらもうなずき、青年とショートカットの少女と共に移動することとなった。

で、目的の場所に着くまでの間、全員は簡単な自己紹介をした。

青年は上条 当麻。ショートカットの少女は御坂 美琴。ツインテールの少女は白井 黒子。

で、歩いている間の様子で美琴はなにやら当麻を目的の敵にしており、黒子も別な意味で当麻を目的の敵にしてるらしい。

この様子に士はどうしたもんかと思っっている間に目的の場所であるフォトショップへとたどり着いていた。

「こんな所に喫茶店なんてありましたかしら？」

「今日来たばかりだからな」

「来たばかり？」

首を傾げる黒子に土はあっさりした様子で答えるが、美琴は当麻共に首を傾げていた。

まあ、いきなり異世界から来ましたと言っても信じられないだろうから、誤魔化しただけなのだが。

とりあえず、当麻達を思い思いの席に座らせた後、話を聞くことになったのだが

「1つ聞いておきたい。お前はチンピラか？」

「なんでよ!？」

「いや、当然の反応だと思うぞ？」

呆れた様子で問い掛ける土に怒り出す美琴であったが、麗華も呆れた様子で土の言葉にうなずいていた。

話を要約すると、ある日偶然であった際に美琴の電撃を当麻が防いだのがきっかけらしい。

なお、当麻の右手は『幻想殺し（イマジンプレイカー）』という物で、それが異能であるならば右手で触れるだけで消せるという。

美琴の電撃を消したのもこの能力故であり、これを聞いた美琴はなにやら舌打ちしそうな顔をしていたが。

話を戻すが、このことを知らなかった美琴は以来当麻を目の敵にし、ことあるごとにケンカという名の電撃を喰らわせてるそうなのだ。

これを聞いた土と麗華がチンピラかという感想を持ったとしても仕方なかっただろう。

なお、雄介や望も同じ感想を持っていたのを述べておく。

「だって、なんか悔しかったし」

「だからって、電撃を喰らわせるのはどうかと思うぞ？」

それにお前、自分の力がどんな物なのかわかって言ってるのか？」

「当たり前じゃない。でなきゃ、能力なんて使えないわよ」

「違う。そんなことじゃない」

口をとがらせる美琴であったが、問われたことに何言ってるんのかという顔をする。

しかし、問い掛けた土は真剣な顔をし

「自分の能力が人殺しの力だって自覚はあるのか？」

「へ？」

士の言葉に美琴だけでなく、当麻も目を丸くしていた。

黒子は若干驚いていたものの、すぐさま冷静さを取り戻していたが。

「な、何言ってるのよ……私がそんなことするわけ」

「例え、お前がそのつもりでなくても、お前の能力は人を殺せるんだよ。」

それに事故って言葉を知ってるか？ お前は手加減したつもりでも、そうなってしまう場合もあるんだ。

というか、あの電撃をまともに受けてたらどうなるよ？」

「運が良くても重傷だろうな」

戸惑いながらも反論しようとする美琴であったが、呆れた様子の士と麗華の言葉に何も言えなくなる。

確かに士達がいた所で放った電撃の威力は人を殺せるほどの威力があった。

その時は当麻にはこれくらいの威力でなければ通じないと思ったからなのだが、今になって思うと身震いしてしまう。

もし、当麻がまともに喰らっていたら

「なんで、こいつにそこまでくだわるかはわからんが、こいつにしていることがなんなのかわかってやってるのか？」

士に聞かれるが、美琴は答えることが出来ない。

本音を言えば見返してやろうとか、そんな気持ちだった。

でも、ただそれだけで……そこまで傷付けようと思ったわけじゃない。

けど、自分が今までやってきたことを思い返すと、そうだとは言えなくなってくる。

「く！」

「おい、ビリビリ！」

いたたまれなくなつて、フォトショップを飛び出す美琴。

呆然と見ていた当麻がそのことに気付いて慌てて追いかける。

そんな光景を黒子はため息を吐きながらも見送っていた。

「追いかけないのか？」

「そうした方がよろしいのでしょうか。あの類人猿に任せるわけにもいきませんし。」

でも、これはお姉様にはいい薬なのかもしれませんね」

「いい薬って？」

士の問い掛けに肩をすくめながら答える黒子だが、その言葉に雄介は訝しげな表情を見せていた。

その問い掛けに黒子は外の景色に顔を向け

「お姉様は大変な努力をなさって、『レベル5』にまで能力を高めた方なのですよ。」

それは尊敬するのですが……そのせいなのか、お姉様は厄介ごとに良く首を突っ込まれる方です……」

「力に固執しているのだろうか？ それでそのようなことを」

「いや、自分で何をしたいのか、わかってないんだろ？」

ため息混じりに話す黒子の言葉に考える仕草をしながらつぶやく麗華だったが、士は肩をすくめながらそんな意見を出した。

ちなみに『レベル5』などわからない単語が出てきた物の、それは後で聞こうかと士は考えていたりする。

「わかってないって？」

「たぶんだが、強い力を持ってしまったせいで、その力で何をすればいいのかわからないんだろ。」

でも、何もしないわけにはいかない。自分の力で役立てることをしようと考えたんだろ。」

「なるほど……」

「当麻へのちよっかいも、そんな自分を否定されたような気がしたんだろ。」

だから、自分を認めさせようとして、あんなことをしてるんじゃないか」

望の問い掛けに答える土の話を聞いてうなづく雄介。

その話には黒子も納得する。確かに言われるとそうなのかもしれない。むろん、真実とは限らないが、どこか意地になっているように見えるのは確かだった。

その後も話を続ける土だったが、いきなり話を止めたかと思うと眼を細めていた。

「どうしたの、お兄様？」

「追いかけるぞ。なんだか、急激に嫌な予感がしてきた」

「へ？」

「土がそういうのなら、そうなのだろうな」

麗葉の問い掛けに土が答えるのを聞いて、黒子は思わず呆然としてしまう。

いきなり何を言い出すかと思ったからだ。なぜか麗華は同意していた。

土の勘は困ったくらいに当たるので、今回もそうなのだろうと望達は思ったのだ

こうして黒子の首を傾げさせながらも、土達はバイクで美琴達を追いかけることにしたのだった。

一方、美琴は人気の無い公園で1人ベンチに座っていた。

そこで今まで自分が当麻にしてきたことを思い返す。

出会い頭に電撃……毎回というわけではないが、しては文句を言ったりしてる。

そのたびに当麻に逃げられるが、普通に考えたら当然かと思えてきた。

だって、人を殺せるくらいの威力の電撃を放っていれば　自分としてはそんなつもりは無かった。

でも、何度も防がれたせいで意地になって威力を上げていたのは事実だった。



そこまで思い返すと、自分は何をしてるのかと悩んでしまう。  
自分はそのためにここまで力を高めたわけじゃないのに、そんな時だった。

「ぐるるるる……」

「え？」

獣のうなり声が聞こえ、美琴は思わず立ち上がったってしまう。

そして、辺りを警戒していたのだが

「なに……あれ？」

それを見て、思わず呆然としてしまった。

それは人の形をした豹……と言えはいいのか？ 見た目的にはそのように見えるのだ。

しかも、首にはマフラーのような物も巻いている。それがマフラーと共に黄色、黒、灰色と色違いで3匹もいた。

その3人の怪人の姿を見て、美琴は思わず身構えてしまう。姿はもちろんのこと、感じる気配も普通では無い。

なにより、3人の怪人は自分を見たままこちらに向かってくる。

何かある。そう思った美琴は威嚇のために電撃を放とうと右手を向け

「あぐ!？」

しかし、電撃が出ない。それどころか、頭痛で思わず地面に崩れ落ちてしまう。

「く、な、なんで？ ああ!？」

疑問に思いながらも電撃を出そうとするが、やはり頭痛がするだけで電撃が出ない。

その間に3人の怪人は頭の上に光の輪が現れると、そこから武器を取り出していた。

黄色が剣、黒が槍、灰色が両手にかぎ爪。それらを構えて美琴に迫ろうとしていた。

「あう!？ う、あ、ああ……」

そのことに美琴は怯えていた。電撃を出そうとしても頭痛がするば

かりで出来ない。

その上、怪人達は明らかに自分を襲おうとしている。

何も出来ず、しかも頭痛でろくに動けない。このままでは……恐怖で震える美琴であったが

「ビリビリ！」

そこに当麻が駆け付け、美琴の前に立った。

「あ、あんた……どうして……」

「それはその……ともかく、あんたらはなんのつもりだ!？」

当麻が来たことに戸惑う美琴だったが、当麻自身もなんで来てしまったのか良くわかってない。

なんだか、放っておけなかったのは事実だが……ともかく、そのことで言いよどみながらも当麻は怪人達を睨む。

しかし、怪人達はそんなのは知るかと言わんばかりに襲いかかろうとしていた。

「くっ」

「ぐおお!？」「ぐが!？」「ぐぐおお!？」

「へ?」

そのことに身構えると当麻であったが、いきなり飛び込んできた3台のバイクに怪人達がはね飛ばされた事に思わず呆然としてしま

う。

「まったく、嫌な予感がしてみれば、こういうことか」

「て、士さん!？」

そして、そのバイクの1台に土が乗っていることに驚くはめにな

ったが。

「お姉様! あれはいったいなんですか?」

「く、黒子……私にもわかんない……」

「お姉様?」

後では瞬間移動で現れた黒子に美琴は怯えた様子で答えるが、その様子に黒子はいぶかしんでいた。

「あいつらの相手は俺達がする。お前達は離れてろ」

「で、でも」

「望、頼む」

「うん、ほら、こっち来て」

「え？ ちょ、ちよっと」

「ま、待ってよ」

「何をするんですの!?!」

士の言葉に戸惑う当麻。士達に任せるのは気が引けたからだが、士に頼まれた望に美琴と黒子と共に引つ張られてしまう。

その間に士はベルトを装着し、麗華と麗葉、雄介はカードを構え

「くくへ!?!」

「くく変身!?!」

『仮面ライド デイクライド!?!』 『ターンアップ』

「くくええええええええ!?!」

麗葉がカードに吸い込まれる場面を見て、当麻、美琴、黒子が驚く中、士達は変身する。

その光景に更に驚く当麻達。一方の士は気にした風も無く、ケースを剣に組み替えて構えていた。

「おっと!」

「くつ!」

「うおお!」

士が黒の怪人が振り下ろした槍を自分の剣で受け止めると、麗華も黄色の怪人の剣を水からの剣で受け止め、雄介は灰色の怪人に突っ込んでいく。

その光景に当麻達は息を呑んだ。不良のケンカや能力者の能力行使とは違う何か。

それが目の前で繰り広げられ、言い知れぬ雰囲気を出していたのだ。その雰囲気に当麻達は飲まれていたのである。

「ち、中々素早いな。じゃあ、こいつで行くか」

『フォームライド アギト、ストーム!?!』

「アギト!?!」

「す、姿が変わった!？」

怪人と槍と剣をぶつけ合っていた士は、このままではらちがあかないと姿を変える。

その姿はどことなく雄介のクウガを思わせるが、左腕と上半身の色が青くなっており、左手には青い棍が握られていた。

その上、肩当ての形が左右で違っている。その姿に戦っていた怪人と当麻が驚きを見せる。

当麻は知らないのだが、今の士は仮面ライダーアギトと呼ばれる者で、今戦っている怪人と戦ってきた者でもあった。

ちなみにだが今の姿はストームフォームと言い、素早さを高めた形態である。

「うおつと!？ く、負けるかあ!」

一方、押されがちで怪人の攻撃を何度か受けた雄介はよろめきながら後へと下がっていた。

それでもすぐに体勢を立て直すと、自分のバイクの片方のグリップを引き抜いてしまう。

実は雄介のバイクのグリップの片方は引き抜いて警棒に出来るのだ。その警棒を伸ばし、右手に持つ雄介。すると姿に変化が現れる。

上半身がふちに紫のラインが入った銀色の鎧のような物に変わり、目も赤から紫へと変わる。

また、警棒も紫の頭身を持つ剣へと変わっていた。  
「があ!？」

それに構わず襲いかかる灰色の怪人であったが

「が!？」

「ふん!」

「ぐぼあ!？」

かぎ爪は雄介の鎧で止められた拳句、殴り飛ばされる羽目となった。

「く! まったく! 私は士や雄介のように姿は変えられんが」

麗華も黄色の怪人の剣を自分の剣で受け流してから、柄のホルダ

ーを広げてカードを一枚抜き取り

『ビート』

「はあ！」

「ぐがぁ!?!」

「こういうことは出来るのでな！」

柄にカードをスラッシュし、威力を高めたパンチで黄色の怪人を殴り飛ばしていた。

「おがぁ!?!」

そんな中、黒の怪人を棍で突き飛ばした士はディケイドへと戻り、腰のケースからカードを一枚取り出し

『ファイナルアタックライド　　ディ・ディ・ディ・ディケイド！

』!」

「は!」

ベルトにセットすると、発生した何枚ものエネルギーフィールドを引き連れるような形で跳び上がり

「おおお!」

「ぐがぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!」

エネルギーフィールドを突き破りながら放つ跳び蹴りを喰らわして吹っ飛ばし、黒の怪人を爆発させる。

『ぐあぁぁぁぁぁぁ!?!』

それとほぼ同時に麗華と雄介も怪人達を倒していたのだった。

「ふむ、今回は比較的に楽だったな」

「ま、前回の事もあるし、油断は出来ないけどな」

元の姿に戻りながら話しかける麗華に士は渋い顔で答える。

前回、備えをしていたにも関わらず怪人に人をさらわれてるだけに、そのことを警戒していたのだ。

「あんた達……何者よ？」

「ん？ 俺達か？ 俺達は」

そんな時に美琴は睨みながら問い掛ける。士達がしたことは明らかに普通じゃ無かったから。

それに対し、土は人差し指を立て

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「通りすがりの」

「仮面、ライダー？」

と、決まり文句になりつつセリフを聞いた当麻や黒子と共に美琴は呆然としてしまふのだった。

一方、その頃

「さてと、ここに例の鉱石があるらしいし。とつとつ、手に入れちゃおうかな」

などつつぶやくのは1人の青年だった。年の頃は20歳前後。シューズに動きやすそうな黒のズボン、シャツにジャケットとラフないでたち。

肩に掛かりそうな黒髪は若干ソバージュっばくなっている。

その顔は整っており、見た目的には好青年に見えた。

その青年はどこかを見上げ、不適な笑みを浮かべながらジャケットの内ポケットからある物を取り出す。

それは一枚のカードだった。どことなく、青いディケイドを思わせる姿が描かれた

## 第11話『2つが交差する前の世界』（後書き）

そんなわけで『とある魔術の禁書目録』編となります。

まあ、正確には本編開始の数週間前になります。

それと本来は同人原稿を書き上げてからの掲載予定でしたが……

同人原稿が思ったよりも掛かりそうなので、先に掲載することになりました。

同人と言っても完全に文字ばかりの18禁ですがね……

さて、士達と出会ってなぜか能力が使えなくなった美琴。

彼女に何が起きたのか？ それは次回にて明かされます。

そして、最後に登場した青年の正体は……というのは冗談ですが、本格的な登場は次章にて。

今回はそのままクライマックスまで行けたらいいなあ………と思っ  
てます。

うん、思ってるだけで、どうなるかはわかりませんけど。

## 第12話『能力（力）の意味』

「さあ、話してもらいますわよ。あなた方が何者なのかを」

戦いの後、詳しい話を聞かせると言い出す黒子。

士達は別に隠す気は無かったので、場所を変えて話す事にした。

といっても、フォトショップに戻ってきただけなのだが。

「そうだな。俺達が異世界から来たと聞いたら、お前達は信じるか？」

「「「はあ？」「」」

で、士が答えるのだが、問い掛けた黒子だけでなく美琴と当麻も何言ってるんだ？というような顔をする。

実際、そのような心境なのだが。

「あんたね……なに、ふざけたこと言ってるのよ？」

「あいにくだが、こうとしか言いようがないんだがな」

睨んでくる美琴に士は気にした風も無く答える。

そのことに美琴はいらだちを募らせるが、黒子は何かを考えてから携帯端末で何かを調べ始め

「お姉様。ちょっとおかしなことがありますの」

「なによ？」

「実はこのお店のことを簡単にですが調べてみたのですが、地図はもちらんのこと、書類上でも存在しないことになってますの」

「はあ!？」

その話に訝しげになる美琴だが、話した黒子が携帯の画面を見せながら出た話に驚いてしまう。

携帯の画面にはナビと思われる物が映されていたが、その画面では黒子達がいる所は空き地ということになっていた。

次にフォトショップがある住所の情報が掲載されている画面に切り替えるが、そこにも空き地ということになっている。

「能力とかじゃないの？ それで幻を見せてるとか」



「それをする理由はなんですか？ 少なくともこの方々が私達にそんなことをする理由がわかりませんわ」

携帯の画面を見ても反論しようとする美琴だが、黒子はため息を吐きながら問い掛ける。

というのも、士達の目的がわからないからだ。この学園都市に何かをするつもりだとしても、あまりにも目立ちすぎている。

士達は困でというのも考えられないわけではないが、何を目的にしてるかによっては微妙な所だ。

「それで、あなた方はどのような目的で来られたのですか？」

「そうだな。俺達は」

黒子の問い掛けに士はこれまでの経緯と目的を話す。

しかし、話を聞いていた美琴と黒子は怪訝な顔付きになっていたが。

「あんた、それ本気で言ってるの？」

「俺達としては勘弁して欲しいが、あちらは本気でな。それで、あいつらを止める為にここに来たわけだが」

睨む美琴に士はため息混じりで答えた。

士達とて戦いがたくて異世界に来てるわけではなく、自分達の日常を守るために戦っているにすぎない。

だから、出来れば怪人達が諦めてくれればと思っている。ただ、それは無理そうだと半ば考えていたりもするのだが。

「まあ、あなた方の話とはかくとしましても、モンスターが現れたのは間違いありませんものね」

「そっぴや、ビリビリはどうして攻撃しなかったんだ？ お前なら、電撃ぶつ放して倒そうとしそうなものだけだ」

「そ、それは……」

呆れた様子でため息を吐く黒子。というのも、士の話信じるには証拠が無さ過ぎる。

フォトシヨップにしても、なんらかの方法で1日で用意したとも考えられるのだ。

しかし、そうなるって怪人達のことかわからなくなる。

あまり考えたくないのだが、学園都市の技術ならあのような怪人を創り出すことも可能なのかもしれぬ。

だが、そうなるのであれば人気が無かったとはいえ、堂々と美琴を襲う理由がわからない。

そのせいで怪人達を倒した土達をどうしても疑ってしまうのだ。

なぜなら、まるで怪人達の出現を予期していたような動きを見せていたのだから

その話でそのことに当麻は気付く。美琴の性格を考えるなら、怪人達を倒そうとするはずだから。

そのことに美琴はなぜか顔を背けてしまう。そのことに訝しげになる当麻と黒子。

「……使えなかったの」

「使えなかったって……何がだよ？」

「能力……使おうと思っても、頭痛がして……使えなかったのよ」  
「洪々と答える美琴の言葉に首を傾げていた当麻が黒子と共に驚きを露わにした。

『無能力者（レベル0）』かコントロールをミスったりしない限り、能力が使えないということはありえない。

ましてや、美琴は『レベル5』の『超能力者』。そのコントロール能力は高く、とてもミスとは思えなかった。

「どういうことですか？ お姉様が能力を使えないとは？」

「わからない……どうしてだか、私にも……」

「ま、どうしてかは、なんとなくわかる気がするな」

「え？」

黒子の問い掛けに美琴は怯えた様子で首を横に振る中、土の言葉に当麻が反応して顔を向ける。

で、土はというため息を吐き

「ようするに怖くなったのさ。自分の力に」

「そんな！ そんなこと……無い……」

「まあ、お前は素直すぎるんだよ。自分のしたことに気付いて、自

分の力が怖くなっただらうな。

頭痛はどうしてかはわからんが、それで無意識に能力を使うことを拒んだんじゃないのか？」

土の言葉に大声で反論する美琴だったが、次に出た言葉は弱々しい物だった。

言われてみるとそうなのかもしれないと思ってしまったのだ。怖いと感じたのは事実だったし。

だから、次に出た土の言葉に何も言えなくなる。

当麻と黒子も何も言えないまま美琴を見つめる。

心配してるのだが、なんと声を掛ければいいのかわからないのだ。

それは望や麗華、雄介も同じであったが

「よし、お前。今日は当麻の家に泊まれ」

「……はあ!!?」「」「」「」

土のいきなりの発言に麗葉と叶を除く全員が驚いてしまう。

むろん、土の突拍子もない発言によるものだが。

「ちょ、ちょっと!?　なんで、いきなりこいつの家に泊まらなきゃダメなのよ!？」

「そうですねよ!?　こんな類人猿の家に泊まらせるなんて、危険すぎますわ!？」

が、すぐさま正気に戻った美琴と黒子が怒りの形相で土に怒鳴ってきた。

まあ、当然だろう。なぜいきなりそんな話になっているのか、理解出来ない。

それに対し、土は気にした様子も無く顔を向け

「お前と当麻は一度ちゃんと話し合った方がいい。お互いの為にもな。

ああ、貞操とかそういうのは大丈夫だろ。当麻にそんな甲斐性は無さそうだし。

それでも心配なら、お前も泊まっていけばいい」

「そ、それはともかくとしても、寮監がお許しになるわけが」

「誤魔化せ」

「なに、無茶苦茶言ってるんですのおおおおお!!?」

なんとか反論しようとする黒子であったが、話していた士の言葉に絶叫する。

なお、黒子が絶叫する理由としては、当麻の家に泊まることよりも寮監が怖いためののだが。

どんな人物かは……まあ、機会があったら、皆様の目で確かめて欲しい。

ちなみに甲斐性が無いと言われた当麻はうなだれていたが。

その後、なんとか考え直させようとあれこれ反論する美琴と黒子であったが、士に「能力をちゃんと使えるようになりたくないのか？」と言われ 結局は言いくるめられてしまう。

当麻はというと断ろうとしたのだが、話を聞いてもらえずに「不幸だ……」と床に両手と両膝を付いて落ち込んでおり、雄介に慰められていたが。

そんなわけで一同は当麻の家へと向かうこととなった。

みんなで行ったのは、怪人達にまた襲われてもいいようにである。

その間も美琴と黒子は反論するものの、士は右へ左へと聞き流すだけであり、その様子を当麻を覗く全員が苦笑しながら眺めていた。当麻はうなだれっぱなしであったりするが……

そうして、2人の反論以外は何事も無く当麻の家にたどり着き、そこに美琴と黒子を残すと士達はフォトシヨップへと引き上げていく。

「あのさ……2人を当麻君の家に泊めて、本当に美琴ちゃんは能力を取り戻せるの?」

「無理だろうな」

「おいおい」

ふと出た疑問に望が問い掛けると、士はあっさりと答える。

しかし、その答えに雄介は思わずツッコミを入れてしまった。

というのも、能力を取り戻せるからと2人を当麻の家に泊まらせたのに、手のひらを返すかのような事を言われれば当然の反応だろう。

「美琴に必要なのは切っ掛けだ。しかし、普通にすごしてる分には、その切っ掛けと出会うのは難しいだろ」

「それで当麻の家に？」

「当麻と美琴は一度きっちり話し合った方がいってのもあるけどな。」

まあ、難点があるとすれば、ああしたからといって必ずしも切っ掛けがつかめる訳じゃないってことだが」

「結局ダメじゃないか……」

麗華の問い掛けに答えていた士だが、後の話を聞いてやはり突っ込んでしまう雄介。

しかしながら、士は美琴が能力を使えないのは心理的な物が大きいと睨んでいる。

そうなれば、何かをしたからといって能力が使えるとは限らないと考えたのだ。

結局の所、美琴次第。それで士はその切っ掛けをつかませるために、当麻と話し合わせようとしたのである。

むろん、士も言っていたが、話し合ったからといって切っ掛けがつかめる訳でもないのが問題だが。

「それも問題だが、3人だけで大丈夫なのか？ 前回の事もあるのだぞ？」

「ああ……しかし、幸いと言えればいいのか、フォトショップと当麻の家が近い。」

時々、様子を見ることはしないと。そういうわけで、後で見張りの順番を決めるぞ」

麗華の疑問に士はため息混じりに答える。

場所的に当麻の家の周辺をうろつくことは、自分が不審者と言ってるような物だ。

そうなれば、当然警察のお世話になりかねない。

学園都市では『ジャッジメント風紀委員』などになるかもしれないが。

それを避けるために、たまに当麻の家の様子を確かめるしかないと

士は考えている。

幸いなのはフォトショップと当麻の家が近いので、様子を見に行くのが容易であることだろう。

本当は士達も泊まるか、フォトショップに泊まらせるべきなのかもしれないが

士は当事者達だけで話し合わせた方がいいと考えていたのだ。

そんなことを考えながら望達とフォトショップへ戻る士。

その時、ある青年とすれ違い　士は思わず振り返る。

しかし、青年は路地で曲がったのか、すでにその姿は無かったが。

「どうかしたの？」

「いや、何か気になる物を見かけたような気がしてな」

訝しげな顔をする望の問い掛けに、士はどこか真剣な眼差しで答える。

気になったのだ。どこか、自分に似た気配を感じた為に

「片付いているのはいいのですが、狭い所ですわねえ」

「しょうがないだろ。『無能力者（レベル0）』の上条さんが、いい所に住めるわけが無いじゃないか」

さて、その頃当麻の家では、不満げな黒子に当麻がため息を漏らしながらも文句で返していた。

美琴はというと男の家に泊まるのを自覚し、恥ずかしさで赤くなっていたのだが

「ちょ、ちよつと待って!? 『無能力者（レベル0）』って、本当に!? 私の電撃を防げるあんたが!？」

気になる発言に驚きを露わにする。

当麻の右手は美琴の電撃はもちろんのこと、異能であれば触れることで無力化出来る。

となればかなり特殊な能力であるのは間違い無く、それなりに高いレベルだと思っていたのだ。

どうやら、黒子も同じ考えだったようで、同じく驚いていたりするが。

「しょうがないだろ。計測器とかには何の反応も出ないんだよ。だから、上条さんは『無能力者（レベル0）』ってわけ」

どこか諦めの境地で話す当麻を美琴は呆然と見つめている。

なんの冗談かと思った。でも、当麻の表情を見ていると嘘とも思えなかった。

その一方で黒子は腕を組みつつ、あごに手を当てて考え込んでいた。当麻の右手の『幻想殺し（イマジンプレイカー）』は、異能であるならば触れれば無力化するという物。

むろん、全てを無力化出来るわけでも無いのだろうが、それでも破格の能力と言える。

しかし、それ故に『無能力者（レベル0）』なのだろうとも考える。計測器の計測を右手が無力化してるのか、あるいは異能にしか反応しない為に計測器で計測出来ないのか

そのどちらかのせいで、計測が出来なかったのでは？ と、考えたのである。

実際は別の要因もあるのだが、今の黒子ではそれを知ることには無かった。

その後、3人で夕食の準備をし、そのまま夕食となり

「そういえば、あんたってどうしてここ（学園都市）に来たのよ？

やっぱ、その右手のせい？」

「いや、親父に送られた。右手はここに來てからだな、知ったのは」  
「送られた、というのは？」

その食事中、気になったことを美琴が問い掛けるが、当麻の返事に黒子が首を傾げる。

学園都市に來る子供は大抵自主的かスカウトか、なんらかの目的があつてかのいずれかになる。

美琴と黒子は当麻の右手の能力でスカウトされたと思っていたのだが

「いや、俺って昔っから不幸体质でさ。良く不幸な目にあってるんだよ。」

それで気味悪がれたり、いじめにあったりして……本当に刺されそうになったこともあったな」

「「はあ!？」」

「それでマズイと思った親父が俺をここに送つたらしいんだ」

どこか遠くを見るように学園都市に來た経緯を話す当麻だが、美琴と黒子は驚きを隠せなかった。

まあ、気味悪がれたりいじめにあったりとかはまだしも、刺されそうになったと聞けば美琴と黒子のような反応もおかしくない。

「さ、刺されそうになったって……刃物か何かで？」

「ああ、そうだけど？」

「それで……なんで、平気そうに言えますの？」

美琴の問い掛けにきょとんとした顔で答える当麻だが、黒子は顔を引きつらせながら問い掛ける。

このことに2人は呆然とするしかない。刺されそうになったというのは異常だし、とんでもないことだ。

でも、当麻の様子を見てるとそれを自覚しているようにはとても見えなかった。

「あ、あんた、そんなことされて、なんとも思わないの!？」

「あ、いや……別に何も思わないわけじゃないけどさ。」

慣れたつていうか、ここまで不幸が続くと諦めたつていうか」

思わず怒鳴ってしまった美琴に、当麻は後頭部を搔きながら苦笑していた。

確かに不幸続きではあるが、ここまで続くと当麻としてはまたか……と、一種の諦めの境地に達しようとしていたのである。

まあ、その不幸も場合によっては困ったことになるので、完全に諦めてるわけでもないが。

一方で美琴と黒子は呆然としてしまっている。

当麻を見ていると、不幸を不幸だと思っていないように見える。



実際はそうではないのだが、少なくとも2人にはそうとしか見えな  
い。

なぜ、そうでいられるのか、美琴と黒子にはわからなかった。

「あんたは……それでいいの？」

「まあ、いいわけじゃないんだろうけど……でもまあ、これのおか  
げで困ってる人を助けられたり出来るからさ。」

それでもいいかなって思ってるけどな」

戸惑いを浮かべる美琴に当麻はやはり苦笑しながら答える。

当麻は不幸体質故か、良く厄介ごとに巻き込まれたりする。

その時、困っている人がいれば、当麻は助けたりしていた。

といつても、かつこいいとかそういう物では無かったりするのだが

……

一方で呆然としたまま当麻の話の聞く2人。

しかし、美琴だけはそんな当麻が眩しく見え、なぜか羨ましく感じ  
ていた。

その後、これ以上話を深く聞くべきか悩んだ美琴と黒子は差し当  
たりの無い会話をしながら夕食を済ませ、3人はシャワーを済ませ  
て寝ることにした。

その際、当麻が寝ているベッドに美琴と黒子が寝ることで当麻は床  
に寝るはめになり、「不幸だ……」と呟きつつ就寝

「ねえ……」

「なんですよ、お姉様？」

当麻の寝息が聞こえる中、寝付けられなかった美琴が声を掛け、  
同じく起きていた黒子が返事をし

「あのね……私、誰かの為に能力を使ってるんだって思った……  
でも」

静かに、でも確かな声でそんなことを呟く美琴。

正義感が強い為か、美琴はチンピラなどに絡まれた人を助けをした  
りする。

自分がただそうしたかっただけで、深い意味があつたわけではない。

だからだろうか？ 当麻を見ていると、自分がちっぽけに思えてくる。

当麻は例え自分が不幸な目にあい続けても、決して落ち込むことなく生きている。

その上で困ったことになっている人を助けようともしてるのだ。

あの時だって、怪人達に追い詰められそうな時に私を助けてくれて

その時の当麻の姿を思い出して思わずかっこいいと思ってしまい、顔を赤くしていたりするが。

それでも、気分は落ち込みそうになる。当麻と自分を比べてしまったら。

「確かに土さんの言う通り、お姉様の能力は人には危険すぎる物ですわ。

現にお姉様があの時類人猿……上条さんに放った電撃の威力を考えれば、上条さんは死んでもおかしくはなかったでしょう。

あの時のお姉様はそのことを考えずに使っているようでしたから、そういう意味では自覚が足りなかったと言うしかありませんわね」

そんな美琴の呟きに、黒子は静かに答える。

美琴が『低能力者（レベル1）』から『超能力者（レベル5）』に努力をしてなったのは有名な話だ。

それが凄いことだということは黒子だってわかっている。

かといって、不良退治をしてもいいという理由にはならない。

電撃は人をただ傷付けるだけでなく、時にはたやすく命を奪うことさえある。

現に乾燥した時期に良く起こる静電気で心臓停止が起こったという話もあるくらいだ。

今までの不良退治でそのことが起こらなかったのは、たまたま起こらなかったからとも言える。

ましてや、当麻に放っていた電撃の威力は雷に匹敵するか、それ以上だ。

まともを受けていたら、当麻はどうなっていたか……今まで防がれていたせいで意地になっていた美琴はそのことに気付いていなかったが。

そんな黒子の返事を聞いて、美琴は考えてしまふ。自分の能力は本当はどう使えば良かったのかを。

もしかしたら、このまま使えないままの方がいいんじゃないかとも思えてしまった。

しかし、答えは見つからずに、そのまま眠りにつこうとするが当麻の不幸体質がここでも発動する。

いきなりだが、白井 黒子は美琴に心酔している。

まあ、この表現はある意味正確では無いのだが……あまりの心酔ぶりに百合を疑われてるくらいだ。

実際、そうだろうというツッコミも聞こえそうだが……それはひとまず置いておこう。

ともかく、そんな彼女が美琴と一緒にベッドに寝ることになってじつとしていられるか？

答えはNOである。

(んっふっふっふ……お姉様)

現に美琴が寝静まったのを見計らって何かをしようとしていた。

本人は美琴を励まそうと考えているのだが、よだれを垂らす顔を見ていると明らかにいかがわしい事をしようとしているようにしか見えない。

そろそろと右手を伸ばし、美琴に抱きつこうとしていた。

が、その様子に気付いた美琴は蹴り倒すことで迎撃したのだがそれがあある意味まずかった。

言い忘れていたが、実は当麻は2人と一緒に部屋で寝ている。

普段の当麻なら、2人に遠慮して別の部屋で寝そうなものだが怪人に襲われるというある種のショックな場面に出くわした為か、あるいはその時の疲れのせいか……

そこまで思考が回らずに一緒に部屋で寝てしまったのである。

「きゃ!?!」「ぐえ!?!」

で、当然当麻が寝ていたのはベッドの下の床であり　そこに黒子が落ちてきたのである。

寝ていた当麻に襲いかかる重量感と痛み。それに悶絶しながらも何事かと目を覚ませば感じる柔らかな感触。

特に右手からは特に柔らかい感触を感じた。なんだろう?　と思っ  
て見てみると、そこにはあられもない姿の黒子がいた。

士の言われて泊まることになった美琴と黒子だが、当然ながら寝間着などは持ってきていない。

なので、下着に制服のシャツを羽織っただけという姿で寝ていたの  
だが……

そのせいで落ちた際にはだけてしまい、当麻に肌の大部分をさらす  
結果になってしまったのだ。

しかも、何をどうすればそうなったのか、当麻の右手は見事に黒子  
の胸をわしづかみにしていた。

ご丁寧にブラの中に手を入れた状態で

突然のことに理解出来ず、それでも恥ずかしさで赤くなり、泣きそ  
うになる黒子。

「ご、ご、ご、ごめん!?!」「きゃあ!?!」

そのことに当麻は謝りながら後退り……直後に背後で柔らかな感触  
とぶつかり、左手がとても柔らかい物をつかむ。

「な、なん、え!?!」

このことに当麻は何だろうと振り向き、直後に青くなる。背後に  
いたのは美琴だった。

どうやら、後退りして彼女にぶつかってしまい……なぜか、左手が  
彼女の胸をつかんでしまう。

やはり、ブラの中に手を入れた状態で

このことに美琴も恥ずかしさで赤くなり、それでも怒りを浮かべる。  
「ご、ごめんなさい!?!　上条さんはそんなつもりはまったくもっ

て無かったので、って、おわあ!?!」「きゃあ!?!」

当麻は慌てて弁解しようと離れようとしたのだが、それがまずかった。  
慌てたせいでバランスを崩し、美琴と一緒にベッドから落ちてしまったのだ。

まあ、別にそれ程高いわけでも無かったので、ちょっと痛い程度で済んだが。

で、その痛みに耐えながら起き上がるうとする当麻。その時、両手に柔らかな感触が

「う、うう……え？」

なんだろうと顔を向け、再び青くなる。

というのも、彼の下には美琴と黒子があり、どういうわけか当麻の両手は彼女達の胸をわしづかみにしていた。

やはり、ブラの（以下略）おり、当麻が2人を押し倒したようにしか見えない。

このことに顔を引きつらせる当麻。真っ赤になって当麻を睨む美琴と黒子。

「う、ごめんな、ぶべら!？」

直後、当麻は言い訳をするものの2人から平手打ちされ、部屋を追い出される羽目となった。

このことに当麻は「不幸だ……」と呟くものの、このことをクラスメートである男子達が聞いていたら、ぶん殴られるだけでは済まなかったかもしれないが

## 第12話『能力（力）の意味』（後書き）

そんなわけでラッキースケベ発動している当麻さんでした（おい）いや、こういうのもたまには必要だよな？

それはともかく、自分の能力を考えるようになった美琴は今後どうなっていくのか？

それは次回のお話となります。そして、今回はとある魔術の禁書目録編最終回。

出歩いて怪人達に再び襲われる当麻達。土達がおらず、為す術無し。その時、美琴はどうするのか？ そんなお話です。

今回はこのSSオリジナルの必殺技も登場いたします。

そういうわけで、次回またお会いしましょう！

### 第13話『決意した時』

さて、一夜明けたこの日、当麻達は朝食を買うために外に出ている。

昨夜の夕食で当麻が買い置きしていた材料のほとんどを使ってしまった為だ。

しかし、この時の当麻達はそのことをあまり問題にしてなかった。今のようにコンビニなどに買いに行けばいいと考えていたからだ。それと昨夜のことがあって、気分転換の為にというのもある。

なので、スツカリと忘れていた。土に自分達が迎えに行くまで出歩くなと言われてたことを。

「しかし、寮監にはどう誤魔化したものでしょうか」

「そうよ……ねえ……」

その道中、ため息を漏らす黒子の言葉に美琴は思わず顔を引きつらせていた。

美琴と黒子が通う常盤台中学は学園都市の中でも有数の名門校にしてお嬢様学校でもある。

その上で全寮制であるのだが、その寮監が2人にとっては怖い存在だった。

なにしろ、『超能力者（レベル5）』と『大能力者（レベル4）』の2人をいともたやすく倒せてしまうのだ。

といっても、美琴の方は大して能力を使っていない状態での話だが、それでも凄い話なのは間違い無い。

まあ、そのせいで色々と噂されていたりするが

ともかく、無理矢理だったとはいえ、無断外泊をすることになった美琴と黒子。

このままでは寮監からお叱りという名の折檻を受けることになる。

黒子は『風紀委員<sup>シヤッジメント</sup>』の仕事の関係ということで誤魔化すことが出来るかもしれない。

あの寮監のことだから、一瞬でその嘘を見破りそんな気がしてきたが……  
しかし、美琴は何かをしてるわけでもないの、上手い誤魔化し方が思いつかない。

黒子の手伝いでという手は前にも何度か使っているの、同じ手が使えない可能性もある。

そのことでどうしたものかと悩み、ため息を吐く美琴と黒子。その2人の様子に当麻は首を傾げていたが。

「にしても、思ったより遠いわね。まだなの？」

「ああ、もうちよつとで着くつて」

思ったよりもコンビニまでの距離があったことに訝しげになる美琴に、当麻は苦笑しながら答える。

当麻の家は家賃が安い分、立地条件はどうしても悪くなる。

コンビニから離れてるのも、ある意味仕方がなかったのだ。

でも、あと少しで到着……と、思われた時であった。

「……………ぐるるるるる……………」

「え？」「な、こんな時に!？」

うなり声が聞こえてきたかと思うと、建物の陰から7体の怪人が姿を見せる。

前回とは違い、昆虫のような姿の怪人やライオンやサイといった獣のような姿の怪人。

そんな中で1体だけ異様な雰囲気を持つ怪人がいた。

全身を青い甲冑のような物に包まれているが、その顔はどことなく人の顔にも見えた。

そして、右手には杖にも槍にも見える武器を持っている。

その怪人達が現れたことに当麻は驚き、黒子は自分達の迂闊さに気付いて顔を歪めた。

「くう!？」

美琴もとっさに電撃を放とうとするが、やはり頭痛がして能力が使えない。



そのことに悔しく思う中、黒子はスカートを翻し

「く、効かな、あ!？」「あ……」

両太ももに巻いてあるベルトに仕込んだ長さ数cmの金属矢数本を瞬間移動で飛ばすものの、怪人の体に弾かれるだけであった。

そのことに悔しく思うが、同時に怪人の1人が水の塊を撃ち出してきた。

美琴はまだ頭痛が抜けない為、黒子は突然のことで動けない。

やられる。そう思いながら呆然と水の塊を見てしまう2人だったが

「ちい！」

すかさず当麻が前に出て、右手を突き出すことでその水の塊を消し去った。

「あ、ありがとう……ですの……」

「礼はいいから、お前はビリビリを連れて逃げろ！」

「な!？」

呆然としながらも礼を述べる黒子だが、助けられたことを自覚するとなぜか顔が赤くなってきた。

が、当麻は振り向かずになんかことを言いだした為に、美琴は驚かすにはいられなかったが。

「な、何言つてのよ!？」

「そうですねよ!？ 私の能力ならお2人とも連れていくのは可能ですわ!」

当麻の言葉が信じられず怒鳴る美琴。黒子も怒鳴りながらも逃げるように言い聞かせようとしたり。

黒子の瞬間移動での長距離移動は無理だが、連続で使えば少なくとも怪人達から逃げ切れる。

黒子はそう思っていたのだ。だが

「ダメなんだ……俺の右手は……」

振り返らず……それでも悔しそうな声で当麻は答えた。

当麻の右手は異能ならば無力化してしまうのは前にも話したが、困

ったことにそれは直接触れなかったとしても作用することがある。あえて詳しい説明は割愛するが、黒子の瞬間移動は異能という力を全身で包むことで初めて発動が可能になると思われる。

それは他人と共に瞬間移動を行う場合でも同じ事だろう。そうなる」と当麻は瞬間移動が出来ないことになる。

瞬間移動をする為の異能の力が全身を包む際、彼の右手に触れた瞬間に無力化されてしまうのだから。

そのことに気付いた黒子は思わず舌打ちしそうになる。戦うのはほぼ無理だ。

黒子の金属矢は怪人達に通用しなかったし、美琴は未だに能力が使えない。

当麻は『幻想殺し（イマジンプレイカー）』以外は大した力があるわけではなく、ケンカが少し強い程度でしかない。

そうなる」と逃げるしかないのだが、走って逃げ切れるか怪しい。怪人達にどのような力があるかわからないが、人よりも速く走れる可能性もあるからだ。

方法があるとすれば当麻を見捨て、美琴と共に逃げるしかないのだが

が  
「そ、そんなの……出来るわけが……」

涙を浮かべる黒子が悔しそうな顔をする。命が掛かっていなければ、黒子は迷い無く当麻の言うことを実行しただろう。

しかし、今の状況はそうでは無く、その上黒子は優しすぎた。美琴と仲が良い（黒子視点で）当麻のことは嫌ってはいるが、見捨てる程ではない。

むしろ、今回の事で見直したと言ってもいい。だからこそ、黒子は当麻を見捨てる事が出来ない。

それは美琴とて同じだった。最初の方こそ、当麻を目の敵にしていた。

でも、今日のことと自分の勘違いに気付かされた。

どんな所にも不幸な人はいる。美琴はそれを知っているつもりだった。

けど、それはある意味勘違いだった。確かにそれは間違いない。でも、どんなに不幸な目にあっても、それでもくじけない者はいる。今、目の前にいる当麻のように。当麻だって、本当は逃げたいはずだ。

でも、彼の右手がそれをさせてくれない。だから、自分はここに残って美琴達を逃そうとしていた。

この時、美琴は当麻の右手が恨めしいと思ってしまう。

あの右手がなければ、こんな事にならなかったのにと……だから、認められない。

こんな事で当麻を犠牲にするなんて

「ふざ、ける、なああああああ！！？」

「きゃ！？」「ビリビリ！？」

「くぐがあああああ！！？」

その考えから来た怒りで、美琴は思わず電撃を放ってしまう。

そのことに黒子と当麻は驚くが、電撃は彼らをすり抜けて3体の怪人を襲った。

「お姉様、能力が」

「え？ あ……ここは私と当麻でなんとかするから、あなたは士達を呼んで！ 早く！」

「で、ですが」

「あんだ1人なら、遠くに飛べるんでしょ？ いいから早く！」

能力が突然使えたことに驚きながらも美琴は戸惑う黒子に指示を飛ばす。

当麻が逃げるが無理ならばここで自分と一緒に時間を稼ぎ、その間に黒子に士達を連れてきてもらおうと考えたのだ。

それに黒子の能力は制御の関係上、1人の方が遠くへと瞬間移動出来るので、その方が早いと考えたのもある。

「当麻があいつらの攻撃を防いで私が攻撃！ それで時間を稼ぐか

ら、早く呼んできて！」

焦るように美琴が叫ぶ。先程の電撃は無自覚ではあったものの、全力に近い威力で放った。

しかし、電撃を受けた怪人達は多少よろめきながらも立ち上がっている。

何発も喰らわせれば倒せるかもしれないが、それまで自分の体力が保つかはわからない。

だから、助けを呼んで と、考えていた。

「その必要は無いぞ」

『アタックライド ブラスト!!』

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐ!?」「」

そんな時、声と電子音が聞こえたかと思うと、別の3体の怪人が銃撃を受けて倒れてしまう。

そのことに呆然となる当麻達だが、何かに気付いて慌てて顔を向けた。

その顔を向けた先にはすでに変身した士、雄介、麗華に望がいた。

「さて、俺は家で待ってるって言わなかったか？」

「そ、それは」

「士！」

銃に組み替えたケースを肩に掲げつつ、睨むように顔を向ける士。そのことに当麻は顔を引きつらせるが、美琴は叫びながら前に出て

「これが正しいことなのか、私にはわかんない！」

でも、こんな事で誰かが傷付くのなんて絶対に嫌!

だから……だから、私はそんなことをさせないために、能力(力)を使うわ！」

決意を秘めた瞳で叫ぶ美琴。その時、士が持つケースが勝手に開いたかと思うと、1枚のカードが飛び出してきた。

士がそのカードを手に取ると、カードに美琴や黒子が通う常盤台中学の校章が描かれる。

「いいんじゃないのか？　ただ、言うことがあるとしたら前にも他の奴に言ったんだが、自分のしたことはどんな形であれ自分に返ってくる。」

それをどう受け取るかは、自分次第だ」

「うん！」

そのカードをケースに戻しながら話す土に、美琴は力強くうなずく。

その美琴に顔には迷いは無く、逆に強い意志を秘めた瞳を見せていた。

「んじゃ、とつとと終わらせるぞ。こいつらに長々と付き合ってやる必要も無いからな」

「ああ！」「そうだな」

ケースを剣に組み替えながら、土は怪人達へと体を向ける。

そのことに雄介と麗華も同意し、怪人達を見据えながら構え始めた。それを待っていたかのように槍を持つ怪人が右手を突き出すと、怪人達が一斉に襲いかかる。

「は！」

「ぐお！？」

「たあ！」

「があ！？」

それを土や麗華が剣で切り裂き

「おりゃ！」

「がふ！？」

雄介が殴り飛ばし

「てえい！！！」

「ぐばあ！？」

美琴が電撃を放って怪人達の動きを止め

「おわつと！？」

光弾などの攻撃を当麻が右手で防ぎ

「お姉様には近付けさせませんわよ！」

「ぐー!?」

すぐ側まで来て襲いかかろうとする怪人に黒子が触れ、瞬間移動で吹き飛ばす。

「があ!?!」「ぐおお!?!」

「さてと、さっさと終わらせてもらっぞ」

「そうだな」

『ファイナルアタックライド　　デイ・デイ・デイ・デイケイド!』

『!』

『キック　サンダー　マツハ　ライトニングソニック』

2体の怪人を突き飛ばした土と麗華はそれぞれカードをセットし

「ふっ!」

「ぐおお!?!」

1体の怪人に向かって土からエネルギーフィールドが何枚もの並んでいくと同時に、麗華は刹那の速さで駆け抜けてもう1体の怪人をはね飛ばし

「おお!」「はあ!」

土が剣となったケースを構えて走り出すと、麗華は立ち止まって天高く跳び上がる。

「でりやあああ!?!」「はああああ!?!」

「ぐがああああああ!?!?」「がはあああああああ

!?!?!?」

走り出した土はエネルギーフィールドを突き破りながら加速し、

麗華は右足を突き出して突っ込んでいき

土は通り過ぎるようにして怪人を切り裂き、麗華は突き出した右足を怪人の胸板にめり込ませる。

切り裂かれた怪人はそのまま崩れるように倒れ、蹴り飛ばされた怪人は突き飛ばされて地面に倒れ、頭の上に光の輪が現れると共に爆発の中へと消えていく。

「ふん!　はあ!」

一方、雄介も両手を広げるように構えてから、右足に炎を宿しながら駆け出し

「はあ！」

助走してから天高く跳び上がり、頂点で宙返りをし

「おつりやあああああああああ！」

「ぐばあああああああ！？」

そのまま、炎を宿した右足を突き出して突っ込み、怪人を蹴り飛ばして同じように爆発させていた。

「ええい！」

「ぐおおおお！？」「がああああ！？」「ぎいいいい！？」

一方、美琴は電撃を放ち、怪人達を感電させるのだが

「もう、本当に効いてるの！？」

その光景に美琴は思わず叫んでしまう。

というのも、電撃を受けたはずの怪人達が一度は膝を付くもの、すぐに立ち上がってしまうからだ。

膝を付くのを見る限り、まったくダメージが無いわけではないようだが

ともかく、電撃に耐性があるのか全力の電撃が足止め程度にしかなくていなかった。

これは美琴が弱いからではなく、怪人達の肉体がそれだけ強固だったというのが大きい。

もつと威力がある攻撃が出来ればいいのだが、土達が前に出て戦っている以上、巻き込んでしまう可能性が高い。

威力が高い攻撃方法はもう一つあるが、アスファルトで舗装されたこの場所ではその攻撃方法が出来ない。

八方塞がりな状況に美琴は表情を歪ませていたが

「ぐが！？」「ぐぼお！？」

「すまん、遅くなった」「てりゃあ！」

「があ！？」

そこに土と麗華が斬り込んで怪人達突き飛ばしてくれた。

「士！ 私が合図したらそこから離れて！」

「わかった」

『アタックライド スラッシュユー！！』

それを見た美琴がポケットに手をつ込みながら叫んだ事に、士はベルトにカードをセットしながら答え

「はあ！」

「ぐー！ があ！？」

「はあああ！」

「ぐー！？」「がは！？」

赤い残像を残す剣の振りで怪人を連続で斬り、麗華も激しい動きで怪人達を斬っていく。

その間に美琴はポケットから取り出した物を指で弾いて、宙に舞い上がらせる。

それは一枚のメダル。ゲームセンターなどで使われているような物。そのメダルが回転しながら、指を弾くような形で構える美琴の右手の親指に向かって落ちていき

それと共に美琴の体が右手を中心に電撃を発していた。

「今よ！」

「麗華！」

「ああ！」

美琴の叫びで士は声を掛けてから麗華と共に別々の方向に跳び去った。

それとほぼ同時に美琴は落ちてきたメダルを指で弾くのだが、それによって起きたのは閃光だった。

まばゆいまでの閃光。それが一瞬起きたかと思うと、何かか怪人に向かつて目にも止まらぬ速さで飛んでいく。

それは先程のメダルだ。そのメダルが音速を超える速度で飛ばしたのだ。

簡単に説明すると、美琴は電撃を起爆剤にしてメダルを撃ち出したのである。



それは一種の『超電磁砲』<sup>レルガン</sup> 美琴のあだ名ともなっている力が、ここで解放されたのだ。

「ぐが!?!」「ぐがお!?!」

「ぐがあああああああ!?!?!」

そのようにして撃ち出されたメダルは2体の怪人を衝撃で吹き飛ばした拳銃、もう1体の怪人の額を撃ち抜き吹き飛ばして地面に倒れる間も無く、爆発の中へと消し去っていった。

「やれやれ、とんでもない威力、くう!」

その光景に呆れる士だが、何かに気付いて慌てて跳び退こうとした。

しかし間に合わず、飛んできた青い光の濁流に弾き飛ばされてしまう。

「士! あ」

美琴が思わず声を掛けてしまいが、その直後に気付いてしまったあの光を放ったであろう槍を持つ怪人が、自分に向けて右手を向けていることに。

しかも、その右手には青く大きな光球があり、すでに攻撃出来るのだとも

そして、それに気付いた時には槍を持つ怪人が青い光の濁流を放った後だった。

「お姉様!?!」

「ビリビリ!?!」

防ぐことも逃げることも出来ず、動けない美琴。

その彼女を助けようと黒子が駆け寄りうとするが、その前に当麻が美琴の前に立ち

「うおおおおおおおおおおおお!?!?!」

右手で青い光の濁流を受け止める。だが

「く、処理しきれねえ!?!」

青い光の濁流の威力が強すぎるためか、もしくは撃ち続けられて

いるためか、当麻の右手に触れても消える気配が無い。  
それどころか、じりじりと当麻が押され始めていた。

当麻も歯を食いしばって耐えてはいるものの、それが精一杯の状態。  
「当麻!？」

「当麻、もうちょっとだけ我慢しろ。美琴、黒子。手伝ってくれ」  
それを見て正気に戻った美琴が助けようとした時、よろめきながらも戻ってきた士がそんなことを言い出す。

何を?と思った美琴と黒子が顔を向けると、士は1枚のカードをケースから取り出していた。

それは先程飛び出た、常盤台中学の校章が描かれたカード。  
そのカードを見た瞬間、美琴と黒子の脳裏にある知識が流れ込んでくる。

「ええ!」「わかりましたわ」

「いいから、早くしてくれえ!？」

それは士が今持っているカードの効果。その知識を理解した美琴と黒子はうなずく。

一方で青い光の濁流を防いでいる当麻は悲鳴を上げていたが。

「じゃ、とつとと終わらせるか」

『ファイナルアタックライド ミ・ミ・ミ・美琴!』

2人の返事を聞いた士はすぐさま持っていたカードをベルトにセツトした。

それと共に美琴と黒子が士に駆け寄り

「行きますわよ!」

そう言って美琴と士に触れた黒子は2人と共に瞬間移動で上空へと飛んだ。

「ぬぐ!？」

それと共に士達と槍を持つ怪人達の間にくつものエネルギーフィールドが並ぶ。

いつもと違うのはエネルギーフィールドはリング上になっており、なおかつ数がいつもよりも明らかに多かったことだ。

「でええええええええええええええええい!!」

そのエネルギーフィールドが現れると美琴は土の肩をつかんだかと思うと、一気に撃ち出した。

そう、撃ち出したのだ。先程放った『超電磁砲』と同じ方法で。

撃ち出された土は慌てることなく両足を突き出し、音速を超える速度でエネルギーフィールドを次々と突き破り

「おおおおお!!!」

「ぐ、ぐがああああああああああ!!!?」

槍を持つ怪人はエネルギーフィールドが来た時点で青い光の濁流を撃つのをやめ、槍を盾にして防ごうとした。

しかし、音速を超える速度で飛んできた土の両足によって槍を砕かれた拳句、胸を打ち抜かれて大きく吹き飛び、地面に倒れる前に爆発の中へと消えていったのだった。

その光景を背にしながら着地する土。

「た、助かった……」

「ぐがああああ!!!?」 「ぐおおおおお!!!?」

助かったことに安堵し、へたり込む当麻。

その間に雄介と麗華が残った怪人達を倒し、美琴は黒子の瞬間移動によって地面に降り立っていた。

「つと、大丈夫、当麻?」

「ん? ああ、なんとかな……そういうビリビリこそ、大丈夫なのか?」

駆け寄って心配そうな顔をする美琴に、当麻は苦笑しながら後頭部を掻きつつ答えた。

しかし、そのことに気付いた美琴はため息を吐き

「美琴よ」

「はい?」

「今度から私のことは名前で呼んでよね。私も当麻って呼ぶからさ」

「え? は?」

顔を赤く染めつつ背ける美琴。どう見ても恥ずかしがっているこ

女にしか見えなかった。

しかし、当麻は鈍感らしく、言われた意味を理解出来ずに戸惑っていたが。

なお、黒子はなぜか羨ましそうに2人を見つめていた。

「まあ、仲がいいことはいいんだがな」

と、そこに変身を解いた土がやってくる。

なぜか、指の関節を鳴らしながら

「ともかく、お前らは反省しろよ?」

「え? なんのことでしょうか?」

どこか顔を引きつらせているように見える土の言葉に、当麻は首を傾げる。

どういう事かわからない為で、同じ心境らしい美琴や黒子も首を傾げていたが

「俺は言わなかったか? 俺達が来るまで家を出るなって」

「……あ……」

土の返事でそのことに気付いた当麻達。

そのことに気付けば、土の顔は引きつってるのではなく、怒っているのだと理解出来

「……あいた〜!?!?」「」

土に手痛いげんこつを受けるはめになり、その光景を望や雄介、麗華が苦笑しながら見ているのだった。

なお、麗華はこの時の土がちょっと怖かったらしく、少し怯えていたが。

「帰る……んですか?」

「一応、終わったみたいだしな」

あの後、当麻達の朝食を買ってから、土達はフォトショップに戻っていた。

この世界でやることを終え、自分達の世界に戻るために。

しかし、問い掛けた当麻は美琴と黒子と共に土達が帰るという意味がわからずに首を傾げていたが。

「本当に大丈夫なんでしょうね？ あなた達がいなくなった後にまた来るなんて事にならないでしょうね？」

「そうだったら、俺達が帰ることは出来ないがな」

ジト目の美琴に土はため息を吐きながら答えた。

帰れると言っても、土達にとってはこれで終わりというわけではない。

例え自分達の世界に帰っても、時が経てばまた別の世界に行かねばならないのだから

それのため息が漏れてしまったのだ。

「それじゃあ、俺達はそろそろ行くが……お前達はがんばれよ。色々、特にその2人はな」

「はい？」

意味ありげな視線を向けつつ話す士だが、その言葉の意味が理解出来ない当麻は首を傾げていた。

しかし、視線を向けられた美琴と黒子は目に見えて顔を赤くする。

「ち、違う！？ わ、私は当麻のことは」

「そ、そうですねよ！？ わたくしはお姉様一筋で」

「さて、なんのことかな？」

慌てた様子で何かを否定する美琴と黒子。

その様子を話していた土はくすりと笑いつつ、軽く流していたが。

一方、慌てる2人を見た望達は苦笑し、麗葉は意味がわからずに首を傾げていた。

「当麻はその方がいいのかもな。じゃあな」

「はい？」

「それじゃあ、さようなら」

苦笑しつつもそんなことを言ってから振り返る土。

当麻はその言葉の意味が理解出来ず、再び首を傾げるはめになってしまったが。

そんな当麻を見た望は苦笑しながらも手を振り、雄介達と共にフォトショップの中へと入る。

そして、士達が入るとフォトショップは光に包まれ、光が消えるとそこにフォトショップは無く、ただの空き地が広がっていた。

「え？ え？ ええ！？ も、もしかして、本当に異世界から来たの！？」

突然のことに理解出来なかった美琴だが、少しして起きた現象に驚いてしまう。

当麻と黒子も目を丸くしている所を見ると、美琴と同じ心境のようだが。

「はあ……休日だったのにどっと疲れちゃったわね……今日は帰って休みたい……」

「俺もだ……」

「わたくしも……って、なんでしょうか？」

なんとか落ち着きを取り戻した美琴だがそれと共に疲れも感じてしまい、ため息混じりにそんな言葉が漏れた。

まあ、朝早くからあのような激闘をすれば疲れもするだろうが。

当麻も同じ心境であり、今日は休日なので寝てしまおうかと考えていたりする。

黒子もそれに賛同しようとしたが、着信音が聞こえて慌てて携帯を取り出して操作をし

「え？」

「何かあったの？」

「あ、その……ある研究所から、つい最近発見されて解析中だった鉱石が盗まれたそうですよ。」

警備カメラの映像を送るので、映っている犯人を見かけたら連絡して欲しいとのことなのですが……」

「どうかしたの？」

戸惑いながら携帯を操作する黒子の返事に、問い掛けた美琴は怪訝な顔をする。

なんでそんな物を盗んだのかと疑問に思うが、それ以上に黒子の様子が疑問だった。

その疑問に答えるかのように黒子は携帯の画面を見せるのだが

「え？」

「なんだ……これ？」

携帯の画面にはどこかを映したと思われる映像が一時停止の状態  
で映されていた。

そして、その映像を見た美琴と当麻は顔を強ばらせる。

その映像には青い人影が映し出されていたのだが、その姿がどことなく土が変身したデイケイドに似ていたのだ。

「これって、土……なのかな？」

「いや、違うと思うぞ。青いのもそうだけど、ヘルメットとか肩とかの形が違うしな」

美琴は思わずそう考えてしまうが、当麻はきっぱりと否定した。

当麻の指摘通り、雰囲気としてはデイケイドに似ているものの、指摘したパーツや色がまったく違っていたからだ。

「どういうことでしょうか？」

「さあな？ もし、また会えたら、聞いてみるしかないと思うけど……俺は土さんが犯人とは思えないな」

携帯をしまいながら問い掛ける黒子に、当麻はため息混じりにそう答えるしかなかった。

それと共に鉱石を盗んだのは土では無いのではとも思えてしまう。

助けられたというのもあるが、土がそのようなことをするには思えなかったから

もっとも、その思いは美琴と黒子も同じであったが。

結局、考えても答えがわかるわけでもなく、当麻達はその日は別れることにした。

疲れて休みたかったからだ……寮に戻った美琴と黒子が休めたのはそれから数時間後のことだった。

無断外泊のことで寮監にキツイお灸を据えられたからだ

その後、当麻はことあるごとに美琴と黒子に付き合わされるはめになる。

当麻としては断りたかったが、2人のあられもない姿を見たことをクラスメートにはらすと脅されて涙を呑むはめになる。

そのたびに「不幸だあゝ!？」と漏らすのが、美琴と黒子はなぜか楽しそうにしていた。

ただ、そんな自分達にしばらくしてもう1人が加わることになるうとは、この時の3人は思いもしなかった。

一方、元の世界に戻った土達は

「帰ってきたのはいいが……良く考えると、異世界でゆっくり出来たこと無いな」

「まあ、それ以前に怪人達のことがあるから、難しいだろうがな」

そのことに気付いた土に、麗華はため息混じりに答えていた。

今まで3つの世界を渡り歩いてきた土達だが、そのどれもが滞在期間が1日程度でしかない。

どんな世界なのかしつかりと確かめるには短すぎる時間だ。

反面、世界の破壊を企む怪人達の対処も必要なもので、そういつたことをする余裕が無いのも事実だが。

「へえ。まさか、お店ごと異世界に来るとは思わなかったよ」

「え?」

と、聞き覚えのない声に思わず振り返る雄介。

土達も同じように振り返ると、そこにはカウンター席に座るラフな格好をした青年の姿があった。

土達は知らないのだが、あの青いディケイドを思わせるカードを持つていた青年である。

「え? ええ!?!? もしかして、私達あの世界から人を連れてき



やったの!？」

「ああ、大丈夫。ボクも異世界を渡り歩いてるから。

それに助かったよ。ほとぼりが冷めるまで、お茶でもしようと思  
ったからさ」

「どういうことだ？」

もしかして、当麻達の世界から人を連れてきてしまったのではと  
思い、慌てる望。

それを見てか、青年は右手を軽く振りつつ気にした様子も無く答え  
るのだが、麗華は訝しげな顔で問い掛けていた。

「いうのも、聞き捨てならないことを言っていたからだ。

「言ったとおりだよ。ボクは異世界を渡り歩き、その世界のお宝を  
ゲットするトレジャーハンターさ」

「トレジャーハンター……ね。そいつがなんでここでお茶なんてし  
てるんだ？」

「というか、さっきほとぼりが冷めるまでとか言ってたか？」

「ああ、あの世界でお宝を手に入れたのはいいんだけど、ちょっと  
した騒ぎになってね。

少し、落ち着いてから帰ろうと思ってたのさ」

ジト目で問い掛ける土に、話していた青年はキザな様子で答える。  
しかし、それを聞いてか、土は嫌な予感が強まっていた。

なんかこう、ろくでもないことをしてそうな気がしてならないのだ。  
実際、その通りだというのを後に知ることになるが

「コーヒーごちそうさま。美味しかったよ」

「はい、ありがとうございます」

コーヒーの代金を起き、叶に見送られながら立ち去ろうとする青  
年。

土達の横を通り過ぎ、ドアを開けようとして

「ああ、ボクの名前は海東<sup>かいたう</sup> 大樹<sup>たいき</sup>。縁があったら、また会おうね」

笑顔と共に自己紹介をする青年 海東。その後、右手を軽く振  
ってから去ってしまう。

「なんだっただ？」

「さてな。だが、近い内にまた会いそうな気がしてならないが」

呆然と見送る雄介に士はなぜか真剣な眼差しで答える。

そう、なぜか海東とはまた会いそうな気がしてならないのだ。

そんな様子の士に、雄介だけでなく麗華や望も戸惑いを見せるのだ。  
った。

それから一週間。小学校に通いだした麗華は慣れてきたのか、友達が出来ていた。

このことに麗華は喜ぶ。元の世界ではこのような形で友達など出来なかつただろうから

そんなこんなで時が経ち、再び異世界へ行く日が来た。

淡い光を放ちながら下りる垂れ幕。それに描かれる絵を見た瞬間、士はジト目になっていた。

「またか……」

「あはははは……」

呆れたようにぼやく士。望は苦笑するしかなかった。

良く見ると雄介や麗華も呆れたような顔になっている。

士達をそんな風にさせた垂れ幕には、先端に赤い宝玉がある杖と斧にも見える杖とが交差している絵が描かれていた。

杖は2本ともどこか機械的な物を感じるが、それと共に絵から連想出来ること。

それはこの世界に魔法が存在するということであつた。

その頃

どこかの林と思われる場所で2人の少女が見つめ合っていた。

いや、その表現は少し語弊があるかもしれない。

一方は肩にフェレットと思われる小動物を肩に載せており、どこか

の制服にも見える白い服を着た栗色の髪を左右の上辺りでおさげにしている幼き少女。

可愛らしく整った顔立ちをしているが、その表情は真剣な眼差しでもう一方の少女を見つめている。

もう一方の少女は長いブロンドの髪をツインテールにしており、黒いレオタードにも水着にも見える衣服を身に纏い、更にその上からマントを羽織っている。

一応、手袋やブーツ、スカートのような物も身に付けてはいるが、やはり幼い少女にしては少々過激な衣装と言えた。

その少女も同じく可愛らしく整った顔立ちなのだが、おさげの少女を睨んでいるように見える。

そして、2人の少女の手には士達が垂れ幕で見た杖が握られていた。おさげの少女は赤い宝玉が先端にある杖を。ツインテールの少女は斧にも見える杖を。

そして、ツインテールの少女の後には別の少女の姿があった。淡いオレンジ色の腰まで伸びる髪に凛々しく整った顔立ち。

しかし、服装はツインテールの少女よりも過激だった。

なにしろ、着ているのはブラのような上着と短パンのみという格好なのだから。

一応、肩と腰にケープのような物があるが、その過激さを隠し切れていない。

更にはその少女の頭と腰から、髪と同色の獣の耳としっぽが出ている。

その獣耳を持つ少女はなぜかおさげの少女を睨んでいたがどこか一触即発の雰囲気がある今の状況。

そんな少女達から少し離れた所である物が浮かんでいた。

四角錐を2つ、上下にくっつけたような水色の宝石。

その宝石が強い輝きを放ちながら浮かんでいたのだ。

明らかに普通では無いのだが、少女達は気にした様子が無い。

いや、時折宝石を見ているところを見ると、まったく気にしていない

いというわけでもなさそうだが

「そこまでだ」

そんな時、少年の声が聞こえてくる。

少女達が顔を向けると、光り輝く魔方陣の上に立つどこか物々しい黒い制服のような物を着た少年がいた。

明らかに若いながらも凜々しい顔立ちで少女達を見据え、持っていた杖を向け

「時空管理局」

「ああ、ちよつと待つてくれないかな？」

何かを言おうとした時、それを遮る形で別の声が聞こえてくる。

誰もがそこに顔を向けると、そこには不敵な笑みを浮かべた海東がいた。

「なんだ、お前は？」

「ボク？ ボクは海東 大樹。それ、ジュエルシードだよ？」

ボクはそれを手に入れるために来た、トレジャーハンターだよ」

「ふざけんじゃないよ！ それはフェイトの物だ！」

少年の問い掛けに海東は気軽な様子で自己紹介するのだが、聞き捨てならないことを聞いた獣耳の少女が叫ぶ。

ジュエルシード……それが輝きながら浮かんでいる宝石の名なのだが

「まだ、誰も手に入れてないのに自分の物だと主張するなんて、滑稽だよ？」

しかし、海東は不敵な笑みを浮かべながらジャケットの内側からある物を取り出す。

それは奇妙な形をした銃と一枚のカード。カードはあの青いディケイドにどこか似た姿が描かれた物だ。

そのカードを銃の側面にセットし、スライドさせて銃身を伸ばし

「変身」

『仮面ライド デイ・エンド!!』

「な、なに!？」

機械音の唸りを響かせる銃を真上に向けてトリガーを引くと、海東の周りにいくつもの残像が不規則に動き回った。

おさげの少女や他の少女達がそのことに驚いていると残像が海東の元へと集まり、1つとなつてある姿へと変わっていく。

カードに描かれていた、どこかデイケイドを思わせる姿へと

「え？ あ、え？ バリア、ジャケット？」

「な、なんだ、お前は!？」

「名乗ったと思ったけどね？ ボクは海東 大樹。通りすがりのトレジャーハンターだよ」

その光景に少女達が驚く中、フェレットがなぜか人の言葉を発しながら同じく驚き、少年も戸惑いながらも杖を向けて威嚇する。

それに対し、海東は不敵な笑みを浮かべるような様子で、銃を向けながら答えるのだった。

この時、土達はまだ気付いてもいなかった。

自分達が新たな段階へと進んだことに

### 第13話『決意した時』（後書き）

そんなわけだとある魔術の禁書目録編はこれにて終了。

しかしながら、気になる終わり方をしましたが、これは後ほどわかります。

そして、次なる世界は『魔法少女リリカルなのは』の世界。

そこで待つ物はなんなのか？　そして、海東の登場はどのようなことになるのか？

次回はそんなお話です。ではでは、次回またお会いしましょう。

## 第14話 『魔法少女と仮面ライダーとトレジャーハンターと』

「え？ あ、え？」

「なんだい、ありや……」

海東の変身に戸惑う少女達。

獣耳の少女は未だに睨んではいたが、戸惑いを隠し切れずはいなかった。

「なんなんだ、お前は！ 魔導士か！？」

「いやいや、違うよ。しいて言うなら仮面ライダー、かな？」

「仮面、ライダー？」

戸惑いながらも睨み、杖を向ける少年におどけた様子で答える海東。

その言葉におさげの少女は首を傾げていたが。

「ま、流石にボク1人で君達の相手は出来ないから」

と、海東は話しながら3枚のカードを取り出して銃にセットし

「この人達に相手してもらおうよ」

『仮面ライド ライオトルーパー！！ 王蛇！！ サイガ！！』

銃のトリガーを引くと合成音と共にいくつもの残像が不規則に動き、やがてそれらが重なり合うとその姿を現した。

1つは5人組の集団。フルフェイスヘルメットのような物と銅に似た色の装甲を纏い、手にはナイフのような物を握っていた。

もう1つは紫の蛇にも見える装甲を纏った者。その手には牙にも見えるサーベルが握られている。

最後の1人はヘルメットが（サイ）の字に見える白い装甲を纏った者。その背中には何かの装置を背負っていた。

「な、なに？」

その者達が現れた事におさげの少女は怯え、ツインテールの少女は睨んでいるものの困惑の色が強い。

なにしろ、海東だけでなく謎の集団まで現れたのだ。本来なら逃げ

たい所である。

しかし、ツインテールの少女はジュエルシールドが目的故に簡単に引き下がるわけにもいかなかった。

「く、なんのつもりだ!？」

「何って? ジュエルシールドを手に入れる為に決まってるじゃないか?」

でも、君達は邪魔しようとするよね? だから、そうさせないための援軍だよ」

「ま、待って、く!？」

「フェイト!？」

「うわ!？」「あわわわわわ!？」

少年もツインテールの少女と理由はある意味同じ故引き下がれず、困惑の色を隠し切れないまま叫ぶように問い掛ける。

それに対し、海東は人差し指を差しながら答え、ジュエルシールドに向かってしまう。

ツインテールの少女はそれを止めようとするが、文字通り飛んできた白い装甲の者 サイガの突進を危うく受けそうになる。

幸いにも立ち止まることで回避出来たが、それを見て危ういと感じた獣耳の少女が駆け寄ってきた。

そして、それを切っ掛けに蛇の装甲を纏った者 王蛇が少年に襲いかかり、おさげの少女にも集団 ライオトルーパー部隊が襲いかかった。

「あわわわわわわ、きゃあ!？」

『プロテクション』

おさげの少女 名を高町なのはと言っのだが、そのなのはにライオトルーパーの1人が斬りかかってくる。

それを慌てながら後ろに飛んで避けるものの、もう1人のライオトルーパーがナイフを折り曲げて銃の形にし、エネルギー弾を撃ってきた。

そのことになのはは思わず両腕で顔を守りつつ背けてしまうものの、



杖から女性ののような電子音が聞こえたかと思うとなのはの前に輝く魔方阵が現れて銃撃を防ぐ。

「きゃあ!？」

「なのは! く、これじゃあ」

そこへ別のライオトルーパーが跳んで斬りかかってきた。

それも魔方阵によって防げたものの、その攻撃でなのはは吹き飛ばされそうになる。

このことになのはの肩にいたフレット 名をユーノと言うのだが、どこか悔しそうな顔をしていた。

なのはは元々は普通の少女だった。しかし、この海鳴市にジュエルシードがやってきたこと。

それを回収するためにやってきたユーノと出会ったことで、魔導士となってジュエルシードの回収を手伝うことになった。

幸いだったのはなのはが魔導士として天才とも言える才能の持ち主であったこと。

ユーノに教えてもらいながらとはいえ、独自に訓練していくことでその才能を目覚めさせていった。

その反面、戦闘に関しては難を残している。

なのはは元々普通の少女故に、そういった物を学んではいなかった。それにジュエルシードを回収する際に戦闘が起きることもあるが、それも数える程度でしかない。

結果としてなのはは戦闘に関しては素人レベルでしかなく、このように集団で襲われては恐怖もあつて何も出来なくなってしまうのだ。「くそ、なんなんだこいつは!？」

一方、少年 名をクロノ・ハラウン。

この地球とは別の次元にある組織『時空管理局』の執務官を勤めるいわばエリートだ。

執務官がどういう役職なのかは説明が長くなるので割愛するが、その執務官となるべくそれ相応の訓練もしている。

その為、クロノはなのはよりも高い実力を持っているのだが

戦っている王蛇があまりにも異常すぎた。力や速さは明らかにクロナを超えている。

接近戦は避けたいが、王蛇の動きが速くてそれが中々出来ない。

どうやら空を飛べないと見て、空を飛んでみるのだが

『アドベンド』

「な！？ くう！」

王蛇が蛇の頭が付いている杖にカードをセットすると、どこからともなく赤いエイのようなモンスターが現れて襲いかかってくる。かろうじて避けるものの、2対1なった状態でクロナは更に追い込まれていった。

「くう！？」

「フェイト！？ くそ！ こいつ速すぎる！？」

サイガと対峙するツインテールの少女と獣耳の少女は窮地に立たされていた。

ツインテールの少女の名はフェイト・テスタロッサ。獣耳の少女の名はアルフ。

2人はある理由から独自にジュエルシードを集めている。

その為、戦闘などの訓練を受けてはいる。といっても経験の方はまだ浅いのだが。

そのことを差し引いてもフェイトとアルフから見てサイガは圧倒的過ぎた。

まず、アルフが言ったとおりサイガは速かった。というか、速すぎた。

サイガの背中にはフライングアタッカーという飛行ユニットが装着されている。

文字通り飛行が可能となるのだが、特筆すべきなのはその速力。

最高速度は時速にして820km。亜音速と言ってもいい速度で飛行が可能だ。

フェイトも飛行速度は速い方だが、流石にサイガの速度までは出せない。

故にサイガを捉える事が出来ずにいたのだ。

「くう!？」

「フェイト!? くあ!？」

更にサイガの攻撃が凄まじかった。

時折止まったかと思うとフライングアタッカーを変形させてライフル形態にし、エネルギー弾を乱射してくるのだ。

しかも、そのエネルギー弾の威力が高く、フェイトとアルフは魔方阵の盾で防いでいるものの、下手に受ければその盾も破壊されかねなかった。

「く!」

「あ、フェイト!」

このままではマズイと考えたフェイトはエネルギー弾の乱射が止まったのを見計らって飛び出した。

向かう先はジュエルシード。アルフは慌てて追いかける中、サイガもそれに気付いてフェイトに向い突進してくる。

しかし、それがフェイトの狙いだった。

「バルディッシュ、ザンバーフォーム!」

『イエス、サー』

フェイトの指示に杖が男性的な電子音で答えると変形して光の刀身を持つ大きな剣となり、フェイトはそれを振り向きながらサイガに向かって振り回す。

自身が囷となってサイガを引きつけて迎撃する。現に速度とタイミング的にサイガはフェイトの剣を確実に受けるのは間違い無かった。確かにフェイトの考えたとおり、サイガはフェイトの剣を『受ける』だろう。

だが、フェイトはここで2つの間違いを犯す。1つはジュエルシードを諦めなかったことだ。

ジュエルシードを諦めて退散すれば、少なくともこの後の結果は起きなかっただろう。

しかし、彼女はある理由からジュエルシードを諦めるわけにはいか

ず、故に退散することが出来なかった。

もう1つが　これが決定的なのだが、サイガの実力を見誤っていたことだ。

「え……」

その事実にはフェイトは目を見開く。

なぜなら、サイガはフェイトの剣を手で受け止めていたからだ。

フェイトは知らぬ事だが、このサイガは装甲と装甲を纏う者共に強い力を持つ。

しかし、フェイトは経験の浅さから、そのことに気付くことが出来なかった。

「あぐ!?!」

更に状況は悪化する。

サイガはフェイトの剣を受け止めたが、突進をやめたわけではない。故にフェイトは突進をまともに喰らう事になり、そのままサイガと共に落ちていく。

突進のダメージは着ている物が魔法で作られた物だったおかげで軽減されている。

だが、流石に亜音速の突進の威力は強すぎて軽減しきれずに激痛が全身を貫き、フェイトは顔を歪めていた。

そのせいで気付けなかった。このまま落ちたらどうなるのかを

「か!　はあ!?!」

そう、その先にあるのは地面。

フェイトのそのことに気付く前に地面に激突し、全身を飲み込むほどの大きさのクレーターを穿ちながら、その身を地面にめり込まされる。

そのあまりの激痛にフェイトは目を見開き、やがて事切れたように手足を地面に付け、目を閉じて意識を失ってしまう。

「てめえええええええ!!　良くもフェイトをおおおおおお!!　?」

それを見たアルフが怒りの形相で突っ込んでくるが、すでにフェ

イトから離れていたサイガはその突進をあつさりと避け

「があ!？」

容赦の無い回し蹴りで、アルフを蹴り飛ばす。

「がは!？ あ、ぐ……フェイ」

そのまま地面に激突したアルフは手を伸ばそうとするがそのまま気を失い、伸ばした手が地面に落ちた。

「さてと、みんなが相手をしている間に、おや？」

その光景を眺めていた海東は飽きたとばかりに振り向くが、そこで自分の前に何かの制服らしき物を着た十数人の男達が光に包まれながら現れた。

「やれやれ、まだいたんだ」

その男達は杖を構えるが、海東はその様子に呆れたように首を振る。

そして、1枚のカードを銃にセットし

『仮面ライド ゼクトルーパー!!』

銃のトリガーを引くとベストのような黒い装甲と戦闘服を纏い、バツタを思わせるフルフェイスヘルメットをかぶり、右手にボールのような銃身を持つマシンガンがはめられている10人の集団が現れ、先程現れた男達に向かい隊列を組んでマシンガンを撃ち始めた。

「ま、まだ味方がいたの!？」

この光景をモニター越しに見ていた栗色のショートカットヘアにどこかの制服を着た少女が驚愕していた。

少女の名はエイミー・リミエッタ。可愛らしく整った顔立ちをしているのだが、今はモニターに映る光景に顔を引きつらせている。

エイミーがいるのはどこかの施設にも見える所で彼女の他にも複数の男女がいて、エイミーと同じ光景を見て困惑や驚愕といった表情を見せていた。

「まさか、管理外世界にあんな者がいたなんて」

長いエメラルドグリーン製の髪をポニーテールにした女性が、同じようにモニター越しに映る光景を見て綺麗な顔立ちを歪めていた。女性の名はリンディ・ハラオウン。若く見えるがモニターに映るクロノの母親でだったりする。

それはともかく、リンディは悩んでしまう。リンディがいる場所は『アースラ』と呼ばれる巨大な艦船のブリッジだ。

リンディ達は時空管理局と呼ばれる所の職員であり、ある理由からなのは達がいる世界に来たのである。

本来は世界に来たという意味を詳しく説明する必要があるのだが、それは後ほど行うとして

来たままでは良かったが、海東という予想外のイレギュラーに困惑していたのだ。

アースラには戦闘員はまだいるが、海東が見せる力　リンディは召還のような物だとかんがえているが　を考えるとまだ呼び出せる可能性が高い。

これからのことを考えると下手な消耗は危険な為、なのは達がいる所へ増援を送るのも躊躇われる。

そのことにリンディは悩むものの解決策が思い浮かばない。

ロストロギア　ジュエルシードのことだが、それを諦めて全員を撤退させようかとも考えるが

「それになんなの、あいつ？　魔力が一切無いなんて　で、別の反応！？　クロノ達の所に向かつてる！？」

「なんですつて！？」

海東から魔力の反応が無いことに首を傾げるエイミィだったが、不意に現れたセンサーの反応に思わず驚いてしまう。

リンディもそれを聞いて驚き、センサーを凝視してしまう。確かに3つの反応がなのは達へと向かっていた。

ただでさえ厄介な状況に新たに現れたイレギュラー。もしや、新たな敵か　そう考えたリンディは更に表情を歪めてしまう。

「え？ なに？」

一方、なのは達の元に3台のバイクが止まり、乗っていた者達がヘルメットを脱ぎながらバイクから降りていた。

そのことになのはは困惑するが、他の者達も突然の乱入者に動きを止めて顔を向けてしまう。

「なんか、厄介なことになってるな」

「な、なあ……あれって、仮面ライダー……なのか？」

その内の1人である土がなのは達の状況を見てため息を吐くが、もう1人である雄介がサイガや王蛇、ライオトルーパーやゼクトルーパーを見て困惑する。

土達はこの世界に来てから、たまにはツーリングしながら見て回ろうという土の意見でバイクで海鳴市を回っていた。

その最中に土と麗華に麗葉が変な気配を感じ、そこへ向かって走っていたらここへたどり着いていたのである。

「おや、君達は喫茶店にいた子達じゃないか」

「その声……海東か？」

「え？ ていうか、あの人も仮面ライダー？」

「というか、あれではまるで……ディケイドではないか……」

ディエンドが海東であると気付いた土の横で望はそのことに軽く驚いていた。

その一方で麗華はディエンドの姿に戸惑いを隠せない。

ヘルメットやスーツのデザインや色は違うのだが、雰囲気明らかにディケイドに似ていたのである。

「で、お前は何してるんだ？」

「なに、そこにあるジュエルシードっていうお宝を手に入れようと思っただけで、邪魔されちゃってね。それで応戦してたってわけ」  
「応戦ね。にしちゃ、やりすぎじゃないか？」

肩をすくめながら答える海東を問い掛けた土は睨んでいた。

土達の登場で戦闘こそ止まっているが、状況から見てなのはやくろ

ノ達が一方向的にやられていたように見える。

それにフェイトやアルフに至っては完全に気を失っていた。そのことに雄介や望達も睨んでしまうが

「ボクとしてはお宝を諦める訳にはいかないからね。それなりの対処はするさ」

「にしたってやりようはあるだろうが？」

「その結果がこれだよ。それとも、君達も邪魔をするのかな？」

睨む士に話していた海東は銃を向けて挑発してくる。

そのことに望は思わず士の後ろに隠れてしまうが、士は雄介と麗華と共に海東を睨み続けていた。

「渡しちゃダメです！ それは危険な物なんです！」

「ネズミさんがしゃべってる？」

「だ、そうだが？」

「お宝を手に入れるのに危険は時に付きものだよ」

ユーノが思わず叫んだ事に麗華は首を傾げる。

ネズミというのは麗華の勘違いだが、動物がしゃべる所を見てなんだろうと思ったのだ。

一方、麗華は魔法では人の言葉を話せる動物がいることを知っていたので大して驚きもしなかったが、逆に雄介と望はそのことに驚いて声を失っている。

そんな中、大して気にした様子を見せない士が問い掛けるが、海東はおどけた様子で答えていた。

「ど、どうするんだよ？」

「海東の邪魔をした方が良さそうだな。というか、明らかにやり過ぎてる」

「その方が良さそうだな」

戸惑う雄介に士はベルトを取り出しながら答え、麗華もカードを取り出しながら同意する。

なのはのような子供を複数で襲わせるのは明らかにやりすぎにしか思えない。



フェイトとアルフは土達の位置からでは確認が難しいが、倒されて気絶しているように思える。

理由はわからないが海東はやり過ぎているようにしか見え、彼を止めた方がいいと考えたのだ。

雄介も同じ考えのようでカードを取り出しながら海東を睨み

「……変身……!」

『仮面ライド デイクライド!』 『ターンアップ』

海東を止める為に土、雄介、麗華と麗葉は変身する。

その光景になるのは達は驚いてしまうが

「へえ、君達も仮面ライダーなんだ。でも、やるっていつなら相手をしてあげるよ」

海東はどこか嬉しそうにしながらも、構えを見せる。

そのことに呆れながらも、土はケースを剣に組み替えて持っていた。

「俺は倒れてる子供達の所に行く。麗華はあっちの女の子を、雄介はあっちの男の子を頼む」

「で、でも他の人達は？ ていうか私は!？」

「あっちはあっちでがんばってもらうしかない。望はどうか隠れててくれ」

「あ、ちよつと!？」

戸惑う望に指示を出していた土が答えて雄介と麗華と共に駆け出す。望は逆に困ってしまった。

なにしろ、隠れようにも隠れられるのが木の陰くらいしかない。

今までの戦闘を見てきた望にとってはそれはあまりにも頼りなく感じてしまい、本当に大丈夫かと不安になったのだ。

「は！ 大丈夫か？」

「あ、はい、ありがとう、ごじます……あの、あなた達は？」

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「仮面ライダー、ですか？」

ライオトルーパー達に斬り込み、なのはの元にたどり着く麗華。

なのはは小さく頭を下げながら問い掛けると、麗華は顔を向けて答

えてからライオトルーパー達に向き直した。

その返事にユーノは首を傾げていたが。

「おりゃあ!」

その一方で雄介も王蛇に殴りかかるものの、避けられて距離を取られていた。

「く、君達はなんなんだ!? あいつの仲間か!？」

「あ、いや……知ってるだけで仲間ってわけじゃ、つておわ!？」

それである程度自由になったクロノに怒鳴られて困りながら答えようとする雄介であったが、王蛇に斬りかかれて慌てて逃れる。

その雄介の返事をクロノは信用出来なかった。なにしろ、海東と知り合いのようだし、ここへ来た目的もわからない。

雄介達もジュエルシードを狙っているのかと思ったのだ。

「まったく、ボクの邪魔をしないで欲しいものだね」

「邪魔をされるようなやり方をしてるからだろうが」

銃で剣を受け止める海東に、斬り込んだ土がそう返す。

土がなんで海東と戦っているかといえば、フェイトの近くに海東がいたからにすぎない。

その後ろではジュエルシードが未だに宙に浮いていたが、今はそれに構ってる暇は無かった。

海東を近付けさせない為もあるが、どんな物かわからない為に下手に近付けないとも感じていた為だ。

「よつと」

「く!」

そこで海東が剣を弾き、撃ってくる。

そのことに舌打ちながらも土は避け、ケースを銃に組み替えながら撃ち返した。

海東もステップを踏むかのように躲すと撃ち返し、土も避けて撃ち返し　そんな繰り返しが行われる。

「ぬお!? おわつと!？」

「はあ! くつ、しつこい!」

一方で王蛇の攻撃をなんとか躲し続ける雄介。麗華は数の多さに押されそうになっていた。

神鳴流には多数に対する技があるが、それは気を用いなければ使うのが難しいという難点がある。

変身して麗華と合体しなければ気を用いた技をほとんど使えなかった麗華は、それが理由でその技を習得出来なかった。

故に多数相手には苦戦を強いられてしまうことがあるのだ。

雄介の場合は王蛇の実力が高く、武器もあって迂闊に近付けないというのが大きい。

紫の姿になりたい所だが、その姿だと動きが遅くなって王蛇に追いつけなくなる。

いくら防御力が高まるといっても、攻撃を受け続けるのは倒されるのと同義だ。

なので青の姿になりたい所だが、青の姿は素早さが上がる代わりに腕力が低下してしまう。

それを補うために武器を使うのだが、武器を使うためには最低でも長い棒が必要となる。

が、雄介の周りには棒が無かった。それで姿を変えることが出来ず、王蛇に押される形になってしまったのだ。

「くそ！」

クロノも王蛇が呼び出したモンスターとサイガの相手に苦戦を強いられていた。

動きが速い上に自由に飛び回って捉えるのが難しい。

トラップを仕掛けてはいるが、その動きと2対1という状況に誘い込むことが中々出来ずにいる。

クロノの仲間と思われる者達も海東が新たに呼び出した集団　ゼクトルーパー隊との相手に拮抗状態にあった。

士も撃ち合いをやめて海東と睨み合っており、このまま膠着状態が続く　かに思われた。

「封印！」

「え？ あ！？」

と、そんな声が聞こえて海東が顔を向け、その光景に驚いてしま  
う。

何があつたかといえ、なのはがジュエルシールドに持っていた杖を  
向けていたのだ。

なのはがなぜここにいるかといえ、麗華が助けに来たことで向か  
ってくるライオトルーパーの数が減つたのである。

おかげでなんとか対処出来るようになり、向かってきた2人を魔法  
で拘束してジュエルシールドの元にたどり着いたのだ。

そして、杖を向けられたジュエルシールドは杖の先端にある赤い宝玉  
に吸い込まれていった。

「あちゃ〜、取られちゃつたか……ま、いいや。別にあれ1つじゃ  
ないしね。

じゃ、ボクはこれでおいとまさせてもらうよ。でも、次は邪魔をし  
ないで欲しいな。じゃあね〜」

『アタックライド インビジブル!!』

そのことに海東は肩を落とすがすぐに立ち直つて銃にカードをセ  
ットし、そんなことを言い残して文字通り姿を消してしまふ。

「おわつと！？ あれ？」

「消えた？」

すると王蛇やサイガ、モンスターやライオトルーパー、ゼクトル  
ーパーらの姿がテレビの砂嵐のようにぼやけたかと思うと全員消え  
てしまふ。

そのことに雄介や麗華は辺りを見回しながら戸惑いを見せていたが。  
「なるほど、人から奪う気は無いということか……助かったよ、嬢  
ちゃん」

「あ、いえ、その……」

ケースを腰に戻しながら考える土が礼を言うと、言われたなのは  
は照れくさそうにしていた。

その様子に思わず微笑んでしまふ土であつたが

「時空管理局だ！ お前達の身柄を拘束させてもらう！」

クロノが杖を向けながらそんなことを言い出していた。

ひどいと思われそうだが、ある意味仕方の無い対応でもあった。

なにしろ、士達は現時点では身元不明な上に明らかに強い力を持っている。

それに助けてもらったとはいえ、味方であると決まったわけでは無いのだ。

また、海東のこともあったので、クロノとしてはどうしても警戒してしまふのである。

「時空管理局？」

「この世界の警察みたいな組織か？」

「この世界？」

一方、クロノの対応に雄介が首を傾げ、士はあごに手をやりながら考えている。

その土の一言にユーノが反応して

『クロノ、杖を下げなさい』

「母さ、艦長！？ こいつらは」

『落ち着きなさい。先程のこともあるのはわかるけど、相手を下手に刺激するものではないわ』

「は、はい……」

突如、士達の目の高さに現れたモニターのような映像に士やクロノ、クロノ仲間達以外の全員が驚く。

そして、その映像に映る女性　リンディの言葉にクロノは反論しようとするが、逆にたしなめられていた。

『私は時空管理局所属巡航艦アースラ艦長のリンディ・ハラオウンです。』

申し訳ありませんが、詳しい話を聞きたいのでこちらに来て頂けないでしょうか？』

「その方が良さそうだな」

「いいのか？」

「一応、海東の邪魔をしたはいいが、ここで何が起きてたかわからないんだ。

それを聞いた方がいいだろうし、その方がこの世界でやることもわかるだろ？」

「そうだな。ていうか今更だけど、そういうのは教えて欲しいよな」「そうだよな」

麗華の問い掛けに肩をすくめていた土は変身を解きながら答える。それに納得しながらも同じく変身を解く雄介はぼやいていたが。

まあ、異世界に行かされても、その世界で何をすれば良いのかわからない。

今までは怪人を倒して終わりだったが、それだけだったとしても教えて欲しいと思うのだ。

そんな雄介のぼやきに同意しながら、望も土達の元へと来ていた。

「おっと、そういえば」

そこで土が何かを思い出して歩き出す。その先にいたのは気絶しているフェイトだった。

「よっと。麗華、悪いがそっちを頼む」

「わかった」

「すまないが、この子達の手当てを頼めるかな？」

『ええ、そのくらいでしたら、お安いご用です』

そのフェイトをお姫様抱っこの形で抱き上げる土はアルフのことを変身を解いた麗華に頼んでからリンディにもお願いをする。

そのことにリンディは笑顔で答え

「ん、んん……うん……だ、れ？」

「通りすがりの仮面ライダーだ」

「仮面、らい、ん……」

抱き上げられたことで気が付いたフェイトが、かすかな意識で問い掛ける。

そのことに笑顔で問い掛ける土であったが、それを聞いたフェイトは再び意識を失ってしまうのだった。

「仮面ライダーって……なんだろう？」

その様子を見つめていたなのは、そんな疑問を持ってしまっ  
なせか、大事なことのような気がしてならなかったから

## 第14話『魔法少女と仮面ライダーとトレジャーハンターと』（後書き）

そんなわけで時間が掛かっちゃいましたが、魔法少女リリカルなのは編です。

どうでしたかね？ 私的には不安いっぱいな感じで書いてましたが、ちなみに時間が掛かった理由は仮面ライダーフォーゼ×ISのクロスSSを書いてたからだっったりします。

仕事の執筆とかに追われてて、気分転換に書いた物なんですけど……見事に1話書き切っちゃいました。

なにやってるんだ私……ちなみに見たい方います？

内容としては一夏がフォーゼに変身。作品内独自設定改変という形になってますけど。

それでもいいというか違いましたら、ご感想にでもご一報ください。もしかしたら、掲載するかもしれません。もしかしたら

さて、海東が本格的に参戦となりましたが、この海東は原作とは違う設定になっております。

そっちの方は追々物語りでも書いていきますが、今回のように人から奪うような真似はしません。

そうでなかったら容赦はしませんけどね。

次回はリンディと話し合うことになった土達。

一方、フェイトは今までしてきたことが明るみとなってリンディ達に拘束されそうになるのですが

といったお話です。それでは、次回またお会いしましょう。



## 第15話『少女達の想い』

「すごい」

「ですねぇ」

「そうだな」

話し合うことになり、土達やなのは達はアースラの艦内へと転送という形で連れてこられた。

ちなみにバイクも一緒に転送されている。どうやら、リンディが気を利かせてくれたらしい。

一方でその艦内の様子に望となのはや雄介は感心してたりする。なにしろ、魔法使いの船だからファンタジーに出てくるような帆船を思い浮かべていたのだ。

しかし、実際は未来SF的な文字通りとんでもないテクノロジーで造られた戦艦だったのである。

そのことに望や雄介、声には出さなかったが麗華やも軽く驚いていたのだ。なお、麗葉も興味深そうに辺りを見回しているが。

「それじゃ、頼む」

「はい」

一方、土は白衣を着た男性と話していた。

気絶しているフェイトとアルフを任せる為で、2人は白衣を着た男性と女性によってストレッチャーで運ばれていった。

「では、付いてきてくれ。その前に君はバリアジャケットを解除した方がいい」

「あ、はい」

クロノに言われ、なのはは意識を集中させる。

すると制服のような白い服が普段女の子が着るような普通の服へと変わっていた。

「なるほど、魔力で先程の服を作っていたのか。というか、あれは防御用か？」

「いいなあ」

その光景に感心する麗華と望。雄介も声には出さないだけで同じような様子であった。

一方で麗華は目を輝かせている。まあ、土達と暮らすようになってアニメなどを見るようになったのだが、その影響があるのかもしれない。

「君も元の姿に戻ったらどうかかな？」

「あ、そうですね」

「へ？」

と、クロノに言われてユーノがうなずくが、なのはは首を傾げていた。

言っている意味がわからなかったからだが。その間にユーノの体が輝き

その輝きが消えると肩まである淡いブロンドの髪に民族衣装を思わせる半袖半ズボンを着て、マントを纏った少年へと変わっていた。

「ふう、そういえばなのはにはこの姿は久々に」

「え、ええ〜!？」

「え、どうしたの!？」

少年　ユーノなのだが、にこやかに話しかけようとしたらなのはに驚かれてしまう。

どうしたのかと思ったのだが

「え、ユーノ君、その姿って」

「え？　確か、会った時にこの姿は見せたと思ったけど」

「私、フェレットのユーノ君しか見てないよ！」

「え？　だって、あの時、あれ？」

「どうも、お互い勘違いしてたみたいだな」

「そのようだな」

驚くなのはと戸惑うユーノのやりとりを見ていた土とクロノはそんなことを言い合っていた。

ちなみに望達はユーノの変身に驚いて固まっていたが。

そんなこともあったものの、改めてクロノに案内されて艦内を歩く土達。

その間、艦内を見回していたのだが、どう見ても魔法が使われてるようには見えなかった。

その辺りを聞いてみるとエネルギーとして魔法を使っているのとどだったが。

「艦長、彼らを連れてきました」

「ご苦労様」

ある一室に通されて中に入り、その光景を見て土とクロノを除く全員が固まった。

というのも、いかにも戦艦の一室に見える一角に畳を敷き詰め、その上にリンデイが正座していたからだ。

しかも、周りには茶器があったり、ししおどしがあったりと和風の造りとなっている。

激しく何かを間違っている気がしてならない。

「あら、どうかなされましたか？」

「いや、日本を勘違いした外国人を見ているような気分になってな」  
笑顔で問い掛けるリンデイに土は額に手を当てつつ、ため息混じりに答えるのだった。

その後、畳の上に思い思いに座り、まずはユーノからこれまでの経緯を聞くことになり

「そう、大変だったのね」

「しかし、無謀だ」

あらあらと言った様子のリンデイだがクロノは無然と言い放ち、そのことでユーノはうつむいてしまう。

話を要約するとユーノが乗っていた艦が事故を起こし、その影響でジュエルシードがなのはの世界に落ちてしまった。

ジュエルシードはわかっていないことも多く、下手をすれば大きな

事故を起こしかねない。

そのことを考えたユーノは時空管理局に連絡を手早く済ませ、落ちたジュエルシードを回収する為になのは世界に降り立ち

ジュエルシードによって起きた現象で力を使い果たし、以降はなのはの助力を得て回収を続けていたそうなのだ。

「そうは言うけどな。確かに無謀だったが、あんたらがすぐに来られるんだったら苦労はしなかったと思うけど」

「う……」

どことなく擁護するような土の言葉にクロノは軽くたじろいでいたが。まあ、ユーノに非が無いわけではない。

キッチンとやり方を考えていれば安全に回収出来たかもしれない。それに彼が経緯等をちゃんと話していれば、リンディ達か他の時空管理局の職員が来るのが早まる可能性もある。

しかしながら組織という形式上、手続きや準備等でどうしたって時間が掛かってしまう。

なので、時として手遅れだった可能性もありえたのだ。そういった意味ではユーノの判断も間違いとは言えない。

ただ、なのはを巻き込んでしまったのは別の意味で問題ではあったが。

「ユーノさんの話はわかりました。では、あなた方のこととディエンドでしたか？ 彼のことを聞きたいのですが」

「そうだな。先に海東、あんたらが言うディエンドだが、偶然会ったとしか言えない。名前はその時に聞いた。

で、俺達のことだが……俺達が異世界から来たと聞いたら、お前さん達はどう思う？」

「え？」

「異世界？ 次元世界のことか？」

土の返事に問い掛けたリンディはクロノと共に首を傾げる。

しかし、続けて土の話を聞く内にみるみる顔が強ばっていき

「そんなのはありえない!？」

「きゃ!?!」

クロノがいきなり叫んでしまった為になのはは思わず驚いてしまったが。

クロノの反応はある意味仕方が無い。なにしろ、彼らの常識では土の話はあり得ないのだ。

行く先々の世界の文明が違っているのはまだいい。普通に海外などに行けば文明が違っているのは当然だからだ。

しかし、土が言う行った先々の魔法や魔術はクロノ達の常識から明らかに外れていた。

クロノ達の魔法はデバイスと呼ばれる杖のような物を使って行使される。

デバイスにはAIのような物があり、それを介することで呪文詠唱の短縮や汎用性を高めることが可能となるのだ。

むしろ、デバイスを使わなくとも魔法は行使出来る。

しかし、土の話を書く限りでは彼が話す魔法や魔術はデバイスが無くとも高い汎用性があるように思えるのだ。

それに土の話に出てきた電撃使いの少女の話もクロノ達にしてみればありえない。

レアスキルで魔力を雷などに変換出来る者は確かに存在する。

しかし、土の話出てきた少女のような汎用性は無い。せいぜい、魔法に上乘せがいい所だ。

だからこそ、クロノは否定しかつたのだ。土の話を。

「そう言われてもな。実際に見てきたことだし」

「そうだよなあ」

「その話は別にするにしても……あなた方がしていることはあなた方がするようなことで無いわ」

肩をすくめる土の言葉に雄介が同意するようにならずが、それに対してリンディはそう言い放つ。

土達のやっつてるとは極端な話、怪人を倒して世界を救うようなものだ。

むろん、リンディは世界を救うという部分は信じてるわけでは無いが、怪人達を倒すというのは士達がするようなことでは無いと思っ  
ている。

むしろ、それこそ自分達時空管理局が行うことだと思っていたのだ。  
「別に頼まれたからってだけじゃない。俺がやるうと思っただからや  
っている。」

ついでに言えば厄介ごとが俺達の所にも来ないようにしようと思っ  
てるのもあるけどな」

そんなリンディに対し士は肩をすくめながら返した。

士に世界を救うという考えは微塵も無い。ただ、厄介そうだからな  
んとかしよう。

その程度の考えで行っているにすぎないのだ。

「あなた達はいいの？」

「私は……何か出来る訳じゃないけど、見守ってないとなんか不安  
だし」

「俺はただなんとかしたいってただけだしな」

「私は士に救われた。その恩を返したいだけだ」

不安そうに問い掛けるリンディに望は苦笑しながら、雄介は後頭  
部を掻きつつ、麗華はうなづくように答える。

望はただ不安故に士について行っている。そうしないと士はどこか  
に行ってしまうような気がしてならないからだ。

雄介はなんとかしたいというのもあるが、誰かの笑顔を守りたいと  
いう想いが強いのもある。

麗華は言葉通りだ。士に自覚は無かったとはいえ、色んな意味で救  
われた。その恩義に応えるべく一緒に戦っている。

麗華も麗華と同じような想いであつたし。

「ですが」

「ま、望達はともかく、俺は俺の為に戦っている。そう思ってくれ  
ればいい」

困惑するリンディに士は苦笑混じりに答えた。

良くも悪くも士は自己中心的であり、戦ったり何かに関わっていたりするのも厄介ごとを早々に終わらせる為でしかない。

これまでのことも結果的に良い方面に向かっていたにすぎないのだ。「そうですね……あなた方のことに関しては保留にいたしますが、ジュエルシードに関しては時空管理局が全権を持ちます」

「え？」

「これからのことは僕達に任せて、君達は日常に戻るといい」

一度息を吐いてから言い放つリンデイの言葉になのはが思わず顔を向けるとクロノもうなずきながらそう言い聞かせた。

「まあ、確かになのはちゃん達に危険なことをさせるわけにもいかないからなあ」

「でも、いきなりこんなことを言われても困るでしょうから、今日は帰ってゆっくりと考えるといいわ」

その話には雄介が納得する中、リンデイは微笑みながらそんなことを言い出す。

それに対し、なのはは戸惑った顔をする一方で士は何か気付いたように眼を細めた。

そして、ふっとため息を吐き

「そうだな。なら、俺達の勝手にやらせてもらおうさ」

「っ！？」

「士？」

士の言葉にリンデイの表情が一瞬で強ばるが、望はそのことに気付かずに訝しげな顔になる。

望は士の言葉の意味を理解出来なかったが、リンデイは理解してしまっただからこそその反応であった。

「別に構わないだろう？俺達は自分達のやることに戻って、なのははいつもの日常に戻る。」

ま、その行く先でジュエルシードが出てきたりしたら、その時はその時で対処するけどな」

「あなた……」

それに構わず不敵な笑みを浮かべる士にリンディは顔を強ばらせながらも内心は恐怖していた。

士はこちらの意図を見抜いている。その上であんなことを言ったのだらうと感じた。

でなければ、あんな意味ありげな言い回しなんかしない。

この時、リンディは士が老齢の兵士に見えた。なぜ、そんな風に見えたかはわからないのだが。

「どういうことだ？」

「なに、結局変わらないってことさ。俺達もなのはもやることはなただ、俺達はなのはの手伝いをした方が良さそうだがね」

「お前、何を言って」

「あ、あの、そんなわけには」

首を傾げる麗華に士は肩をすくめながら答える。

それを聞いたクロノは反論しようとしたが、なのははそれを遮る形で断ろうとした。

士達に迷惑を掛けると思ったからだか

「あた!？」

「は、ガキが大人ぶってるんじゃない。お前さんは心配して言うてるんだらうがな。」

じゃあ聞くが、お前は心配してる奴のことを考えたことはあるか？」

が、士に軽いデコピンをされた拳句、そんなことを言われて目を白黒するはめになったが。

「どついう、ことですか？」

「お前さんはただ心配するだけで、そいつのことも自分のことも考えてないっただけだ。」

その様子じゃ、親にもやってること内緒にしてるんだろ？」

「え？ あ、はい……魔法のことは内緒にって言われてたし……」

「たぶん薄々だとは思つが、何をしてるかは気付かれてると思うぞ」

「ええ!？」

士の言葉に問い掛けるのはだったが、最後の方はユーノと一緒に



に驚くはめになった。

まあ、なのは達にしてみれば親に気付かれてないと思っていたのだ。故に土の言葉は意外すぎたのである。

「大人はお前さんが思ってるほど甘くはない。

なんで何も言わないかは聞かなきゃわからないが、少なくとも心配はしてるだろ。

それでもお前さんは言えるのか？ 誰かを心配させたくないって？」

「なのは！？」

それでも言い放つ土の言葉になのはは崩れ落ち、ユーノがそのことに驚いた。

なのはは以前父親が重傷を負い、その関係で家で1人であることが多くなった。

それが関係しているのかは不明だが、なのはは自分がなんとかしなければという想いに駆られてる節が見られる。

ジュエルシードのことに関わったり誰かを心配させたくないというのも、その想いからだろう。

「先に答えを言ってみるとだ。お前さんは自分が怪我をしたらどうなるかも考えてないだろ？」

まあ、お前さんの歳でそこまで考えろってのは酷かもしれんが、少なくとも親兄弟に友達は心配するだろうな。

それでも言えるのか？ 誰かを心配させたくないって？」

土の問い掛けになのははうなだれた。確かに幼い故の短慮さもあるたのは否めない。

しかし、それ故に周りが見えておらず、ただひたすらに突っ走ろうとしてしまったのだ。

ただし、これは別になのはが悪いとかでは無い。彼女が幼すぎた故の過ちのようなものだから。

「もう1つ答えを言ってみるとだ。誰かに頼ったっていいし、時と場合によっちゃ丸投げしたっていいんだ」

「いや、それはどうかと思うけど」

「じゃあ、なにか？ ジュエルシードがどれ程厄介かは知らんが、なのは1人で解決しろとでも？」

「あ、いや……」

その一言を聞いて思わずツツコミを入れる雄介だが、話していた士に言われて言いよどむ。

断っておくが、士はなんでもかんでも丸投げしろと言ってるのではない。

「自分1人じゃ出来ないことだってある。そういう時は大人なり友達なり頼ってもいいんだ。」

その為に時空管理局つてのがあるんだし、ユーノだってなんでもつて訳にもいかないだろうが手伝ってくれてるだろ？」

「あはは……」

そう、なのは1人では出来ないこともある。

そういう時には人を頼り、時には全てを任せることも必要なのだ。

士はそう言い聞かせているのである。むろん、なのはが全てを理解するのは歳故に難しいだろう。

でも、大事なことを言っているのは良くわかっていた。

だからだろうか？ 士に言われて照れくさそうにするユーノを見てから、なのはは潤んだ瞳で士を見つめた。

今のなのはには士が凄いや人のように思えて

「まったく、あなたって何者なのよ？」

「言わなかったか？ 俺は通りすがりの仮面ライダーだ」

呆れた様子を見せるリンディに士は人差し指を立てた右手を挙げながら答える。

このことにリンディは士のことをおかしな人だと思った。雰囲気が見た目と一致しないのだ。

冷たい感じがすると思ったらなのはのことを気に掛けるようにあれこれとアドバイスをする。

まるで孫を可愛がる祖父だと、リンディは失礼ながらに考えてしまったのだ。

『艦長。例の子が目を覚ましました』

「わかったわ。それじゃあ、彼女にも話を聞いておこうかしらね」

「あ、あの、私も一緒にいっていいですか？ フェイトちゃんとか  
やんとお話ししたいから」

「ええ、いいわよ」

「俺達もいいか？ ちょっと気になることがあってな」

エイミイの通信にうなずくとリンディは立ち上がりながらそんな  
ことを言い出す。

それを聞いて正気に戻ったなのはの言葉に笑顔でうなずくが、土の  
言葉には怪訝な顔をしてしまう。

「嫌な予感、ですか？」

「ああ、どうにも放って置かない方がいい気がしてな」

「こういう時の土の勘って良く当たるしねえ」

首を傾げるリンディに土が答えると望は呆れた様子でため息を吐  
く。

それを聞いたリンディはふと考えていた。これまでのやりとりなど  
で土が見た目通りの者では無いことはわかつている。

彼が持つ力もそうだが、今までのことを考えると彼の言葉を無視し  
ない方がいいだろう。

「わかりました。では、まいりましょう」

結果、リンディは土の同行を認めることにした。

彼なら、何か進展を作ってくれるのではないかと思つて。

「ん、あ………」

その頃、医務室のベッドの上でフェイトは目を覚ましていた。

「っ………」

それと共に体に痛みを感じたが、我慢出来ない程でないのになん  
とか体を起こす。

それで医師が気付いたらしく、体の状態を問い掛けながら声を掛け

てきた。

それに対しては大丈夫だと答えつつ、フェイトは自分の様子を確かめる。

バリアジャケット　魔法で作られる防護服のことだが、それが解除されて今は黒のワンピースを着ている。

手元に自分のデバイスたるバルディッシュは無く、アルフは自分の横にあるベッドの上で未だに眠っている。

そこまで確認した所でフェイトは深くため息を吐く。

ここは時空管理局の艦の中であろうことは容易に推測出来た。

自分がやられる前に時空管理局の職員らしき人物が来たのは見ていたからだ。

それと共に非常にマズイ事態だということも推測出来る。

なにしろ、自分達がしてきたことが犯罪であることは自覚していた。それが知られば、時空管理局は自分達を拘束するだろう。

かといって逃げ出すのも難しい。バルディッシュは近くには無いし、第一ここは時空管理局の艦の中だ。

例え、アルフが目を覚ましたとしても結局は同じだろう。それを考えてフェイトは自分の体を抱きしめていた。

なんとしてもここから逃げ出さなければならなかった。

だって、そうしないと母の願いを実行することが出来ないのだから

そんな時だった。土達が現れたのは。

「あなたがフェイト・テストロツサさんね？　お名前はなのはさんから聞いているわ」

笑顔で問い掛けるリンディだが、内心はある疑問に満ちていた。

テストロツサの性は昔なんらかの事故のニュースで見た記憶がある。なのはにフェイトの名前を聞いた時にそのことに思い至り、エイミイに調べてもらっているが

どうやら、土の勘は当たりそうだとため息を吐きそうになる。

「あなた方が今まで何をしてきたかはなのはさんに聞いています。」

だからこそ、教えて欲しいの。なぜ、ジュエルシードを集めようとしているのかを」

自己紹介をしてからイスに座るリンディは真剣な顔で問い掛ける。それに対し、フェイトはうつむいたままであった。

フェイトが考えるのは母のこと。このままだと母に迷惑を掛けてしまう。

なんとかしたいが今の自分ではどうしたらいいのか思いつかず、結局黙るしかなかった。

そのことに気付いたのかリンディはため息を吐き

「ちよつといいかな？」

「え？」

士が声を掛けてきたことにリンディは思わず呆然としてしまう。

いきなり何をと思ったからだが

「誰かに頼まれたのかな？ そのジュエルシードつてのを集めるのを？」

「あ……ん……」

士の問い掛けにフェイトは思わず顔を向け、すぐにうつむいてしまう。

が、その瞳が揺れていることに士とリンディは見逃してはいなかった。

士が問い掛けたことをリンディも考えなかったわけではない。

フェイトはなのはと同じくらいの歳だろうから、それを含めて考えても自主的にジュエルシードを集めるのは考えにくい。

ただ、リンディとしては段階を踏んでから聞きたかったというのが本音だ。

フェイトに何かあるのは最初のやりとりで気付いていたし、だからこそ慎重を期したかったのだが

「フェイトちゃん……」

そんな彼女をなのはは心配そうに見守る。

なのはとしても知りたかった。フェイトがなぜ必死になってジュエ

ルシードを集めるのかを。

その為に今日までフェイトと戦ってきたのだから。

「く、うう……ここは？」

「アルフ」

そんな時だった。アルフが目を覚まし、体を起こそうとしていたのは。

そのことにフェイトが声を掛け、そのことで誰もが顔を向けて

「へ？」「え？」

土が首に腕を回して連れ去ろうとするのを連れ去られようとしているアルフとフェイトは目を丸くしてしまふ。

まあ、他の全員も同じような物だったが。

「悪いがちょっと話を聞かせてくれ」

そう言いつつ、土はアルフを医務室の外に連れ出してしまふ。

「て、ちよつと待ちな！？ 何する気だい！？」

外に出た所で正気に戻ったアルフが土の拘束を離れ、顔を赤くしながら歯をむき出し睨み付けてきた。

「さっきも言ったとおり、話を聞きたいだけだ。あの嬢ちゃん、誰かをかばってるのか話す気は無さそうだね。

でも、それだと色々とまずいことにもなりかねない。だから、あんなに聞こうと思ってな」

「け、けどな」

「もし、話してくれるなら、あんたらがやってきたことは大目に見てもらえるかもしれないぞ？」

言いよどむアルフ。彼女としてはフェイトの不利になるようなこととはしたくなかった。

しかし、話し掛けてきた土の言葉に思わず目をむき出してしまふ。

「ほ、本当かい？」

「話次第、にもよるだろうけどな。そっちの判断はリンディさんにしてもらうさ」

問い掛けるアルフに土はリンディがいる方へと顔を向けながら答

えた。

リンディは雄介と麗華と共に土の元に来ており、土の言葉に静かにうなづく。

なお、ここにいない他の者達はフェイトの所で話し掛けていたりしたが。

「わかったよ」

それを聞いてアルフは静かに話し始め　その内容に土を除く聞いていた全員が顔をしかめていた。

フェイトは母親であるプレシア・テストロッサに頼まれてジュエルシードを集めている。

何に使うかまでは聞いてはいない。ただ、集めてこいと言うだけ。けど、集めてきても理由を付けてフェイトを虐待する。そのことで

アルフはくそ婆と呼ぶ程に憎んでいると。

アルフの話を要約するとそのようになる。

「そんなの親のすることかよ！」

雄介が思わず怒鳴ってしまったが、ある意味当然かもしれない。

なにしろ、雄介としては許せない行為をプレシアはしていたのだから。

麗華も似たような顔をしているが、一方でリンディと土だけは考え込むような仕草をしている。

リンディはプレシアのことをある程度であるが知っており、なぜそんな人物がジュエルシードを集めているのかと疑問に思っていた。

一方、土はアルフが話した内容に疑問を持つ。どの部分かと聞かれたら困るのだが、どうにも気になる一言を聞いた気がしたようだったのだ。

「なあ、プレシアって奴のこと調べてもらえるか？　後、何かわかったら俺達に伝えて欲しい。その為に通信手段があれば助かるけどな」

「ええ、元からそのつもりです。通信手段に関しては検討しておきましょう」

士の問い掛けにリンディはうなづく。

リンディとしてもプレシアに何かがあるのは間違い無いと思っている。

なのだが、どうにも不安がぬぐえない。なにか、他にもありそうな気がしてならない為。

「そ、それで……フェイトはどうなるんだい？」

不安そうに問い掛けるアルフだが、リンディは複雑そうな顔をしてしまう。

順当にいけばフェイトとアルフは拘束されることになる。

理由が理由とはいえ、2人がしたことは犯罪と言われても否定出来ないことだからだ。

かといって理由を考えるとリンディとしては拘束はしづらい。

時空管理局としては失格な考えではあるが、彼女個人としてはそう思ってしまうのだ。

「なあ、フェイト達を俺達に預けてくれないか？」

「はい？」

が、士がいきなりそんなことを言い出したために思わず呆然としてしまったが。

「し、しかし、彼女達は」

「まあ、流石に魔法を使えないようにしてもらう必要はあるだろうけど、その方がフェイト達にいいだろ」

「で、ですが」

士の言葉にリンディは困惑する。

士の言っていることはわからなくもない。それが最善だとも思う。しかしながら組織の手前上、はいそうですかと出来ることでも無かったのだ。

「なに、フェイト達を保護しただけだろ？ だったら、解放しても問題は無いよな？」

「あ、あなたって人は」

しかし、士の意味ありげなウインク混じりの言葉にリンディは額



に手を当てつつため息を吐いていたが。確かにフェイト達をここに連れてきたのは状況から考えてもそう言うのもいい。

通じるかは別にしても言い訳としては成り立つが、あまりにも無理矢理過ぎる言い分にリンディは頭を痛めていた。

「ま、フェイトは自分がしていることを理解してるようで理解してないのかもしれない。」

そういった意味では話をしたいと思ってね」

「……わかりました。ただし、魔法に関してはリミッターは付けさせてもらいますよ」

「妥当だろうな。今のフェイトじゃ、解放した途端に逃げ出しかねない」

ため息を吐きつつも不満げにうなずくリンディ。

士の言いたいこともわかる故になんとかしたいとも思っている。

かといって組織の手前上、心情だけでフェイトを半ば解放するわけにもいかない。

なので後の言い訳が大変になるが、とりあえず妥協点としてそんなことを言い出したのだ。

そのことに言い出した士は真剣な眼差しをフェイトに向けながら答える。

士としてはフェイトがなのはと同じくらいに周りが見えていない気がしてならない。

もしかしたら、それが不幸を呼び寄せるかもしれないとも感じている。

故にリンディの妥協案もある意味渡りに船に思えたのだ。

「ついでと言っちゃなんだが、なのはの両親に会ってこれまでのことを話してくれないか？」

魔法のことは秘密にしなけりゃならないんだろが、今回はその方がいいような気がしてな」

「む……」

で、ついでとばかりに土はそんなことを言い出すが、リンディは途端に考え込んでしまう。

確かにこの世界は管理外　時空管理局があまり手出ししていない世界であり、それ故に魔法のことなどが知られるのは好ましくないかといって、なのはの両親などにも秘密というのも難しいだろう。なんでこんなことを考えるかといえば、実は時空管理局は慢性的な人手不足に陥っている。

理由は魔法文明の世界なので時空管理局の職員は魔法を使える者で大半で占められているのだが

魔法が使える者が多くないというのもあるが、その者が魔法が使えるからといって必ずしも職員になるわけでもない。

他にも理由はあるがその為に時空管理局の職員の数、特に戦闘を行う者の人手が慢性的に足りていないのである。

それを示すかのようにアースラに乗る戦闘などをこなす実働部隊の人数もギリギリの数しかない。

故になのはに協力してもらうつもりでいたのだ。

ただ、リンディはなのはから自主的に協力を申し出るように仕向けようとして、土に見抜かれてしまっていたが。

ともかく、なのはに協力してもらうつもりなら両親に秘密というのは難しいだろう。

起こすつもりは無いが、何かあった場合のことを考えると色々マジイ事態にもなりかねないからだ。

むろん、話したからといって万事解決とはならないが、秘密にするよりはマシだろう。

「わかりました。準備を進めておきましょう」

「すまないな」

うなづくリンディに土は苦笑する。

それと共に考えてしまう。今回はかなり大事になりそうだと。



第15話『少女達の想い』（後書き）

そんなわけで私はガノタの野望を応援しています。

いきなりすいません。この作品が好きなのでして、早く新しい話が掲載されないものかと思ってるのですよ。

それはさておき、今回は話し合いの回となりました。

うん、上手くまとめられてない気がするならないよ^^;

自分で書いておいて不安いっぱいですが、それでも次回に続きます。

次回はリンディ達と共になのはの両親と話すことになった土達。

しかし、その先では といったお話。というわけで、次回またお会いしましょう。

## 第16話 『日常と非日常』

士達は今、なのは達とリンディ達と共になのはの家が経営している喫茶店『翠屋』みどりやへ向かっている最中であつた。

ちなみに士達のバイクはアースラに置いており、後でフォトシヨップに転送されることになっている。

後、フェイト自身とデバイスであるバルディッシュに使い魔であるアルフにはリミッターが掛けられ、魔法が使えないようにされた。フェイトとしては形式上任意同行という形にはなっているが、何もしないわけには行かない為にこのような措置となつたのだ。

で、向かつてるのはいいのだが、なのはとフェイトは落ち込んだ様子を見せている。

フェイトの方は母親の事やら今後のことを考えている為だが、なのはの場合は似ているようで違う。

というも

「いたずらして怒られに行くような顔をしてるな」

「あつ……」

士にそんなことを指摘されるが、なのはとしてはそのような気分であつた。

何しろ両親や兄と姉に魔法を含めた今までしてきたことを内緒にしてきたのだ。

それを話すとどんな反応をされるのか怖かつたのである。

そんななのはの内心に気付いてか、リンディは苦笑していたりするが。

その一方で士は妙な気配を感じていた。

遠くから誰かに見られているような、そんな気配を感じるのだ。

しかし、視線を周りに向けてもそれらしい者は見えない。

気に掛かるが指摘したからといってどうにもならないだろうと、今は無視することにしたが。

「ところでき。こつちつて確か」

「うん、フォトショップがある方向だよね？」

一方、なのはが案内する先を見て、雄介と望がそんなことを言い合っていた。

フォトショップを出る時はちゃんと確認していなかったが、住宅街であつたのは覚えている。

なので、その中になのはが言う喫茶店があるのだろうと2人は思ったのだ。

「あ、あれです。あれがお父さんとお母さんの喫茶店です」

そうこうしている内にたどり着いたらしく、なのはが一軒の建物を指差していた。

可愛らしくもセンス良く整えられた入口に土と望はどこか既視感を感じていたが。

「お母さん、ただいま」

「あら、なのは。お帰りなさい」

「あら、土に望じゃない。どうしたの？」

「それはこつちのセリフなんだがな」

挨拶をしながら入っていくなのはを出迎えるのはエプロン姿の女性だった。

なのはと同じ栗色の背中まで伸びる髪に可愛らしく整った顔立ち。

なのはとのやりとりを見なければ学生にも見える女性が笑顔で出迎えていた。

しかし、土や望達が気になったのはそつちでは無く　まあ、なのはの母親の若さとかも十分気にはなつたが。

問題はそこでは無く、なぜこの喫茶店に叶がいるかということである。

しかも、にこやかな様子でお茶までしている。このことに土としても顔を引きつらせる他なかった。

「うん、目の前がこのお店だったから、挨拶がてらに来てみたのよ」

「なんでも今日引っ越されてきたそうで」

で、士の疑問ににこやかに答える叶となのはの母親。

色々と疑問に思うことがあるはずだが、なのはの母親はその辺りは気にした様子を見せていないようだった。

「良かったな。少なくとも変に怒られることは無いと思うぞ」

「あははは……」

呆れた様子の士の一言になのは苦笑しか出来なかった。

確かにその通りかもしれないが、何か別の心配が出てきそうな気がしてならないからだ。

「おや、なのは。来ていたのか」

「あ、お父さん」

そんなことをしている内にエプロン姿の男性もやってくる。

見た目的には好青年にも見える顔立ちと整った黒髪。服装の上からでも鍛えてるとわかる体付き。

そんな男性だが、なのはの言葉を信じるなら彼女の父親らしい。

端から見てると若く見えて親子には見えないのだが

「あ、なのは。帰ってきてたんだ」

「う、うん」

で、その父親の後ろから別の少女が姿を見せる。

長い黒髪を1つに束ねて三つ編みにし、メガネを掛けた優しい顔立ちをしている。

雰囲気的なのはの母親に似ている感じがするし、なのはとのやりとりから見て姉なのだろうと士は思った。

「ただいま〜って、なのは。来てたのか」

「お兄ちゃん。それに忍さんも」

と、入口から青年が女性と共に入ってきて、なのはとそんなやりとりをした。

青年はなのはの父親より身長が少し低い以外は雰囲气的にも似ていた。

一緒に来た女性は紫に輝く長い髪に知的に整った顔立ちをしている。こちらの方はなのはの反応を見て、なのはの兄の知り合いなのだろう。

うと土は考えた。

「あ、いたあ！」

「え？ アリサちゃん？ それにすずかちゃんも」

不意に元気のいい少女の声が聞こえ、振り向いたなのはそこにいた少女に軽く驚きを見せていた。

アリサと呼ばれた少女はなのはと同じくらいの背にブロンドの髪を腰の辺りまで伸ばし、左側の一部をアクセントのように結い上げている。

顔立ちの方は可愛らしく整っているが、どこか勝ち気な様子を見せていた。

すずかと呼ばれた少女もアリサとほぼ同じ背であるが、こちらは紫に輝く髪を腰の辺りまで伸ばし、カチューシャを付けている。

顔立ちの方は優しく整っていて穏やかな表情を見せているが、どことなくなのはの兄と一緒に来た女性と雰囲気似ている気がした。

「やれやれ、一気に賑やかになったな」

「そういえば、この人達は？」

「あ、ええと……」

一気に人が増えたことに呆れる土だが、土達のこと気付いたなのはの兄の問い掛けになのはは言いよどむ。

改めて考えると家族に魔法のことを話していいのかと考えてしまったのだ。

一方、土は何か気付いて視線を外に向けていた。

「まったく、あんたは！ 今日はいったいどこに行ってたわけ？」

「え、ええと、それは」

「すまないが、ここを頼む。ちょっと用事が出来た」

「え？ あの」

アリサに詰め寄られるなのは。

一方、土はそう言いながら外に出てしまい、言われたリンディは戸惑ってしまふ。

しかも、何かに気付いた雄介、麗華、麗葉もついて行ってしまい、



更に戸惑うはめになってしまったが。

「どうかしたのか、土？」

「妙な天気だと思わないか？」

「え？ あ、な！？」

「結界？」

外に出た雄介の疑問に土が答えると麗華は何か気付いて空を見上げ、同じく気付いた麗葉が首を傾げた。

そう、麗華と麗葉には結界と思われる物が周囲に張られているのがわかったのだ。

しかも、多くはなかったとはいえ、あつたはずの人の気配が翠屋以外から消えている。

「どうということだよ？」

「さてな。あいつらに聞けばわかるんじゃないのか？」

麗華達の言葉に雄介も首を傾げるが、土はある方へと顔を向けていた。

雄介達もそこへと顔を向け、それを見て顔をしかめてしまう。

「あ、あの……あの人達、どうかしたんですか？」

「たぶん、来たんだと思う」

「来たつて、なにがさ？」

一方、翠屋の店内では土達の行動にほとんどの者がフェイトのように首を傾げていたが、望は真剣な眼差しで答えていた。

そのことにアルフは首を傾げるものの、叶も同じような顔で土達を見ている。

「な、なに、あれ？」

その時、すずかはそれを見て目を見開いてしまう。それは望と叶を除く全員がそうであった。

なぜなら、土達が見ている方向から複数の怪人達の姿が見えてきたのだから。

「いけない！ あれでは！」

「ダメだよ！ 土にここを頼むって言われたじゃない！」

呆然としていたクロノだが、異常事態だと気付いて土達の元へと駆け寄ろうとする。

しかし、それを望が叫ぶことで止めようとしていた。

「だ、だけど、あんな数じゃ土さん達が」

「でも、言われたでしょ？　ここを頼むって」

戸惑うのはだったが、望はそれでも言い聞かせようとしていた。確かに怪人達の数は土達よりも遙かに多い。だから、なのはは一緒に戦った方がいいと思ったのだ。

「そういうことですか……クロノ、なのはさん。土さんは私達にみなさんを守れと言っているのです」

「え？」

リンディもそのことに気付き、言い聞かせるような形で指示を出す。

怪人の数から考えて戦える者全員で行った方がいいのは確かだ。しかし、ここにはなのはの家族や友達がいる。

それを守りながらとなるとかなり厳しくなってしまう。

そこで土はなのは達にその人達を守らせ、自分達が矢面に立とうとしたのだ。

「で、でも」

「言いたいことはわかります。ですが、だからこそ自分がやらなければならぬことを見失ってはいけないのです」

それでもなのはは土達の元へ行こうとするのだが、リンディはそれをなだめた。

今言ったようにここには戦えない者達がいる。まあ、リンディやなのはが知らないだけで、なのはの母親以外の家族はそれなりに戦えたりするが。

それはそれとして、そういうた者達を側で守ることも必要なのだとリンディは言い聞かせようとしたのだ。

「え……」

「なによ……あれ……」

しかし、それを見たなのは顔を強ばらせ、アリサは顔を引きつらせてしまう。

他の者達も似たようなものだった。なにしろ、ハッキリと姿が見えた怪人の姿は、なのは達にはありえないものだったから。

リンデイもこのことに息を吞んでしまう。ただ、叶と望は静かに見守っていた。

「寄越せ……ジュエルシードを……」

「なんで欲しいのかわからないのに、そうホイホイと渡すと思ったのか？」

「それ以前に貴様達の目的を知っていれば、渡す気は最初から無いがな」

怪人の1人の言葉に士が答えると、麗華も睨み返しながら答えた。世界の破壊。それが怪人達の目的だ。それ以前にジュエルシード自体が危険な物故に渡せなかったが。

ともかく、それをしようとしている者達に危険物を渡すことなど出来るわけがない。

士達の反応はその考えからである。

「寄越せ……この不要な世界を破壊する為に……」

「出来るわけないだろ！ そんなことさせてたまるか！」

「そういうことだ。寝言は寝てからほざけ」

もう1人の怪人の言葉に雄介が反論すると、士は言い放ちながらベルトを装着した。

それと共に雄介や麗華、麗葉もカードを構え

「『変身！』」

『仮面ライド デイケイド！！』『ターンアップ』

変身し、それぞれ構える士達。

「え、なに？ 小さな女の子がカードになって、え？」

「なんだ、あれは？」

一方、士達の変身を初めて見たなのは姉や兄は戸惑いの色を浮かべる。

それは同じく初めて見た者達も一緒の反応であったが。

「ふん！」

「おりゃあ！」

「はあ！」

そんなのに構っていられないとぶつかり合う土達と怪人の群れ。士と麗華が持っている剣を振り回し、雄介も殴るなどして怪人達と戦っていく。

しかし

「おい、いくらなんでも多すぎるぞ、これは！」

怪人を蹴り飛ばしながら雄介が叫ぶ。

事実、怪人の数は土達の数倍あるのは目に見えてわかっていた。それでも戦えないわけではないが、数の差がありすぎてどうしてもなのは達の元へ向かおうとする怪人が出てきた。

今はなんとかとどめているものの、このままでは押さえられなくなるのも時間の問題であった。

「しょうがないな」

怪人を斬り飛ばした士が一言漏らすと、剣にしているケースから1枚のカードを取り出し

『アタックライド　イリユージョン！！』

「ふ、増えたあ！？」

ベルトにカードをセットしたことで4人に増える士。

そのことにアリサが驚く　叶と望以外の全員も驚いていたが。が、4人の士は更にカードを取り出し

『仮面ライド　電王！！』『フォームライド　電王、ロッド！

！』『　電王、アックス！！』『　電王、ガン！！』

それぞれの士が赤、青、黄色、紫のアーマーとマスクを装着した姿へと変わる。

これは仮面ライダー電王という仮面ライダーであり、ある方法により4つのフォームに変身出来る仮面ライダーでもあるのだ。

で、赤いアーマーの士がまたカードを取り出し

「な、なんなの……あれ？」

『アタククライド 俺、参上！！』

「そういうわけで、俺達参上だ」

「いや、いいから早くなんとかしてくれ」

碧屋にいる忍が叶と望を除いた全員の気持ちを代弁するかのよう  
に漏らした時、カードをセットした士はなぜか軽くしゃがんで両手  
を広げるようなポーズを取った。

そのことに麗華は呆れた様子を見せていたりするが。

「わかつてる。行くぞ」「ああ」「」

そんな彼女に答えてから、4人の士はそれぞれ剣、ロッド、斧、  
銃を持って怪人達へと向かっていく。

そして、怪人達を斬ったり打ち払ったり、なぜか張り手で突き飛ば  
したり次々と撃ち抜いたりしていた。

「まったく、ああいうのはたまに羨ましくなるよ、な！」

「どうかと思わないこともないが、な！」

そんな士に負けじと雄介と麗華も怪人達を殴ったり切り払ったり  
している。

それでも拮抗するのがやつとの状態であった。なにしろ、怪人達の  
数が多いのだ。

士が増えても、そうなるのがやつとの状態なのである。

そのことになのははいてもたってもいられなかった。

士達を助けたい。あのままじゃ危ないから その思いでビー玉サ  
イズになっている自分のデバイスであるレイジングハートを握りし  
めていた。

「おい、なのはを押さえとけよ。今にも飛び出そうとしてるからな」  
「え？」

が、そのことを士に指摘されて、なのはは目を丸くしていた。

まさか、気付かれているとは思わなかった。士は戦いに集中してい  
たと思っただから

ただ、士の方もただ戦っているわけでは無い。怪人達がなのは達の

元に向かわないようにしながら戦っていたのだ。  
そのおかげか、なのはの様子に気付けたのだが。

「ダメよ、なのはさん。たぶんだけど、今行っても邪魔になるだけだわ」

「で、でも」

「母さんの言うとおりだ……我々が行っても……ただ、やられるだけだ」

「え？」

「なのは、ちゃん？」

リンディの言葉にも強い意志を秘めた瞳を向けるのはだが、クロノの言葉に思わず困惑した表情尾見せてしまう。

そんななのはにすずかは怪訝な顔を向けていたが。

怪人とクロノ達のような魔導士が戦ったらどうなるかと聞かれれば、クロノ達が勝つことは可能と答えられる。

ただし、今のような数になると一方的にやられることもありえた。理由としては相性の悪さが上げられる。基本的に魔導士は魔法を撃つというのがスタイルだ。

フェイトのようにデバイスを武器として戦う魔導士もいないわけではないが、フェイトとアルフを除いたこの場にいる魔導士は基本的なスタイルの魔導士だった。

そして、魔法はただ撃てばいいという物では無い。威力を高めるなどでコントロールが必要となる。故に手数がどうしても少なくなりがちなのだ。

一応、手数を増やす魔法もあるが、そういった物は大抵威力が低くなる。

これが人間相手ならまだなんとかなるのだが、怪人となると話がかわってしまう。

なにしろ、怪人は人間よりも強い力と高い耐久力を持つ。

人間なら一撃で倒せる魔法でも耐えられるし、バインドなどで捕縛しても力尽くで抜けられてしまうのだ。

1対1ならまだ勝ち目はあるのだが2、3体ともなると厳しくなり、それ以上となれば先も言ったとおり一方的にやられかねない。士達の援護があればそうでもないが、今は守らねばならない一般人がいるので、それを望むのは難しくなる。

士達と戦う怪人の姿を見ていたリンディとクロノは、それがわかった為の言葉であった。

一方でフェイトは士の戦いに目が離せなかった。

フェイトもクロノと近い印象を怪人に持っていた。が、だからこそ士が凄いと思えた。

自分ではあのように戦えないことが出来る士を

「でも、なにもしない訳にはいかないわ。クロノ、なのはさん。準備を」

「なんだ？」

それでも士達の為に援護射撃を考えたリンディがそれを指示しようとした時だった。

不意に怪人達の動きが止まったのである。そのことに雄介が首を傾げたが

「退いただと？ なぜ」

「さあな。でも、理由も無しにつてわけでも無いだろうが」

麗華もこのことには首を傾げるが、士は油断無く見送りながらそんな意見を漏らす。

そう、怪人達が退いたのがあまりにも唐突すぎたのだ。なので、不意打ちとも考えられたのだが

「いなく………なったな」

「本気でなんのつもりだ？」

怪人達が完全にいなくなり、更には再び襲い掛かってくる様子が無い。

そのことに雄介だけでなく、士でさえも首を傾げずにはいられなかった。

「いつも………ああいうのと戦ってたんだね、士は………私としてはや

めて欲しいかな？」

「え？ あ、叶さん」

「俺としては勘弁して欲しいけどな。あっちがああだと、そうもい  
かなくてね」

終わつたと見てか、どこか悲しそうな顔をしながら叶がやってく  
る。

そのことに雄介は軽く驚くが、士は肩をすくめるだけであつた。

士としても戦いは出来ればしたくない。でも、そうもいかないの  
が自分達の現状であつた。

「もう……何が起きてるのか説明しなさい！！？」

「やれやれ、騒がしい嬢ちゃんだな」

「なんですって!?!」

「す、すずかちゃん……」

一方、終わつたはいいが訳のわからない状況に叫んでしまうアリ  
サ。

が、そのことを士に指摘されて更に怒鳴ってしまい、そのことがす  
ずかの顔を引きつらせていたが。



第16話『日常と非日常』（後書き）

そんなわけでなのは達が全員集合。

しかし、また戦闘になってしまい、なのは達に話すのが先になってしまいました。

さてさて、これからなのは達はどうなってしまうのか？

次回はなのは達との話し合いになります。

リンディは人手不足でなのはに協力を求めますが、そのことを土に指摘され

一方でなのははどうするべきなのか、フェイトもどうしていけばいいのか悩むことに。

一方、士達はプレシアの事情を知るのですが

そんなお話です。次回でまたお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2458s/>

---

仮面ライダーディケイド 世界を巡る破壊者

2012年1月2日06時45分発行